

口頭発表		A会場 (Zoom1)		B会場 (Zoom2)		C会場 (Zoom3)	
セッション1	司会(補助)	堤 良一 (田村 早苗)		小川 晋史 (岡田 一祐)		久保蘭 愛 (山本 佐和子)	
	ホスト	幸松 英恵		永谷 直子		小出 祥子	
	10:00 10:40	A-1	江國香織『ヤモリ、カエル、シジミ チョウ』における文字表記による 表現効果	B-1	平仮名表記における 緩やかな綴りの固定について	C-1	中世における呉音・漢音の 交替による漢語の語形変化
		p. 1	細河 紗羅	p. 37	渡辺 悠里子	p. 73	大島 英之
	10:50 11:30	A-2	現代日本語における 形容詞の述定と装定の機能差 ―「深い」を中心に―	B-2	近世唐音のゼロ韻尾字にみられる 長音表記と非長音表記の 混在について	C-2	『金光明最勝王経音義』 成立過程の再検討 ―「仏典音義データベース」の 構築と分析から―
	p. 7	馬 文清	p. 43	王 竣磊	p. 79	李 乃琦	
	11:40 12:20	A-3	副詞的修飾成分「べつに」の 働きと位置づけ	B-3	日本語オノマトベにおける 音象徴の探索 ―辞書と機械学習によるアプローチ―	C-3	『三宝絵』二伝本における MVR・ハ使用率の比較研究
	p. 13	仲谷 絹	p. 49	飯田 雛乃・Alexander Kilpatrick	p. 85	小玉 花菜	
休憩 (70分)							
セッション2	司会(補助)	幸松 英恵 (中崎 崇)		中澤 光平 (永谷 直子)		小出 祥子 (久保蘭 愛)	
	ホスト	田村 早苗		小川 晋史		山本 佐和子	
	13:30 14:10	A-4	状況「を」句の対象性	B-4	真偽疑問文における 「か」あり／なしの違い ―フォーマリティとの関わりに 着目して―	C-4	脱従属化の観点から見た接続助詞 ノ二の情意に関する通時の研究
		p. 19	佐藤 友哉	p. 55	姚 夢琳	p. 91	赤尾 莉央
	14:20 15:00	A-5	日常会話 (CEJC) における 包括的助数詞の使用実態 ―〈つ〉〈個〉による助数詞の 代替機能に注目して―	B-5	逗子市小坪漁港の漁業者集団語の 語彙体系の解明と特徴の考察	C-5	「AテモBテモ」構文の成立について ―「AドモBドモ」との 比較を中心に―
	p. 25	山本 晃子	p. 61	佐藤 旺斗	p. 97	パーマー パトリック	
	15:10 15:50	A-6	与格主語構文の意味的特徴の再検討	B-6	出雲に多方言における ピッチ上昇位置と分節音の関係 およびその変化について	(発表はありません)	
	p. 31	西郷 太一	p. 67	平子 達也			
休憩 (10分)							
大会式典会場 (ovice)							
司会 (補助)		高木 千恵 (矢田 勉)					
16:00 16:20		大会式典		会長挨拶 日本語学会会長 木部 暢子 学会賞授賞式			
16:30 18:00		オンライン懇親会		司会：高木 千恵 会場担当：森 勇太・大槻 知世			

ワークショップ			A会場（Zoom1）			
セッション3	ホスト（補助）		矢田 勉（久保園 愛）			
	9:30 11:00		ワークショップ 通時コーパスをひらく ―『日本語歴史コーパス』と『OpenCHJ』― 小木曾 智信・北崎 勇帆・久保 柊子・鴻野 知暁・田中 牧郎・村上 謙・村山 実和子・渡辺 由貴			
	W-1 p. 127					
休憩（20分）						
ポスター発表／オープン学生セッション（ovice）						
セッション4	会場担当		幸松 英恵（会場全体），岡田 一祐（P-1），田村 早苗（P-2），永谷 直子（P-3），小川 晋史（P-4） 有田 節子・中澤 光平・山本 佐和子（オープン学生セッション）			
	11:20 12:20	P-1 p. 103	BCCWJ2のメタ情報の設計―出典情報について― 山崎 誠・高橋 雄太・呉 寧真・ 近藤 明日子・小木曾 智信		P-3 p. 115	ジブリ作品の役割語―虚構度を指標として― 安井 寿枝
		P-2 p. 109	小学生と中学生の作文にみられる文末の時制表現の誤用 ―「児童・生徒作文コーパス『ちょっとおかしな 日本語』検索サイト」を用いて― 加藤 恵梨・八木 豊		P-4 p. 121	人物の性格と使用する人称詞との関係について ―アニメーション作品を資料として― 深田 芽生
		オープン学生セッション（G-1～G-11） 予稿集に原稿はありません				
		G-1 確認要求場面における日本語母語話者と学習者のくり返し応答―応答の語用的機能に着目して― 陳 月明 G-2 近代における授与動詞ヤル・アゲルの変遷 石橋 恒乃 G-3 生成AIを用いたテキスト画像化・動画像機能による『日本語辞典』の発展的意味記述法の探索―ダジャレ表現を対象として― 永田 るの、尾高 柚子、中澤 萌音、石川 萌加、工藤 美桜、佐藤 百華、會田 美水里、新井 よしの、原田 麻未、香取 里美、佐井 春香、 松本 莉沙子、内藤 果恋、小林 茉凜、安西 凜、檜垣 沙也菜 G-4 材料・原料を表す「で」と「から」 松浦 千紗 G-5 使役助字による『日本書紀』区分論の検討 呉 子凡 G-6 創作媒体の相違が助詞使用に及ぼす影響―同一作者による作品の比較分析― 石井 遥尊、宮崎 順大 G-7 ライトノベルにおける色彩語の特徴―一般文芸との比較を通して― 柴原 麻衣 G-8 変体漢文における「処（トコロ）」の成立と変遷 潘 曉琦 G-9 水産関連商品への方言活用が消費者選好に与える影響 田崎 瑞音 G-10 日本語における多義語の字義的意味とメタファー的意味の関係―BERTによる分析― 盧 捷 G-11 2拍語8構造パターンにおける母音無声化類型―首都圏在住大学生を対象とする音響音声学的・計量的分析をとおして― 近藤 祐史、浅野 利音、名尾 萌花、吉野 華、朽津 陽彩、森 紀世春、小林 浩乃、中澤 茉央、MOON SEOHYUN、TAN XIAOZHEN				
フリータイム（15分）						
オープン学生セッション（ovice）						
セッション5	会場担当		森 勇太（会場全体） 田村 早苗・中崎 崇・永谷 直子・矢田 勉（オープン学生セッション） オープン学生セッション（G-12～G-26） 予稿集に原稿はありません			
	12:35 13:35	G-12 「Vラレタイ」構文の意味分析に関する一考察 李 鋭 G-13 国立国語研究所『鶴岡調査データベース』第2回調査回答データ音声・音韻項目の要因モデル ―生え抜き話者を対象とした、現象ごと・語ごとの共分散構造分析モデル― 吉川 心遥、竹内 瑠衣、尹 智愛、杉原 奏音、村瀬 瑠々 G-14 「絵文字・顔文字」と「コメント文」における感情情報のクロスオーバー研究 本多 彩愛、小澤 莉子、湯澤 ななみ、坪井 タ佳、小林 茉凜、尾高 柚子、中澤 萌音、内藤 果恋、岩瀧 舞優 G-15 「になる」に前接するサ変名詞について 大前 遼 G-16 近代国語辞書における収録語の語種別割合―「ア～アオ」の区間の比較― 中尾 涼 G-17 日本語の連体修飾要素の機能に関する再考察 俣平 洸希 G-18 西周における「経済学」という語の理解に関する一考察 魯 肖楚 G-19 単漢字イメージの中国語翻訳における形態変化に関する考察―『二十億光年の孤独』（田原訳）の分析に基づいて― 王 凌志 G-20 イメージと規範意識から見る日本語自称詞の選択動機―自称詞「ウチ」の使用を通して― 楠瀬 百合 G-21 方言カス型動詞の多様性 田形 周造 G-22 漢和辞典の字音収録・認定の現状―直近の漢和辞典における慣用音をめぐる字音収録・認定の記述を中心に― 呂 沅鈞 G-24 対称代名詞「あなた」はどう使われているか―『日本語日常会話コーパス』からの用例分析― 北島 美奈 G-25 現代日本語の評価の「また＋形容詞」 王 馨由 G-26 自然談話における文末の同意要求表現―自然談話を用いた研究方法を探る― 中田 麻祐子				
		フリータイム（15分）				
休憩（10分）						
シンポジウム会場（Zoom4）						
セッション6	司会		堤 良一			
	ホスト（補助）		佐伯 暁子（岡田 一祐）			
	14:00 17:00	S p. 141	シンポジウム 日本語研究と辞書編纂の接点を求めて 外国語学習に資する用例とは何か―対象言語・学習者レベル・辞書サイズの違いを越えて― 小室 夕里 発信のための国語辞書に必要な情報は何か―校閲者の視点から― 稲川 智樹 総合的な「日本語辞書」は可能か―「中央語」と「方言」を驚づかみにする― 金水 敏 企画担当 佐伯 暁子・堤 良一			
談話室 9:30-17:00 オンライン談話室（ovice） 会場担当：森 勇太・大槻 知世						
書籍展示ブース 11:00-14:00 オンライン書籍展示（ovice：オンライン談話室内）						

江國香織『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』における文字表記による表現効果

関西外国語大学大学院 外国語学研究科 博士後期課程 言語文化専攻
ほそかわさら
細河紗羅

1. はじめに

江國香織による文学作品『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』は、幼稚園児である主人公拓人を中心に、小学二年生の姉の育美、拓人と育美の母親である奈緒、そして一家の主である父親の耕作と一家を取り巻く他の登場人物で構成される。物語は、奇数章が拓人の視点から、偶数章がその他の大人たちの視点から交互に三人称語りで語られる。その表記も奇数章と偶数章で異なり、拓人の語りはひらがなとカタカナで、他の登場人物の語りは漢字と仮名で書かれるが、拓人が成長するにつれ漢字が用いられるようになるといった、表記表現が顕著に現れている。しかし、こうした規範から逸脱した非慣用的な表記による修辭的效果（表現効果）を検討する研究は、主に語を対象に行われてきた（金水 2021、吉田 2020）。喜古（2007:64）が指摘するように、語レベルのみの観点では表現効果を正當に扱っているとはいえず、文レベルでの表記の表現効果の考察は検討の余地があるといえる。

また鎌田・小方（2013:4）は表記の規範と逸脱について以下のように述べている。

規範と逸脱の観点からは、ある特定の単語の文字表記を例えば一度変化させることは、修辭的に重要な意味を持っている可能性があると考えられる。

ここでも、語について述べられているが、文においても、拓人の語りでひらがなカタカナ交じりから漢字仮名交じりに変化することは同様に、修辭的に重要な意味をもつと筆者は考える。

したがって、本研究では、『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』における拓人の語りの場面を中心に、喜古（2007：64）の示した非慣用的な表記が「ことばのどの要素（意味・イメージ・音声）にどのような効果が生じているか」という観点を援用し、ひらがな、カタカナ、漢字の表現効果の一用法を明らかにすることを試みる。

2. 先行研究と本研究の対象

2.1. 先行研究

喜古（2007）は、表記を書き手の立場からみた表記意識ではなく、読み手の立場から受け取る表現効果、特にカタカナの表現効果について検討した。カタカナの表現効果を明らかにするうえで、(1)「標準的な表記である」という効果 (2) 語としてのまとまりが保たれるという効果¹を除外している。したがって、その対象は主に、標準から逸脱した非慣用的表記

¹ (1)「標準的な表記である」という効果は、カタカナでいえば、外来語・外国語等の慣用的といえる表記のことであり、(2) 語としてのまとまりが保たれるという効果は、戦後の国語政策によって、仮名書き

であるといえる。そして表記された「ことばのどの要素（意味・イメージ・音声）にどのような効果が生じているか」という観点から、カタカナの非慣用的表記を分析した結果、次のような効果があったとした。

- A ことばの意味に〔限定・ずれ・強調〕があることが明示される
- B ことばにある種のイメージが付加される
- C ことばの音声が目立つ

前述の、金水（2021:35）では上記の B、C の表現効果が村上春樹による『海辺のカフカ』にもみられることを指摘したうえで、「話し手のリテラシー」「多重ヴォイス」「一人称代名詞によるキャラクターの差異化」という観点から『海辺のカフカ』を分析している。また、吉田（2020）はカタカナ語のひらがな表記という語種の規則を外れた表記を取りあげ、「理解不足」「皮肉・冗談」「付加価値」の主に三つの用法に分けられるとした。これらの用法も、喜古（2007）による表現効果に相当することから、喜古が明らかにした表現効果はどの文字体系においても通用するものであるといえる。

前述の「ことばレベル」の表現効果に加え、喜古（2007:64）は「文レベル」の表現効果について「そのことばが文中に置かれているものである以上、言葉の印象が文の印象にまで関わっていく」と説明し、「文レベル」の表現効果は、非慣用的な表記がなされた語による文の表現効果と解釈できる。

一般に、小説は漢字仮名交じり文で表記されてきたことから、語以上のレベルの文字体系による表現効果は対象とされてこなかった。しかし、『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』では、一文すべてがひらがなやカタカナで書かれているため、「文のレベル」の表現効果に新たな定義を設け、喜古（2007）の「文のレベル」の表現効果を、「文の表現効果」と称し、文における文字表記による表現効果と再定義する。文は語に付随する単位であるため、二次的な表現効果であることに変わりないが、非慣用的表記を対象とする場合、非慣用的表記がなされた語による文の表現効果ではなく、あくまでも文字表記による表現効果とし、文における文字表記による表現効果にはどのようなものがあるのかという観点から捉えることとする。

2.2. 本研究の対象

前節の定義を踏まえた『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』における文の表現効果の対象は以下のとおりである。

- ① 漢字仮名交じり文から逸脱したひらがなとカタカナによる表現効果
- ② ひらがなカタカナ交じり文における漢字による表現効果

に移行された際、読みやすさの点からひらがなではなく、カタカナで表記することで語としてのまとまりが保たれるといった効果を指す。詳しくは喜古（2007:62）を参照されたい。

喜古（2007）のように、(1)「標準的な表記である」という効果を対象から除外するため、本研究での文の表現効果における標準的な表記とは、漢字仮名交じりという文全体の表記法となる。それゆえ、『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』の拓人の語りであるひらがなとカタカナは、漢字仮名交じり文から逸脱している非慣用的表記であるといえる。また、前述のように、物語終盤の拓人の語りでは、ひらがなカタカナ交じりではなく、漢字仮名交じりに表記が移行する。この表記の変化は、拓人の語りという枠組みのなかでの、ひらがなカタカナ交じりから逸脱した漢字表記と捉えることができる。

3. 『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』における文字表記による表現効果

3.1. ひらがなによる表現効果

物語は拓人の語りから、次のように始まる。

これにのると、べつなばしょにはこばれる。そのことを、たくとはりかいしている。
とびらはあいていて、かたわらにしているひとがたち、うながすのでりこむ。ざせき
きはきいろで、うちがわのかべはそらいろ。(p.5)

このように、ひらがなカタカナ交じり文とはいえ、拓人の語りはひらがなベースで表記される。文全体に漢字が使用されず、ひらがなで表記されることによる表現効果は何だろうか。一つに、イメージに関わる表現効果が挙げられる。すなわち、喜古（2007）におけるBの効果である。物語がひらがなで始まることへの異質さと同時に、子供の読む絵本といった幼い印象を想起させる。あるいは、言語が未だ自分のものとして形成されていない印象があるといえる。

拓人の語りにおいて、ひらがなと共に使用されているカタカナには外来語や動植物名等の語に標準的な表記がなされていることから、このような語には特別なイメージは想起されないといえる。しかし、次のようにカタカナが非慣用的に用いられている例も見られた。

3.2. カタカナによる表現効果

以下は、霊園で働く児島が心の内で発した言葉を感じとった拓人による描写である。

- (a) おじさんは、るるるむるるむむるらむ、というかんじのものをだして、ほかのヒトたちは、さわさわしたかんじのものをだしていた。(中略) るるるむるるにはつたわってくるものがあって、たくとのあたまのなかでところどころかたちになった。コドモガイタラとか、メイワクカケタとか。(pp.98-99)

下線部²「るるるむるる」は、一見、擬態語が表記されているようにみえるが、文脈を鑑

² 以下、下線および波線は発表者による。

みると、それがカタカナに変換され「コドモガイタラとか、メイワクカケタとか」と形になったとされていることから、形(言葉)になる前の気配や印象が表されていることがわかる。カタカナで書かれている波線部「コドモガイタラ」「メイワクカケタ」も形をもたない気配や印象が言語化されているといえるが、ひらがなの差異は何だろうか。「るるるむるる」といった気配が、私たちの理解できる「コドモガイタラ」という言葉に変換されているだけではないだろう。同様の表現効果をもつといえる次の例を見てみたい。姉の育美が声で発した言葉を拓人が心の内で真似る描写である。

- (b) 「にげないでっていつてくれた？」いくみがきく。ニゲナイデッテイツテクレタ？「いつてない」たくとがこたえと、いくみはあわててかたてをかぶせてふたをする。「いつてっていつたのに」イツテッテイツタノニ。(中略) どりよくしないとわからない、いみと、もくてきのあることば。みんながつかっていることば。(p.236)

下線部について拓人は「どりよくしないとわからない」としていることから、ここでのカタカナの「ことばレベル」の表現効果は、「ことばの音声が生立つ」効果があるといえる。つまり、わからない言葉は単なる音であり、その結果、音声が生立っているということである。しかし、物語全体の文脈から、文の表現効果はことばレベルの表現効果とは異なるといえる。「どりよくしないとわからない」に加えて、「いみと、もくてきのあることば」「みんながつかっていることば」としていることから、拓人以外の大人たちが使っている意味と目的のある(ことを込めた)言葉は拓人にとって理解できない、無意味なものであることが読みとれる。

そのような拓人の思想は以下のようにも表されている。

- (c) たくとはことばのいみをりかいしない。せかいはずでにじゅうぜんで、おとにいみはないからだ。(p.79)

拓人はこのような音や言葉をコミュニケーションの手段としては用いず、以下のように言外で相手の意思を感じとっている。

- (d) ききとろうとどりよくすれば、たくとはあいてのことばをおおまかにりかいすることができる。(中略) けれどそれは、おとをききわけてりかいするのではない。あいてをじっとみて、みみではないどこかをすませてかんじとるのだ。(p.7)

このように、拓人は言葉を介さずとも相手を理解することができるがゆえ、拓人にとって言葉がただの音で、意味のないものということが内包されている。そのような言葉のカタカナ表記は、その言葉自体がもつ音声の強調だけでなく、拓人にとってその言葉自体が無意味

であるという「ことばの無意義性」をも表しているといえるだろう。したがって、拓人の世界での、文における非慣用的なカタカナには「ことばの無意義性を表す」効果があると考えられる。

では、拓人の語りに用いられる漢字にはどのような表現効果があるのだろうか。

3.3. 漢字による表現効果

(e) (f)はどちらも、拓人が、カエルが発していることを育美に訳す描写であるが、漢字が用いられる以前と以後の場面である。(e)では、育美から質問されるまで拓人から話すことはなかったのに対し、(f)では自ら話している。

(e) 「なにかいってる？」たずねられ、「いってる」とこたえたものの、なんといっているのかせつめいするのはむずかしかった。「いそがしいって」それでそういった。(p.212)

(f) 「大丈夫だって」拓人は通訳した。「池は必要じゃないって」(p.460)

(e)では言語化することが難しかったことが描写されているが、(f)では具体的に言語化できていることは、拓人が言葉にとらわれた世界に参入したことが示唆されているといえる。言葉にとらわれた世界とは、漢字仮名交じりで表記される拓人以外の大人たちの世界である。大人たちにとって言いたいことをそのまま発することのできない言葉を用いることによる不自由が次のように表されている。

(g) 「電話くらいくればよかったのに」けれど代りにそう言った。自分でも、どうしていいのかわからなくなったのだ。(p.88)

(h) いてもいいですと言いたかった。ほんとうはいない方がもっといいけれど、そういうわけにはいかないのだから、どうぞ、いてください、と。(p.424)

漢字が使用されるようになった拓人の語りにおいても、大人たちと同様、拓人が思ったことを発しないという以下のような描写がされている。

(i) 「葉っぱ死んじゃうの？」尋ねられ、たぶん、と思ったが黙っていた。(p.461)

このように、音に意味はないとしていた拓人の世界に漢字が加わることで、拓人にとって言葉がただの音ではなくなり、大人たちの用いる「いみと、もくてきのある」ものになったことが表現されているといえるだろう。したがって、拓人の語りににおける漢字表記は、「ことばレベル」では、ことばの意味を強調する効果があるといえる。そして、これに付随する

文の表現効果は、その言葉自体が有意義であるという「ことばの有意義性を表す」効果があると考えられる。

4. おわりに

以上、本研究では、従来、規範から逸脱した非慣用的な表記による表現効果を検討した研究が語を対象に行われてきた背景から、江國香織による文学作品『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』における拓人の語りの場面を中心に、喜古（2007）の示した非慣用的な表記が「ことばのどの要素（意味・イメージ・音声）にどのような効果が生じているか」という観点を援用し、主に文におけるひらがな、カタカナ、漢字の表現効果の一用法を明らかにすることを目的とした。

その結果、漢字仮名交じり文から逸脱したひらがな、カタカナ、そしてひらがなカタカナ交じり文に対する漢字には、新たに「ことばの無意義性・有意義性」を表す効果があることが明らかとなった。この効果は、喜古（2007）の示した「ことばレベル」の表現効果に付随する「文の表現効果」であり、文字表記による表現効果の体系化の一助となるといえる。また、従来の表現効果に関する研究で対象とされてきた漢字仮名交じり文ではなく、ひらがなカタカナ交じりにおける文字表記の表現効果を探求したという点で新規性があると考えられる。

しかし、『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』という一作品の拓人の語りを取りあげたことから、本研究で提示した表現効果は、ごく一部であり、江國香織の他小説や他作家の文学作品において、あらゆる表現効果が現れているといえるため、今後は帰納的に、他作品を分析していくことを課題とする。

参考文献

- 江國香織（2017）『ヤモリ、カエル、シジミチョウ』朝日新聞出版
- 鎌田まみ・小方孝（2013）「物語文章における文字表記の分析と模倣」『人工知能学会全国大会論文集 27』 pp.1-4.
- 喜古容子（2007）「片仮名の表現効果―戦後の小説を資料に―」『早稲田日本語研究』 16,pp. 61-72. 早稲田大学日本語学会
- 金水敏（2021）「近・現代小説の片仮名の用法一斑――村上春樹『海辺のカフカ』を中心に」 pp.26-58. 加藤重広・岡墻裕剛（編）『日本語文字論の挑戦：表記・文字・文献を考えるための 17 章』 勉誠出版
- 吉田敬（2020）「ひらがなの表現効果―表記がもたらす非言語情報と文章表現への影響―」『英文學論考』 48,pp.20-40. 立正大学英文学会

現代日本語における形容詞の述定と装定の機能差
—「深い」を中心に—

マ プンセイ
馬 文清 (東北大学大学院生)

1. はじめに

形容詞の文中での機能には、名詞を修飾・限定する規定用法あるいは装定用法(「赤いバラ」)、述語としての用法あるいは述定用法(「庭のバラは赤い」)がある。形容詞は多くの場合、これらの用法を持つが、常に両用法が成立するわけではない((1)(2)参照)。

- | | |
|---------------------------------|--------|
| (1) a. <u>〇</u> 明るい選挙 | (装定用法) |
| b. ? (あの) 選挙は (が) <u>明</u> るい。 | (述定用法) |
| (2) a. ? <u>固</u> い再選 | (装定用法) |
| b. <u>〇</u> 再選は (が) <u>固</u> い。 | (述定用法) |

これは、形容詞は述定と装定に用法差があることを示している。それは述定になるときに装定になるときの機能差であると思われる。では、その機能とはどのようなものであろうか。

本発表ではこの機能差をとらえたいのであるが、この機能差は個別の形容詞にかぎった問題ではない可能性もあり、他の類似する形容詞の対照も視野にいれていくとすれば、語彙的な体系性が比較的明瞭な語からとりあげていくのがよいと考えられる。そこで、国広哲弥が次元形容詞としてまとめる語群に属する語として、属性形容詞「深い」をとりあげ、そこから考えていく¹。また、機能差をとらえる考え方として、たとえば、述定になれない場合があるとすれば、それは述定に必要な要件を持たないからだと考えられる。そのようにとらえると、述定・装定の使用制限という観点が、述定・装定の機能差をとらえる観点になるように思われる。

そこで本発表では、次元形容詞としての属性形容詞「深い」を対象として、「深い」の述定と装定の使用制限を明らかにした上で、述定と装定の機能とはどのようなものかを解明することを目的とする。

2. 先行研究

形容詞の装定・述定の使用制限から両者の差異を論じた研究としては、仁田義雄(1980)、木下りか(2004)、楊婧璋(2015、2018)が挙げられる。仁田(1980)は、形容詞「多い」「少ない」が装定用法を通常持たない理由を装定の機能に求める。すなわち、装定とは「被修飾名詞の内在的性質を限定する」機能を持つが、「多い」「少ない」は数量という外在的性質を述べるにすぎないため、装定になりにくいとする。木下(2004)は、形容詞「多い」「遠い」が装定用法として成立する条件に、「比較対象が文脈上明確になっていること」が必要であるとした。ただし、仁田と木下の考察対象は「多い」「遠い」など「多くの」「遠くの」という特有の装定形式を持つ特殊な形容詞に限られ、述定の機能には触れていない。一方、楊(2015、2018)は一般的な形容詞を検討する。楊(2015)は仁田(1980)のいう「被修飾名詞の内在的な性質」という見解を踏まえ、「新しい」を対象に装定で用いられる場合が述定に言い換え可能かどうか、また言い換えができないのはなぜかを分析した。その結果、形容詞が被修飾名詞の内在的性質を表さない場合には、述定への転換が困難であることを示した。ただし、その「内在的性質」が何を指すのかは必ずしも明確ではない。楊(2018)は、述定への転換が不可能となる要因を「部類分け」の機能(名詞を共通の意味カテゴリーに整理・分類する機能)の有無に求め、装定用法が成立するか否かは、名詞が共通の意味カテゴリーに整理されるかどうかに関わると論じた²。このように、楊は装定の制約を被修飾名詞の性質や部類分けの可能性に着目して説明している

¹ 国広哲弥(1982)によると、次元形容詞は、具体的に、「ナガイ-ミジカイ」「タカイ-ヒクイ」「フカイ-アサイ」「トオイ-チカイ」「ヒロイ-セマイ」「アツイ-ウスイ」「フトイ-ホソイ」「オオキイ-チサイ」がある。

² 楊(2018)のいう、「部類分け機能」とは、形容詞が被修飾名詞を特定の基準に基づいて分類し、その中から特定の項目を限定する機能を指す。たとえば、「高い山」では「高さ」という客観的な基準によって「山」が分類され、「高い」という特定の属性が選ばれるとする。一方、「深い感謝」のように主観的な評価を表す形容詞の場合、明確な分類基準が存在せず、述定用法への

が、一方で形容詞自体の性質や、述定の機能との結びつきについては十分に検討していないといえる。

以上のように、従来の研究は一般的な形容詞自体の性質に関する検討は不十分である。そこで本発表では、一般的な形容詞の中でも特に典型的で多様な意味を持つ次元形容詞「深い」を取り上げる。

この問題を考えるためには、形容詞「深い」の意味分析が必要である。これまで「深い」の意味については、国広哲弥（1982）、森田良行（1989）、金善花（2017）、栗木久美（2022）などが論じている。国広（1982）は「「フカイ」の意義素は〈基準面から物の内部へは入り込んでいく距離が標準値より大きい〉」とし、森田（1989）では「深い」は、「そのものが基準とするところから、はるか奥の方までを占めている状態。また、そのような奥まった地点」を表す語としている。金（2017）・栗木（2022）は、「深い」の意味が空間的領域から心理・社会・時間といった非空間的領域へと拡張される点に着目し、その多義的構造を認知的枠組みから整理する。いずれも「深い」の意味分析として有益なものといえるものの、文法的機能としての述定・装定の使い分けについては十分に扱われておらず、また「深い」の述定と装定の機能を考えるためには、もう少し詳細な意味記述が必要ではないかと考えられる。

本発表では「深い」を対象に、意味用法と使用制限の分析を通じ、述定と装定の機能差を明示する。

3. 調査方法

本発表で扱う述定用法とは、形容詞が文末で自立的に言い切りを構成する場合や、「再生が難しい商品」のように形容詞述語を含む節が名詞を修飾する場合を指す。装定用法とは、形容詞が名詞を直接修飾する場合を指す³。用例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』で語彙素「深い」を検索した結果、計 16460 件が得られた。そのうち、装定 4379 例、述定 1292 例が確認された⁴。それらから無作為に抽出した 2000 例から、形式名詞や抽象名詞を修飾する 156 例と「彫りが深い」「懐が深い」「奥が深い」のような慣用句 87 例を除き、装定 1422 例、述定 335 例を分析する。

次に、意味特徴に基づいて例を分類し、各分類における装定と述定の用例数をもとに、「深い」が装定あるいは述定として使えない場合を検討する。そして、これらの使用制限のある例とない例を対照することで、装定・述定に必要な要素を明らかにし、それぞれの機能を示す。

4. 「深い」の用法

「深い」の装定・述定の機能差を捉える前提として、まず「深い」がどのような用法を持つのかをみていく。「深い」の用法には、大きく分けて「空間的用法」と「非空間的用法」という 2 つがある⁵。

4.1 空間的用法

(3) 深い海の中の谷底には、動物学者も知らないような怪物がいて聞いている。 (LBq9_00081,19720)

(4) といっても深い雪に覆われている北海道では、その実感はない。 (PN4e_00023,560)

(3) の「深い」は海水面のある一点という基点から、海のなかまで、すなわち下方向に向かったの進入距離が大きいことを意味している。(4) の「深い」は雪の表面の一点から地面まで、すなわち下方向への垂直方向での一次元的距離が大きい状態を表している。(3) (4) の用法は、対象「海」と「雪」そのものの奥行きに注目し、持つ内部空間の奥行きが大きいことを表している。すなわち、(3) (4) の「深い」は **1-A 〈基点から垂直方向に奥まで進入する距離が大きい〉** という用法である。

(5) 台風のときは、ふだんの時化のときよりも深い海底が多少は動くからです。 (PB54_00094,36080)

(6) 深い地震としては最大級のものでございます。 (OM42_00002,738270)

自然な転換が困難であるとする。

³ こうしたやり方は安本真弓（2009）による。

⁴ 本発表においても、基本的に「連体形—一般」は「装定用法」、「終止形—一般」は「述定用法」と捉える。ただし、「連体形—一般」の中でも、「の」「のだ」「ため」「から」「ので」「ほど」「よう」「みたい」「らしい」などの助動詞や形式名詞が後接する場合や、「この調査でも喫煙習慣など肺がんに関係の深い要因も配慮されている」のような場合は述定用法に含められる。

⁵ 本発表でいう「空間的用法」「非空間的用法」は、小出慶一（2000）の区分に従う。すなわち、空間的用法は実在の空間における次元量を記述する用法であり、非空間的用法は心理・時間・関係など抽象の対象に適用される用法である。

一方で、(5)の「深い海底」は、海面から海底までの垂直距離が大きいことを表し、(6)の「深い地震」は、地表から震源までの距離が垂直方向で遠いことを表している。これらは対象自体の距離ではなく、ある基点から対象の位置までの距離が大きいことを表している。すなわち(5)(6)の「深い」は**1-B〈ある位置が、基点から垂直方向（特に下方）に離れる距離が大きい〉**という用法である。

以上を整理すると、同じ垂直方向の用法でありながら、「深い」が対象そのものの奥行きに注目する場合は1-A、対象の位置に注目する場合は1-Bとして区別される。

また、水平方向に関する用法もある。

(7)この店の不思議な雰囲気は、うなぎの寝床のような、深い奥行きがかもし出すものだ。(OB4X_00002,49480)

(8)古代ギリシアは深い森に囲まれていた。(PB12_00263,4190)

(7)の「深い奥行き」は、店の内部空間において、開口部（出入口）を基点とし、店が内部方向へと長く続いていること、すなわち水平距離が大きいことを表している。(8)の「深い森」も同様に、森の「外」から内部へ入り込む際に、その進入距離が長く、中に入れば入るほど先が見通せない、囲まれてしまうような感覚になることが表されている。これらの、(7)(8)の「深い」は**1-C〈基点から水平方向に向かう進入度が大きい〉**という用法であるといえる。

4.2 非空間的用法

非空間的用法の場合、形容対象であるものはさまざまである。まずは生理的なもの(9)、次に心内現象(10)(11)、さらに関係性(12)(13)や時間(14)(15)、色彩(16)、そして評価(17)や身体的状態(18)に関するものが挙げられる。以下に例を示す。

(9)不快と安堵とがないまぜになった深い吐息を吐いた。(LBg9_00107,38820)

(9)は、「吐息」という呼気行動において、呼吸が肺の深部から発せられていることを表すもので、「深い」は**2-A〈身体の奥部に到達するまでの度合いが大きい〉**という用法を持つ。

(10)これまで、こみ上げてくる深い悲しみに辛うじて耐えていた小田は、(PB49_00487,30860)

(11)我われが及ばないほど高い意識や深い思考を内在させている(後略)(PB19_00513,37900)

(10)の「深い悲しみ」は、悲しみという感情が、その最奥へ向かう入り込みの度合いが大きいことを表している。(11)の「深い思考」も同様に、その意識の中に内在する思考が、どこまで掘り下げられるのか予測できないような、果ての見えない奥行きを持つことを表している。これら(10)(11)のような「深い」は**2-B〈精神の奥部への入り込みの度合いが大きい〉**の用法である。

(12)だから土地とこの生き物とは深い関係があるのです。(PB21_00006,74990)

(13)相互扶助協会と労働組合と協同組合の結びつきは深い。(PB13_00071,63930)

(12)の「深い関係」は、土地と生き物との間に存在する長期的かつ密接な相互作用が、継続的に積み重ねられてきたことを表している。(13)の「協同組合の結びつきは深い」も、協同組合と他の組織との間に強固で密接なつながりがあることを表している。ここでの「深い」は**2-C〈関係や結びつきの程度が強い〉**という用法といえる。

(14)親鸞の子孫と門弟たちがつくりあげた深い歴史が感じられる。(LBt1_00018,1390)

(15)秋も深いというのに黒のタンクトップにジーンズと言う姿(後略)(OY13_03493,4150)

(14)の「深い歴史」は、親鸞の子孫や門弟によって長い年月をかけて築き上げられてきた歴史的背景を示し、その時間的蓄積が大きく、過去から現在に至るまでの長い時間の流れが感じられる状態を表している。(15)の「秋も深い」は、秋の始まりからの時間的進行度合いが大きいことを表している。(14)(15)の「深い」は、**2-D〈時間の経過が長く、時間的な積み重ねが大きい〉**の用法である。

(16)周囲を山に囲まれた深い緑色の湖面は、(LBt9_00148,2730)

(16)は緑色の色合いが濃く、濃度が高いことを表している。この「深い」の用法は**2-E〈色の濃度が高い〉**といえる。

(17)つまり殉教に対する深い讃美としての『奉教人の死』とか、(LBg9_00216,12330)

(18) あの当時と同じような重く深い退屈の中に身を置いてみたいとさえ思う。 (LBd9_00055,62250)

(17) の「深い讃美」は、対象に対する賞賛の程度が高く、尊敬や強い共感を伴う評価であることを表している。また、(18) の「深い退屈」は、時間を持て余すという状態に焦点を当てる表現である。いずれも、強い評価や身体的状態が生起している点で共通していることから、ここでの「深い」は、**2-F 〈ある評価やある身体的状態が甚だしい〉** の用法であるといえる。

以上をまとめると、「深い」の用法は以下の表 1 に整理される。なお、表にはそれぞれの用法に該当する装定および述定の用例数を併せて示す。

表 1 「深い」の用法

「深い」の用法		形容対象であるものの種類	用例数	
			装定	述定
1 空間的 用法	A 基点から垂直方向に奥まで進入する距離が大きい	〔奥行き〕に焦点を当てるもの（海など）	183	65
	B ある位置が、基点から垂直方向（特に下方）に離れる距離が大きい	〔位置〕に焦点を当てるもの（海底など）	12	0
	C 基点から水平方向に向かう進入度が大きい	奥行、軒など三次元の物体の前後の距離を示すもの	72	8
2 非空間的 用法	A 身体の奥部に到達するまでの度合いが大きい	呼吸など生理に関するもの	75	6
	B 精神の奥部への入り込みの度合いが大きい	感情・精神作用に関するもの	696	85
	C 関係や結びつきの程度が強い	関係性に関するもの	243	162
	D 時間の経過が長く、時間的な積み重ねが大きい	歴史、秋など	6	4
	E 色の濃度が高い	色に関するもの	64	0
	F ある評価やある身体的状態が甚だしい	叡智、讃美、疲労など	47	0

5. 「深い」の述定・装定の使用要件と機能

表 1 から、「深い」の用法は、述定にも装定にも用いられる用法（1-A、1-C、2-A、2-B、2-C、2-D）と、装定でしか使えない用法（1-B、2-E、2-F）に大別できる。以下では、両者の対照を通じて、述定・装定として成立するための要件を明らかにしていく。

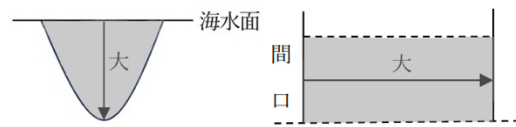
5.1 「深い」の述定の使用要件

まず空間的用法について見る。述定にも装定にも用いられる用法を取り上げる。

(19) 地表には高い山脈や深い海があるが、地球の大きさにくらべるとその凹凸は小さい。 (OT23_00063,910)

(20) 同氏宅は街路に沿った長屋式住宅の一つで、間口は三間ばかりだが、奥行きが深い。 (LBm3_00054,17350)

(19) は用法 1-A の例であり、(20) は用法 1-C の例である。(19) の「深い海」の場合、海水面により外部と内部が隔てられ、海水面に広がる囲まれた内部空間（図 1 の灰色の部分）の奥行きが大きいことが想定される。



(20) の「奥行きが深い」もまた、家屋という構造物によって区切られた物理的な内部空間（図 2 の灰色の部分）において、水平方向の奥行きの程度が大きいことを表す。つまり、これらの例はいずれも、区切られた内部空間への進入度の大きさを表している。つまり、空間的用法（1-A、1-C）一般では、内部空間への進入度が大きいという特徴がある。

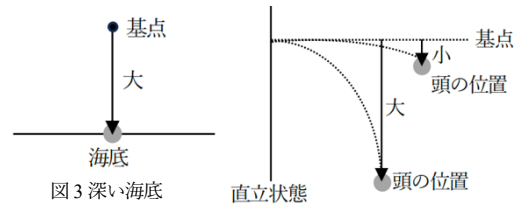
これに対して、装定でしか使えない用法にあたる 1-B の例をみる。

(21) 新第三紀中新世に深い海底に堆積した地層で、大間層と呼ばれています。 (PB34_00218,5830)

(22) 地面に頭がつくくらい、深いおじぎだった。 (LBkn_00008,9050)

(21) の「深い海底」は、海底が海水面から非常に離れた「深い位置」にあることを表す。「深さ」は垂直方向の距離の大きさに着目したもので、囲まれた内部空間を前提としていない点で一次元的な表現である。「深い」は海水面のある一点という基点から、海底の位置（図 3 の下の点）までの下向き

の距離が大きく、その距離が把握しにくいという特徴を表している。(22)の「深いおじぎ」も、起立時の頭の位置を基点とし、そこから頭を下げる距離が大きいことを表している(図4)。この場合も内部空間を前提としておらず、基点より下への一次元的距離の大きさを表している。つまり、〔位置〕に焦点を当てる1-B一般では、内部空間が前提とされていない。



以上のように、空間的用法では、述定・装定のいずれにも使用可能な場合、「深い」は〈内部空間性〉、すなわち海や森のように物理的な空間の内部が想定できる性質を有し、一定の内部空間を持つ対象について、その内部への進入距離が大きいことを表すという共通の特徴を持つ。これに対し、装定でしか使えない場合は、明確な内部空間を持たず、内部空間への進入という意味が欠如しているといえる。

続いて、非空間的用法を見る。まず述定にも装定にも用いられる用法の例である。

(23) 深呼吸でもよいから意識して深い呼吸をするように指導する。(PB13_00410,15860)

(24) 国際情勢についてもなかなか洞察力が深いとXは評価していた。(LBn2_00065,38000)

(25) ハワイって今では「世界屈指のリゾート地」ってカンジだけど、その歴史は深いよね。(PB42_00259,8550)

(23)の「深い」(用法2-A)は、身体内の肺という内部空間への空気の進入度が大きく、空気が肺の奥まで達する状態を表している。(24)の洞察力(用法2-B)は、物事の本質や背景を見抜く認知的な内部領域があると捉えられる。「深い」は、その認知的な内部領域での洞察の程度が大きいことを表している。(25)の「深い歴史」(用法2-D)も、出来事が積み重なった時間的領域に、容易に達しえないほど入り込んでいることを表している。つまり非空間的用法(2-A、2-B、2-C、2-D)一般では、当該の内部空間や内部領域への入り込みの程度が大きい様子を表している。

一方、装定でしか使えない用法に属する用法2-E、2-Fは次のようなものである。

(26) 深い藍色に変わってゆく途中の空を見上げ、(OB5X_00136,28330)

(27) 石工ダヴィッドは深い疲労で、肘掛け椅子に腰掛けるや(中略)、眠ってしまう。(LBj9_00059,3620)

(28) 新婦の両親に対して、深い感謝を述べている部分以外は、(LBq8_00005,8440)

(26)の「深い藍色」(用法2-E)は、色の濃さの度合いを表し、内部領域性を伴っていない。このような用法は、〈内部空間への進入度が大きい〉という基本的な意味からずれており、「深い」の周辺的な用法といえる。(27)(28)は用法2-Fの例である。(27)の「深い疲労」は、石工ダヴィッドが感じている疲労の度合いを表している。この「深い」は、疲労の強さを強調するものであり、内部領域の最奥に到達しがたいというニュアンスを持つとはいいいにくい。(28)の「深い感謝」も、新婦が両親に対して抱く感謝の気持ちが非常に強いことを表しており、内部領域の奥行きは想定されていない。これらのことから、非空間的用法(2-E、2-F)一般では、内部領域が前提とされていないといえる。

つまり、非空間的用法においても、述定・装定ともに使用可能な場合は、抽象的な〈内部領域〉が存在し、その内部への到達度の大きさを表す場合に述定となり得る。一方、そうした〈内部領域性〉、すなわち、心理状態・時間・関係などの抽象的対象が、奥行きを持つ領域として捉えられる性質を持たず、内部領域への進入という意味を欠く場合は、装定用法に限られる。したがって、〈内部空間性〉や〈内部領域性〉の有無は、述定にも装定にも用いられるものと、装定でしか使えないものの違いであるといえる。この違いから、「深い」の述定の使用要件は、「深い」が〈内部空間性〉や〈内部領域性〉を有し、最奥まで到達できない、到達しにくいということを表す必要があるといえる。

5.2 「深い」の述定と装定の機能

「深い」の述定は、物理・抽象を問わず、〈内部空間性〉や〈内部領域性〉が認められることを要件とする。これを欠く場合、「深い」は述定として成立しない。つまり、述定の機能は、「深い」の基幹

的な概念である次元属性を主語に付与することである。一方で、「深い」の装定は、空間的な量を表すときには、〈内部空間性〉がなくても、使用可能である（例えば、深い海底）。また、非空間的なものを表す場合にも、〈一次元的な方向性の程度の大きさ〉を示す意味特徴のみを持つ場合に使用できる（例えば、深い感謝）。このように、装定は述定のように常に基幹的な意味特徴を要件とするわけではない。つまり、装定の機能は、形容詞が持つ意味全体を保持して名詞を修飾すること、あるいは、その意味全体の中から〈進入距離が大きい〉〈程度が大きい〉といった部分的な意味特徴を取り出して名詞に付与することである。

6. 形容詞の述定と装定の機能

これまでの分析から、「深い」の述定は、語が持つ基幹的な概念——とりわけ次元形容詞としての〈内部空間性／内部領域性〉——を前提として成立するのに対し、装定はそれらを必須とせず、語の一部の意味特性（例：進入距離・程度性）を取り出して用いられることが明らかになった。さらに、次元形容詞であり、「深い」と対義語である「浅い」も、「深い」と同様の振る舞いをすることが示唆される。以下に、「浅い」が述定で自然に用いられない例を示す。

(29) 多くの絵はがきを飾った浅い石のアーチは影も形もなく、 (PB19_00216,104970)

(30) 龍は浅い茶色のくせ毛の短い髪。 (PB17_00029,8480)

(29) の「浅い石のアーチ」は、石のアーチの最高点（湾曲部の頂点）を基点として、そこから地面までの下方向への進入距離が小さいことを表しており、内部空間の存在は前提とされていない。(30) の「浅い茶色」も、色彩の濃淡の低さを表すものであり、「内部領域」は関与しない。以上は、「浅い」も「深い」と同様に、述定には次元形容詞としての〈内部空間性／内部領域性〉という基幹概念が必須であるのに対し、装定は基幹概念を要件とせず、局面的特性（進入距離や程度）だけで成立しうることを示す。したがって、これは「深い」という語に限定される問題ではないが、まずは「深い」に着目すると、述定の機能は、その形容詞が持つ基幹的な概念を主語に付与することである。本発表における「基幹的な概念」とは、その形容詞が本来持つ中心的な語義特徴を指す。「深い」の場合、「内部空間性」「内部領域性」が該当する。次元形容詞の基幹的な意味は次元性にあり、それを主語に付与するのが述定の役割であるため、述定の場合はこれを欠くことはできない。一方、装定の機能は、形容詞が持つ意味全体を保持しつつ、その中から部分的な特質を取り出して名詞に付与することである。この「部分的な特質」とは、形容詞が持つ意味内容の全てではなく、ある一側面だけを取り出し、名詞を修飾する際に抽出される特徴を指す。「深い」の場合、その基幹的な概念を欠いても、届きにくい方向への程度大という部分的な特質があれば、装定は成立する。

7. おわりに

本発表では、形容詞「深い」を対象に、意味特徴の観点から述定と装定の機能の違いを考察し、次元性が次元形容詞の述定に不可欠な要素であることを示唆した。今後は、他の次元形容詞での検証を進めるとともに、「深く考える」のような連用用法の機能についても明らかにしていきたい。

参考文献 木下りか (2004) 「形容詞の装定用法をめぐり一考察：「多い」「速い」の場合」『大手前大学人文科学部論集』5/金善花 (2017) 「次元形容詞「深い」にかかわる経験的基盤について」『さいたま言語研究』1/国広哲弥 (1968) 「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2/国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館/栗木久美 (2022) 『日本語次元形容詞の意味研究—認知言語学の観点から』博士論文/小出慶一 (2000) 「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』/西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 44, 秀英出版/仁田義雄 (1980) 「「多い」「少ない」の装定用法」『語彙論的統語論』明治書院/仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27-3/仁田義雄 (2010) 『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房/森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店/八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院/安本真弓 (2009) 「構文的機能から見た中古形容詞の特徴—意味との関わりから」『国語学研究』48/楊婧璋 (2015) 「形容詞の属性と装定から述定への転換可能性との関わりについて」『国語学研究』54/楊婧璋 (2018) 「形容詞の装定における「部類分け」の機能について—装定から述定への転換可能性をめぐって—」『言語科学論集』22 調査資料 国立国語研究所 (2025) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2025 年 9 月 4 日確認)

副詞的修飾成分「べつに」の働きと位置づけ

仲谷 絹^{なかや きぬ}（東北大学大学院生）

1 はじめに

副詞的修飾成分「べつに」は、従来否定形式と共起する陳述副詞とされてきた（工藤 1982、全 2016）。

- (1) 毎日運動するのはべつに難しいことじゃない。

しかし、(2) のように否定形式と共起せず、後続する語が打消しの意味も含まないものも存在する。

- (2) 君みたいな生意気な若者、僕はべつにすきだけどね。

これまで「べつに」は否定形式と共起すると考えられていたため、このような「べつに」がどのような意味を表すのかは明らかになっていない。そうすると、「べつに」はどのような文に用いられ、どのような働きを持つのだろうか。また、「べつに」の位置づけは陳述副詞で適切なのだろうか。適切でないのであれば、どのように位置づけられるべきなのだろうか。そこで本発表では、「べつに」はどのような働きを持ち、どのように位置づけられる副詞的修飾成分なのかを明らかにすることを試みる。

2 先行研究

「べつに」は森田（1988）、飛田・浅田（1994）によって意味や用法が述べられている。森田（1988）は「主体・対象が特に他の場合と区別するような状態にないことの強調である」としている。飛田・浅田（1994）は「べつに」が述語にかかる修飾語の場合には後ろに打消しや否定の表現を伴うことが多いとした。

そして、全（2016）は副詞的修飾成分「べつに」について、述語が後続するもののほかに、以下のように単独で現れるものも考察対象とした。

- (3) 「今日、病院行ってきたの？」「行った」「どうだった？」「べつに」

（全 2016, pp.166-167:3 一部省略・下線は発表者による）

全（2016）は否定述語と共起する副詞としての基本用法を「べつに」の〈副詞的用法〉、(3) のような単独で用いられ、話し手の否定的な心的態度の表明に特化しているものを〈感動詞的用法〉とし、それぞれがどのような意味と機能を持っているのか、そして両用法の連続性はどのようなものかを考察した。全（2016）は〈副詞的用法〉の「べつに」に関しては、「否定述語と共起し、否定される述語の内容をとりたてて強調するという、陳述副詞として働く」と結論づけている。〈感動詞的用法〉については、否定的心的態度の表明に特化したものであると述べている。全（2017）でも「べつに」の基本は否定形式と共起する陳述副詞であるという軸は保持されている。

以上のように、先行研究において「べつに」は否定形式と共起することが前提として分析がなされている。しかし、(4) のように否定形式と共起しない文が実際には存在する。

- (4) 君みたいな生意気な若者、僕はべつにすきだけどね。

(4) は否定形式と共起しない文であり、述語である「すきだ」には打ち消しの意味は含まれない。したがって、否定形式と共起することを前提とした先行研究の分析では、(4) のような文を説明することができない。また、「べつに」が必ずしも否定形式と共起しないのであれば、否定形式と共起することが前提としてなされた「陳述副詞」という位置づけも再検討の余地があると考えられる。

3 「べつに」が使用される文

まず、「べつに」がどのような副詞的修飾成分であるかを明らかにするため、「べつに」が使用される文のタイプを明らかにする。

先行研究で指摘されている通り、「べつに」は**否定形式と共起する場合**がある。

(5) べつに「会社を辞めればいい」なんて言ってないだろ。

(6) わたし、家では上下スウェットだし、服とかべつに興味ないよ。

(5) の「べつに」は「言ってない」と共起している。(6) の「べつに」は「興味ない」と共起している。
また、「べつに」が使用されるとき、以下のように逆接が現れているものがある。

(7) 新居は狭いが、べつに気にならなかった。

(8) 君みたいな生意気な若者、ぼくはべつに好きだけどね。

(7) は否定述語である「気にならない」の対象である「新居が狭いこと」に逆接が伴っている文である。
一方 (8) は述語に「けど」が伴っており、否定形式と共起しないタイプである。

つぎに、「べつに」が使用されるとき、以下のように逆接仮定が現れているものがある。

(9) 先生が死んでしまってもべつにかまやしないさ。

(10) 毎日散歩してもべつに健康にはならなかった。

(9) は「『先生』が死んでしまう」という事柄に逆接仮定の「ても」が伴われ、当該事態が否定形式を伴って評価されているタイプである。「かまやしない」と共起している。(10) は「毎日散歩をする」という習慣と「健康になる」という結果が結びつかなかったことが逆接仮定「ても」で示されているタイプである。「ならなかった」と共起している。どちらも「べつに」が否定形式と共起するタイプである。

そして、「べつに」が使用されるとき、以下のように「だけ」が現れているものがある。

(11) A: 君はどうして我々によくしてくれるんだ? 何か目的でもあるのか?

B: べつに、やりたいようにやってるだけさ。

(12) A: おい、山田校長。いいたいことがあるなら言ってみろよ。

B: べつに? ちょっとは礼儀を覚えたらどうかと思っただけですよ。

(11) では A の問いかけに B が「べつに」を伴って応答している文である。「やりたいようにやってるだけ」と述べることで「目的はない」ことを意味している。(12) B も学生 A の問いかけに対する応答であるが、「べつに」で一度「いいたいことはない」と示したあとに「礼儀を覚えたらどうか」という「いいたいこと」を述べているタイプである。このタイプは否定形式と共起しない。

さらに、「べつに」が使用されるとき、以下のように「すればいい」が現れているものがある。

(13) A: この期間限定ドリンク、おいしそうだけど飲めないな〜。

B: え、べつに注文すればいいじゃん。

(14) A: 劇の主役なんて、だめですよ私なんか……髪も染めたことないんですよ。

B: 髪なんて、べつに染めたらいいじゃん。

(13) B は、A の期間限定ドリンクを飲むことを躊躇う先行発話に対して応答するタイプの文である。述語は「すればいい」で結ばれ、否定形式と共起しない。(14) B も先行発話に対する応答であり、「髪も染めたことのない自分は劇の主役なんて尚更無理だ」という先行発話に対し「髪を染めたらいい」と示すことで「劇の主役は無理ではない」と示す文である。このタイプは否定形式と共起しない。

最後に、**単独使用**の「べつに」の文は以下のようなものがある。

(15) ふみちゃんのドレス、すごーく赤くなかった? ——べつに。

(16) 焼き鳥最後の一本、買っちゃった。食べたい? ——べつに。

(15) は「ふみちゃんのドレスがあなたも赤いと思っただろう」と同意を求める文に対しての応答文である。(16) は最後の一本の焼き鳥を食べたいかどうかという問いかけに対しての応答文である。どちらも「い

いえ」という意味を表す。前述のものとは述語がない点で区別される。

以上のことから、「べつに」には、**逆接**、**逆接仮定**、「**だけ**」、「**すればいい**」が現れる文にも使用され、問いかけへの応答という形で**単独での使用**も見られることがわかった。逆接仮定が現れる文では「べつに」は必ず否定形式と共起するが、逆接の文では必ずしも共起せず、「**だけ**」文、「**すればいい**」文では否定形式と共起しない。このように、「べつに」は否定形式と共起しない文にも使用できる。

4 「べつに」の働き

では、「べつに」そのものが持つ副詞的修飾成分としての働きはどのようなものだろうか。

- (17) わたし、家では上下スウェットだし、服とかべつに興味ないよ。
- (18) 新居は狭いが、べつに気にならなかった。
- (19) 先生が死んでしまってもべつにかまやしないさ。
- (20) A：君はどうして我々によくしてくれるんだい？ 何か目的でもあるのか？
B：べつに……やりたいようにやってるだけさ。
- (21) A：劇の主演なんて……だめですよ私なんか。髪だって染めたことないんですよ。
B：髪なんて、べつに染めたらいいじゃん。
- (22) ふみちゃんのドレス、すごく赤くなかった？ ——べつに。

(17) は、「あなたは私がファッションに興味があると思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり、特にファッションに興味はない」という意味である。(18) は「あなたは私が、新居が狭いことを気にしていると思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり、私は新居の狭さをたいして気にしていない」という意味である。(19) は「あなたは私が、恩師が死ぬことを問題視していると思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり、私は恩師が死ぬことを大して問題視していない」という意味である。(20) は「あなた (A) は私 (B) が、なんらかの目的があると思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり私は特になんらかの目的はなく、むしろやりたいようにやっているだけである」という意味である。(21) は「あなた (A) は、私 (B) が、「A は髪を染めるのは似合わないし、劇の主演なんて尚更だ」と考えていると思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり、「A は髪を染めるのは似合わないし、劇の主演なんて尚更だ」なんて特に考えていない。むしろ髪は染めたければ染めたらいいし、劇の主演だってやったらいいと考えている」という意味である。(22) は、「あなたは私もふみちゃんのドレスを派手だと思ったと思っているかもしれないが、私の認識はそれとは異なり、ふみちゃんのドレスを特に派手だとは思わなかった」という意味である。

(17) ～ (22) をみると、否定形式と共起する例もしない例も、単独使用の例も、その意味構造は共通して以下のようなものであると考えられる。

- (23) あなたは「私が【ある事柄】だ」と思っているかもしれないが、
私の認識はそれとは異なり、私は特に【ある事柄】ではない（むしろ～である）。

「べつに」が使用される文には、「聞き手は「私が【ある事柄】だ」と思っているかもしれない」という話者の想定が存在する。この想定を、相手の考えを見積もって形成されている想定であることから話者の「見積もり」と呼ぶことにする。

以上のことから、副詞的修飾成分「べつに」は、話者の見積もる想定が話者自身の実感とは「別」であることを示し、自身はその想定された考えを特別言及するほど持っていないという意味を表す働きを持っていると考えられる。

5 「べつに」の位置づけ

このようにみると、副詞的修飾成分「べつに」は、どのように位置づけられるのだろうか。管見の限り、「べつに」を副詞的修飾成分の分類体系に位置づけているのは工藤（1982）と全（2016）であり、どちらも陳述副詞に位置づけている。

5.1 これまでの陳述副詞のとらえ方

これまで、陳述副詞の規定は複数の研究者によって考察されている。国立国語研究所（1991）によれば、山田（1936）による陳述副詞の立項から、渡辺（1971）、中右（1980）、芳賀（1978）、市川（1976）、工藤（1982）によってその捉えなおしや下位分類が行われている。また益岡（1993）、森山（2000）、加藤（2006）も、日本語文法論の概説書ではあるものの、陳述副詞の捉えなおしを行っている。

それぞれの研究において陳述副詞は様々に規定されており、大きく①特定の表現と呼応・共起するもの（ぜひ、決して、はたして等）、②後続する叙述内容についての話者の気持ち・態度を表現するもの（もちろん、あいにく等）、③文の命題内容の蓋然性を限定するもの（おそらく、たぶん等）、④後続する事物を排他的に取り上げるもの（ただ、すくなくとも、むしろ等）⑤その他（接続詞的なもの、アスペクト・テンスに関わるもの等）に分けられている。これらの条件を「べつに」と照らし合わせてみたときに、はたして「べつに」は陳述副詞と言えるのだろうか。⑤を除いて①～④について検討する。

5.2 「べつに」は陳述副詞か

まず「べつに」が①特定の表現と呼応・共起するものであるかを検討する。

- (24) 今度ぜひ遊びにいらしてください。
- (25) 決して嘘はつきません。
- (26) はたして鍵は見つかったのだろうか。

(24) のように「ぜひ」が使用される文は「ください」で結ばれ、(25) のように「決して」が使用される文は「ない」で結ばれ、(26) のように「はたして」が使用される文は「か」で結ばれる。このような呼応や共起が起こるものは陳述副詞とされた。しかし、「べつに」には否定形式と共起しない例も存在する。

- (27) 君みたいな生意気な若者、ぼくはべつに好きだけどね。
- (28) A：劇の主演なんて、だめですよ私なんか……。髪も染めたことないんですよ。
B：髪なんて、べつに染めたらいいじゃん。

したがって、①の規定は「べつに」には当てはまらないと考えられる。

では、「べつに」は②後続する叙述内容についての話者の気持ち・態度を表現するものだろうか。

- (29) もちろんよくご存じのことと思います。
- (30) あいにく大粒の雨が降り出した。

(29) は、話者は聞き手がある事柄を知っていることについて「もちろんだ」と思っていることを表す文である。(30) は大粒の雨が降り出したことについて話者は「あいにくだ」と思っていることを表す文である。しかし、「べつに」はそれ自体が気持ちや態度を表す形式ではない。

- (31) 新居は狭いが、べつに気にならなかった。

(31) は、「新居が狭いことを話者が気にしていない」ことについて、話者の気持ちや態度が「べつだ」と示すものではない。したがって、「べつに」は②の規定にも該当しないと考えられる。

次に、「べつに」が③文の命題内容の蓋然性を限定するものであるかを検討する。

- (32) おそらく先生はコインランドリーを出てコンビニに向かった。

(33) 母親はたぶん昼頃に来ます。

(32) は、「先生がコインランドリーを出てコンビニに向かった」という事態の蓋然性が「おそらく」程度のことであるということを示す文である。(33) は「母親が昼頃にやってくる」という事態の蓋然性が「たぶん」程度であることを示す文である。一方で、「べつに」は蓋然性を規定する副詞的修飾成分ではない。

(34) 留学経験があってもべつに就活は楽にならないよ。

(34) は「留学経験がある」ということから想定されやすい「就活に有利である」という事態を否定する文であり、(34) であらわされている命題内容である「留学経験があっても就活は楽にならない」の蓋然性を「べつに」は限定していない。したがって、「べつに」は③の規定にも該当しないと考えられる。

最後に、「べつに」が④後続する事物を排他的に取り上げるものであるかを検討する。

(35) ただ君だけが頼りだ

(36) 少なくとも十年はかかる

(37) わたしは夏よりもむしろ冬が好きだ

(35) では、話者の知っている人間の中からただ一人「君」を取り上げている。(36) では、無限の時間の流れの中から「十年」という期間を取り上げている。(37) では、四季の中から「冬」を取り上げている。一方で、「べつに」には後続する事物をただ一つ排他的に取り上げる機能を持たない。

(38) べつに僕は好きじゃない。

(38) は話題に上がっている物事を「僕」は好きではないことを述べる文である。後続する事物である「僕」を「べつに」は取り上げていない。

以上のことから、副詞的修飾成分「べつに」は陳述副詞ではないと考えられる。

5.3 話者が見積る想定と関わる副詞

では、副詞的修飾成分「べつに」はどのように位置づけられるべきだろうか。「べつに」はここまでみてきたように、話者の見積もりがある文に使用され、その見積もりと話者の認識が「別」であることを示す副詞的修飾成分である。実は「べつに」のほかにも、話者の見積もりと関わると思われる副詞が存在する。

例えば「全然」は、肯定文に使用される例について、新野 (2011) によって「何らかの前提を否定するような場合に使われる」という調査結果が出ている。

(39) もっと遊ばないと、とか、甘えていいのに、とか言われるんですが、全然遊んでいるし、甘えてます。 (新野 2011, p.192)

(40) 「かっかするなよ」と言う落合監督に対し、「全然冷静だった」という谷繫。 (同上)

新野 (2011) は、「いずれも、直前に示された、自分に対する他人の発言の内容という前提に対して、〈そんなことはまったくなく〉と否定している」と述べている。(39) の話者は投げかけられた意見から「意見を言った人は、[私が【遊んでおらず、甘えられていない】] と思っているかもしれない」と見積もり、それを否定していると考えられる。(40) の話者は監督の声掛けから「落合監督は [私が【かっかしている】] と思っているかもしれない」と見積もり、それを否定していると考えられる。したがって、「全然」が使用される文にも見積もりが存在すると考えられる。「全然」もまた否定の叙法副詞に分類されている (工藤 1982) が、必ずしも否定形式と共起しないため、否定の叙法副詞という位置づけは見直されるべきである。

そして、副詞的修飾成分「普通に」も井本 (2011) によりプラスの評価を表す文に使用される「普通に」は評価対象の事物に対してマイナスの評価が前提とされている「標準程度否定文脈」があって成り立つものであると述べられている。

(41) 学食のラーメン, まずいって聞いてたけど, 普通においしかった。(井本 2011, p.72:55)

(41) では、評価対象である「学食のラーメン」について、「まずい」という標準程度否定文脈が導入されたうえで、「普通においしかった」と評価することで、マイナス値から標準値への引き上げを「普通に」が行っているとされている。この「標準程度否定文脈」は、「学食のラーメンはまずい」という噂を聞いた話者がラーメンの美味しさに対して行った見積もりであると考えられる。

その後西村 (2016) は標準程度否定文脈がない場面においても「普通に」が使用できると主張している。

(42) ねえねえ、あの子、普通にかわいくない？ 読者モデルみたい。(西村 2016, p.62:24)

(42) は、見知らぬ女性に対する評価の文である。西村 (2016) はこのような場面では標準程度否定文脈が存在しないと示した。しかし、(42) には「一般的に街で見かける女の子は読者モデルだと思うほどには可愛くない」という見積もりがあると考えられることから、「普通に」使用される文にも見積もりが存在すると考えられる。また、「普通に」もは西村 (2016) によって「程度副詞的な性質を保ちつつ、注釈副詞として働く」と述べられているが、未だ確固たる位置づけはなされていない。

このように、見積もりがある文に使用される副詞的修飾成分は、現状では確固たる位置づけがないといえ、再考の余地がある。そこで、以上のような副詞的修飾成分をくくる「見積もり副詞」という分類が必要なのではないかと考えられ、本発表の「べつに」はそこに位置づけられるのではないかと考えられる。

6 終わりに

本発表では、副詞的修飾成分「べつに」がどのような文に使用されるのか、その働きはどのようなものかを明らかにし、従来位置づけられていた陳述副詞に位置づけることはできないことを示し、「見積もり副詞」という分類項を打ち立てその中に位置づけるべきであることを提案した。「見積もり副詞」という分類項の立項は、副詞的修飾成分に新たな分析の観点を提供するという点においてその分類体系研究に寄与するものであると考えられる。

今後は、立項した「見積もり副詞」の分類項としての整備のために、副詞的修飾成分「全然」や「普通に」、またその他見積もりに関わる副詞的修飾成分の記述を行い、「見積もり副詞」の内実を明らかにしていく必要がある。

参考文献

市川孝 (1976) 「副用語」『岩波講座日本語 6 文法 I』岩波書店/井本亮 (2011) 「『普通にかわいい』考」『商学論集』79, 福島大学経済学会, pp.59-75./加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』研究社/工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所 研究報告集 3』(ひつじ書房『副詞と文』(2016) による)/国立国語研究所 (1991) 『副詞の意味と用法』/全紫蓮 (2016) 「副詞「べつに」の意味と機能-＜感動詞的用法＞を中心に-」『日語日文学研究』99-1, 韓国日語日文学会, pp.97-120./全紫蓮 (2017) 「否定におけるとりたて副詞の機能」『日本語教育研究』41, 韓国日語教育学会, pp.189-206./中右実 (1980) 「文副詞の比較」, 国廣哲彌編『日英比較講座第 2 巻文法』, 大修館/新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究』ひつじ書房/西村恵美 (2016) 「『普通にかわいい』再考 -高い程度を表すと解釈される副詞的成分「普通に」の新用法に関して-」『英語学英米文学論集』, 42, pp.43-63./芳賀綏 (1978) 『現代日本語の文法』, 教育出版/飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版/益岡隆志 (1993) 『24 週日本語文法ツアー』くろしお出版/森田良行 (1988) 『基礎日本語辞典』角川書店/森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房/渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房

2025. 10. 25 日本語学会 2025 年度秋季大会 口頭発表資料

状況「を」句の対象性

清泉大学短期大学部 佐藤 友哉

1. はじめに——研究の目的

現代語格助詞「を」には、①対象（木を切る）、②離点（店を出る）、③経路（階段を上がる）、④時間（3年を過ごす）、⑤状況（捜索隊は大雨の中を（太郎を）探した）がある。

研究の目的：状況（動作主体を取り巻く環境）を表す用法が「を」格を取る理由について、状況用法と「を」の他の用法との関連を探りつつ、説明すること。

2. 従来の指摘と問題のありか

天野 (2008)

- ・「状況ヲ句文を成り立たせる動詞の意味としてより本質的なものは、対抗動作性」(p. 6。下線引用者)である(下掲(2)参照)。
- ・「桜吹雪の中を道を歩いた。(杉本 1993:30。下線引用者)」のように、当該動作が対抗動作性を表さない例は「状況ヲ句文というよりも移動空間ヲ句文に近い」(p. 8)。

申 (2014)

「を」の状況用法（「中を」の形式に限定）を、移動性述語と共起する「空間的状況」と、非移動性述語と共起する「時間的状況」に分ける (p. 82)。(3)のように、時間的状況を形成する述部は対抗動作性を表すとは言い難い例もある (pp. 83-84)。

○空間的状況

- (1) 雨の中をグラウンドを走った。 (申 2014:82)

○時間的状況

- (2) 寒さの中を15分間立っていた。 (同上)

- (3) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。 (シドニィ・シェルダン著／天馬龍行訳『天使の自立』。申 2014:84)

- ・時間的状況には「何らかの時間的な幅と流れ」(p. 84)といった[展開プロセス]がある。

- (2):15分間立っていること

- (3):「平らげて」から「反り返った」までの動作が連続していること

- ・[展開プロセス]によって時間的状況の「を」句は時間的な経路として解釈される (p. 85)。

問題のありか

ア、「時間的な経路」(申 2014)とは具体的にどのようなものか。

イ、[展開プロセス](申 2014)があれば、なぜ状況「を」句が成立するのか。

この問題は、状況用法と関連の深い経路用法及び時間用法が「を」格を取る理由と合わせて考察することで解決すると考える。

3. 経路用法及び時間用法が「を」格を取る理由

経路用法

・佐藤（2025）：「を」の経路用法を形成する動詞は『『を』が示す空間において未占有領域を既占有領域へと逐次変えていく作用』を表し、『『を』格は、状況変化をもたらす逐次的占有作用の目標・対象として前景化する』（p. 28. 下線引用者）。

cf. 「公園で歩く」の「で」は場所を背景化する。

占有：「物体がある空間を占めて、そこを自身の存在場所とすることを指す。自分のものとして所有する意では用いない」（p. 26）

佐藤（2025）に付言すれば、経路用法の「を」格も対象性を有することにより、対象用法との共通性が生じ、「を」格を取る。

時間用法

佐伯（2020）によれば、状況用法は時点、期間を表す時間用法の内、期間を表すものと共通点を持つ（p. 31）。以下、期間を表す時間用法が「を」格を取る理由を探る（下例は佐伯2020が期間を表す「を」格と共起する動詞として挙げるものを基に、筆者が作例したもの）。

○経由点・経路を表す動詞と共起

(4) 時代を歩んでいく。／祖父の人生を辿る。／戦乱の時代をくぐり抜ける。

(4)の「を」上接項は抽象的経路を表し、動作が有する逐次的占有作用の対象となる。

○時間的経過を表す動詞と共起

(5) 3年を過ごす。／長野で少年期を送る。／80年を生きる。

(5)は動作主体が或る時間の中に身を置き、それを一定期間続けるさまに叙述の重点がある。このとき、動作主体は当該の時間の中に身を置くことでその時間を占め、これが逐次繰り返される。即ち、逐次的占有作用が当該期間を対象にとって発揮される。

○完了を表す動詞と共起

(6) 冬を乗りきる。／考查課程を終える。／厳冬を辛抱し抜く。

佐伯（2017:69）によれば、時間用法は経路用法と対象用法にまたがる振る舞いをする。(6)は抽象的な移動を表す意味で逐次的占有作用が当該期間を対象にとって発揮される面と、達成・完遂を表す意味で対象用法に連続する面との両面がある。

○継続を表す動詞と共起

(7) 6日間を働き続ける。／長い冬をもちこたえる。／生涯を独身で貫く。

(7)は或るあり方（働くことをやめない、負けずにいる、独身）において当該期間を逐次占めていくさまに叙述の重点があり、逐次的占有作用が当該期間を対象にとって発揮される。「もちこたえる」「貫く」を「最後までがまんする」「突き通す」と解せば、「を」格は対象用法的な意味においても対象性を有する。

◆期間を表す時間用法のまとめ：当該期間が逐次的占有作用の対象となる、または、対象用法的な意味（他動性の目標）で対象となるが故に対象用法との共通性が生じ、「を」格を取る。

4. 状況用法が「を」格を取る理由——その対象性について

移動性述語と共起する場合（申 2014 でいう空間的状況）

(8) 闇の中を、滅茶苦茶に走った。 (LBq9_00179 800 菊池寛『真珠夫人』)

(9) マーイやは、朝の木漏れ日の中を、やや俯き加減でゆっくりと歩いた。

(LBh9_00205 160 門田泰明『黒豹ダブルダウン』)

(10) 甘だるい香りと真紅の色彩の中を、信じられない話だが、軽く汗ばむほどに我らは庭を彷徨ったように思う。 (PB49_00022 30000 宇月原晴明『風林火山を誘え』)

(8)(9)(10)では、動作主体が移動することにより、状況内の未占有領域を既占有領域へと逐次変化させるさまに叙述の重点がある。つまり、逐次的占有作用が、周囲の状況を対象に取った状態で発揮される。

さらに、(8)の「闇の中」は「走る」動作にとっての逆境であり（(9)(10)の「を」上接項は非逆境）、対抗動作の対象（2節 天野 2008 参照）という意味においても対象性を有する。

非移動性述語と共起する場合（申 2014 でいう時間的状況）

○状況「を」句が逆境となる場合

(11) しかも売り出される切符はわずか二百枚で、人々はその前売券を手に入れるための抽選券をもらうため、寒風のなかを並んでいるのだった。

(LBj9_00192 7560 典厩五郎『ロマノフ王朝の秘宝（下）』)

(12) 東京の日本山岳本部から榎有恒、松方三郎、三田幸夫、日高信六郎等の諸君も来会して、日曜日当日のウェストン碑前ではあいにくの小雨の中をそれぞれ予告を違えず講演をした。 (LBp7_00027 2230 尾崎喜八『音楽への愛と感謝』)

前節で「を」の期間を表す用法が時間的経過を表す動詞と共起する場合（例：3年を過ごす）、逐次的占有作用が当該期間に対して発揮されると述べたが、(11)(12)においても類似のことがいえる。(11)(12)で動作主体は、「寒風のなか」「あいにくの小雨の中」という空間とそこに流れる時間、つまり時空間をそれぞれ「並んでいる（列に合わせて立ち続ける）」「予告を違えず講演をする」というあり方で過ごす、換言すれば、そのあり方で当該時空間に身を置き続ける。(11)(12)は、動作主体がそのあり方で当該時空間を逐次占めていくさまに叙述の重点があり、当該時空間は、逐次的占有作用の目標・対象として前景化する。

さらに、「寒風のなか」「あいにくの小雨の中」は「並ぶ」動作、「予告を違えず講演をする」動作遂行にとっての逆境となるため、「を」上接項は対抗動作の対象という意味においても対象性を有する。

○状況「を」句が逆境とならない場合

(3) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。 (シドニィ・シェルダン著／天馬龍行訳『天使の自立』)

申 2014:84。再掲。下線の範囲、種類を変更)

再掲(3)では、まず「三皿も平らげて」という表現から、食事が継続的に行われたことがわかる。さらに、既述のように「三皿も平らげてから椅子に反り返る」という一連の行為に[展開プロセス]が認められる（2節 申 2014 参照）。(3)では、継続して食事をするというあり方と、「三皿も平らげてから椅子に反り返る」というあり方で当該時空間を過ごすさまが

表されている。即ち、(3)では動作主体がこのあり方で当該時空間を逐次占めていくさまに叙述の重点があり、当該時空間は逐次的占有作用の目標・対象として前景化する。

- (13) かたわらに山田東宮侍従長、牧野東宮女官長が恭しく立つなかを、美智子さんは玄関前で家族ら一人ひとりに別れの挨拶をした。

(LBh2_00016 21740 河原敏明『美智子皇后』)

- (14) (引用者注、帝位継承者の夫妻が暗殺された時に着ていた制服について、ウィーンの歴史博物館の案内係である「大佐」が説明している、という文脈) 陳列ケースを取り巻いて制服を見下ろしている見物客が一樣に沈黙を守るなかを、大佐は説明をつづける。

(LBo9_00221 24340 ゲルハルト・ロート著／須永恆雄訳『ウィーンの内部への旅』)

(13)(14)も各動作主体が「玄関前で家族ら一人ひとりに別れの挨拶をする」「説明をつづける」というあり方で当該時空間を過ごすさま、即ち、当該時空間を逐次占めていくさまに叙述の重点がある。当該時空間は、逐次的占有作用の目標・対象として前景化する。

(3)及び(13)(14)は(11)(12)とは異なり、状況「を」句が各動作遂行にとっての逆境とはいえず、したがって、対抗動作の対象という意味においては対象性を有しない。

「中を」以外の形式を取る状況「を」句文——「下を」「ところを」形式

○移動性述語と共起する場合

- (15) 馬車は炎天の下を走り通した。

(PB29_00381 28430 横光利一『編年体大正文学全集』)

- (16) 拝啓 昨夜は、月光の輝く下を久し振りに夫婦揃って散歩し、幸せをかみしめました。

(PB38_00046 40550 伊宮伶『手紙の書き出し実例集』)

- (17) 「お忙しいところを、わざわざ来ていただいてすみません」

(PB29_00530 10680 逢坂剛『[ノスリ]の巣』)

(15)(16)(17)では、状況「を」句と移動動詞「走り通す」「散歩する」「来る」が共起している。(15)(16)(17)では各移動の表す逐次的占有作用が当該の状況に働くさまに叙述の重点がある。そのため、「を」上接項は逐次的占有作用の目標・対象として前景化する。さらに、(15)(17)では状況「を」句と動作とが「逆境—対抗動作」の関係にあるため、(15)(17)の状況「を」句は対抗動作の対象という意味でも対象性を有する。

○非移動性述語と共起する場合

- (18) 太郎は炎天の下を立ち続けた。

(作例)

- (19) お忙しいところをご対応くださり、ありがとうございます。

(作例)

(18)(19)では、動作主体が「炎天の下」「(お)忙しいところ」という時空間を「立ち続ける」「(ご)対応する」というあり方で過ごすさまが表されており、このさまに叙述の重点がある。したがって、当該時空間は逐次的占有作用の目標・対象として前景化する。さらに、(18)(19)では「を」格名詞句と動作とが「逆境—対抗動作」の関係にあるため、(18)(19)の状況「を」句は対抗動作の対象でもある。

以上に見たように、「下を」「ところを」形式を取る状況用法もその成立原理は「中を」形

式と同じである。

◆「を」の状況用法まとめ

- ① 移動性述語と共起する場合、移動による逐次的占有作用が空間的状況を対象に取り発揮される。
- ② 非移動性述語と共起する場合、[展開プロセス]による逐次的占有作用が時空間的状況を対象に取り発揮される。

2 節ア：「時間的な経路」とは、逐次的占有作用が発揮される時空間のことである。

2 節イ：[展開プロセス]があれば、当該空間または時空間が対象性を帯びるため、「を」格を取るようになる。

- ③ 移動または[展開プロセス]は状況「を」句文の成立に必要な条件だが、対抗動作性は必ずしも必要な条件ではない。対抗動作性は、既に成立した状況「を」句に対象性を付加するものと位置づけられる。

以上を踏まえ、次の現象について考えてみる（(20)の下線範囲は私に改めた）。

(20) *ろうそくの明りの中を本を読んだ。 (杉本 1986:298)

(21) ろうそくの明りの中を本を読み続けた。 (佐藤による作例)

(22) ろうそくの明りの中を目を凝らしながら本を読み続けた。 (佐藤による作例)

(20)は杉本(1986)が「何らかの移動」(p.299)の意味が表れていないために非文法的とする文である(ただし、筆者には不自然ながらも完全に非文とまでは思われない)。注目すべきは、(21)「読み続けた」、(22)「目をこらしながら本を読み続けた」のように表現を追加、変更することで、順に容認度が高まっていくことである。まず、(20)の容認度が低いのは、「読む」が移動も表さないし、継続する動作であることも不明瞭であるが故に[展開プロセス]が読み取りづらいため、「ろうそくの明り」という空間または時空間に対し、逐次的占有作用が発揮されると見なしづらいからである。これに対し、(21)(22)の容認度が上がるのは、(21)では「続ける」によって[展開プロセス]が読み取りやすくなることで当該時空間を対象に取り逐次的占有作用が発揮されると解されるようになるためであり、(22)ではこのことに支えられ、さらに「目を凝らしながら」によって当該時空間が動作遂行にとっての逆境であることが明確となり、その結果、当該時空間が対抗動作性の対象とも解釈できるようになるためである。

5. 対象を表示する「に」との比較

次例のように、「に」も対象を示し得る。「を」が示す対象との違いは何か。

(23) 太郎に書類を渡す。／A案に賛成する。／騒音にいらいらする。

「に」が表示する対象：動作の先に存する事物（「騒音」は「いらいらする」の原因であるとともに態度の向かう先でもある）。

状況「を」句文の場合どうか。菅井(1998)によれば、「を」格は「イメージスキーマ《起点→過程→着点》における《過程》のプロファイルとして意味的に規定される」(p.27)。状況「を」句文は逐次的に進行する移動や、逐次的に時空間を過ごすさまが描かれるため、

その対象は動作の過程局面に存するものといえる。

6. おわりに

「を」の状況用法は次の2条件を満たす。

- ① 「を」上接項が、動作主体を取り巻く環境を意味すること。
- ② 述部が移動を表す場合も表さない場合も「を」上接項が述部の表す逐次的占有作用の対象となること。

「を」の状況用法は述部が何らかの移動を表す場合、直接的には経路用法に連続する。述部が移動を表さず、かつ[展開プロセス]を表す場合、直接的には時間用法に、より具体的には時間的経過を表す用法に連続する。述部が対抗動作性を有する場合は、対象用法とも関連するが、述部が対抗動作性を有することは状況「を」句文成立にとって必須ではないことから、その関連は二次的なものである。

本研究の意義とでもいふべきものがあれば、次の二つが挙げられるだろう。

- ・状況用法が「を」格を取る理由について、状況用法と経路、時間、対象を表す用法との関連を示しつつ論じたこと。
- ・述部が移動を表す場合も表さない場合も同一の原理で状況用法を説明したこと。

本研究を格助詞「を」の統一的説明に向けた足がかりとしたい。

【調査資料】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（中納言 2.7.1 データバージョン 2021.03）

【引用文献】

- 天野みどり（2008）「状況を表すヲ句について」『和光大学表現学部紀要』第8号 pp. 1-13
- 佐伯暁子（2017）「現代語における時間を表すヲ格について」『日本語文法』17巻1号 日本語文法学会 pp. 54-70
- 佐伯暁子（2020）「現代語における経由点・状況・時間を表すヲ格について」『岡大文論稿』48号 岡山大学法文学部言語国語国文学研究室 pp. 42(16)-29(28)
- 佐藤友哉（2025）「経路を表す『を』格の対象性」『清泉女学院短期大学研究紀要』第43号 清泉女学院短期大学 pp. 23-32
- 申義植（2014）「状況の『を』句文成立の意味的な制約について—時間状況における展開プロセス—」『筑波応用言語学研究』21号 筑波大学人文社会科学部研究科 pp. 82-95
- 菅井（1998）「対格のスキーマ分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集（文学）』44 名古屋大学文学部 pp. 15-29
- 杉本武（1986）「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社 pp. 231-380
- 杉本武（1993）「状況の『を』について」『九州工業大学情報工学部紀要人文・社会科学篇』6号 九州工業大学 pp. 25-37

日常会話（CEJC）における包括的助数詞の使用実態 — 〈つ〉〈個〉による助数詞の代替機能に注目して—

やまもとあきこ

山本晃子（立命館大学大学院生）

1. はじめに

日本語の助数詞は 300 種を超えと言われる（飯田 1999）が、それらが常に厳密に使い分けられているわけではない。山本（近刊）は新聞と日常会話を比較し、日常会話では〈人〉〈回〉〈つ〉〈個〉など限られた助数詞に使用が集中することを示した。つまり、公的な書き言葉に比べ、話し言葉では使い分けが簡略化しやすいと考えられる。

特に注目されるのは、日常会話で〈個〉が主要助数詞の一つとして頻繁に用いられる点である。これは新聞には見られない特徴であり、話し言葉では、〈個〉も〈つ〉のように包括的助数詞として機能している可能性がある（Shimojo 1997, 伊藤 2015, 山本 2024）。では、〈個〉は〈つ〉と同等といえるのだろうか。

本発表では、Shimojo (1997) が挙げた包括的助数詞の条件の一つ、「個別的助数詞の代わりに使用できる」という機能（「代替機能」）に注目し、〈つ〉〈個〉を比較する。両者はいずれも代替機能を持つが、共起する数詞、用法、数えられる対象といった点で異なる特徴を示すことを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 「包括的助数詞」の定義と機能

水口（2004）は、「包括的助数詞」を「ある範疇に入るものすべてと共起することができる助数詞」、「個別的助数詞」を「ある範疇のさらに特定化された下位範疇としか共起することができない助数詞」と定義している（p.68）。たとえば、人間という範疇では〈人〉が包括的助数詞、〈名〉が個別的助数詞となる。

- (1) a. 店に係が { 三人 ・ 三名 } いる。
- b. 刑事が銀行強盗 { 三人 ・ *三名 } を追いかけている。

Shimojo (1997) は、包括的助数詞の機能の一つとして「個別的助数詞の代わりに用いられる」という「デフォルト機能」を挙げている¹。

- (2) デフォルト機能
何らかの語用論的条件があれば、個別的助数詞の代わりに使用することができる。 例) 皿がちょうど三つある。

本発表では、この「デフォルト機能」を、便宜的に「代替機能」と呼ぶ。

¹ (2) は、英語原文に基づき発表者が要約したものである。Shimojo (1997) で挙げられた包括的助数詞の機能は三つあり、「デフォルト機能 (default function)」「補完機能 (complement function)」「不特定参照機能 (unspecified-referent function)」である。また、デフォルト機能の例としてここで示したものは発表者による作例だが、「皿」については、Shimojo (1997) で〈つ〉のデフォルト機能が働く対象の例として挙げられているものである。下線はすべて発表者による。

2.2 〈つ〉〈個〉に関する先行研究

〈つ〉〈個〉は、いずれも無生物を数える助数詞である。先行研究では、〈つ〉は「無生物」であれば基本的に何にでも用いられる包括的助数詞とされる（松本 1991, 谷原・顔・リー1990, 飯田 1999 など）²。

一方、〈個〉は、基本的には、「持ち運び可能で三次元的な形をもつ対象」（りんご、電球など）に用いられるとされてきた（松本 1991, 谷原・顔・リー1990, Shimojo1997, 飯田 1999 など）。しかし、話し言葉を対象とした記述的研究（Shimojo1997, 伊藤 2015, 山本 2024）では、抽象物（アイディア、夢など）や他の助数詞で数えられる対象（皿、カメラなど）にも〈個〉が用いられることが報告され、〈つ〉と同様に包括的助数詞として機能する可能性が指摘されている。

ただし、その実態は十分に検討されていない。本発表では、先行研究を踏まえ、話し言葉では〈個〉も包括的助数詞として機能するという前提のもと、その「代替機能」に注目し両者の特徴を比較する。

3. 研究方法

本研究では、調査資料として『日本語日常会話コーパス』（データバージョン 2023.03、以下 CEJC）を用いた³。検索には「中納言」（バージョン 2.7.2）を使用し、〈つ〉および〈個〉の用例を収集した⁴。

収集した用例は、前後文脈および CEJC に収録された映像を参照し、〈つ〉〈個〉で数えられている対象（以下、対象名詞）を確認した。「三つ折り」「四つ星ホテル」などの複合語の一部となっているもの、固有名詞、歌詞等の引用、言い淀み、「今一つ」「～一つとっても」のような特殊な「一つ」の用法、対象名詞を判別できないものは、分析から除外した⁵。その結果、分析対象は〈つ〉1538 件、〈個〉1058 件となった。

² ただし、飯田（1999）では、無生物であっても「たんぽぽ」「生垣」「紙飛行機」のような複雑な形状を持つものは〈つ〉で数えにくいという指摘もなされている（p.388）。

³ CEJC の設計等詳細は、小磯・天谷・石本ほか（2022）を参照。

⁴ 以下に〈つ〉の検索条件を示す。〈個〉については、検索式中の「つ」を「個」に置き換えることで抽出した。

(i) キー: 品詞 LIKE "名詞-数詞%"

AND 後方共起: 語彙素="つ" ON 1 WORDS FROM キー

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

⁵ 分析対象から除外したのは、まず複合語の一部となっているもの（〈つ〉44 例）、固有名詞（〈つ〉2 例）、他の文章からの引用（〈つ〉16 例、〈個〉1 例）、言い淀み（〈つ〉6 例）である。さらに、「一つ」の特殊な用法については、対象名詞に応じて他の助数詞が選択できるかどうかを基準に判断した。例えば、(ii a) では対象名詞「コンビニ」に合わせて〈軒〉が選択可能であるが、(ii b) では〈軒〉を用いることができないため、「一つ」の特殊な用法と判断される。

(ii) a. この街にはコンビニが {一つ／一軒} しかない。

b. 東京はコンビニ {一つ／*一軒} とっても品揃えが違う。

このような用法は〈つ〉に 73 例、〈個〉に 9 例見られた。例えば (iii) がその一例である。

(iii) 雑用一個に関してもまず気付かない (T010_013, 123560)

また、対象名詞を判別できないものとは、前後文脈からも対象が判断できない例や、発話現場に存在する対象を指していると考えられるものの、CEJC に収録された映像にその対象が映っていないため判別できない例を指す（〈つ〉44 例、〈個〉26 例）。

さらに、各対象名詞について使用可能な助数詞を確認した結果、〈つ〉 927 件、〈個〉 668 件が他の助数詞でも数えられると判断された。確認には、発表者自身の内省、飯田（著）・町田（監修）（2004）『数え方の辞典』を用いた。

4. 分析結果

4.1 共起する数詞による比較

まず、他の助数詞でも数え得る〈つ〉 927 件、〈個〉 668 件について、共起する数詞を確認した（表 1）。表中の「いく・何」は、〈つ〉は「いくつ」、〈個〉は「何個」を示す。「その他」には、十以上の数詞や「一二個」のように数詞を重ねた例が含まれる。

表 1：〈つ〉 〈個〉 共起する数詞

数詞	〈つ〉		〈個〉	
一	310	33.4%	444	66.5%
二	239	25.8%	76	11.4%
三	118	12.7%	29	4.3%
四	63	6.8%	13	1.9%
五	14	1.5%	10	1.5%
六	4	0.4%	10	1.5%
七	2	0.2%	5	0.7%
八	9	1.0%	2	0.3%
九	0	0.0%	3	0.4%
いく・何	168	18.1%	30	4.5%
その他	–	–	46	6.9%
合計	927	100.0%	668	100.0%

表 1 では、両者とも「一」が最多だが、〈個〉の約 7 割に対し、〈つ〉は 3 割強にとどまる。〈つ〉は「二」「三」「四」との共起や「いくつ」が一定数見られるのに対し、〈個〉は「一」に偏り、他の数詞は少ない。「その他」は十以上の数詞など〈つ〉に現れない用例だが、〈個〉全体の 1 割未満にすぎない。以上の

ように、両者は共起する数詞に異なる傾向を示す。

4.2 対象名詞と使用可能助数詞の比較

対象名詞を出現頻度順に整理した結果を表 2、表 3 に示す。両表には度数 10 以上の助数詞を掲げた⁶。

表 2、表 3 の対象名詞には、「生ビール」「アイスクリーム」「皿」などの具象物と、「年齢」「事」「テーマ」などの抽象物が含まれる。〈つ〉は両者が混在するのに対し、〈個〉は食べ物を中心とする具象物が多い。

その次に、これらの対象名詞に対して使用可能な個別的助数詞を確認した。対象名詞に使用可能な個別的助数詞は、〈つ〉 174 種、〈個〉 119 種であった。それらを出現頻度順で表 4、表 5 に示す。取り上げたのは度数 15 以上の助数詞である⁷。

⁶ 表 3 中の「食べ物」とは、会話中に話者の目の前に用意されている菓子類等の何らかの食べ物である。

⁷ なお、対象名詞と使用可能な助数詞は必ずしも一対一に対応するわけではない。ひとつの名詞に複数の助数詞が対応することがあり、たとえば「ケーキ」には〈ピース〉や〈切れ〉、「会議室」のような部屋には〈室〉〈部屋〉〈箇所〉などが使用可能である。本発表では、このような場合には対応するすべての助数

表2：〈つ〉対象名詞

順位	対象名詞	度数
1	年齢	80
2	生ビール	23
3	発言	22
4	事	20
5	お猪口	18
6	物	14
6	学年	14
8	揚げパン	13
8	テーマ	13
10	ギョウザ	10
10	の（形式名詞）	10
10	言葉	10

表3：〈個〉対象名詞

順位	対象名詞	度数
1	年齢	34
2	食べ物	32
3	アイスクリーム	26
4	の（形式名詞）	19
5	皿	18
6	卵	15
7	パン	13
7	芽	13
9	空豆	12
10	つくね	11
10	ギョウザ	11

表4：〈つ〉使用可能助数詞

順位	対象名詞	度数
1	本	102
2	杯	94
2	枚	94
4	歳	80
5	件	34
5	点	34
7	皿	31
8	台	29
9	箇所	23
10	言（こと）	22
11	切れ	17
12	軒	15
12	テーマ	15
12	室	15

表5：〈個〉使用可能助数詞

順位	対象名詞	度数
1	本	149
2	枚	123
3	粒	34
3	歳	34
5	台	31
5	点	31
7	皿	28
8	切れ	27
8	袋	27
10	箇所	26
11	パック	21
12	杯	17
12	箱	17
12	件	17

表4、表5を比較すると、両者とも〈本〉〈枚〉が上位にあり、〈点〉〈台〉〈箇所〉〈件〉なども共通して確認される。しかし差も見られ、〈つ〉では〈歳〉（度数80）が高頻度だが、〈個〉では度数34にとどまる。〈つ〉で頻出する〈杯〉（度数94）や〈言〉（度数22）は〈個〉では表外である。一方、〈個〉では〈粒〉も上位に入り、形状に規定される助数詞が上位にあることが特徴的である⁸。なお〈粒〉は〈つ〉では表外である。

詞を記録し、件数に加算した。そのため、表3、表4に示した各助数詞の度数の合計は、対象名詞の数とは一致しない。

⁸ 松本(1991)では対象名詞の形状に使用が規定される助数詞を「形状類別詞」と呼び、日本語の形状類別

4.2 用例に基づく〈つ〉〈個〉の比較

まず共通点として、表 4、表 5 の両者に〈点〉〈台〉〈箇所〉〈件〉を代替する例が見られる。〈点〉は「展示作品」「項目」「商品」、〈台〉は「パソコン」「カメラ」などの機械類に多く、「車」など乗り物にはほとんど用いられなかった。〈箇所〉は「駐車場」「観光地」などの場所、〈件〉は「事件」や形式名詞「こと」に用いられていた。

- (3) 報告すんの忘れてたことが 二個ありまして (T009_008b,800)

次に、頻度に差のある助数詞として〈歳〉を挙げる。〈つ〉では度数 80 と高頻度だが、〈個〉では度数 34 にとどまる。これは、〈つ〉が年齢そのものを数えられるのに対し、〈個〉は年齢差を表す場合に限られるためと考えられる。

- (4) 卓球の愛ちゃん 四つぐらいん時から かーってやるけど (S001_015,26920)

- (5) 奥さん 私の四個下 (T008_013,36930)

続いて〈つ〉特有の用法を見ると、高頻度の〈杯〉(度数 94) や〈皿〉(度数 31) は、飲食店での注文場面に多く現れていた。

- (6) 梅角ハイボールを一つください (S002_012,61180)

- (7) 葱タン塩 あと冷麺一つください (T015_012b,20850)

- (8) 豆腐サラダを二つ (K008_015,6780)

一方〈個〉では〈杯〉(度数 17)、〈皿〉(度数 28) が確認されたが、注文場面での使用は〈杯〉の 6 例のみであった。

- (9) 梅酒ロック二個とキウイクラッシュサワー一個とジントニック一個と… (K009_019,62920)

以上により、メニューを数える用法は〈つ〉に顕著であると言える。

また、発言を数える〈言〉も〈つ〉のみ度数 20 以上に達し、〈個〉は度数 12 にとどまる。特に〈つ〉では発話開始を示す用法が多く、これは〈個〉には見られなかった。

- (10) ぐっちさん ぐっちさん 一つだけゆわせてください (S002_011,18410)

最後に〈個〉の特徴をみると、表 5 の通り〈本〉〈枚〉への偏りが顕著である。これは、表 3 で確認したように、〈個〉の対象名詞が具象物中心であることと関係していると考えられる。〈本〉は「一次元的に細長いもの」、〈枚〉は「二次元的に薄く広がるもの」に用いられるとされる(松本 1991, 谷原・顔・リー 1990, 飯田 1999 など)。しかし、その選択に明確な基準は存在しない。そのため、対象の細長さがやや不足する場合や、厚み加わる場合、その形状が〈個〉で数えられるものの範囲に入ることが考えられる。つまり、形状的に複数の選択肢がある対象について〈個〉が選ばれる傾向が見られるの

詞は〈個〉〈枚〉〈本〉〈粒〉〈筋〉〈面〉の 6 つとしている。

であり、このような場合、〈個〉が〈本〉〈枚〉を代替しているというよりも、助数詞の使い分けが曖昧になる境界領域において〈個〉が選択されていると考えられる⁹。

5. まとめ

本発表では、日常会話における〈つ〉〈個〉を包括的助数詞の「代替機能」の観点から比較した。まず、共起する数詞の分布に差が見られた。〈個〉の約7割は「一」と共起していたのに対し、〈つ〉は3割強にとどまった。また、〈つ〉は「二」「三」「四」や「いくつ」とも一定数共起していた。また、代替する助数詞について比較した結果、両者はいずれも個別的助数詞を代替する包括的助数詞として機能している点で共通するものの、〈つ〉には〈個〉に見られない用法が存在すること、また、〈個〉は、目に見える形を有する具象物に対して用いられる傾向が強いという相違点が明らかとなった。この点から、両者を包括的助数詞として同等とみなすことはできないと言える。

今回は包括的助数詞の「代替機能」にのみ注目し分析を行ったが、包括的助数詞にはその他にも「適切な個別的助数詞をもたない対象名詞に用いられる」という機能があることも指摘されている。このような機能も含め、より詳細な分析を今後の課題としたい。

【参考文献】 飯田朝子（1999）「日本語主要助数詞の意味と用法」博士論文、東京大学。／伊藤由貴（2015）「近代を中心とした助数詞の通時的研究」博士論文、大阪大学。／小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝泰晴・西川賢哉・渡邊友香（2022）『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書6『日本語日常会話コーパス』-設計・構築・特徴-』東京：国立国語研究所。／谷原公男・顔瑞珍・デビー・リー（1990）「助数詞の用法とプロトタイプ 〈面〉・〈枚〉・〈本〉・〈個〉・〈つ〉」『計量国語学』17（5）：209-226。／松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造の体系－原型意味論による分析－」『言語研究』99：82-106。／水口志乃扶（2004）「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対照』61-77。東京：くろしお出版。／山本晃子（2024）「話し言葉における助数詞〈つ〉〈個〉の使用実態に関する一考察」『論究日本文学』121：21-36。／山本晃子（近刊）「日本語助数詞の使用実態と位相差-新聞（BCCWJ）・日常会話（CEJC）・小学校国語教科書（COSMOS）の比較分析」『立命館言語文化研究』37（1）：掲載ページ未定。／Shimojo, Mitsuaki（1997）The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of tsu and ko in Japanese. *Linguistics* 35（4）：705-733.

【調査資料】 飯田朝子（著）・町田（監修）（2004）『数え方の辞典』東京：小学館。／国立国語研究所（2023）『日本語日常会話コーパス』（バージョン 2023.03, 中納言バージョン 2.7.2）<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/index.html>（2025年1月29日確認）

⁹ 〈個〉〈本〉〈枚〉の選択が曖昧になる形状を持つ対象名詞についての指摘は、Shimojo（1997）、飯田（1999）にも見られる。

与格主語構文の意味的特徴の再検討

さいこう たいち
西郷 太一

(総合研究大学院大学学生／Visiting Scholar, University of Hawai'i at Mānoa)

1. はじめに

本発表では、与格主語構文 (dative subject constructions: DSC) を扱う。

- (1) 僕にはロシア語が話せる。 (2) 太郎にはお化けが怖い。

DSC は、「怖い/面白い/憎い」などの形容詞、「残念だ/困難だ/可能だ」などの形容動詞、「要る/ある (所有) /-タイ・(ラ) レル (可能)」などの動詞派生形が形成する。ここでは、DSC を形成する述語と与格主語述語 (dative subject predicates: DSP) と呼ぶ。また、この構文に現れる二つの名詞句について、先行名詞句を第一項、後行名詞句を第二項と呼ぶ。

本発表では、DSC の曖昧性を扱う。ここでいう曖昧性とは、下の (3) のような文に現れる、(3a) (3b) の二つの解釈のことを指す¹。

- (3) 太郎にはこの問題が難しい。
a. 太郎の判断するうえでは、この問題は難しい。
b. 太郎はこの問題が難しいような学力だ。

この解釈の違いを簡潔に示すと、(3a) は太郎の視点から問題に対する総称的叙述をしたものである一方で²、(3b) は発話者の視点から太郎の性質について叙述をしたものといえる。

DSC に以上の曖昧性があることは、人称制限によって確かめられる。以下に示すように、(3a) のように太郎の視点からの叙述を行う場合には、証拠性表現が必須である。

- (4) (定期テストの問題を振り返っている (A, B ともに太郎とは別の人物))
A: 太郎にはどの問題が一番難しかったのかな。
B: 太郎にはこの問題が難しかった* (らしい) よ。

一方、(3b) のように太郎自身の視点が問題でない場合には、証拠性表現は必要ない。

- (5) (誰に答えを聞こうかと話し合っている (A, B ともに太郎とは別の人物))
A: 太郎にならこの問題が解けるかな?
B: いや、太郎にはこの問題は難しいから、次郎に聞こう。

(5) で証拠性表現が必要ないのは、(3b) のように太郎の視点とは独立した叙述としての解釈が可能であることの反映である。証拠性表現の有無が反映する人称制限は、(3) に叙述の視点に基づく曖昧性が存在することを示唆する。

これに対して、DSC の中には、曖昧性を持たない文も存在する。(6) がその例である。

- (6) 太郎には英語が話せる。
a.*太郎の判断するうえでは、英語は話せる (ものだ)。
b. 太郎は英語が話せるような人だ。

直感的な観察として (6a) は論理的に成立しない。さらに (3) と異なり、(6) は人称制限が課されない。よって、この種の DSC の解釈は一義的で、曖昧性を持たないと考えられる。

¹ 本発表で提示する例文について、第一項、第二項標示の「ハ」「ガ」の選択によって優先される解釈が変化することが想定される。たとえば、第二項を「ハ」で標示すると (3a) の解釈が優先して現れる (「太郎にはこの問題は難しい。」)。本発表ではこの点を掘り下げず、あくまで名詞句と述語の連なりにおいて現れる解釈を捉える。その点において、例文は「コト化」されたものを扱っていると解釈されて問題ない。

² ここで「総称的」というのは、「太郎が、一般的な価値観から言って、おばけは怖いものと考えられていると思っている」ということである (関連する議論として Stojanovic 2007 を参照)。

本発表では、曖昧性についての検討を通して、DSC が意味的に二つに分類できることを明らかにする。そのうえで、DSC が曖昧性を生むメカニズムに関して分析を提示する。

本発表の構成は以下のとおりである。2 節では、先行研究における DSC の意味の扱いを検討し、判断主という概念によって意味が整理可能であるという仮説を提示する。さらに、それに基づいて DSC を二分類することを提案する。3 節では、その仮説の確からしさを保証する 3 つの言語現象の観察を行う。4 節では、2 種類の DSC が存在する意味的背景がどのようなものかを明らかにする。5 節はまとめである。

2. DSP の意味分類と DSP における判断の構造

2.1. DSP の意味分類

DSC の曖昧性に違いがある原因としては、まず DSP の意味特徴が原因と考えるのが自然である。実際、DSP の意味と DSC の意味は従来の研究で明示的に区別されていない。これを踏まえ、まず、従来の研究で DSP の意味がどのように分析されてきたかを取り上げる。

眞野 (2004) は、DSP の意味が大まかに「判断」と「所有（「能力」も含む）」に分けられることを指摘している（鈴木 2022 も参照）。以下に分類に対応する述語を示す。

(7) 「判断」タイプの述語

心理状態：面白い、恐ろしい、楽しい、ありがたい、恥ずかしい、かわいい

必要：必要だ、要る

能力／可能：難しい、困難だ、容易だ（能力というよりは難易度に関する判断）

(8) 「所有」タイプの述語

能力／可能：できる、分かる、可能だ、苦手だ、得意だ、見える、聞こえる

所有：ある、ない、いる、多い cf. 眞野 (2004: 79)

ここでいう「判断」は、ある人物による判断についての叙述であり、第一項による第二項についての叙述であると思われる（○○は～～だ。）。一方の「所有」は、ある人物の所有についての叙述であり、第一項についての叙述である（△△は～～な人だ。）といえる。

しかし、DSP が意味的に二分できるとして、それは DSC の意味にどのように反映されるのだろうか。従来の分析で問題なのは、DSP の意味を分類するに留まっており、これでは DSC の曖昧性は捉えられないという点である。なぜなら、最初に示した DSC の曖昧性は、言い換えるならば、「判断」「所有」の両方を表しうる述語と、「所有」しか表さない述語が存在することを示すことになるためである。眞野 (2004) の分類に従うと、(3) では、(3a) は「判断」、(3b) は（知的能力の）「所有」ということになる。つまり、DSP の意味に対するラベリングは、DSC の意味に対する分析には機能しないのである。

これを踏まえて、本発表では、DSP ではなく DSC の意味を二種類に分類すべきであると仮定する。しかし、「判断」という用語は様々な文脈広く使用される用語であり、たとえば「所有」を叙述する場合に判断は関わらないのかなどという点で誤解を招く恐れがあり、最適ではないため、代わりに、鈴木 (2022) の用語を借りて「評価」という用語を使用する（本発表では「判断」を別の意味で使用する (2.2 節)）。これらを踏まえて、以降の議論では、DSC の意味に応じて「評価」解釈、「所有」解釈という用語を使用する。

そのうえで、これまでの観察は、(3) のように「所有」解釈と「評価」解釈のどちらも受けるものと、(6) のように「所有」解釈しか受けないものがあることを示しているといえる。このふるまいの差は、以降 DSC の曖昧性を検討する上で重要な手掛かりになる。

2.2. 叙述における判断とその主体

DSC は「評価」「所有」の二つの解釈を持つが、この解釈は主観的判断を伴う場合が多く、DSP の多くは主観的述語である。よって DSC では、主観的述語の特徴である faultless disagreement (FD) が生じる。FD とは以下のように、主観的述語を含む文で二人の話者が一見矛盾する発話をして、それぞれの発話が真とみなされ得る状況を指す (Kölbel 2004)。

(9) A: 太郎にはフランス語が話せるよ。 B: いや、太郎は全然話せないよ。

このような場合、どちらかが誤っているわけではなく、A と B で「話せる」の基準が異なると考えることができる。すなわち、両者は真偽ではなく、単なる意見の相違によって対立している。DSC の意味に着目すると、(9) は「所有」解釈の環境であり、「所有」解釈では第一項「太郎」の性質をどう判断するかにおいて、A と B の間で FD が生じることがわかる。

一方の「評価」解釈の環境ではどうだろうか。ここでも FD は生じるが、A と B の間ではなく、第二項をどう評価するかについて「太郎」と B との間で生じる。

(10) A: 太郎にはこの問題が一番簡単だったんだって。

B: えー。(私には) この問題が一番難しかったけどなあ。

このように、主観的述語の DSP は「誰の視点での叙述か」が意味分析において重要になってくる。本発表では、この特定の視点の基となる人物のことを「判断主 (judge)」と呼ぶ。

本発表で提示する分析は、DSC の曖昧性が、判断主の意味論的位置付けの違いによって生じるというものである。すなわち、DSC には、第一項を判断主とする解釈と、文中に明示されない発話者を判断主とする解釈があり、この違いが、DSC の曖昧性を生じさせるという仮説を提示する。仮に (3) を例にとれば、(3a) の解釈は、第一項である太郎が判断主の時に生じ、(3b) の解釈は、文中に明示されない発話者が判断主の時に生じる。

そして、この判断主の位置付けの違いは、「評価」「所有」という解釈と連動しており、DSC における判断主の意味論的位置付けは、以下のどちらかに分類できる。

(11) a. 「評価」解釈: [第一項 判断主 [第二項 述語]]

b. 「所有」解釈: [Ø 判断主 [第一項 第二項 述語]]

本発表では、便宜上、(11a) のように、判断者が第一項の場合を内的判断構造、(11b) のように、判断者が発話者の場合を外的判断構造と呼ぶ。この仮説をもとに、DSC の曖昧性に関する差異を説明すると、曖昧性を有す DSC は内的判断構造も外的判断構造もとる一方で、曖昧性を有さない DSC は外的判断構造しかとらないということになる。

ここまでの議論を踏まえて本発表の問いを整理しておくと、まず、DSC に二種類の判断主構造があることはどのような点から証拠づけられるのか、そして次に、なぜ DSC の中に判断主構造の取り方のパターンが違うものがあるのか、が問題である。まず前者の問題を解決するために、次節でいくつかの現象の観察を行う。

3. 判断の構造を反映するテスト

本節では、3 つの現象の観察を通して、二種類の判断主構造が存在することを裏付ける。

3.3. 観察①: (疑似) 二重与格

前節の仮説にもとづけば、「評価」解釈を生む内的判断構造では、第一項が明示的な判断主なのに対して、「所有」解釈を生む外的判断構造では、デフォルトで発話者が判断主と解釈されるだけであり、判断主のスロットは実際には空である。よって、「所有」解釈の場合には空のスロットに判断主を挿入し、疑似的な二重与格表現を実現させることができる。ここでは、最も自然な判断主標示形式として「～的には」を使用する。(12) は「評価」「所有」両方の解釈を許容する文であり、(13) は「所有」解釈しか許容しない文である。

- (12) a. 健太にはこの問題は簡単だ。 「評価」／「所有」
 b. 僕的には、健太にはこの問題は簡単だ。 「評価」
 (13) a. 健太にはロシア語が話せる。 「所有」
 b. 僕的には、健太にはロシア語が話せる。 「評価」

まず、(12b) が許容されることから、(12a) で第一項を判断主としない解釈が成立することが明確に裏付けられる。さらに、(12b) では、第一項を判断主とする解釈が成立しないことが重要である。その証拠に、人称制限が課されず、証拠性表現の共起で許容度が低下する。

- (14) 僕的には、健太にはこの問題は簡単だ (*らしい)。

このことから、「評価」解釈は外的判断主構造に基づくものであることが明らかである。

3.1. 観察②：第一項の脱落

DSP の中には、第一項を脱落させ、第二項と述語を「主題－解説」関係で結ぶことができるものがあることが指摘されている (杉本 1986, Shibatani 1999, 眞野 2008 など)。

- (15) a. 章子には花子が怖い。 b. 花子は怖い。
 (16) a. 章子には花子の気持ちが分かる。 b. #花子の気持ちは分かる。

杉本 (1986) は、DSP のうち形容詞だけが第一項の脱落を許容し、動詞は許容しないとしている。眞野 (2008) も、第一項の脱落の可否に関して DSP を整理するなかで、脱落を許容する述語群として形容詞のみを挙げている。しかし、脱落の可否に述語品詞が影響しているとして、なぜ形容詞と動詞とで違いが現れるのかについては明らかでない。さらに、仮に DSP の意味的特徴がこの現象に関わっているとすれば、前節で示したように、述語品詞だけを根拠にして DSC の意味分析を行うことはできない。

一方、判断主構造の仮説による分析では、第一項の脱落は判断主脱落の操作で、DSC の判断主が内的判断構造にある「評価」解釈の際にのみ生じると考えられる。(16) で脱落が生じないのは、この文が「所有」解釈しか許容しない、内的判断主構造を持つ文であるためである。このことから、判断主でない第一項は脱落しないという説明が与えられる。

3.2. 観察③：「ニトッテ」交替

第一項標示の「ニ」は、複合形式である「ニトッテ」と交替できる場合がある (杉本 1986, 眞野 2004, 鈴木 2022)。先行研究では、「評価」を表わす述語でニトッテ交替ができるといふ観察が共有されている。実際、(17) のように「評価」解釈が可能な場合、交替が起きる。

- (17) a. 真子にはこの本が面白い。 b. 真子にとっては、この本が面白い。(評価)
 (18) a. 真子には速読ができる。 b. *真子にとっては、速読ができる。(所有)

三好 (2019) が指摘するように、ニトッテ標示は、ある叙述が心内世界を参照したうえでの叙述であることを明示する。つまり、(17b) では、真子の心的世界を参照したうえで、「この本が面白い」という命題が真であることが示される。真子の心的世界を参照するということは、真子を判断主として述べることを意味するため、(19) のように人称制限が課され、(20) のように発話者を判断主とする解釈を強制する環境に埋め込むことはできない。

- (19) 真子にとっては、この本が面白い* (らしい)。
 (20) (誰に答えを言わせようかと話し合っている (A, B とともに真子とは別の人物))
 A: 真子にならこの問題が解けるかな?
 B: *いや、真子にとってはこの問題は難しいから、芳子に任せよう。

これをふまえると、ニトッテ標示を許容しない第一項は、判断主とは解釈できないものであり、外的判断構造しかとることができない DSC に現れるものと考えられる。

4. 曖昧性の発生と述部の意味

4.1. なぜ曖昧性が生まれるか

前節で、DSC に二種類の判断主構造が存在することを明らかにした。次に、なぜ判断主構造の取り方のパターンが DSC によって違うのかを明らかにする必要がある。

考える一つの分析は、「評価」「所有」どちらの解釈も可能な DSC は、「評価」解釈を元として、「所有」解釈が派生するというものである。すなわち、第一項である判断主がある対象に対して何らかの判断を行うことが（評価）、判断主自身を特徴づける叙述としてみなされる（所有）ということである。しかし、「所有」解釈が必ずしも「評価」解釈を含意するとは限らないため、この分析は適当でない。たとえば、以下のような表現が可能である。

(21) 私的には、太郎にはこの問題は難しいと思っていたが、実際には、太郎的には楽勝だった。

この文が許容されることから、「太郎にはこの問題は難しい」（所有）という叙述を行うために、太郎が「この問題は難しい」（評価）と判断している必要性はないことがわかる。ともすれば、むしろ、「評価」「所有」の両方を表わしうることがデフォルトで、もう一つのタイプの DSC で「評価」解釈が生じない原因を考えた方がよさそうである。

4.2. 述部の意味

では、なぜ「評価」解釈を許容しない DSC が存在するのか。それを考えるためにここで扱うのは、「所有」解釈しか受けない文が、ある操作によって「評価」解釈を受けるようになる現象である。これにより、DSC において「評価」解釈が生まれる背景が明らかになる。

ここでは、具体的な DSP として「話せる」を例に挙げる。これまで示してきた通り、「話せる」は「所有」解釈のみを許容し、「評価」解釈は許容されない。

(22) 太郎には英語が話せる。

a.*太郎の判断するうえでは、英語は話せる（ものだ）。

b. 太郎は英語が話せるような人だ。

しかし、副詞要素「簡単に」を挿入すると、外的判断構造で「評価」解釈が可能になる。

(23) 太郎には英語が簡単に話せる。

a. 太郎の判断する上では、英語は簡単に話せる（ものだ）。

b. 太郎は英語を簡単に話せるほど流暢な話者だ。

その結果として、たとえば、前節の観察の一つである第一項の脱落が生じるようになる。

(24) a.#英語は話せる。 (＜太郎には英語が話せる)

b. 英語は簡単に話せる。 (＜太郎には英語が簡単に話せる)

このように、副詞要素の挿入によって「評価」解釈が可能になるのはなぜなのか。これは、現段階で十分に明らかとは言えないが、本発表では、判断の内容を提示する要素が動詞だけでは、発話するに十分な情報価値が与えられないためであると考え。「英語は話せる」であれば、英語が言語である以上「英語」に「話せる」という判断を行うことは何も意味しない。文の発話においては、名詞の意味が表す以上の情報を述語が提供しなければならないという語用論的制約があり (Jung 1997), 「所有」解釈しか許容しない DSC の述語のうち多くは、そのような環境に置かれているということである³。つまり、本来的に DSC は「所有」

³ ここでは、副詞要素「簡単に」は文が「評価」解釈を受けるために必須であるため、ある意味で「義務的付加詞」(Goldberg and Ackerman 2001) といえる。また、ここで取り上げる制約については、語用論的なものである以上、どのようなコンテキストを想定するかが文の許容度に強く影響する。しかし、この問題

「評価」解釈の両方を生みうるが、「評価」解釈が拒絶される環境があるために、DSC の中で曖昧性に関して異なる振る舞いが観察されるのだと結論づける。

5. 終わりに

本発表では、先行研究で DSP の意味特徴とされてきた「評価」「所有」の解釈を判断主構造の観点から再整理し、判断主の位置づけにもとづいて再検討することを試みた。さらに、DSC ごとに解釈可能性の分布が異なることについて、情報価値の有無から説明を試みた。

最後に、判断主構造に基づく本分析が、叙述類型論の枠組みでの眞野 (2008) の DSC 分析に対して示唆するものがあることを示して終わる。眞野 (2008) は、時間的展開性を根拠に事象叙述と属性叙述が区別可能であるという前提に立ち、DSC は事象叙述 (25) と属性叙述 (26) の両方が可能であると指摘している (cf. 眞野 2008: 81-82 (31) (32))。

- (25) a. 昨日 (私には) その蛇が怖かった。 b. 今日 (私には) この問題が難しい。
(26) a. 私は蛇が怖い。 b. 健には料理が難しい (ものだ)。⁴

これまでの議論を踏まえてこの例を見ると、まず、ここで事象叙述と呼ばれているものは第一項「私」の判断に基づく叙述であるため、本発表でいう「評価」解釈に基づくと分かる。一方、属性叙述と呼ばれているものは、これが属性叙述であるという前提に立つ以上、発話者が対象を提示して属性を付与する必要があるため、判断主である発話者の判断に基づく第一項に対する叙述である。これは、本発表でいう「所有」解釈に基づく。

すると、眞野 (2008) の整理は、第一項が判断主である「評価」解釈の場合に時間副詞との共起が可能であることを指摘するものと再解釈できる。であれば、このようなことが起こる理由について、明示的な判断主の判断は時間的展開性を持つからである、と考えることができる。つまり、文中にある明示的な判断主が判断した瞬間というのは、具体的な時間軸に位置づけられるため、当然の帰結として時間副詞と共起は許容される。一方、発話者が判断者の際には、発話者は文中に明示されないため、時間副詞による束縛が不可能になると考えることが可能である。この背後には、判断主が明示されないことによって判断主依存的な発話でないことが含意され (generic-reading: Stojanovic 2007)、時間的展開性のない総称的解釈が可能になるという意味論的なメカニズムが存在していることが想定される。

このように、従来性質属性の表現で時間性の問題として議論されてきたものは、判断主の位置づけによって再解釈される可能性を残している。判断主 (主観性) と時間性、属性叙述の関係については、多くの問題が残されたままであるため、別の機会に論じることにする。

【参考文献】◆杉本武 (1986) 「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』: 272-380. 凡人社/◆鈴木彩香 (2022) 『属性叙述と総称性』花鳥社/◆眞野美穂 (2004) 「与格主語構文の構造について—「ニトッテ」との交替現象からの一考察—」*Proceedings of KLS*, 24: 78-88. 関西言語学会/◆眞野美穂 (2008) 「状態述語文の時間性と叙述の類型」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』: 67-91. くろしお出版/◆三好伸芳 (2019) 「名詞句の特定性と述語の意味」『文芸言語研究』, 75: 63-90. 筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻/◆Goldberg, A. E. & F. Ackerman. (2001). The pragmatics of obligatory adjuncts. *Language*, 77-4: 798-814./◆Jung, Y. (1997). Obligatory adjuncts. *Texas Linguistic Forum*, 38: 161-171./◆Kölbel, M. (2004). Faultless disagreement. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 104: 53-73./◆Shibatani, M. (1999). Dative subject constructions twenty-two years later. *Studies in the Linguistic Sciences*, 29-2: 45-76./◆Stojanovic, I. (2007). Talking about taste: disagreement, implicit arguments, and relative truth. *Linguistics and Philosophy*, 30: 691-706.

は本発表で扱う範囲を大きく超えるため、あくまで特殊なコンテキストを想定する場合を除いて考える。

⁴ 眞野 (2008: 81 (32b)) では、「健には料理が難しい (ようだ)」となっているが、眞野 (2008: 74) は、属性叙述として解釈される総称文にのみ付与される表現として「ものだ」を挙げており、ほかの属性叙述の環境でも「(ものだ)」を付加しているため、本発表では、「(ものだ)」に改めている。

平仮名表記における緩やかな綴りの固定について

わたなべ ゆりこ
渡辺 悠里子（京都大学学生）

1 本稿の目的

中世書写の資料を中心として、いわゆる「仮名文字遣」（安田 1967）に関する研究成果が蓄積されている。発表者もそれを受けて、平安末期書写の資料について調査を行ったことがある（渡辺 2019）。種々の平仮名字体選択の偏りや固定が観察されたが、その結果は多くの資料に必ずしも共通するものではなかった。それは他の先行研究でも同様で、ある資料に認められる仮名文字遣が、別の資料と一致しないことはたびたびある。もっとも、仮名文字遣の個別性の高さについては、安田（1971）に、「個人的乃至は臨時的である可能性を孕み、従って恒常的な法則性を持ったものとして処理することの、少くとも史的分野にあっては困難」（1 頁）とあるように、はじめから想定されている。

『一步』（1676 刊）に「上に書ては字なり似合ぬ仮名也といふ事なるべし」「下に書ては似あはぬといふ事なるべし」という記述がある。安田（1992）はこれについて、「紙面全体の美的表現性との関連で理解する必要がある」（34 頁）「当該字の四周はもとより、行の内部との関連、更にその集積としての紙面の一葉全体にも及ぶ「似合」であろう」（35 頁）と述べる。今野（2001）は「分節機能をそもその基として仮名文字遣が成立、発展し、その中で特定の語の表記が「字なり」「似合」（『一步』）といった、伝達効率とは別次元の要素をも含めた種々の要因を絡ませつつ固定することがあった」（233 頁）とする。平仮名字体の選択には「美的表現性」や「伝達効率とは別次元の要素」も関わる。そのことが、仮名文字遣の個別性の高さの一因になっている。

今野（2001）は仮名文字遣について、「ひと纏まりの語への意識の高まりと、それを実際に書くという行為によって実現させる場合の連綿とがごく自然に、比較的固定的なある纏まりをうみだした時に、結果として機能的な仮名文字遣が発生し、そうした書記に習熟していた〈文字社会〉においては、それを〈暗黙の了解〉として読み解いた」（199 頁）と述べる。発表者も、平仮名字体の綴り方の偏りは、はじめは「自然に」発生するものであると考える。その偏りが機能性を獲得するためには、明文化された取り決めではなくとも、当該の仮名文字遣に一定の合意、つまり共通性が必要になる。その共通性はどのように形成されてゆくのか。

本稿では、まず、機能性を獲得していないと思われる平仮名字体の選択の偏りを観察し、字体の選択においてさまざまな制約があることを示す。加えて、字体選択の偏りが共通性を持つ契機的一端についても考察することを目的とする。

2 考察のための調査について

2.1 資料

伝藤原公任筆『古今和歌集』（以下、伝公任本）および二荒山神社本『後撰和歌集』（以下、二荒山本）の表記について調査する。伝公任本は十二世紀初期の書写と推定される、古今和歌集の完本である（小松茂美 1995）。二荒山本は同じく十二世紀の書写と見られている（同 1961）。巻十までの上巻のみで下巻は発見されていない。いずれも、平安時代書写の伝本のなかでは多くの本文を残している。伝公任本はすでに渡辺（2019）で悉皆調査を行っているが述べ切れなかった点がある。また、表記の共通性について考えたいため、同時期かつ同じ装飾本である二荒山本も合わせて調査を行う。

本稿の問いは、資料間に共通する仮名文字遣が形成される道筋にある。そのような仮名文字遣は中世の資料

を中心に示されてきているため、そこへの接続として、平安末期の仮名文字遣について検討する。調査の対象には、「文字を書くことは反省的ではあるけれども、その余地を出来るだけ捨象し得る」（安田 1971、2 頁）実用的な文書を推す考えがある。伝公任本や二荒山本は、そのような実用的文書ではない。しかし、本稿では美的表現も含めた種々の字体選択の偏りに注目するため、多彩な表現のある資料を調査する。さまざまな事例を観察することで、どのような字体選択の偏りが真に機能的であるのかを考察する一助とすることを目指す。

2.2 方法

渡辺（2019）では伝公任本について、特定の字体の連なりで書かれるいくつかの語について取り上げ、固定の程度の極めて高いものを示した。しかし、本稿では、固定の程度がそれほど高くないものも含めて示し、字体選択の偏りのさまざまな様態について見る。

仮名表記の文献では、特定の語が特定の字体の連なりで書かれることがある。井手（1999）第二篇第一章が示すように、変体漢文表記中のものではあるが上代から確認できる。平仮名表記の文献にも同様の指摘があり、伊坂（1988）など多数の研究がある。これは「平仮名文の完成期からさほど隔たらぬ古い時期から認められる」（矢田 2012、344 頁）もので、語の書き方が固定するのは本質的なことであり、本稿で対象とする資料にも見える予想される。さらに、異体仮名のレベルで語の固定を観察した場合、多様な字体選択の偏りが観察されることも期待できる。

3 結果

3.1 固定する臨時的な表記 —ウグヒス—

はじめにウグヒスの表記について見る¹。次に掲げるのは伝公任本と二荒山本におけるウグヒスの表記および用例数である。表記は現在の通行の平仮名字体に近いものは現在の平仮名で、変体仮名はその字母で表す。×は脱字。以降の用例数には複合語も含む。

伝公任本：うくひ春 9 鶯 7 う俱ひ春 6 う俱ひす 5 う俱飛数 3 う俱ひ×1

二荒山本：うく日春 10 う具ひ春 1 うく日須 1

二荒山本では、ウグヒスの表記はほぼ一定し、多くの場合に〈うく日春〉を選択する。また、それぞれ 1 例のみの〈う具ひ春〉〈うく日須〉には、固定表記の〈うく日春〉を用いなかった背景がいずれも想定できる²。二荒山本において〈うく日春〉は強く定まった表記であったと見られる。

二荒山本と比較すると、伝公任本のウグヒスの表記は統一感に欠ける。〈うくひ春〉が 9 例、一字のみ異なる〈う俱ひ春〉が 6 例と、中心的な表記はありそうだが、二荒山本のようなまとまりはない。伝公任本で注目したいのは、3 例の〈う俱飛数〉である。他のウグヒス表記にはない飛・数を用いる。また、ウグヒスが連続

¹ 以降の語の抽出は、発表者による調査および各作品の索引（西下経一他『古今集総索引』（明治書院、1958）・大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集総索引』（1965）・西端幸雄『後撰和歌集総索引』（和泉書院索引叢書 15・1997））によった。

² 〈う具ひ春〉は、変字によって生じた表記であると考えられる。同一の音節が紙面上で隣り合う際、同一字体を繰り返さないようにする変字法は、小松英雄（2006）など、とくに行頭についてたびたび指摘される。加藤（2004）によれば、二荒山本では行頭以外でも同一字体の接続を避ける。〈う具ひ春〉は 35 番歌（歌番号は新編国歌大観による）冒頭に見える表記で、〈具〉が前歌の〈く〉と隣り合う。このとき、ウグヒスを固定の表記で表すと〈く〉と〈く〉とが隣接する。それを避けるために〈具〉を用いたと考えられる。またもう 1 例の〈うく日須〉（166 番）は、高橋他（1987）の影印本を見る限り〈日〉と〈須〉との間で墨継ぎが行われる。途中で筆を止めたことが変則的な表記の一因になっているとも考えられる。

して表記される箇所にはのみ現れ、散発的な箇所には現れない。このことから、〈う倶飛数〉は視覚に変化をつけるための、臨時的な表記であると考えられる。

このような変字が行われるのはありふれたことだが、集中に〈う倶飛数〉が3例も見られることは不可解である。伝公任本全体でみると、音節ク・グでは〈具〉を一割強、音節ス・ズでは〈須〉を半数程度用いる。しかし〈具〉〈須〉はいずれもウグヒスでは用いられない。変則的な表記を行うのであれば、これらの字体を用いた、より多様な形態が見られてもよいはずである。それにもかかわらず、一定の形式に集中するのはなぜか。

〈う倶飛数〉を変則的な表記を行う場合のスタイルとして、恒常的に用いていた可能性は低いであろう。伝公任本ではウグヒスの基本的な表記さえ定まっていなかったためである。そのうえ、ウグヒスが繰り返されるといいう、限定的な場合に対応する表記様式を、事前に準備しておくことは考えにくい。〈う倶飛数〉は偶然揃ってしまった表記と考えるのが自然である。それにもかかわらず複数回現れるのは、〈う倶飛数〉という並びになりやすい何らかの事情があることを示唆する。

第一節で確認したように、平仮名字体の選択には「美的表現性」や「伝達効率とは別次元の要素」も関わっている。変則的な表記が行われたのは、視覚的な変化をもたらすための「美的表現性」のためであろうが、他にもない〈う倶飛数〉という字体の並びになったのは、やはり書き手の美的感覚のためか、あるいは書き手にとって物理的に綴りやすかったためと考えられる。二荒山本のウグヒスの表記が固定的である理由も、同様に考えられてよい。

ここでも課題となるのは、美的感覚や綴りやすさが書き手間で必ずしも一致しないことである。たとえば伝公任本ではウグヒスに〈具〉〈須〉を用いない。しかし、すでに例示したように、二荒山本では〈具〉〈須〉を一度ずつではあるがウグヒスに用いる。次項以下でも、字体選択の偏りの具体例を挙げることで、さまざまな様態を見ていく。

3.2 前接の平仮名字体による後続字体の変化 —ナミダ・モミヂー

ついで、ナミダの表記について見る。ここで注目するのは語中のミである。

伝公任本：な三た 18 那みた 10 那三た 5 なみた 3 な三堂 1 那三堂 1

二荒山本：な見多 15 なみ多 8 那み多 1

伝公任本では〈な三た〉は18例だが、〈なみた〉は3例にとどまる。伝公任本全体で見ると、ミは主に〈み〉または〈三〉で書き表される。み：三の使用比率は7：5ほどで〈み〉がやや優勢である。しかし、〈な〉に続く場合には〈三〉が多く用いられており、〈な〉の直後のミには〈三〉が現れやすいことが知られる。しかし前接のナが〈那〉の場合はその反対で、〈那〉に続くミは〈み〉が優勢である。そのことも踏まえると、〈な〉のあとに〈三〉が続く傾向がいっそう明確になる。二荒山本では音節ミのうち〈見〉の使用割合は全体の約15%で、残りの大多数は〈み〉である。しかし、ナミダでは〈な見多〉という表記がもっとも多い。すなわち、伝公任本・二荒山本ともに音節ミ全体では〈み〉を多く用いるにもかかわらず、ナミダの〈な〉の直後には〈三〉または〈見〉を中心に用いている。厳密ではないにせよ、明らかな偏りが存在する。モミヂの表記を確認することで、ナミダの表記の偏りをより明確に理解できる。

伝公任本：もみ遅 30 もみち 24 茂み遅 1 茂みち 1 茂三ち 1 紅葉 1

二荒山本：もみち 44 みみち 3 も見ち 2

いずれの資料でも、〈も〉のあとには〈み〉が続くのが通常である。二荒山本では〈見〉が続く例が2例あ

るが、このうち1例は変字の例と見ることができる。当該の例は「もみぢ葉は」という句が連続する箇所の一つ目であり、〈も見ちはゝ〉(392番。下線は発表者による)という字体選択がなされている。前歌には〈もみち者ゝ〉とある。二荒山本でもモミヂには〈み〉を用いるのが原則であったことが知られる。伝公任本では〈も〉のあとに〈三〉が続く例は確認できない。伝公任本では音節ミの平仮名字体のうち、〈み〉は語頭で、〈三〉は語中で用いられる傾向があることがすでにわかっているが(渡辺 2019)、モミヂに関してはこの傾向と逆で、語中であっても〈み〉が用いられる。全体の傾向とは異なる、それぞれの語ごとの選択傾向があることが知られる。

ナミダとモミヂはいずれも二音節目にミを持つ。しかし、語中のミであっても〈な〉が前接する場合は〈三〉または〈見〉が選択されやすく、〈も〉の場合は〈み〉を用いる傾向が明らかである。とりわけ、〈も〉から〈み〉への連続は、伝公任本と二荒山本とで共通して見られるが、これは偶然の一致であるのか、あるいは〈も〉から〈み〉への連続が比較的共有されやすいものであったのかが興味深い。同一の字体を同じような筆順で書く以上は、ある字体からある字体への連続のしやすさが共通することは想定できる。あるいは、「美的表現性」に基づく字体配置である可能性もある。

一方、〈な〉に続くミについては、両資料間で異なる字体が選択される。しかし、伝公任本と二荒山本では、音節ミにおいて二番目に多く用いる字体がもともと異なっている。ナミダにおいて、伝公任本では〈三〉、二荒山本では〈見〉を多く用いるが、これらの字体はもう一方の資料ではほとんど使われない。各音節において用いる字体が異なっているため、両資料は共通する用字法を持つ余地がない。ただし、〈な〉のあとに〈み〉が続きにくいという点は共通している。

3.3 同字母別字体の運用の差異 ―オモヒ―

オモヒ(思)について見る。便宜上、各索引が名詞として立項するものを考察の対象とし、動詞の連用形は含めない。〈お a〉は「於」に近い字体、〈お b〉は「お」に近い字体である³。

伝公任本：お a もひ 14 お b んひ 11 お b 母ひ 7 お a 裳ひ 2

二荒山本：お a も日 7 お b も日 6

二荒山本は〈お a〉〈お b〉⁴のいずれにも〈も〉が続き、運用上の違いは確認されない。伝公任本は、〈お a〉の場合は〈も〉〈裳〉、〈お b〉の場合は〈ん〉〈母〉が続き、その逆はない。渡辺(2019)ではオにホが続く場合、オが〈お a〉か〈お b〉かによって〈ほ〉の字体が異なることを確認した。前接のオの字体によって後続の字体が異なる同様の現象がオモヒにも認められる。

伝公任本の〈お b〉は原則として連綿で次の字体へつながってゆくが、〈お a〉の連綿の有無は不統一である。そのため、字体選択には連綿の有無が関与している可能性がある。しかし、〈お a〉のように連綿する場合としない場合があるため、連綿の有無だけが字体選択を決定づける要因とはいえない。〈お b〉が連綿する場合、最終画が下に突き抜けていくが、伝公任本を見る限り、途中でこの最終画の向きを変えることは好まれない。このことが伝公任本の字体選択を決定していると考えられる。平仮名は原則として左側または中央から書か

³ すでに取り上げた〈な〉・〈み〉・〈も〉についても、別稿では複数の字体に区別したことがある。本稿で取り上げた資料にも同様の差異が見出せる。しかし、当該語彙での用法に違いは見られず、区別して示すことはかえって冗長となるため、本稿では一字体として示した。

⁴ 〈お a〉と〈お b〉(あるいは〈於〉〈お〉)の関係については、矢田(2012)第三篇第五章に詳しい。

れるため、右側に位置する〈お b〉の最終画を連綿で後続字体につなぐ場合、左方向へ斜めに下ろされることになる⁵。〈ん〉〈母〉は初画が斜め左に下りる字体であり、〈お b〉の連綿となだらかにつながる。それに対して〈も〉〈裳〉は中央付近より開始する。渡辺（2019）で指摘した〈ほ〉も、〈お b〉に対しては連綿と連動して初画が斜め左に下りていて、〈お a〉には初画がまっすぐに下りる字体が用いられる。また、〈お b〉はほとんどの場合連綿するが、〈い〉が後続する場合は連綿しないことが多い。〈い〉の初画は斜め右に下りるため、〈お b〉から連綿すると全体として線が曲がることがその理由であろうか⁶。これらを踏まえると、〈お b〉の連綿が結果的に後続の字体を制約していると思われる。このことは何らかの表現の意図を見出すよりも、運筆の都合や書き癖と見た方が自然である。なお、二荒山本の〈お b〉は連綿しないことも多く、伝公任本の方法は共有されていない。

ここまで、「美的表現性」や「伝達効率とは別次元の要素」に関わると思われる、機能性とは結びつかない仮名文字遣について見てきた。どのように綴られるかは偶然性や一回性の要素も大きい。しかし、書記の際にはさまざまな相応の制約が存在したことも知られた。こうした現象は他の箇所にもあると予想され、種々の制約のもとで全体の綴りが形成されていたと考えられる。しかし、伝公任本の表記と二荒山本の表記とは一致しないため、こうした制約は個人的な好みや書き癖にとどまる場合が多いと思われる。以下では、このうち一部のものが共通性を獲得していく一側面について考察する。

3.4 共通する固定表記 ―ハナ―

伝公任本・二荒山本のいずれでも、ハナは〈者那〉と書かれる⁷。

伝公任本：者那 135 花 106 八那 1 は那 1 は×1

二荒山本：者那 151 とな 6 はな 4 者な 1 ×那 1

ハナを〈者那〉と書く資料には他にも例があり、豊田（2000）に指摘がある。伝公任本・二荒山本とも、ハナの平仮名表記は〈者那〉がほとんどである。これまで例示してきた他の語に比べ、表記の固定度が高く例外が少ない。ハナ＝〈者那〉は、複数の資料に共通する、確立した表記であったことが予想される。仮名文字遣は個性が高いものだが、〈者那〉のように広く用いられ、読解の一助となり得るものも存在する。このように、表記の固定が資料間で共通する方向に進むにあたっては、どのような条件が必要であろうか。3 節全体を踏まえて現段階での予想を示しておく。

まず、当該語がよく用いられる字体で構成されることが重要であると思われる。3.2 のナミダとモミヂでは、同じ語中のミであっても、直前の字体によって後続のミの字体が異なることを示した。このとき、使用される字体が資料間で異なっている場合、そもそも共通表記が成立する契機がないことも確認した。同様に、語の表記にあまり一般的でない字体を用いた場合、その表記は一回性が高くなる。語全体が広く用いられる字体で構成されていることが、表記が共通するための必要条件であろう。

また、共有されやすい綴り方であることも必要となる。3.2 で述べたように、同一の字体を同じような筆順で書く場合、書き手が異なったとしても、ある字体から別の字体への連続のしやすさが共通することはあり得

⁵ 後続字体全体が〈お b〉に対して右寄りに書かれる場合や〈お b〉の最終画が中央に近い場合もある。その場合、〈お b〉の最終画はまっすぐ下ろされることがある。

⁶ ただし、〈お b〉の後続字体の初画が横に進む場合は連綿がなされる。

⁷ 伝公任本のハナについては渡辺（2019）で言及済みだが再掲する。

る。また、加藤（2001）は、定家の表記について検討する過程で、いくつかの平仮名字体について、上からの連綿を受ける字体であるのか、下へ連綿でつながってゆく字体であるのか、定家に至るまでの通時的な変遷を調査した。その結果、上下どのように連綿するかは「時代が下るに従って統一」（39 頁）されることを示した。3.3 のオモヒで見たように、連綿は綴りを大きく左右する。加藤（2001）が示したように、連綿の様態が複数の資料間で共通するのであれば、綴りやすい字体の連続も共有される可能性はいっそう大きくなる。

最後に、当該の語が頻出語であることが前提となる。福島（2008）は、「定家仮名遣い」を示すと思われる仮名遣い書のなかで、表記の揺れが認められない語を掲げ、「使用頻度の高い語の表記が固定されれば、より効率的な読み取りが実現されやすい」（219 頁）と述べる。頻出語には表記が固定する利点があると考えられ、このことは異体仮名のレベルでもある程度同様に考えることができるのではないか。頻出語のうち、先に述べたまとまりやすい条件を備えたものが、何度も繰り返されるうちに、表記の共通性が強化されていったと考えられる。

4 課題

本稿の最後で、どのようにして語の固定的な表記が共通性を持つのかについて考察した。次に考えるべきは、同音節であっても、語頭と語中とで用いる字体が異なる仮名文字遣である。ハナに〈者那〉が固定するということと、語頭のハに〈者〉が固定するということには、汎用性の面で隔たりがある。語頭と語中とで用いる字体が異なる仮名文字遣が共通基盤を持つ契機については、引き続き考察する。

参考文献

- 伊坂 淳一（1988）「藤原俊成の用字法・試論―自筆本「広田社歌合」における機能的用字法―（Ⅰ）」（『学苑』577）
伊坂 淳一（1988）「藤原俊成の用字法・試論―自筆本「広田社歌合」における機能的用字法―（Ⅱ）」（『学苑』578）
井手 至（1999）『遊文録 国語史篇二』（和泉書院）
加藤 良徳（2001）「藤原定家による仮名文書記システムの改新」（『国語学』204）
加藤 良徳（2004）「機能面からは説明のつかない異体仮名の用法について」（『名古屋大学国語国文学』95）
小松 茂美（1995）『伝藤原公任筆古今和歌集』（旺文社）
小松 茂美（1961）『後撰和歌集 校本と研究』（誠美書房）
小松 英雄（2006）『日本語書記史原論』補訂版・新装版（笠間書院）
今野 真二（2001）『仮名表記論攷』（清文堂）
高橋良雄他（1987）『二荒山神社本 後撰和歌集』（桜楓社）
豊田 尚子（2000）「冷泉家時雨亭文庫蔵書の仮名文における「オホ～」表記について」（『鎌倉時代語研究』23）
福島 直恭（2008）『書記言語としての「日本語」の誕生 その存在を問い直す』（笠間書院）
安田 章（1967）「仮名資料序」（『論究日本文学』29）
安田 章（1971）「仮名文字遣序」（『国語国文』40-2）
安田 章（1992）「濁る仮名」（『国語学』170）
矢田 勉（2012）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）
渡辺悠里子（2019）「伝藤原公任筆『古今和歌集』の用字法」（『国語国文』88-6）

近世唐音のゼロ韻尾字にみられる長音表記と非長音表記の混在について

王竣磊おうしゅんらい（東京大学学生・日本学術振興会DC）

一 問題の所在

日本漢字音の中で、古くから伝わった呉音・漢音では、中国語のゼロ韻尾字を書き表す際に、「砂サ・シヤ」とあるように、直音一字表記または拗音二字表記を用いるのが一般的だと考えられ、「サア」「シヤア」のような長音表記は基本的にみられない。やや遅れて移植された中世唐音についても、日本語にあまり定着していないものの、ゼロ韻尾字に長音表記がみられない点で、呉音・漢音と同じ様相を呈している。例えば『小叢林略清規』（二六八四序）^{〔1〕}では、「沙サ」「下ア」「者シヤ」など、非長音表記の例が挙げられる。一方、比較的に新しい近世唐音では、次の例に示すように、非長音表記も確認できれば、長音表記も頻繁にみられ、これまでの字音体系とはだいぶ異なるようにみえる。

沙サ （積悪如恒沙） 假キヤ （假称） 『慈悲水懺法』一六七〇刊）
 砂サア （砂糖） 假キヤ （假醉） 『唐音和解』一七一六刊）
 沙サアー （白沙） 假キヤア（假山） 『南山俗語考』一八一二序）

こうした近世唐音にみられる長音表記について、既に沼本（一九九二）が問題提起をしており、さらに日本語の音節構造の推移と関連づけて論じている。しかし、同論文では、長音表記の存在を確認することにとどまり、各文献の詳細や文献間の異同については触れておらず、ゼロ韻尾字の表記の全容を把握するには不十分だと言わざるをえない。また、近世唐音以前の漢字音においても、例えば蒙求読誦音や熟語の語形では、「詩シイ」「夫フウ」とあるように、長音表記を採る例も散発的に存在する。これは、佐々木（二〇〇九）や坂水（二〇二五）などが既に論じているように、特定の漢音声調と関係している。それに對し、近世唐音の長音表記には声調による制限が認められず、きわめて自由に出現できる。

以上を踏まえ、本発表では、近世唐音におけるゼロ韻尾字の仮名音注を詳細に調査し、表記の実態を明らかにする。その上で、長音表記に焦点を当て、その背後にある音声実現を考察する。

二 資料調査

近世唐音は、有坂（一九三八）の分類に従うと、黄檗系・心越系・訳官系の三つに分かれている。そのうち、黄檗系のものは主に諷經に關わる仏教的なテキストであり、心越系のものは主として琴書の歌詞の類であるが、訳官系では白話小説の注釈や会話の教科書が大勢を占め、当時の中国語口語とより密接な関係にあると考えられる。本発表では、訳官系を中心に据え、一八種の文献（AⅠR）を取り上げる^{〔2〕}。内容からみれば、A・B・Dは黄檗系、Lは心越系であると判断され、ほかの一四種は訳官系とみなせる。各文献の原音音系は、概ね南京方言を代表とする江淮官話洪巢片か（AⅠD・G・H・OⅠQの九種）、杭州方言を代表とする吳語文読層（JⅠL・N・Rの五種）、あるいは両者の混淆（E・F・I・Mの四種）となる（岡島一九八七、姜二〇二二、王二〇二四）。成立年次についてみると、黄檗系が一七世紀後半でほかよりやや早い^{〔3〕}が、大方一八世紀に収まる^{〔4〕}。表記の長短を観察するに先立ち、日本語の母音と中国語の韻母音類との対応関係を確認する（表1）。

表1 中国語韻母音類との対応

主要韻類		漢字例		仮名音注例	
ア段	仮撰二等・果撰一部	馬茶家瓜・他那大打	タ・サア・ナアー	キヤ・クワア・ツアー	
イ段	止撰開口・遇撰三等	知其以離・除去語魚	チ・キイ・リイ、	スイ・ツイ・ツイー	※いずれも開口字のみ
ウ段	止撰開口・遇撰一等	知此師兒・普祖苦路	ク・スウ・ツウ、	キュ・スユ・トユウ	
エ段	仮撰三等・果撰一部	且写蛇夜・伽茄	ケ・エ、・ゼエー	チエ・シエー・スエ、	
オ段	果撰	波多坐我・模土初所	ソ・トウ・モヲ、	チヨ・スヲウ・ツヲ、	
止撰	・遇撰三等	嘴吹水為・除去語魚	クイ・ライ・スイ・ムイ・チユイ・ツユイ		※いずれも唇音字・合口字のみ
果撰	・仮撰	地低西須	テイ・セイ・スエイ		
		貨磨可茄	ハウ・カヲ・キヤウ		

り字数を確認すると、いずれの文献でもイ段・ウ段のほうがほかの段より多いと看取される。ウ段が長音表記を採るか否かは、表記類型を立てる上で重要な基準になりうると考えられる。

三・一・二 イ段 イ段においても、Mを除くと、長さのゆれ幅がウ段と同じく二字までとなるが、一字表記と二字表記が混在しているものが多い。A↘Dでは、ウ段が非長音表記で安定しているのに対し、イ段ではア行音注以外のものが先に長音表記を採るようになったと看取される。二字表記の内訳をみると、Aでは、ハ行の「希」「喜」「毘」以外、「計」「西」「濟」「禮」とあるように、専ら蟹撰三四等開口から止撰に転じたものである。B↘Dでは、止遇撰も二字表記で出現しつつあるが、一字表記もまだ多い。しかし、蟹撰三四等開口字は、「細シ（C）」がみられるものの、基本的に一字表記を採らない点でやはり特殊性をみせている。すなわち、止遇撰の二字表記は蟹撰三四等の㊦イ形に牽引されて勢力を広めた可能性が考えられる。蟹撰三四等の㊦イ形は、例えば『聚分韻略』（二六二刊）^④や『小叢林略清規』などの中世唐音に既にみられ、あるいはイ段長音表記の早い例とみなせるかもしれないが、原音音系における止撰に転じた過程や日本漢字音における受け入れ方などを精査する必要があるだろう。

一方、イ段におけるE・F・Hの長短混在はいずれも、ほかの行が二字表記で安定している中、ア行音注が一字表記で出現するパターンであり、A↘Dでア行音注が常に一字表記に留まっていることにもつながっている。とりわけF・Hでは、ア行音注のみで一字と二字の混在がみられる。こうしたア行音注の長短混在はイ段のみならず、ウ段のE、エ段のE・F・H・Kにも確認され、近世唐音ではア行音注がほかの行より遅れて長音表記を採るようになったと推測される。

三・一・三 エ段 エ段では、例えばRのタ行音注が「爹テエ・テエ」のみであるように、被注漢字が一異なり字しか現れない場合が多く、Lに至っては直音型の被注漢字がみられない。また、子音の行からみても、被注漢字がア行・サ行に集中しており、M・N・Oではア行のものしかみられない。よって、エ段全体の実態を把握するには慎重を要する。試みに、A↘Dは一字表記のみで、ウ段の状況に一致していると推測される。上述したア行音注の特殊性を除くと、E以下の文献は、ウ段と同じく二字表記が主流だろうと推定される。そのうち、サ行音注は二字表記のみならず、J・P・Qにおいて三字表記で現れる。これは、音注を施す側において、セの子音がエ段拗音のそれに近似しており、組合せ型である拗音音注の文字数に影響されたためだと推測される。

三・一・四 ア段 ア段では、文字数で整理すると、一字（A・B）↘一字と二字の混在（C・D）↘二字（E↘G・I↘L）↘二字と三字の混在（H・M）↘三字（N↘R）といった序列が確認され、ゆれ幅が大きいのが、連続的にみえる。そのうち、一字と二字の区分は概ねウ段のそれに対応しているが、長短混在のものも存在する。イ段・エ段における長短混在とは異なり、ア段にみられる混在は、字音体系内部の牽引や表記の影響、ア行音注の特殊性などでは説明できない。また、長音表記内部とは言え、二字と三字の混在についても同様である。これらの文献の編纂者にとって、ア段表記の長さは比較的自由であったのかもしれない。一方、二字と三字の区分はほかの段にみられず、近世唐音における長音表記は、さらに細分化できる可能性を示唆している。

三・一・五 才段 才段においても、一字（A↘C）↘一字と二字の混在（D）↘二字（E↘P）↘二字と三字の混在（Q・R）といった序列が確認され、ア段と並行しているようにみえる。Dにみられる長短の混在は、ア段のそれと同じ状況にあるが、Q・Rにみられる混在は表記の観点からある程度説明することが可能である。Q・Rでは、二字表記であれば㊦ウ形に統一しており、三字表記であれば二字目にヲを添える形となる。ウで終わる二字表記は才段直音型よりも、むしろウ段直音型と、「手シウ」「周チウ」

「有ユウ」などのu韻尾字に多く出現しており、表記としてはかなり安定していると考えられる。こうしたウで終わる音注を背景に、才段直音型では、ウの後にさらにウや踊り字などを添えるのが抑えられたと推測される。一方、二字目がヲであれば、そういった制約がなく、さらに三字表記まで発展することが可能だと考えられる。Qと同じ著者で、成立がやや早いN・Pでは才段に㊦ウ形しか用いられていない点からみれば、Qにおける㊦ウ形は三字表記にするためにあえて導入された可能性も否定できない。

三・二 組合せ型

組合せ型についても表2の結果をさらに整理し、各段・文字数によって文献を分類してみる（表4）。

表 4 各段・文字数による文献の分類（組合せ型）

	2			2・3			3		
ア段	A	B	C	D	E	F	G	H	K
イ段	B	C	F	H	K	L			
ウ段	A	B	C	E	H				
エ段	A	B	C	D	E	F	G		
オ段	C	D	E	F	G				
	H							I	J
								K	L
								M	N
								O	P
								Q	R

表 4 より、組合せ型では、各文献の文字数が比較的に一定しており、イ段以外では概ね二字か三字かで一八種の文献を二分できると看取される。その二字と三字の区分も各段に一致しており、A↖G・I↖R の二群に分けられると考えられる。すなわち、組合せ型が長音表記を採るか否かも、表記類型を立てる上で重要な基準になりうるであろう。しかし、組合せ型によつて得られた二群と、三・一・一節で述べた、ウ段直音型によつて分けられた二群との間には、ずれが生じている。例えば E↖G では、直音型が長音表記を採っているのに対し、組合せ型が非長音表記に留まっているとみてとれる。また、多くの文献において出現しないものの、組合せ型のイ段もほかの段とややずれているようにみえる。例えば K・L・M・R ではほかの段が長音表記を採っているが、イ段では非長音表記で現れることがある。さらに、ア段における長短混在についてみれば、全体的にゆれている H を除くと、F・G では拗音形のみが長音表記を採っており、K ではホア形のみが非長音表記を採っている。

組合せ型では、文字数とモーラ数と必ずしも一致しないのが問題となる。例えば、拗音形とス・ツで始まる形式とは、同じ二字表記とはいえ、必ずしも一モーラで実現されているとは限らず、文献によつても差が出ると想定できる。一つ一つの形式について、その表記のみで、当時実現されるモーラ数を正確に知る術もないが、モーラ数という視点自体は上述のずれや長短混在を説明するのに有効だと考えられる。

具体的に、F・G では、ア段拗音形が一モーラ、エ段拗音や「ツア」「ツラ」などの形が二モーラとして実現されたと想定すると、組合せ型内部においてモーラ数の不一致が生じるため、それを解消すべくア段拗音形にさらにアが添えられ、二モーラの長音表記になる、という解釈が可能であろう。逆に K・L・M・R では、ホア形・スイ形・ツイ形が文字数どおりに二モーラとして実現されたと想定すると、ほかの形式の長音表記と同じモーラ数になったため、当該形式が二字表記に留まった、という解釈が想定できるだろう。単独で出現するア段拗音は、例えば「行脚アングヤ」など、中世唐音において既に確認されるため、一部の編纂者においては、韻律上、「チエ」「ツア」などの形式と異なった振る舞いをしていった可能性が十分考えられる。ホア形は、原音の喉音合口字をできるだけ忠実に写すために作り出された表記だと考えられ、現代語において、例えば「花椒ホアジャオ/ホワチャオ」のように、二モーラで実現されている。一方、「スイ」「ツイ」などのㄟイ形は、i 韻尾字にも用いられており、ここでは二モーラとして実現されていると考えられるため、ゼロ韻尾の開口字でもあるいは二モーラになることがあると想定できる。上述の考えをさらに敷衍すれば、E↖G における組合せ型についても、すべて文字数どおりに二モーラとして実現されたと想定すると、直音型長音表記と同じモーラ数に達しているため、長音表記にならずに、二字表記に留まったのではないかと推測することが可能であろう。

三・三 表記類型

以上、直音型の各段と組合せ型の詳細をみてきた。総じてみれば、一八種の近世唐音資料を、ウ段直音型が長音表記を採るか否か、ア段直音型が三字表記を採るか否か、組合せ型が長音表記を採るか否かによつて、次の四つの類型に分けることができる。

第Ⅰ類Ⅱ非長音型。A↖D。直音型で一字、組合せ型で二字が主流のもの。

第Ⅱ類Ⅱ直音長音型。E↖H。直音型・組合せ型ともに二字が主流のもの。

第Ⅲ類Ⅱ全体長音型。I↖M。直音型で二字、組合せ型で三字が主流のもの。

第Ⅳ類Ⅱア段超長音型。N↖R。Ⅲをもとに、ア段直音型を三字に統一したもの。

第Ⅰ類には黄嬖系のものが多く、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類より成立時期が早いいため、近世唐音におけるゼロ韻尾字表記の初期段階の様相を呈していると考えられる。

四 全体像の把握と長短混在の音声的背景

以上、近世唐音のゼロ韻尾字における長音表記と非長音表記の混在についてみてきた。一七世紀中頃から一九世紀初頭という限られた時期に、ゼロ韻尾字の表記にこれほどのバリエーションがみられることはすなわち、母音の長さの表記は、当該時期の中国語音の音写において重要な要素の一つであったことを示唆している。一方、ゼロ韻尾字の表記の多様さに反し、鼻音韻尾字・u韻尾字・i韻尾字・閉鎖音韻尾字の表記は、各文献にわたって安定しているようにみえる。具体的にいえば、鼻音韻尾字・u韻尾字・i韻尾字では、例えば「看カン」「開カイ」「高カウ」・「残ザン」「在ツアイ」「早ツアウ」とあるように、直音型が二字、組合せ型が三字に統一している。Fのu韻尾字、G・N・Rの鼻音韻尾字には時折「好ハアウ」「漢ハアン」のような直音型表記がみられるが、いずれも三字を超えていない。閉鎖音韻尾字すなわち入声に関しては、仮名ツで表記するものもあれば、記号○で表記するものもあり、そもそも表記しないものも多い。入声の表記については詳細を別稿に譲るが、それ以外の部分は、例えば「獺タ」・「雀ツヤ」とあるように、直音型が一字、組合せ型が二字に統一していると確認される。本発表で取り上げたゼロ韻尾字の表記のバリエーションは、ほかの韻尾の安定さを背景に発生したことに注意されたい。

中国語原音は、中古から現代にわたって音韻論的な長短対立を一貫して持たないと考えられ、ゼロ韻尾字は鼻音韻尾字・u韻尾字・i韻尾字と概ね同等の長さで発音されていると考えられる。入声字は末尾の閉鎖により、副次的に上記のものより短く実現されているとされる^⑤。中世唐音や近世唐音第Ⅰ類では、ゼロ韻尾字と閉鎖音韻尾字が同じく非長音表記を採っているが、これはあくまでも表記上の問題だと考えられ、音声上はやはり別のものとして受け入れられていると考えられる。まず中世唐音では、熟語レベルにおいて、例えば「竹篋シツペイ」「塔頭タツチュウ」「松子ホツス」などのように、閉鎖音韻尾が促音として定着しており、「下火アコ」「椅子イス」「胡乱ウロン」などのゼロ韻尾字とは振る舞いが異なる。高松（一九七二）は、中世唐音を有する聚分韻略系の文献を調査し、曉母合口字に当てられたハ行ヒ形音注が入声にみられず、逆に匣母字に当てられたカ行音注が平声にとんどみられないことを報告している。これは、[hu] [ɣ]といった声母の音声実現が、緩やかな発音とつまった発音において、聞こえが異なることを捉えた上での表記だと考えられる。また、沼本（一九九二）が既に言及しているように、近世唐音第Ⅰ類に属するBの「国字旁音例」では、「凡旁音用一字者其音當曳曳而呼之勿類入聲直而促（巻下一七丁裏、訓点を省略）」と記述されており、ゼロ韻尾字と閉鎖音韻尾字は音声上はつきり区別されていると考えられる。よって、ゼロ韻尾字の表記のバリエーションは原音側から説明しがたい。

ここで考えられるのは、字音体系内部に存在する長さの相対的關係である。一字表記の場合、ゼロ韻尾字の表記の長さは、音声上同等の長さを有する鼻音韻尾字・u韻尾字・i韻尾字の表記の長さど、ずれることになり、逆に二字表記あるいは三字表記であれば、音声上の長さの相対的關係により符合している。すなわち、ゼロ韻尾字表記にみられるバリエーションは、これまで許容されてきた、長さの相対的關係における音声と表記との齟齬が、近世唐音において許容されなくなったことを示唆していると考えられ、編纂者が表記の文字数を揃えることによって齟齬の解消を図ったと推測される。三・二節で既に述べたように、表記の文字数は、特に組合せ型においてそのまま韻律上のモーラ数に等しいわけではないが、直音型においては概ね対応していると考えても差し支えないであろう。そうすると、表記の文字数を揃えることは、韻律上のモーラ数を揃えることを意味することになる。近世唐音では、中国語の鼻音韻尾字・u韻尾字・i韻尾字は二モーラまたは三モーラ音節として受け止められていると想定できるため、ゼロ韻尾字は、一モーラ音節としては許容されずに、二モーラまたは三モーラ音節にしなければならない、ということになる。これは、日本語におけるモーラの等時性標示機能の強化を反映しているのではないかと推測される。江戸中期において、一モーラ音節と二モーラ音節、三モーラ音節の間に存在する持続時間の差がより明確になっていき、それを強く意識した母語話者は、ゼロ韻尾字を音写する場において、表記の文字数を調整することで対処したのではないかと推測される。

五 長短混在の周辺と今後の課題

ゼロ韻尾字の表記のバリエーションに関わり、以上で論じきれっていない問題は多々あると思われるが、ここでは次の三点を提起し、詳細な調査を含め、今後の課題としたい。

(一) 語句末で長さの表記がゆれやすいようにみえる。例えば表2から外れた例として、「不得第時フテテ イス(F)」「下路ヒヤア 口(F)」「手臂シウピ(R)」などが挙げられ、いずれも語句末の例となる。(二) 中国語の助辞類、例えば「個」「箇」「麼」「這」などは、長さの表記がゆれやすいようにみえ、一部の文献では出現位置によって長さが異なる。例えばK・Rでは、「甚麼人」「甚麼話」などにおける「麼」が一字表記、「笑甚麼」「尋甚麼」などにおける「麼」が二字表記を採っている。

(三) 本発表の調査対象ではないが、E「笛譜」・F「吹笛伝」「小曲玲瓏」では、曲の旋律に応じて表記の文字数が自由に増減されているようにみえる。例えば、「等他来家アアア等他回家(F)」などが挙げられる。一方、琴関係はそれほど自由ではないが、一字増の表記、例えば「了リヤアウ」などが頻出する。

【注】(一) 沼本(一九八六)所収影印によって確認した。(二) 調査に際し、A・B・M・Rは東京大学国語研究室蔵本(和本2011:1、松村文庫A6:0001、松村文庫A4:0437、SD:23:1-6)、C・E・Qは関西大学総合図書館長澤文庫蔵本(L23**800*6023、L23**800*6124、L23**A*6140-6141)、Dは奥村(一九七二)所収影印、F・Oは京都大学附属図書館蔵本(谷村文庫483力Ⅱ、1-66)Ⅱ19、Gは古典研究会編(一九七四)所収影印、H・J・K・Nは東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本(倉石827:6、倉石923:299、倉石825:2、特倉石827:3)、Iは国立公文書館内閣文庫蔵本(176-0101)、Lはハーバード燕京図書館蔵本(TJ6771.3343)、Pは東京大学総合図書館青洲文庫蔵本(D40:24)をそれぞれ使用した。また、本発表で扱う各文献の範囲について、Aは「暮時課誦」、Bは卷上本文部分(九丁裏一、九丁裏、C・Dはその全体、Eは乾卷「乾坤門」から「設宴話」まで、Fは「小説語類字義」、Gは右注「南京音」、Hは卷上「通用話頭」、Iは「皇族九等封爵」までの項目、Jは「第一回」「第二回」、Kは卷上「二字話」「三字話」、Lはその全体、Mは「五言絶句」、Nは卷一「二字話」「三字話」、Oは卷上「学庸」右注、Pは卷三「俗語類」、Qは乾卷「唐音大学」、Rは卷一「天部」「地部」「人部(一部)」となる。(三) Rは一九世紀初頭の刊行であるが、卷五の末尾に「明和丁亥仲冬日南山老人識」とあり、卷五までの内容が明和期において既に完成された可能性が高いと考えられる。(四) 京都大学附属図書館蔵本(4-06)Ⅱ48によって確認した。(五) 実験音声学による研究では、例えば朱ほか(二〇〇八)は、現代中国語諸方言を全体的にみて、陰陽声韻が平均三〇〇ミリ秒であるのに対し、入声韻が平均一〇〇ミリ秒であるとしている。

【参考文献】有坂秀世(一九三八)「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』一五ノ一〇／王峻磊(二〇二四)「詠官系唐音の重層性と原音系」『訓点語と訓点資料』一五二／岡島昭浩(一九八七)「近世唐音の重層性」『語文研究』六三／奥村三雄(一九七二)「天和三年黄檗版観音経―近世初期の表記・音韻史料として―」近代語学会編『近代語研究(第三集)』武蔵野書院／姜复寧(二〇二二)「東阜心越琴譜日漢对音的語音特点与音系性實」『励耘語言学刊』三六／古典研究会編(一九七四)『唐詩辞書類集(第十六集)』汲古書院／坂水貴司(二〇二五)「室町時代の文献に見られる漢字音の長形と字音声調の関連」『国語と国文学』一〇一七／佐々木勇(二〇〇九)『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院／朱曉農・焦磊・嚴至誠・洪英(二〇〇八)「入声演化三途」『中国語文』三二五／高松政雄(一九七二)「唐音統考」『国語国文』四一ノ七／沼本克明(一九八六)「鎌倉宋音資料―小叢林略清規―」鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究(第九輯)』武蔵野書院／沼本克明(一九九二)「字音直読資料の長音表記の変遷―音節構造との関係―」『訓点語と訓点資料』八八

【付録】(紙幅の制限で、F・Rのみを示す)

F ●ア段(直1)ハ把(二)タ打大他ナ那拿ハ話花咤巴化把畫マ馬ヤ牙丫ワ畫話(二七)組2ツ茶詐又(三)組3キ駕家價假シ酒ヒ下ク寡掛(一)イ段(直1)イ移以魚与藝シ些子蹠(七)直2イ迺意依義已奚拽キ記拘氣既拒寄紀起其去句計蹊係シ鬚些子置取知主池遲處這這際齊妻ニ你ヒ許戲比批披憩憩驚ミ米リ利理理裏(四)組2ス写細(一)ウ段(直1)ウ誤無ス時は(四)直2ウ胡武鬍糊無ク顧故苦ス覲使似私事厮司寺市試死是時思勢ツ次此楚址助支自フ賦赴夫付捕虎富ル耳兒(三九)エ段(直1)エ夜野(二)直2エ夜爺セ社舍遮射奢(七)組2チ只這遮(三)才段(直1)コ箇モ麼ロ路(三)直2コ科過果我窩可ソ疎ト杜賭都徒躲圖多吐塗ホ火和婆破坡貨モ麻口路囉(二五)組2ヌ咀疎ツ措楚坐做差阻(八)

R ●ア段(直2)ア阿ナ拿那ヤ雅啞(五)直3サ沙吵タ打大佗他ナ拿那ハ把化巴爬怕マ麼馬麻媽ヤ霞夏丫牙雅衙啞ワ娃畫倭(二七)組2ヒ下(二)組3キ佳家假ヒ下ク掛卦寡ツ又詐茶揅撻查ウ瓦(四)組4ク瓜(一)イ段(直1)ヒ臂(一)直2イ雨遇于孟臾巳醫魚衣姨異意キ起祈幾氣基崎紀妓器記機己據鷄繼シ乳暑増チ諸主珠鼠ニ呢女尼義你疑蛭泥ヒ避飛戲比妃皮尻鼻脾被疲虛嘻窺敵ミ迷米謎リ裡哩里離吏利俐狸黎麗(七)直3ヒ麼(二)組2ス西ツ姉製(三)組3ス西些洗細ツ姉臍擠濟妻(九)ウ段(直2)ウ霧五午鳩戸烏武惠鬍舞無胡狐ク古箍庫姑故股鼓苦摺估顧ス時巳四斯是池使士師寺事厮塑梳死屎視思世勢ツ初至子辞池字致粗紙刺知癡肢脂齒指髭痣祖梓麤資仔遲自止ヌ奴怒フ圃夫捕父腑虎膚呼婦ム母ル露二路兒魯耳蘆(八九)エ段(直2)エ夜也野爺テ爹(五)直3テ爹(一)組3シ斜蛇射チ遮這扯ツ且(七)才段(直1)コ個箇モ麼(三)直2オ渦窩コ箇過可ソ所ト躲多都渡土賭駝度唾肚朶妥ホ火和河荷貨婆夥跛モ磨麼摩摩(三〇)※二字目にヲを添えるものが極めて少ない。(直3)コ蛾過娥科我可鵝ト多都土肚吐兔ホ火和波坡火破婆(一〇)※専ら二字目にヲを添える。(組3)ツ做錯(二)

付記 本研究はJSPS科学研究費25KJ0905、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2108の助成を受けたものである。

日本語オノマトペにおける音象徴の探索—辞書と機械学習によるアプローチ—

^{いいだひなの}
飯田雛乃 (名古屋大学学生)・Alexander Kilpatrick (会津大学)

1. はじめに

オノマトペ (擬音語・擬態語) は、日本語をはじめとする多くの言語に豊富に存在する、感覚的・身体的経験を直接的に表現する語類であり (Dingemanse 2012), その主要な特徴のひとつに音象徴 (sound symbolism) がある (Hamano 1998). 音象徴とは、音と意味の非恣意的な結びつきのことを指し、言語学、心理学、さらには認知科学分野において、言語処理、言語習得、言語進化などの観点から活発に議論されている主要な研究テーマとなっている (Imai & Akita 2024).

これまで日本語オノマトペの音象徴に関しては、Hamano (1998) をはじめとする内省的な分析に基づき、子音や母音と意味との体系的な対応関係が詳細に記述されてきた。しかし、このような分析は観察者の直感に依存する部分が大きく、数千語規模のデータを一貫して扱うことは困難であり、再現性や客観性の観点からも課題が残されている。

本研究は、こうした課題を解決するため、辞書記述を基盤とした包括的なオノマトペデータセットを用い、機械学習のアプローチを適用することで、音素と意味の対応を定量的に検証することを目的とする。従来の内省的・実験的研究を補完するデータ駆動のアプローチを提示することで、日本語オノマトペの音象徴体系を明らかにするとともに、音象徴研究の理論的・方法的発展に資することを目指す。

2. 先行研究

2.1 日本語オノマトペの音象徴分析

日本語オノマトペの音象徴に関する記述としては Hamano (1998)、浜野 (2014) による研究がよく知られており、近年盛んに行われている心理言語学的実験における言語間比較の文脈でも頻繁に参照されている (Saji et al. 2019; Akita et al. 2024). 浜野は内省に基づき日本語オノマトペを分析し、子音および母音に対応する音象徴の意味を詳細に記述している。例えば、/k/ は〈軽い、硬い〉、/a/ は〈広い、平ら〉などといった意味と関連づけられる。浜野によるこれらの観察は網羅的であり、日本語オノマトペおよび音象徴研究における「バイブル」とも称される (秋田 2020).

とはいえ、こうした内省的手法には限界もある。日本語には数千語におよぶオノマトペが存在し (小野 2007), それぞれの音と意味の対応関係を一貫して内省によって分析することは、労力の面でも、再現性の面でも大きな困難を伴う。特に再現性の観点からは、内省に基づく分析は観察者自身の音象徴感覚に左右される可能性があり、データが同じでも異なる研究者によって同様の結果が得られるとは限らないという問題がある。

一方で、semantic differential 法を用いて、日本語母語話者に複数の形容詞対でオノマトペを評価させる定量的アプローチも試みられている (Doizaki et al. 2016 など). これらの研究は触覚や味覚といった特定領域の印象評価を精緻に捉える点で有益であるが、実施には多数の話者の協力が必要でコストが高いという制約がある。また、史的なデータや方言データなど話者が少ない言語に適用するのが困難である。

このような課題を踏まえると、既存の言語資料を活用し、より客観的かつ再現性の高い、データ駆動的な手法によって音象徴の体系性を明らかにしていくのが好ましいと考えられる。本研究はその一環として、辞書記述に基づく包括的データセットを用い、日本語オノマトペの音象徴の定量的検討を行う。

2.2 音象徴への機械学習的アプローチ

近年、音象徴の定量的検討として、機械学習的アプローチが積極的に援用されている (Winter & Perlman 2021; Kilpatrick et al. 2023). 例えば、Winter & Perlman (2021) は英語の大きさに関わる形容詞 (例: *tiny*, *gargantuan*) を網羅的に収集し、ランダムフォレストによる分類を行った。ランダムフォレストは多数の決定木を組み合わせたアルゴリズムであり、各木はデータを再帰的に分割しながら、カテゴリ (ここでは LARGE 対 SMALL) を予測するものである。分析の結果、/l, i, a, t/ といった音素が特に予測力を持つことが示された。例えば、/i/ は SMALL 形容詞の約 28% に現れる一方で LARGE 形容詞では 3% にとどまり、/a/ は

LARGE 形容詞に 26% 出現するが SMALL 形容詞ではほとんど現れなかった。この結果は、英語のサイズに関する形容詞が音象徴的バイアスを反映していることを示している。

また、Kilpatrick et al. (2023) は、日本語・中国語・韓国語のポケモン名を用いて進化前後の分類を行うランダムフォレストを構築し、各モデルはいずれもチャンスレベルを上回る精度を示した。さらに、日本語話者による創作名データでも同様の傾向が確認された。特徴量重要度の分析では、/m/ や /N/, 長母音、/g/ などが分類に寄与しており、特に /m/ は進化前に頻出する傾向が見られた。

さらに、Ngai, Kilpatrick & Ćwiek (2024) は日本語の人名を対象とし、ランダムフォレスト型および XGBoost 型の機械学習モデルを構築し、名前から性別を判定する試みを行った。両モデルとも平均精度 75% を超える分類性能を示したが、XGBoost が若干優勢であった。特徴量重要度の分析結果では /m/, /k/, /i/ や /a/, /o/ などが上位を占めており、特に /m/ は女性名側に寄与する傾向が確認された。さらに、/k/ が女性性と、/i/ が男性性と結びつくという対応が示され、これは英語などインド・ヨーロッパ諸語で報告されてきた典型的パターンとは異なる。これらの一連の研究は、機械学習を用いることで言語の音象徴性を実証的に検討できることを示すと同時に、音象徴の言語普遍性・個別性を言語間比較の観点から明らかにするうえで有効な枠組みを提供している。

2.3 本研究の位置付け

本研究では、決定木系学習器のなかでも、従来のランダムフォレストよりも柔軟かつ精緻に特徴量間の関係を捉えることができる XGBoost (Ngai et al. 2024) を採用する。ランダムフォレストは多数の決定木を並列的に構築し、それぞれの木が独立して予測を行うのに対し、XGBoost は逐次的に決定木を構築し、前の木が誤分類した部分を後の木が重点的に学習する仕組みを持つ。この逐次的な最適化により、モデル全体が誤差を効率的に修正し、より高精度な予測が可能となる。こうした性質は、単独の子音・母音だけでなく、語中における位置や音の組み合わせといった複雑な要因が絡み合うオノマトペの音象徴分析に特に適しているといえる。

本研究では、各音素とその位置 (Kawahara et al. 2008; Kawahara 2020; Shinohara & Uno 2022) が、〈大きい／小さい〉、〈重い／軽い〉、〈硬い／柔らかい〉といった意味的対比にどの程度寄与するのかを体系的に検証することで、日本語オノマトペにおける音象徴体系の定量的な裏づけを提示する。

3. 方法

3.1 データの概要

本研究で使用するデータセットは、Iida & Hori (2024, 2025) によって構築されたものである。このデータセットは Kakehi et al. (1996) などの辞書記述をもとに、見出し語をヘボン式ローマ字に変換し、付与された英語定義を分解・整理して得た意味ラベルを対応付けたものである。例えば、「ころころ (korokoro)」の“The state of being round and fat”という英語定義は、“The”, “state”, “of”, “being”, “round”, “and”, “fat”と分解した後、“being”の屈折接辞“-ing”を削除し、それぞれを「ころころ」と対応付けた。音韻面については、各オノマトペの語基を取り出し (例: koro), 子音と母音に分け (例: C1 = k, V1 = o, C2 = r, V2 = o), 前述の意味ラベルと対応づけた。この体系的な分解により、音素単位での定量的分析が可能となる。

分析対象とする意味次元は、Winter & Perlman (2021) の方法論を援用し、“large”-“small”, “heavy”-“light”, “hard”-“soft”という三つの形容詞対とした。これらの次元はいずれも、Hamano (1998) による体系的記述をはじめ、Saji et al. (2019), Akita et al. (2024) など心理言語学的実験や言語対照研究でも頻繁に取り上げられてきた、音象徴研究における中核的な意味領域である。それぞれ形容詞と対応づけられたオノマトペの語数と語例を表 1 に示す。

表 1: オノマトペの数と語例

英語形容詞	語数	語例
large	117	ばちやばちや, がぼつ, ずしりずしり
small	135	ちゃかちゃか, はらり, ころつ, ぷすぷす, ちょこつ
heavy	48	どぶーん, ずっしり, ずるずる, ごつつ
light	118	かさつ, ひょいつ, ひらつ, こんこん

hard	120	ざくざく, ばきばき, こりこり, ごつつ
soft	47	ふにやつ, くにやくにゃ, ほくほく, かさり

3.2 統計分析

全ての分析は R (バージョン 4.4.0) を使用して行った。モデリングには caret (7.0.1) および xgboost (1.7.10.1) を用い、データ処理と可視化には dplyr (1.1.4), tidyr (1.3.1), stringr (1.5.1), purrr (1.0.2), tibble (3.2.1), ggplot2 (3.5.1) を用いた。

本研究では、前述のように“large”-“small”, “hard”-“soft”, “light”-“heavy”という三つの形容詞対のいずれかを定義に含むオノマトペを対象とし、それぞれの形容詞対について二値分類器を構築した (計 3 課題)。学習に用いた特徴は各オノマトペ語基 (例: koro) における hepburn_C1_* (第一子音), hepburn_C2_* (第二子音), hepburn_V1_* (第一母音), hepburn_V2_* (第二母音) である。クラス不均衡に対しては、各コントラストで少数派の件数に合わせダウンサンプリング (例: 大小であれば 117 に) を行い、クラス比を 1:1 に揃えた。評価は外部層化 K-fold 交差検証で実施し、K は各クラスの最小件数に基づき自動設定 (上限 5) とした。学習器は XGBoost (二値分類) を用い、探索グリッドは $\text{max_depth} \in \{3, 6, 9\}$, $\text{gamma} \in \{0, 0.2, 0.4\}$, $\text{colsample_bytree} \in \{0.6, 0.8, 1.0\}$, $\text{subsample} \in \{0.6, 0.8, 1.0\}$ とし、 $\text{eta} = 0.1$, $\text{nrounds} = 1000$, $\text{min_child_weight} = 1$ は固定とした。性能指標は各外部 fold での Accuracy を用い、平均および標準偏差を算出する。

特徴量重要度は、各外部 fold の最終モデルから varImp を算出し、共通する特徴のみを平均して fold 平均重要度とした。再現性のため RNGkind ("L'Ecuyer-CMRG") と固定シード (20250926) を用い、caret のリサンプリングシードも固定した。また、XGBoost は単スレッド (nthread = 1) で実行した。

最終的に選択されたハイパーパラメータの最頻値は次のとおりである。large-small では $\text{max_depth}=3/6$ (同率), $\text{gamma}=0.2$, $\text{colsample_bytree}=1.0/0.6$ (同率), $\text{subsample}=1.0$ 。heavy-light では $\text{max_depth}=6$, $\text{gamma}=0.2/0.4$ (同率), $\text{colsample_bytree}=1.0$, $\text{subsample}=1.0$ 。hard-soft では $\text{max_depth}=3$, $\text{gamma}=0/0.2$ (同率), $\text{colsample_bytree}=0.6/0.8$ (同率), $\text{subsample}=1.0/0.8$ (同率)。なお、 $\text{eta}=0.1$, $\text{nrounds}=1000$, $\text{min_child_weight}=1$ は固定とした。概して浅めの木 (max_depth 3-6) と高サンプリング率 ($\text{subsample} \approx 1.0$, $\text{colsample_bytree} \geq 0.8$) が選択される傾向が見られた。

4. 結果

各形容詞対の分類課題においてモデルは、オノマトペを分類するうえで、高い性能を示した (大小: 平均正解率 0.89 (標準偏差 0.05), 重軽: 0.87 (0.03), 硬軟: 0.87 (0.08))。各分類における特徴量重要度上位 10 音素を図 1 に示す。また、各コントラストについて、学習で得られた fold 平均の変数重要度から上位 5 特徴を抽出し、学習時と同じダウンサンプリング後のバランス済みデータ上で、ラベル (例: small/large) 別に各特徴の平均値 (出現割合) を計算した。これにより、重要度の大きい特徴がどちらのクラスでどの程度過剰か (太字) という方向性とその大きさが明示される (表 2)。

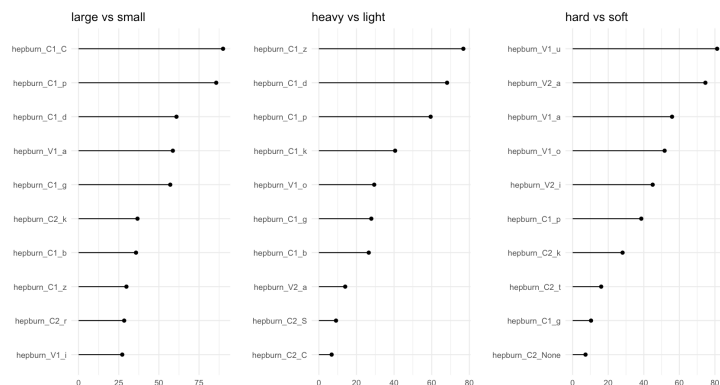


図 1: 各コントラストでの特徴量重要度上位 10 音素

表2：各コントラストについての上位5特徴と各特徴の出現割合

位置_音素	large	small	平均重要度	位置_音素	heavy	light	平均重要度	位置_音素	hard	soft	平均重要度
C1_C (ch)	0.0	0.25	90.0	C1_z	0.35	0.0	76.8	V1_u	0.02	0.51	81.2
C1_p	0.07	0.34	85.7	C1_d	0.29	0.0	68.2	V2_a	0.15	0.53	74.6
C1_d	0.19	0.0	60.9	C1_p	0.06	0.44	59.4	V1_a	0.43	0.11	55.9
V1_a	0.45	0.15	58.7	C1_k	0.0	0.29	40.6	V1_o	0.43	0.26	51.7
C1_g	0.22	0.0	57.1	V1_o	0.46	0.29	29.4	V2_i	0.36	0.06	45.0

また、各対比の上位5特徴のなかで hard vs soft の第二母音 (V2) における/a/および/i/を除けば、全てが第一子音 (C1) または母音 (V1) であり、日本語では語頭が音象徴的に重要であるとする先行研究と一貫性のある結果となった (Kawahara et al. 2008; Kawahara 2020; Shinohara & Uno 2022). 大小モデルでは、C1 の /t̪c, p/ といたった無声子音が〈小〉(例: ちょこつ, ぷつぷつ), /g, d/ といたった有声子音が〈大〉(例: ごっそり, だぼだぼ), V1 の広母音 /a/ が〈大〉(例: ぱっちり) と結びついた. 重軽モデルでは、C1 の /p/ が〈軽〉(例: ぱたぱた), /z/ が〈重〉(例: ずっしり), また V1 および V2 の /a/ が〈重〉(例: ぼちゃっ, ぎぶーん) と結びついた. 硬軟モデルでは、V1 の /u/ が〈軟〉(例: くにやり) と結びついた.

5. 考察

5.1 large vs. small

本研究の結果から、第一モーラの無声破擦音 /t̪c/ (ヘボン式表記: ch) が〈小〉と強く結びつくことが明らかとなった. 実際、「ちゃぽん」「ちゃらちゃら」「ちびちび」「ちんまり」「ちょびっ」「ちょろっ」など、日本語のオノマトペにおいて /t̪c/ を語頭に含む語の多くは、小さな対象や軽快な動きを表している. この結果は、/p, t, k/などの無声子音が〈小〉〈軽〉と関連づけられるとする Hamano (1998) の観察をより精緻化するものであり、特に /t̪c/ が小ささを象徴する機能を担っている可能性を示唆する.

この知見は、Alderete & Kochetov (2017) が提案した expressive palatalization の観点から理論的に位置づけることができる. 彼らは、多言語において語彙的あるいは派生的に現れる破擦音・硬口蓋化が、音象徴的に〈小ささ〉〈子供らしさ〉といった意味と結びつくことを指摘している. 特に /t̪j/ のような破擦音は、高い第2フォルマントなどの音響的特性ゆえに、Ohala (1994) の frequency code 仮説に沿って〈小ささ〉を想起させやすいとされる.

さらに、本研究では第一子音の /p/ も〈小〉クラスに寄与することが確認された. 実際、「ばいばい」「おちおち」「おすおす」「ぷつぷつ」「ぴくぴく」「ぴらぴら」「ぴよぴよ」など、日本語のオノマトペにおいて /p/ を語頭に含む語の多くは、〈小さな対象〉や〈軽快な動き〉を描写するのに用いられる. これは日本語オノマトペに関する Hamano (1998) の /p/ と〈小ささ〉の対応に関する記述を支持する結果である. さらに、両唇音が小ささと結びつく傾向は、Kumagai (2020) が指摘する、日本語および英語において両唇音が〈小ささ〉などと結びつくことと一貫している.

また無声子音と小ささの結びつきについては心理言語学的な傍証もある. Shinohara and Kawahara (2010) は、有声阻害音が〈大〉と関連づけられる一方で、無声阻害音が〈小〉と関連づけられることを示している. その要因として、有声阻害音は声帯振動を維持するために声道の拡張を必要とし (Ohala 1983), その調音的拡張が大きさのイメージを喚起することが考えられる. さらに、有声阻害音は周辺母音の基本周波数を低下させる傾向があり、低い F0 は大きな共鳴体を想起させるため、大きさと連想を導く (Ohala 1994). これに対して、無声阻害音である /p/ などにはそのような効果が見られないため、〈小ささ〉と結びつく傾向があると解釈できる. また、/d, g/が〈大〉と結びついたことも同様の観点から解釈可能である.

/a/ と〈大〉の結びつきに関しても Hamano (1998) の観察と一貫しているうえ、音響・調音的説明に加え、心理言語学的実験からの裏付けもあり (Sapir 1929; Shinohara and

Kawahara 2010; Akita et al. 2024), さらに英語の大きさに関する形容詞の傾向とも一致する (Winter & Perlman 2021).

5.2 heavy vs. light

本研究では、/z, d/ が〈重〉クラスに、/p, k/ が〈軽〉クラスに寄与することが確認された。実際に、「ずっしり」「ずるずる」「ざぶん」「どしん」などは重さや鈍重な動きを描写するのに用いられ、一方で「ぱちぱち」「ぴらぴら」「ころころ」「かきかき」などは軽快で繰り返しの動きを表すのに頻繁に用いられる。このような有声阻害音と〈重さ〉、無声阻害音と〈軽さ〉の結びつきは、Hamano (1998) が内省的に指摘した音象徴的対応と一致する。

さらに、母音 /o/ が〈重〉クラスに寄与する傾向も確認された。例えば「ごつん」「ぼちゃっ」「よたよた」などがある。Hamano (1998) は、/o/ に〈重さ〉を記述していないが、Ohala (1994) の frequency code hypothesis に基づけば、/o/ のような後舌で比較的低い F₂ をもつ母音は、広い共鳴空間に対応し、〈大きさ〉や〈重さ〉を想起させやすいと解釈できる。

5.3 hard vs. soft

本研究では、〈硬軟〉の対比において、母音の分布に特徴的な傾向が確認された。具体的には、第1母音の /a/ や /o/ が〈硬〉クラスに寄与し、逆に第1母音の /u/ や第2母音の /a/ が〈軟〉クラスに寄与した。実際、「ざくざく」「ずどん」「ばきばき」「がたがた」「ごつごつ」「かちかち」など /a, o/ を含むオノマトペは〈硬さ〉や〈堅牢さ〉を表すのに用いられる。これに対して、「さらさら」「ぴちゃぴちゃ」「くにやくにゃ」「ふにゃふにゃ」「ふわふわ」「ぼたっ」など /u/ や /a/ を含む語は、〈柔らかさ〉や〈しなやかさ〉を描写するのに頻繁に用いられる。以上の結果は、〈硬軟〉の次元においては特に母音が主要な役割を果たす点で、〈大小〉や〈重軽〉の次元における子音の寄与とは異なる傾向を示している。

Hamano (1998) の記述では、/k, g/ が〈硬さ〉と結びつくことが強調されており、特に /k/ と〈硬さ〉の対応については通言語的観察も報告されている (Erben Johansson et al. 2020; Akita et al. 2024)。しかし、本研究の XGBoost を用いた分析ではこれらの子音の重要度は比較的低く、むしろ母音の寄与が際立っていた。この点は、日本語オノマトペにおける〈硬軟〉の音象徴について、母音が果たす役割のさらなる検討の必要性を示唆している。/u/ については、Akita et al. (2024) が無意味語評定課題においてその円唇性ゆえに〈柔らかさ〉と関連づけられることを報告しているが、現代日本語の /u/ は円唇性が弱いとされるため、今回の結果を単純に円唇性のみから説明するのは難しい。しかし、Hamano (1998) も /u/ を“protrusion”と記述するように、唇のわずかな突き出しが〈柔らかさ〉のイメージに寄与している可能性は否定できない。

6. 結論

本研究では、日本語オノマトペを対象に、従来の内省的記述や心理言語学的実験に基づく知見と、データ駆動的な機械学習的分析を統合することで、音象徴の体系的特徴を検討した。その結果、/tʃ/ や /p/ が〈小〉に寄与すること、/z, d/ が〈重〉に、/p, k/ が〈軽〉に寄与すること、さらに母音 /u/ が〈軟〉に関与することなど、従来の記述と整合する形で多くの音象徴的対応が確認されたうえ、それぞれの特徴の相対的な強弱が検証できるようになった。これらの知見は、従来の内省的観察を裏付けるとともに、Akita et al. (2024) など近年の心理言語学的実験の結果とも一致していた。本研究のアプローチは、辞書データや実験データといった異なる情報源を接続し、音象徴研究をより再現可能な形で進める基盤を提供するものである。

さらに、本研究の知見は、音象徴の普遍性と個別性を考える上でも重要である。例えば、frequency code hypothesis (Ohala 1994) のような普遍的動機づけは、本研究における /o/ や有声阻害音の結果と整合性がある。一方で、日本語固有の円唇性の弱い /u/ の振る舞いなど、言語個別的要因が音象徴の解釈に影響する可能性も明らかとなった。

今後の課題としては、他言語 (英語 (Flaksman 2024) など) のオノマトペとの比較を通じて、音象徴の普遍性と個別性をさらに検討することが挙げられる。さらに、通時的観点から、日本語オノマトペの音象徴体系が歴史的にどのように変化してきたのかを明らかにすることも重要である。

総じて、本研究は、日本語オノマトペにおける音象徴体系を定量的に裏付けるとともに、音象徴研究の理論的・方法論的展開に資する成果を提示したといえる。

参考文献

- 秋田喜美. 2020. 「オノマトペの音象徴性再訪」『日本認知言語学会論文集』20, 424-438.
- Akita, K., McLean, B., Park, J., & Thompson, A. L. 2024. Iconicity mediates semantic networks of sound symbolism. *The Journal of the Acoustical Society of America*, 155(4), 2687-2697.
- Dingemanse, M. 2012. Advances in the cross-linguistic study of ideophones. *Language and Linguistics Compass* 6(10), 654-672.
- Doizaki, R., Watanabe, J., & Sakamoto, M. 2016. Automatic estimation of multidimensional ratings from a single sound-symbolic word and word-based visualization of tactile perceptual space. *IEEE Transactions on Haptics* 10(2), 173-182.
- Flaksman, M. 2024. *An etymological dictionary of English imitative words*. Munich: Peter Lang.
- Hamano, S. 1998. *The sound-symbolic system of Japanese*. CSLI.
- 浜野祥子. 2014. 『日本語のオノマトペ: 音象徴と構造』くろしお出版.
- Iida, H. & R. Hori. 2024. Towards a comprehensive and quantitative data analysis of Japanese ideophones. *Proceedings of the International Conference on ICT Application Research 2*, 1-6.
- Iida, H. & R. Hori. 2025. A dictionary-based quantitative analysis of the sound-symbolic system of Japanese ideophones. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society* 47, 3605-3612.
- Imai, M. & K. Akita. 2024. Sound symbolism. In M. C. Frank & A. Majid (eds.) *Open encyclopedia of cognitive science*. MIT Press.
- Erben Johansson, N., Anikin, A., Carling, G., & Holmer, A. 2020. The typology of sound symbolism: Defining macro-concepts via their semantic and phonetic features. *Linguistic Typology* 24(2), 253-310.
- Takehi, H., Tamori, I., & Schourup, L. 1996. Dictionary of iconic expressions in Japanese. Mouton de Gruyter.
- Kawahara, S. 2020. Sound symbolism and theoretical phonology. *Language and Linguistics Compass* 14(8), e12372.
- Kawahara, S., K. Shinohara, & Y. Uchimoto. 2008. A positional effect in sound symbolism: An experimental study. *Proceedings of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 8, 417-427.
- Kilpatrick, A. J., Ćwiek, A. & Kawahara, S. 2023. Random forests, sound symbolism and Pokémon evolution. *PLOS ONE* 18(1), e0279350.
- Ngai, C. H., Kilpatrick, A. J., & Ćwiek, A. 2024. Sound symbolism in Japanese names: Machine learning approaches to gender classification. *PLOS ONE* 19(3), e0297440.
- Ohala, J. J. 1983. The origin of sound patterns in vocal tract constraints. In P. MacNeilage (ed.), *The Production of Speech*, 189-216. Berlin: Springer-Verlag.
- Ohala, J. J. 1994. The frequency code underlies the sound-symbolic use of voice pitch. In L. Hinton, J. Nichols & J. J. Ohala (eds.) *Sound symbolism*. Cambridge: Cambridge University Press, 325-347.
- 小野正弘 (編). 2007. 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館.
- Saji, N., Akita, K., Kantartzis, K., Kita, S., & Imai, M. 2019. Cross-linguistically shared and language-specific sound symbolism in novel words elicited by locomotion videos in Japanese and English. *PLOS ONE* 14(7), e0218707.
- Sapir, E. 1929. A study in phonetic symbolism. *Journal of Experimental Psychology* 12(3), 225-239.
- Shinohara, K. & R. Uno. 2022. Exploring the positional effects in sound symbolism: The case of hardness judgments by English and Japanese speakers. *Languages* 7(3), 179.

真偽疑問文における「か」あり／なしの違い
—フォーマリティとの関わりに着目して—

ヨウ ムリン
姚 夢琳 (東北大学大学院生)

1. はじめに

現代日本語の真偽疑問文において、(1)のように丁寧体の動詞述語を用いる場合、「か」の有無による違いはあまり大きくないとされている。

(1) もう出かけます {か／ ϕ }? (『現代日本語文法』4:23)

しかし、「か」なし文は単なる省略形とはいえない。例えば、(2)(3)のような例が挙げられる。

(2) 「あなた以外に、彼女が親しくしていたのは?」「三、四人だけだと思います」「その人たちの住まいは分かりますか?」「ちょっと待ってください(同級生名簿を探していく)」 (LBk9_00006, 88680)

(3) 「その中にフラワー何とかをやりそうな人がいませんか?」「お花の教室をやっている人はいるわよ」「その人の電話番号わかります?」私は昭子に携帯電話を差し出した。(PB29_00140, 40300)

(2)は、刑事が目撃者に「その人たちの住まいがわかるか」を問う「か」あり文である。(3)は、被害者の夫が妻の知人に「その人の電話番号はわかるか」を問う「か」なし文である。いずれも情報提供が可能な相手に「その人に関することがわかるかどうか」を尋ねる点は同じであるが、(3)では発話と同時に「携帯電話を差し出した」という行動が伴い、その場での入力を促す意図が読み取れる。それに対して、(2)からその意図はうかがえない。

以上の例は、両形式に機能差があること、さらに(2)の事情聴取、(3)の私的会話という発話場面におけるフォーマリティの差も、形式選択に影響している可能性があることを示唆している。そこで本発表は、丁寧体の真偽疑問文において、「か」あり／なしがどのような違いがあるのか、またそれが発話場面のフォーマリティとどのように関わるのかを明らかにする。

2. 先行研究

真偽疑問文における「か」あり／なしの違いについては、文体的観点から論じた研究がある。野田(1995)は、普通体の「か」あり疑問文は要求の強い男性的な表現になりやすく、丁寧体の「か」なし疑問文は柔らかな印象を与えると指摘する。森川(2009)も、常体の「か」つき疑問文のぞんざい性が、敬体では消えると言及している。このような議論は、「普通体／丁寧体」という文体の対立に基づき、「普通体+か」は強くぞんざい、「丁寧体+か／ ϕ 」は丁寧な言い方と考えられ、フォーマリティと関連している可能性が示唆されている。

それに対して、機能的観点から考察する立場もある。下谷・王(2007)は、「か」ありは談話の始まりに現れ、情報や反応を要求する働きがあるが、「か」なしは談話の途中に現れ、話し手の推測についての確認を要求するとする。スワン(2008)は、「か」の省略を話者の感情を表す手段と捉え、「か」ありは感情を表さず情報を求めるのに対し、「か」なしは肯定的・否定的な感情を前提に尋ねると述べている。

(4) ～と申しますが、～さん、いらっしゃいますか (個人的な感情を表さない)

(5) 当時(50年位前)としてはめずらしくありません? (「めずらしいだろう」という肯定的感情)

(6) (前夫に) 邦彦いくつになったかわかります? (「わからないだろう」という否定的感情)

(4)～(6)の例から、スワンのいう「感情」とは、話し手の「～だろう」という推測を意味し、下谷らのいう「推測」とほぼ同義と考えられ、いずれも「推測の有無」によって両形式の違いを説明していると言える。しかし実際には、「か」あり文で推測を伴う例も少なくない。

(7) 道原はノートをめくって、二、三分黙っていたが、「五月の連休にはどこかへ行きましたか?」と、一色の顎の傷跡を見てきた。(PB59_00470, 28990)

(8) 石川「こんなにひどくなる前に治療を受ければいいんでしょうけど」みの「治りますか?よく水虫

(7)は、話し手が顎の傷跡を見て「どこかへ行っただろう」と推測し、(8)も、話し手が「治らないって」と続けており、「治らないだろう」と推測したうえで尋ねていると考えられる。したがって、「推測の有無＝「か」の有無」という区分では十分とは言えない。また、(5)の否定疑問文自体が肯定的推測を含みやすく、「か」の有無による違いを比較する対象として適切かどうかを検討する必要もある。また、滝浦（2008）はポライトネスの観点から、「か」ありを相手の意向を問う質問、「か」なしを行為の共同性が強調される勧誘と説明しているが、「もう一軒行きます（か）？」という単一例に依拠し、真偽疑問文一般の説明として十分ではないと考えられる。

このように、「か」あり／なし文の違いは十分に明らかになっておらず、また、この違いはフォーマリティと機能の両方に関わると考えられるが、従来の研究はそのいずれかに偏り、両面を統合的に説明したものはない。そこで本発表は、丁寧体の真偽疑問文において「か」あり／なしがどのような違いがあるのか、またそれが発話場面のフォーマリティとどのように関わるのかを明らかにする。なお、丁寧体を対象とするのは、普通体では文体による影響が大きく、形式そのものの違いを捉えるのが難しいためである¹。さらに、丁寧体のうち「デス形」の「か」なし文は極めて少なく、分析対象から除外する。

3. 考察対象と方法

本発表では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の「書籍」「新聞」「雑誌」に含まれる会話文から、「ますか？」「ます？」「ましたか？」「ました？」という真偽疑問文をそれぞれ50例ずつ、計200例を無作為に抽出し、分析対象とする²。

「か」の有無は、発話場面のフォーマリティに影響されると考えられるため、両形式の比較は、同一フォーマリティ内で行う必要がある。まず、フォーマリティが同じと思われる一つの発話内で、同じ話し手が同じ聞き手に連続して用いた「か」あり／なし文を対象に、両形式を比較し、両者の基本的性格を明らかにする。次に、異なる発話でフォーマリティを統一したうえで比較する。統一の仕方には、蒲谷（2013）の「相手レベル」と「場レベル」の二軸を基準とし³、「相手レベル」を上・疎（+1）／同（0）／下・親（-1）、「場レベル」を改まった場（+1）／通常の場合（0）／くだけた場（-1）という三段階に分けた枠組みを用いる。このうち、「場レベル」は次のように考える。「改まった場」は式典、裁判所、警察署など制度性が強い環境、「通常の場合」は職場、教室、病院など日常的環境、「くだけた場」は家庭、気楽な会食など私的空間とする。

その上で、この二軸の数値を加算し、表1のようにフォーマリティを五段階（+2～-2）に整理した。この区分は便宜的であるが、表2のように各段階では文体や終助詞の使用傾向が見られるため、有効と判断し、「極めて高／高／中／やや低／低」と名づける。ただし、「極めて高」では11例すべてが「か」あり文、「低」では15例中14例が「か」なし文に偏り、形式の使い分けが十分に観察できない。そこで「高」「中」「やや低」の三段階を対象に、同一フォーマリティ内における両形式の違いを考察する。

表1 数値的なフォーマリティの五段階

相手レベル \ 場レベル	+1	0	-1
+1	+2	+1	0
0	+1	0	-1
-1	0	-1	-2

表2 フォーマリティ五段階に見られる言語形式の特徴

五段階	言語形式の特徴	「か」あり／なしの数
極めて高（+2）	丁寧体一貫、終助詞なし	11（100%）／0（0%）
高（+1）	丁寧体一貫、終助詞はかなり少ない	48（58%）／35（42%）
中（0）	丁寧体中心、終助詞が多い	36（48%）／39（52%）
やや低（-1）	丁寧体と普通体の混用、終助詞が顕著	4（25%）／12（75%）
低（-2）	普通体中心、終助詞やくだけた表現が多い	1（7%）／14（93%）

¹普通体+「か」による疑問文は、「男っぽく聞こえる話し方」という印象を与え、役割語的に使われることがあると考えられる。

²「ません」で終わる否定疑問文には、命題に対する肯定的な「傾き」が多く見られ、「くれる／もらう」などの授受補助動詞を含む表現は依頼的な意味を帯びる。これらは形式的に独自の性質を持つと判断されるため、本発表の考察対象から除外した。

³蒲谷は、「場面とは、人間関係に関する認識（相手レベル）と場に関する認識（場レベル）が融合したものであり、待遇コミュニケーションにおける最も重要な枠組みである」と述べている（蒲谷2013：59）。

4. 「か」あり／なし文の機能の基本性格—同一発話者による両形式の連続使用例から—

まず、「か」あり／なし文の機能の基本性格の違いを検討する。方法として、一つの会話内で同じ話し手が連続して用いた「か」あり／なしの26文(計52例)を取り上げ、同じフォーマリティのもとで比較する。

- (9)「私は鉄道警察隊の特捜の者です。①二日の昼ごろ、この改札を千加沢光太郎という人物が通りかかったということがあると思うんですが、覚えていますか?」「エッ?九月二日…千加沢…あ、覚えています。小説家でしょう?あの人はいつも…」(中略)「②その後、千加沢先生のほうが、ご自分の本にサインをして、あなたに差し上げたのですが、それは覚えています?」「覚えていますよ」「じゃあ、ちょっと見せていただけますか?」⁴ (LBn9_00031, 9130)

(9)は、捜査官が副駅長に尋ねる場面である。①の「か」あり文は、命題内容が「千加沢光太郎が改札を通りかかったこと」で、第三者に関わる。最初の質問で話し手に判断材料が乏しく、真偽を聞き手に委ねている。一方、②の「か」なし文は、命題内容が「千加沢があなたに差し上げた本」で、聞き手(第三者以外)に関わる。①で人物が確認され、さらに詳述を受け、話し手には「本のことも覚えているだろう」という一次的想定と、「『はい』と答えるだろう」という聞き手の答えに対する二次的想定が成立する。両想定が同方向で合致し、ギャップがない。これを前提に応答をその方向へ誘導し、続く「見てください」という依頼へつなげている。この場合、②の「か」なしは〈第三者以外／一次的想定あり／ギャップなし〉、①の「か」ありは〈第三者／一次的想定なし／ギャップが問題にならない⁶〉という条件で、それぞれ使い分けられている。

- (10)「母さん」「いいえ、私はシェリー。カーリーの母親。」(略)あなたは軽い卒中の。そのせいで自分のいる場所がわからなくなってしまったの」「わかってるよ、私は家にいるの」「もちろんそうね。だけど、わたしはあなたの母親ではないんですよ。①わたしは本当はシェリー、わかります?カーリーの母親。②カーリーはわかりますか?」メレディスの友だち。」 (PB39_00707, 78570)

(10)は、記憶が混乱している相手との会話である。①の「か」なし文は、命題内容が「私はシェリー」で、話し手(第三者以外)に関わる。直前まで繰り返された「私はシェリー、あなたの母親ではない」という説明と、相手の「わかってるよ、私は家にいるの」という発話から、「相手はわかるだろう」という一次的想定と、「『はい』と答えるだろう」という二次的想定が成立し、両者にギャップがない。これを前提に応答をその方向へ誘導する。一方②の「か」あり文は、命題内容がカーリー(第三者)に関わる。眼前の話し手さえ正しく認識しているか不確かなため、「本来ならカーリーがわかるだろう」という一次的想定はあっても、カーリー(第三者)に関わる応答の方向を予測できず、二次的想定がない。その結果、真偽を聞き手に委ねている。この場合、①の「か」なし文は〈話し手／一次的想定あり／ギャップなし〉、②の「か」あり文は〈第三者／一次的想定あり／ギャップが問題にならない〉の条件で、それぞれ使い分けられている。

- (11) (風間が沈黙している) ようやく、信濃が口火を切った。「①精算はもうすみしましたか?②スタッフのギャラは支払われていますか?③風間さんは分配金を受け取りました?」「い、いや。チ、チケット代の清算は彼が終わらせたけど、ギャラの支払いはまだだと。ぼ、僕らへの分配も、こ、これから」「やはりそうですか」(中略)「き、君は、僕らの劇団が詐欺に遭ったとでもいうのか!?!」風間はどもりながらまくしたてた。「当然です。彼は筋金入りの詐欺師。」 (LBd9_00100, 2460)

(11)は、被害を受け入れたくない聞き手から事実を引き出す会話である。①②の「か」あり文は、命題内容が「清算の進展」「スタッフのギャラの支払い」で、第三者に関わる。後続の「やはりそうですか」「当然です」から、話し手には「清算は済んでいたが、ギャラは支払われていない

⁴用例では、対象を“_____”、一次的想定に関わる文脈を“_____”、二次的想定に関わる文脈を“_____”のような下線でそれぞれ示す。
⁵意味論的には「(あなたが)千加沢光太郎が通りかかったことを覚えているかどうか」が命題とされるが、ここでは「千加沢光太郎が通りかかったこと」という情報を命題内容とみなす。

⁶「問題にならない」は、一次的想定または二次的想定が形成されず、両者を問うことがない場合を指す。

だろう」という一次的想定がある。一方で聞き手の沈黙から、聞き手は“彼”を信じたい立場にあり、「正直に答えないだろう」という二次的想定も成立し、両想定の方向が合致せずギャップが生じる。これより、話し手は想定を前面に出さず、質問を重ねて真偽判断を聞き手に委ねている。一方、③の「か」なし文は、命題内容が「**風間さんの分配金受領**」で、聞き手（第三者以外）に関わる。最初から「受け取っていないだろう」という一次的想定を持ち、加えて①②によって、相手も「自分が騙された」という状況を認め、「『いいえ』と答えるだろう」という二次的想定が成立する。両想定が同方向でギャップがなく、相手の応答を誘導し、次の協力を促している。この場合、①②の「か」あり文は〈第三者／一次的想定あり／ギャップあり〉、③の「か」なし文は〈第三者以外／一次的想定あり／ギャップなし〉という条件で、それぞれ使い分けられている。

以上より、「か」あり／なし文は、命題内容の関与主体、一次的想定・二次的想定の有無、ギャップの有無（一次・二次的想定の成立関係）という点において違いが見られる。また、これらの指標は独立ではなく、互いに連動して形式選択に影響する。この関係を表3に整理する。

「か」ありでは、命題内容が第三者に関わり、判断材料が乏しく一次的想定を持たない(A)。仮に一次的想定はあっても、聞き手の応答方向に関する二次的想定が形成されず、ギャップが成立しない(B)、あるいは二次的想定があっても一次的想定と方向が合致せず、ギャップありとなる(C)。このように、「か」あり文の基本条件は〈第三者／一次的想定任意／ギャップが問題にならない・あり〉であり、真偽判断を聞き手に委ねる意図が前面化するという性格をもつ(α型)。

表3 両形式における各指標の組み合わせのパターン

パターン	指標	命題内容の関与主体	想定の有無		ギャップの有無	「か」あり	「か」なし
			一次的想定	二次的想定			
A		第三者	×	×	—	8	0
B		第三者	○	×	—	5	1
C		第三者	○	○	○	8	0
D		第三者以外	○	○	×	1	22
E		第三者以外	×	×	—	4	0
F		第三者	○	○	×	0	3

○：条件あり、×：条件なし、—：その条件が問題にならない

これに対し、「か」なしでは、命題内容が第三者以外（話し手・聞き手といった当事者）に関わり、関係性や先行知識に基づく一次的想定を持つ。同時に、発話現場の手掛かりにより聞き手の応答に関する二次的想定も同方向に成立し、ギャップなしとなる(D)。このように、「か」なし文の基本条件は〈第三者以外／一次的想定あり／ギャップなし〉であり、相手の応答を特定の方向へ誘導し、その方向に沿う行動や情報を引き出すという性格をもつ(β型)。

ただし、命題内容の関与主体が第三者か否かは絶対ではなく、上記に合わない例も7例ある。
 (12)「最初のラジオを手にしたときを覚えていますか？」「さっぱり覚えてないよ」「株式市場が崩壊したときのことを覚えていますか？」「いや」「大恐慌について話していただけますか？」「厳しい時代だった(略)」やった！これで話の糸口がつかめるわ。 (LBr3_00155, 47960)
 (13)「うちに名簿があるから(略)」「その中にフラワーをやりそうな人がいませんか？」「いるわよ」「その人の電話番号わかります？」私は昭子に携帯電話を差し出した。 (3)(再掲)

「か」ありの4例は(12)のように〈第三者以外／一次的想定なし／ギャップが問題にならない〉(E)で、命題内容は聞き手に関わるが、いずれもインタビューという判断材料が乏しい場面に出現し、一次・二次的想定が立てにくく、真偽を相手に委ねている。「か」なしの3例は(13)のように〈第三者／一次的想定あり／ギャップなし〉(F)で、命題内容は第三者に関わるが、「電話を差し出した」という行動が伴い、一次・二次的想定が同方向に成立し、情報提供を誘導する。したがって、「か」の有無により関わるのは、〈一次・二次的想定の有無〉と〈ギャップの有無〉と言える。なお、表3のB・Dの各1例は、後節のフォーマリティとの関係で説明できる⁷。

以上の連続使用例の分析から、基本的には「か」ありは応答委ね(α型)、「か」なしは方向誘導(β型)という性格をもつ。

⁷α型にもかわらず「か」「か」なしが現れるのは、後述のフォーマリティ低の場合であり、逆にβ型にもかわらず「か」ありが現れるのはフォーマリティ高の場合である。

5. フォーマリティ三段階における「か」の有無と基本的性格の関係

以上の基本的性格を前提に、フォーマリティ三段階ごとに、「か」の有無との関係を検討する。

5.1 フォーマリティ高

高では、「か」あり／なしが48対35（「か」あり58%）で、「か」あり文が相対的に多い。

(14)a 広瀬助教授の所属や専攻など、皆目わからないので、受付の守衛に訊いた。守衛は、文学部の部に広瀬肇の名を見つけてくれた。「今、いらっしゃいますか？」と訊く (LBj9_00004, 3660)

b 「すみません。マネージャーの大原さん、いらっしゃいますか？」と聞いた。すぐに、大原が現われた。「夏木さん、いらっしゃい。お待ちしました」と、大原が言った。 (LBi9_00265, 54410)

(14)は受付で第三者について尋ねる発話である。(14a)は、広瀬助教授の所在については何の情報もなく、一次・二次的想定とも成立せず、真偽を委ねているものである。一方(14b)は、直後の「お待ちしました」から面会予定が推測され、「いるだろう・受付嬢も『はい』と答えるだろう」という一次・二次的想定が同方向に合致し、ギャップなしで大原さんの呼び出しを誘導している。

これに対し、β型の性格であるが、「か」ありとなる例も9例見られる。

(15) 道原はノートをめくって、二、三分黙っていたが、「五月の連休にはどこかへ行きましたか？参考まで教えてください。」と、一色の顎の傷跡を見てきた。「尾瀬へ行きました」 ((7)再掲)

(16) キャロラインはソニアに向き直った。「質問を覚えていますか？」「警察に通報すると脅すので、五百ドル払いました」「面倒を避けたい理由が、ほかにあったのではないですか？その三カ月前、ブロンクス・ハイスクールでも問題が起きましたね？」 (PB49_00331, 32830)

(15)は、警察官が傷跡から「どこかへ行っただろう」という一次的想定を持ち、相手の協力的な姿勢から「正直に答えるだろう」という二次的想定も同方向に合致し、具体的情報を誘導する。

(16)は、弁護士が直前に質問したため、「覚えているだろう・『はい』と答えるだろう」という一次・二次的想定が同方向に成立し、証人に不利な事実の供述を誘導している。いずれも相手の応答をある方向へ誘導する意図は明確であり、「か」なしの性格に当たるが、制度性の強い事情聴取・法廷尋問という高フォーマリティのため、形式が「か」ありへ補正されていると考えられる。

5.2 フォーマリティやや低

やや低では、「か」あり／なしが4対12（「か」なし75%）で、「か」なし文が圧倒的に多い。

(17)a 「消化がよくなるようにホミカを買いましたよ」そこへイヴェットが告げた。「具合が悪いんですか、とても変な顔をしてらっしゃるわ。ホミカを少し飲みますか？」 (LBq9_00065, 45510)

b 「転校のこと、どう思う？」「そうですね、家族は一緒にいたほうがいいと思いますけれど」「ぱったら、ほら、死んだらおしまいっていう...」「ほほ、まいは怒りましたか？」

(LBkn_00029, 54410)

(17)は親しい間柄での会話である。(17a)は、相手の体調不良という手掛かりから「飲むだろう・『はい』と答えるだろう」という一次・二次的想定が同方向で合致し、飲むことを誘導している。一方(17b)では、「怒っただろう」という一次的想定はあるが、二次的想定まで形成されず、真偽を相手に委ねている。

一方、α型の性格であるが、「か」なしが使われる例も5例ある。

(18) 北と武井が車のところにもどってくる。「もしもし...わかってます...ええ」電話が向こうから切れたらしく、北、釈然としない顔で、受話器を置く。武井「怒ってました？」 (LBd9_00026, 18400)

(19) 「こちら夏木千草さん…」「ぼく、会ったことあるんだ！」思わず大声を出してしまう。「三年前、馬に乗せてもらったときについてくれたんですよ、忘れちゃいましたか？」 (PB59_00425, 18610)

(18)(19)はいずれも、相手の反応を手掛かりに「向こうは怒っただろう、自分を忘れただろう」という一次的想定はあるが、応答方向に関する二次的想定が形成されず、誘導意図はない。真偽判断を聞き手に委ねる点で「か」ありの基本的性格に当たる。ただし、いずれも私的でくつろいだ場というやや低フォーマリティのため、形式は「か」なしへ補正されると考えられる。

5.3 フォーマリティ中

中では、「か」あり／なし文が 36 対 39 とほぼ均衡に使われている。

(20)a 那須野は操縦席を後ろに下げると狭いコックピットの中で立ち上がった。右側の席に座っているジャッカルが顔を上げる。「何かありましたか？」 (LBj9_00186, 74480)

b ルディは目を見開いてコックピットのドアを見つめた。「ルディ？」返事はなかった。「ルディ...何かまだわたしに言っていないことがあります？」彼はいきなりアネットのほうに向いた。「アネット、機長の名はケン・ウルフと言ったね？」 (LBo9_00200, 57820)

(20)は同僚に業務状況を尋ねる会話である。(20a)は、相手の行動から「何かあっただろう」という一次的想定はあるが、事態は不明で相手の応答方向を予測できず、真偽を相手に委ねている。一方(20b)は、相手の落ち着かない様子から「言っていないことがあるだろう」、問えば「認めるだろう」という一次・二次的想定が同方向に成立し、ギャップなく相手の語りを誘導する。

しかし、この段階でも、 α 型で「か」なし、 β 型で「か」ありとなる例が見られる。

(21)「お誘いしようと思ったが、お邪魔のようだな」「こっちの調査が急ぐんですよ。でも石岡君が興味を持てますからね、僕の代わりにいきます」「石岡さん、来られますか？」 (LBi9_00192, 79790)

(22) (健康講座で、爪に白い点がある方がいる) みの「本当だ、ありますね。どこか悪いところあります？」観客「健康です、今のところは」 (LBk4_00056, 16440)

(21)は、先行発話から「来るだろう・そう答えるだろう」という一次・二次的想定が同方向で合致し、相手の応答を誘導する点で「か」なしの性格に当たる。ただし「来られる」という可能形＋ますの丁寧さから、フォーマリティ中のなかでも、相対的に高めのフォーマリティとなり、「か」ありが使われている。これに対し(22)は、司会者に「どこか悪いところがあるだろう」という一次的想定はあるが、二次的想定が形成されず、判断を委ねる点で「か」ありの性格に当たる。ただし、市民向けの健康講座という相対的にやや低フォーマリティのため、「か」なしが使われている。このように、フォーマリティ中でも、その相対的な高低に応じて形式が補正される。

以上をふまえ、両形式の選択とフォーマリティ三段階の関係を表4に示す。「か」ありは、フォーマリティが〈やや低→中→高〉と上がるにつれ、方向誘導(β)の比率が〈0%→8%→19%〉と増え、距離感や制度性が「か」ありの選択を後押ししている。一方「か」なしは、フォーマリティが〈高→中→やや低〉と下がるにつれ、応答委ね(α)の比率が〈0%→18%→31%〉と増え、親密さやくだけた雰囲気が「か」なしの選択を促している。すなわち、基本的性格を前提とするものの、用いられる形式は発話場面のフォーマリティに応じて補正されると考えられる。

表4 三段階ごとの α/β の分布とその制約の強さ

三段階	「か」あり疑問文		強さ	「か」なし疑問文		強さ
	α 数(基本)	β 数		β 数(基本)	α 数	
高(+1)	39 (81%)	9 (19%)	↑	35 (100%)	0 (0%)	↓
中(0)	33 (92%)	3 (8%)		32 (82%)	7 (18%)	
やや低(-1)	3 (100%)	0 (0%)		11 (69%)	5 (31%)	

6. おわりに

本発表は、マス形をとる丁寧体の真偽疑問文において、「か」あり／なしが異なる性格をもち、その選択が発話場面のフォーマリティに影響されていることを明らかにした。とくに、従来「推測」として一括されてきたものを〈一次的想定〉と〈二次的想定〉に分け、両者の合致／不合致としての〈ギャップの有無〉を捉えることで、両形式の違いを説明した。ただし、否定疑問文、授受補助動詞を伴う疑問表現、普通体は扱っておらず、今後の課題としたい。

調査資料 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 2.7.2, データバージョン 2021.03)

参考文献 蒲谷宏 (2013)『待遇コミュニケーション論』大修館書店／スワン彰子 (2008)「疑問文と疑問を表す「か」の関係」『講座日本語教育』33 早稲田大学日本語研究教育センター／下谷麻記・王彦 (2007)「自然会話における疑問文の談話機能について：終助詞「か」の有無とその機能的相違」『言語学と日本語教育 V』くろしお出版／滝浦真人 (2008)『ボライトネス入門』研究社／日本語記述文法研究会 (2003)『現代日本語文法 4—第8部モダリティ』くろしお出版／野田春美 (1995)「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～φ?—質問文の文末の形—」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版／森川正博 (2009)『疑問文と「ダ」—統語・音・意味との談話の関係を見据えて—』ひつじ書房

逗子市小坪漁港の漁業者集団語の語彙体系の解明と特徴の考察

佐藤旺斗 SATO AKITO (東京海洋大学)

1. はじめに

本発表は、神奈川県逗子市にある小坪漁港において、漁業者集団が使用する集団語を研究対象とし、その語彙を収集した上で、造語法、機能、使用の変遷といった特徴を明らかにするものである。従来の漁業者集団を対象とした集団語研究は、調査範囲が一部の語彙に絞られたものが多く、ある漁業者集団の語彙体系を明らかにした研究は少なかった。そこで本研究では、文献調査と漁業者への聞き取り調査を併用して、当該漁港における漁業者集団語の全体像の把握に努めた。

2. 先行研究

2. 1 集団語

「集団語」という言葉は、1956 年に柴田武が隠語、職業語、スラングを指して呼んだのが始まりである。米川 (2009) はそれぞれの職業語や若者言葉などに隠語と非隠語が存在するとした上で、集団語を「特定の機能的社会集団（血縁的・地縁的ではない）に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語のこと」と再定義した。本発表における「漁業者集団語」も、この流れにならい、「漁業者集団に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語」とする。

2. 2 漁業者集団語

これまでの漁業者集団語に関連する研究は、ある特定の地域に注目して行われたものが多い。例えば加治工 (1986) では、沖縄県鳩間島で使われる漁業に関する語彙を、漁法に応じて分類している。また、灰谷 (2009) では、島根県小伊津町の営漁における漁場特定に関わる語彙を収集している。他にもこの著者は、植木・灰谷 (2011) においては長崎県対馬市美津島町の漁場特定に関する語彙を収集し、灰谷 (2011) においては、これまで調査してきた各漁場の地理的環境と漁場特定の語彙の関連性についてまとめている。

漁場特定に欠かせない風位語彙に関する記述は、漁業者の語彙の中でも比較的研究が進んでいる。室山 (1983) は、全国の漁村で収集した風位語彙をまとめた資料集である。これによって風位語彙の分布の全体像が提示されたのち、久木田 (1986) や方言ゼミナール (2009) など、各地域に限定した風位語彙の研究が行われた。また、漁法の名称および漁具の名称に関する語彙は、柴田・東川 (1983) の瀬戸内海の島々を対象にした研究を始めとして、柏本・広島女学院大学方言研究会 (1984)、加治工 (1986)、永瀬 (1994)、にて各地域で収集されている。一方魚名に関しては、室山 (1981,1982) が、魚名だけに注目した初期の研究と言える。室山は主に漁獲対象魚種の呼び名の派生形を元に、命名法や使用者の弁別基準に言及しており、魚名の成り立ちに着目する点では高橋 (2014) と共通している。

このように、従来の漁業者集団語研究は、ある特定地域の一部の語彙を集める研究が多く、その地域の方言が混在している場合がある。本研究でも方言を漁業者集団語の一部として収

集したが、方言話者にも聞き取り調査を行うことで、方言かそうでないかの区別をつけた。

3. 研究概要

3. 1 研究対象

今回、研究対象として選定したのは、逗子市小坪漁港の漁業者たちである。選定の主たる理由は、調査の前提となる文献資料に、漁業者集団語のまとまった記録が残っていたことである。また、フィールドワークによる参与観察と、補完的なインタビュー調査を想定して、選定を行った。

小坪漁港は、逗子市の西側に位置する歴史のある漁港である。その発祥は鎌倉時代にまでさかのぼり、沿岸海域での網漁、延縄漁、釣漁などを営んできた。現在はワカメやシラスを中心に年間 70 万トン程度の水産物を水揚げしており、組合員約 30 名（2023 年時点）という小さな漁港ながら、営漁、観光開発、生産量拡大に向けた取り組みなど精力的な活動を行っている。特に盛んなワカメ漁は、天然ものと養殖ものがあり、覗突漁という伝統的な漁法で採集される。覗突漁は、その名の通り水中を箱眼鏡によって覗き、海底のワカメやサザエ、アワビなどを専用の銚子を使って採集するという漁法である。冬場はワカメ漁が主軸となり、春から初冬にかけてシラス漁が行われる。ほか、釣漁や刺網漁も通年的に行なわれているが、その漁獲量は年々減少傾向にある。

3. 2 調査方法

文献調査の調査期間は 2023 年 11 月から 2024 年 8 月まで、聞き取り調査の調査期間は 2024 年 1 月から 2024 年 12 月である。なお、調査票を用いての聞き取り調査は 2024 年 11 月 19 日と 12 月 11 日、12 月 13 日に実施した。

文献に残っている語彙の収集で使用した文献は、『はまことば（小坪）小辞典』（石井 1985）、『逗子市文化財調査報告書第 15 集小坪の漁労具』（逗子市教育委員会編 1993）、『相州小坪浦漁業史』（辻井・菊池 1995）、『海のくらしと道具 小坪小学校資料室にある漁労具池子遺跡群から出土した古代の漁労具』（逗子市教育研究相談センター 2023）である。よって、収集されるのは 1980 年代から 90 年代にかけて使用されていた、または使用していた人物が存命していた、という語彙が中心になる。その手法は、語彙とその意味を合わせて収集し、用法や成り立ちに関する記述があれば、それもあわせて記録するという方法である。収集したデータは五十音順に整理した。

文献で語彙を収集すると同時に、漁業者との会話の中で、文献にない語彙も収集した。漁業者の営漁活動を手伝う中で、自然に発された語彙を記録する形をとったので、口頭での対話が中心となるが、可能な限りその意味や成り立ちについても質問した。調査対象者は、50 代男性漁業者 1 名（表 1 中 C 氏）と、40 代男性漁業者 1 名（表 1 中 E 氏）である。また、蓄積した語彙データに関して、その使用状況について聞き取り調査を行った。この調査では、調査票を作成し、それぞれの語彙について画像を提示しながら使用状況を質問した。調査対象者は調査票に回答を記入しながら、内容に関する口頭での問い掛けにも答えてもらった。回答は調査票に記録されたもののほかに、ボイスレコーダーによる録音でも記録した。

調査対象者は、以下 8 名の漁業者（いずれも男性、仮名は年齢降順にアルファベットを当てはめている）と、漁業者でない地域住民の女性 X・Y 氏、男性 Z 氏である。この男女に関しては、漁業者集団語と方言とを区別するために、漁業者と同じ調査票を配布し、記載の語彙が方言として話されるかを口頭で尋ねた。いずれも営漁していた経歴はないが、漁業者の知り合いで、営漁以外の浜でのイベントなどを手伝う間柄である。小坪地域出身で、地域に 30 年以上住んでいる住民であるため、当該方言話者としてふさわしいと考え、調査対象者に選定した。

表 1：調査対象者の年齢と操業年数

実施日	漁業者	操業年数（約）
11 月 19 日	50 代 C 氏	30 年
	40 代 E 氏	10 年
12 月 11 日	50 代 D 氏	15 年
	40 代 F 氏	10 年
	40 代 G 氏	5 年
	30 代 H 氏	5 年
	50 代 X 氏	漁業者でない
	50 代 Y 氏	漁業者でない
	70 代 A 氏	40 年
12 月 13 日	60 代 B 氏	30 年
	60 代 Z 氏	漁業者でない

発表者作成。

3. 3 調査結果

文献調査で集まった語彙は、風向名 4 語、漁具名 44 語、魚名 11 語、船体部位名 33 語、漁場名 6 語の 98 語であった。また、聞き取り調査で新たに得た、文献になかった語彙は、風向名 6 語、漁具名 26 語、魚名 17 語、船体部位名 6 語、漁場名 33 語の 88 語であった。収集した語彙を本稿で全て示すことは、発表の体裁上難しいが、その一部を図 1 で示す。図 1 は、聞き取り調査で新たに得た漁場名の分布を、海図上に記したものである。また、次章で漁業者集団語の特徴を述べる際、一部の語を取り上げて意味とともに記述する。

一方、文献調査で集まった 98 語に関する使用頻度・認知状況のインタビュー調査では、全年齢層に使用されている語と全く認知されていない語とで二極化が起こっていることが明らかになった。加えて少数ではあるが、世代間で認知状況に差がみられる語もあった。これに関しては、4 章 3 節において詳しく記述する。



図 1：聞き取り調査で得た漁場名の位置（発表者作成）。

4. 漁業者集団語の特徴

4. 1 造語法

収集された漁業者集団語の中には、いくつかの特徴的な造語法がみられる。語形からみると、借用や省略、音韻の変化が起こっていることがわかった。例えば船の前進・後進を意味する「ゴーヘイ」「ゴースタン」は英語の「Go ahead」「Go astern」から来ている（吉岡 2005）。また、視突漁でアワビを剥がして採る際に用いる鉤状の銚、「アワビオコシ」は、「オコシ」と省略されることが多い。これは、アワビオコシ以外にオコシ状の道具が無いいため、「アワビ（の）」オコシ、と説明部分を付け加えなくとも、他の漁具と区別がつくためだと考えられる。一方、網を繕うための針である「アバリ」は、「アンバリ」という風に撥音便化していた。同様に「サザエ」が「サゼエ」と連母音融合、「イカツノ」が「イカツノ」と連濁しているなど、発音のしやすさを重視した自然な変化がみてとれる。

漁業者集団語の造語法は、意味的にも特徴がある。例えば釣漁で餌を入れて使う「アンドンビシ仕掛」は、形状が行灯に似ていることから名付けられた。視突漁で用いる銚の「バラブシ」は、銚の先が枝分かれしていることから「クシ」とも呼ばれる。このような命名は視覚情報に基づく造語法といえる。他にも漁場名である「デーブツ根」は、鎌倉の大仏が船から丁度見える位置にあることが由来しているという。同様に「タキノメエ」は滝の前、「マツエダシ」は松の枝の前にある。漁業者が視覚情報を呼び名と結びつけていることがわかる。一方、事物の動作に由来する語も存在する。前述の「アワビオコシ」もその一つで、他には釣漁で使う浮上付き「ハト」が該当する。これは、水上を水しぶきをあげながら曳かれるさまが「ハトが翼を広げる様子」に似ていることから名付けられたそうである。このように、漁業者集団語の造語法にはいくつかの特徴がある。

4. 2 機能

次に、漁業者集団語のもつ機能について記述していく。米川（2009）では、各集団語には隠語と非隠語が存在するという。漁業者集団語においては、漁場名が隠語的機能をもっている。インタビュー調査において新たに収集した漁場名 33 語の内、24 語は、回答者が 1 人であった。つまり各漁業者が別々の漁場名を使っているということである。これは、各漁業者が先輩漁業者から受け継いだ漁場の呼び名が、それぞれ違うためだと考えられる。漁業者 C 氏は、このことを漁家という言葉で説明していた。C 氏のいう漁家とは、営漁を共に行う共働者の集まりのことで、漁業協同組合の下位集団にあたる。この漁家単位で、操業が行われていたため、どこで何が獲れるという情報も、漁家内で企業秘密のように扱われていたという。つまり、漁家ごとに相伝の漁場名があり、それらは周囲の漁家に対して隠語として機能していたそうである。しかし、C 氏が指摘するには、海域全体で魚が獲れなくなった昨今、漁場情報の価値は下がってしまったため、漁家ごとに漁場を隠す必要もなくなったという。文献に残っているような漁場名は、今回の調査ではどの漁業者も認知していたが、新たに見つかった 33 語に関しては、認知されなくなっていくおそれがある。

一方、非隠語的な機能には、会話の効率化、伝わりやすさの向上などの要素が挙げられる。効率化については、1 節の造語法で触れたような省略表現などが該当する。伝わりやすさに関しては、B 氏が参与観察中に語ったことが参考になる。若い漁業者を弟子にもつ B 氏は、北東風を意味する「イナサ」を「ヒガシナレ」と言い換えて使うという。「ナレ」とは北風のことで、こちらは今回の調査の対象者全てが認知していた。一方、「イナサ」を知るのは B 氏含め 2 人のみだった。こうした状況を受けて、B 氏は言い換え表現を用いるようになったという。こうした伝わりやすさを重視した語の形成は、隠語の形成過程とは逆の性質をもつ。隠語がその役割を失う一方で、伝わりやすい非隠語の役割が生まれているのは、漁業者集団の集団語に対するニーズが変わってきているということでもある。

4. 3 漁具名の変遷

今回の調査では、文献中の漁具名に、使用頻度の高い漁具名と、認知度の低い漁具名とが二極化して存在することがわかった。漁具名の認知度が低いということは、漁具自体が使われなくなったと考えるのが妥当である。例えば船を引き揚げる木造ウィンチの「カグラサン」は電動ウィンチに、木製の道具箱である「コバコ」と「スズ」はプラスチック容器に、網や縄を保管するカゴだった「ダイワ」や「ナワバチ」はプラスチック製のカゴに、それぞれ代替されたため、その呼び名も認知度が低い。「ツノマキ」と「ツム」という漁具は、延縄漁に用いる縄を撚るための道具だが、市販品の影響で漁業者自ら縄を撚ることが無くなったため使われなくなり、漁具名を知る漁業者も 1 人しかいなかった。

一方で使用頻度の高い漁具名には、視突漁に関するもの、全国的な漁業語彙が該当した。視突漁に関するものは、「アワビオコシ」や箱眼鏡を指す「カガミ」、サザエを採る鉞「サザエフシ」、ワカメを刈る鎌「ワカメガマ」である。また全国的な漁業語彙は、日本国語大辞典に記載があるような広く認知されている語で、「タコツボ」、「タモ」などが挙げられる。い

ずれも使用頻度の高い漁具名は、漁具自体の使用頻度も高かった。

「アンドンビシ仕掛」などの一部の語は、高年の漁業者の方がよく使用していて、若年の漁業者の認知度が低かった。こうした漁具は今、使われなくなっていく過渡期にあると考えられる。高年の漁業者が当たり前に使っていた漁具が、環境の変化や技術の変化に伴って使われなくなるため、関連語彙も継承されなくなっているのであろう。

5. おわりに

本研究で、小坪地域の漁業者集団語は 180 語以上の語彙によって形成され、語の成り立ちや役割、使用状況に特徴があることが明らかになった。出来る限り網羅的に語彙を収集し、命名の由来などの語彙に関する情報も収集したが、調査対象者は漁業者 8 人にとどまった。漁業者集団語の語彙体系の全貌を明らかにするためには、漁村の漁業者全員に調査するのが理想である。また、収集したデータが膨大であったため、本稿で言及できた情報は、収集した内の一部に過ぎなかった。語彙や語の情報を辞書的に整理することは、今後の課題である。加えて、他集団との比較や、漁業者の言語意識の調査など、研究の余地も残されている。

参考文献

- 植木香緒里・灰谷謙二（2011）「長崎県対馬市美津島町方言の漁場特定語彙—ヤマアテにみられる開放系漁場の特徴—」『尾道大学芸術文化学部紀要』10:61-70.
- 加治工真市（1986）「鳩間方言の漁業語彙」『琉球の方言』10:1-24.
- 久木田恵（1986）「漁業社会における風の語彙体系の記述と比較の方法」『方言研究年報』29:91-109.
- 柴田昭二・東川栄子（1983）「備讃瀬戸漁村語彙稿（1）（2）」『香川大学教育学部研究報告』58:1-57.
- 柴田武（1956）『現代社会とことば<ことばの講座>』東京創元社
- 高橋そよ（2014）「魚名からみる自然認識：沖縄・伊良部島の素潜り漁師の事例から」『地域研究 = Regional Studies』13:67-94.
- 永瀬治郎（1994）「霞ヶ浦の漁業語彙」『専修国文』55:19-36.
- 灰谷謙二（2009）「出雲地方の漁業集落の風位語彙と漁場確定語彙 —出雲市小伊津町方言からみる開放系漁場の特徴—」『尾道大学日本文学論叢（2011 年度まで）』5:21-35.
- 灰谷謙二（2011）「漁場の地理的環境と漁場特定語彙」『尾道大学日本文学論叢（2011 年度まで）』7:15-25.
- 方言ゼミナール（2009）「紀伊半島南部の漁業社会における風位語彙の構造—印南町印南と串本町古座の比較—」『国語と教育』34:23-38.
- 室山敏昭（1981）「特集・裏日本から日本海側へ@山陰地方の漁業社会の生活語彙—潮の語彙を中心として—」『言語生活』360.
- 室山敏昭（1982）「真鍋島共同学術調査報告 国語学班@岡山県笠岡市真鍋島岩坪方言の魚名関係の語彙」『内海文化研究紀要』10.
- 室山敏昭（1983）「全国各地漁業社会の風位語彙資料」『広島大学文学部紀要』43(特輯 2):1-143.
- 吉岡泰夫（2005）「特集；魚と海のことば——漁業のことば」『日本語学』24(9):6-16.
- 米川明彦（2009）『集団語の研究（上）』東京堂出版

出雲仁多方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係およびその変化について

平子 達也^{ひらこ たつや} (南山大学)

hirako@nanzan-u.ac.jp

1. はじめに

島根県東部の出雲地域で話される出雲諸方言のアクセント体系は、東京方言と同じく下げ核の有無と位置が弁別的な体系である。東京方言と同様、出雲地域諸方言でもピッチ上昇位置は弁別的でなく、それは主に 2 拍めと 3 拍めの分節音環境によって予測可能である(上野 2016 など)。具体的には(1)のようになる。なお、語形の表示には概略の音声表記を用い、ピッチ上昇位置は [で表わす。/ /で囲むものは音素形である。また、W は非狭母音 (a, e, o) を含む拍 (非狭母音拍)、N は狭母音 (i, u) を含む拍 (狭母音拍)、M は促音を除く特殊拍、Q は促音拍、△は無声化母音を含む拍、○は任意の拍を表わす (以上は上野 2016 による)。ちなみに、本発表における議論では、3 拍めより後に下げ核を持つ語のみを扱い、ピッチの下降位置は問題にしないこととする。

(1) 出雲諸方言における語単独発話でのピッチ上昇位置と分節音の関係

- (a) ○[W○, ○[NN, ○[NM 2 拍めから上昇 ex. sa[kana (魚), tsj[tsimi (堤), mi[rin (味醂)
 (b) [○Mo 1 拍めから上昇 ex. [to:φu (豆腐), [saikoro (賽子), [kon.njaku (蒟蒻)
 (c) ○N[W, ○Q[○, ○△[○ 3 拍めから上昇 ex. kutsi[basi (嘴), rap[pa (喇叭), zasi[ki (座敷)

本発表では、出雲地域南部の仁多郡奥出雲町旧仁多町地域で話される方言 (仁多方言) の話者の協力を得て発表者が行った調査結果にもとづいて、語単独発話のピッチ上昇位置について、(1) にまとめた従来の先行研究で指摘されたもの以外のパターン、つまり、(1) の例外となるパターンが観察されることを報告する。そして、発表者の調査結果と先行研究における記述をもとに、当該方言ではピッチ上昇位置と分節音の関係がここ数十年で変化したと推定されることを示し、その変化の背景や変化の結果生じた変異について分析・考察した結果を述べる。

2. 先行研究

2.1 共時的な記述と地理的変異

上記(1)で示した出雲諸方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係、特に、上昇位置とそれぞれの拍に含まれる母音の広さの関係に関しては、廣戸・大原 (1953) によって詳細が明らかになっている (上野 1981; 2016 も参照)。

より古い研究としては、大原 (1937: 40) による簡単な記述がある。大原は、松江 (市) 方言では概略(1)のような関係が認められるとした上で、出雲地域の内部に地理的変異が認められることを指摘する。大原によれば、簸川 (出雲地域北西部) や大原 (同中部)、仁多 (同南部) の各方言では、2 拍目が撥音の場合に松江方言のような(1b)のパターンでなく、3 拍目からピッチが上昇する(1c)のパターン (e.g. kon[njaku「蒟蒻」) が見られるという。

2.2 ピッチ上昇位置と形態音韻交替

出雲諸方言では、先の大原(1937)が指摘する kon[njaku] のようなものとは別に、to:[ko]「虜」や kan[na:]「雷」など(1)の例外に見えるようなものが広く見られる。このことも、既に廣戸・大原(1953)や上野(1981, 2016)によって指摘されている。また、大原(1937)が松江方言で見られるとした「ヤン[ト(止むと)]」「トン[ト(飛ぶと)]」も、これに類するものである。

上野(1981, 2016)が述べるように、これらのピッチ上昇位置は、それぞれ/toriko/、/kaminari/という基底形の分節音環境にもとづいて決まっていると考えれば説明可能である。例えば、/toriko/の場合には「rの隠在化」(友定 2008: 6)と呼ばれる形態音韻交替がかかわる。友定(2008: 25)などが指摘するように saru ~ sa:「猿」、torikago ~ to:kago「鳥籠」の如く、出雲諸方言の多くで/Vru/と/Vri/はどちらも/VV/[V:]と交替する。ただし、仁多方言では V が/i[i ~ i], u, e/の場合に、他の出雲諸方言と異なる交替を示す(以下の(2)を参照。特に(2c-f)に注意)。

(2) 仁多方言における r の隠在化 ("→"の前後は音素形を示す)

- | | | | |
|-----|------------|----------|--|
| (a) | (C)ar{i/u} | → (C)aa | ex. tonari ~ tona:「隣」、saru ~ sa:「猿」 |
| (b) | (C)or{i/u} | → (C)oo | ex. torikago ~ to:kago「鳥籠」、oru ~ o:「居る」 |
| (c) | (C)ir{i/u} | → (C)jaa | ex. iru ~ ja:「炒る」、kiri ~ kja:「霧」、kiru ~ kja:「着る」 |
| (d) | Cir{i/u} | → Caa | ex. tsiri ~ tsa:「釣り」、tsiru ~ tsa:「釣る／鶴／散る」 |
| (e) | Cur{i/u} | → Cwaa | ex. kuri ~ kwa:「栗」、kuru ~ kwa:「来る」 |
| (f) | (C)er{i/u} | → (C)jae | ex. eri ~ jae「襟」、akeru ~ akjae「開ける」 |

松江市方言や出雲市方言について上野(1981: 119; 2016: 28)が述べているように、/r/を含む形式(上記(2)の"→"の左側の形式)と含まない形式(同じく右側の形式)とは、話者の中で結びついているものと考えられる。ここでは、上野(1981: 119)の考えに従い、/r/を含む形式を基底形とした上で、2つの形式を「場面に応じて使い分けられている」併用形と考えておく。

このように考えた時、to:[ko]「虜」において、2拍めが特殊拍 M(この場合は長母音の後半部)であるにもかかわらず、1拍めからではなく3拍めからピッチが上昇するパターンとなるのは、その基底形/toriko/が○NW という分節音環境を持っており、その基底形における分節音環境に従って、上昇位置が決まったと考えれば説明可能である。kan[na:]「雷」の場合も/kaminari/を基底形とすれば同様に説明可能である(上野 1981, 2016. また、大原 1937: 40-41 も参照)。

2.3 歴史的な観点から

上野(2009)は、(1)のような関係が見られることについて、歴史的な観点から説明する。

上野が例にとるのは、松江市方言である。上野は、全ての形式がもともとは1拍目から上昇するパターン*[○○○(1bに相当)]であったとし、そこからピッチ上昇の遅れが起こったことによって、(1a-c)のようなピッチ上昇位置と分節音の関係が成立したと見る。この変化は条件変化であり、主には2拍めと3拍めの分節音環境、特に母音の広狭によって変化が条件づけられている。

上野は、2 段階の変化を考えており、まず*[○○○ > *○[○○という変化が起こったとする。この際に 2 拍目が M (促音を除く特殊拍) の場合にはその変化が阻止された。一方、2 拍目が Q (促音拍) か △ (無声化母音を含む拍) の場合には 3 拍めまでピッチ上昇位置が移動した。

その後、2 拍めが N (狭母音拍) で 3 拍めが W (非狭母音拍) であるものでは、さらにピッチ上昇の遅れが起こり、結果として 2 拍目が Q (促音拍) か △ (無声化母音を含む拍) であるものと同じく 3 拍めからピッチが上昇する (1c) のパターンへと変化した。

(3) 松江市方言におけるピッチ上昇位置の遅れ(上野 2009 による)

- (a) i) *[○W○ > ○[W○ = ○[W○
- ii) *[○NN > ○[NN = ○[NN
- iii) *[○NM > ○[NM = ○[NM
- (b) *[○M○ = [○M○ = [○M○
- (c) i) *[○NW > *○[NW > ○N[W
- ii) *[○Q○ > ○Q[○ = ○Q[○
- iii) *[○△○ > ○△[○ = ○△[○

上記で示した上野 (2009) の考えは、(1) に示したピッチ上昇位置と分節音に関する「共時音声学的不合理的な形」を通時的に説明したものと捉えられる (上野 2009: 81)。

2.4 先行研究のまとめ

(1) で示した出雲諸方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係については、大原 (1937) 以来、認識をされてきた (2.1)。ただし、その地理的変異については、大原が指摘したものの、従来あまり注意を払われてこなかった。これに対して、to:[ko「虜」や kan[na:「雷」のようなものについての指摘も古くからあり、これらについては形態音韻交替における基底形の分節音環境によってピッチ上昇位置が決まっているとする説明が行われてきた (2.2)。また、上野 (2009) によって、出雲諸方言における (1) のようなピッチ上昇位置と分節音の関係に関する通時的説明が与えられている (2.3)。ただ、大原の指摘したその地理的変異については、ここでも等閑視されてきたようである。

以下 3 節では、これらの先行研究の記述や問題点を踏まえて、まず発表者の調査結果にもとづき現代仁多方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係を整理する。その上で、それと先行研究 (大原 1937) の記述を比較し、仁多方言で起こったと考えられるピッチ上昇位置と分節音の関係の変化とその結果生じた変異について考察した結果を述べる。

3 現代仁多方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係およびその変化

以下で示すデータは、旧仁多町域出身の男性 (S26 生) にご協力いただいて得たものである。同年代の他 1 名の方 (男性) に協力を得て行った調査でもおよそ同じ結果が得られているが、個人差についての詳細な検討はまだである。なお、調査した語には和語・漢語・外来語を含んでいる。

3.1 現代仁多方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係

現代仁多方言では、(4)に示すようなピッチ上昇位置と分節音の関係が認められる。ここでは長母音の後半部を R、撥音を n、二重母音の第二要素を J として表す。

(4) 現代仁多方言における語単独発話でのピッチ上昇位置と分節音の関係

- | | |
|---------------------------------|----------|
| (a) ○[W○、○[NN、○[NM | 2 拍めから上昇 |
| (b) [○R○、[○noと[○Joの一部 | 1 拍めから上昇 |
| (c) ○N[W、○Q[○、○△[○、○n[○と○J[○の多数 | 3 拍めから上昇 |

出雲諸方言におけるピッチ上昇位置と分節音の関係として従来知られていた(1)と異なるのは、2 拍めが撥音 n や二重母音の第二要素 J である場合に、3 拍めからピッチ上昇が見られるパターン(1c)が広く認められることである。このうち 2 拍めが n の場合については、大原(1937)に既に記述がある。ただし、筆者の調査では 2 拍めが n である語(○no)の全てで 3 拍めからピッチの上昇する(4c)のパターンが認められるわけではない点が異なる。また、全ての語で(4c)のパターンが認められないのは 2 拍めが J の語(○Jo)についても同様である。しかも○noでも○Joでも、3 拍めから上昇するパターンが認められた語は、原則 1 拍めから上昇するパターンも認められる。

○noの語(96 語)と○Joの語(44 語)において、どういった場合に 1 拍めから上昇するパターンしか認められず([○○○～^x○○[○)、どういった場合に 3 拍めから上昇するパターンも認められるのか([○○○～○○[○)、それらの 3 拍めの母音の広狭との関係を分析した(表 1)。分析の結果、○Joの語の場合(ex. aida「間」)、3 拍めの母音が非狭母音 W であれば 3 拍めから上昇するパターンが認められるが、3 拍めの母音が狭母音 N であると 1 拍めから上昇するパターンしか認められないという傾向が見られた。対して、○noの場合(ex. kanna「鉋」)にはそのような傾向が見られない。

表 1:2 拍めが n あるいは J の語におけるピッチ上昇位置と 3 拍めの母音の広狭の関係

	○no			○Jo		
	○nN	○nW	3 拍めなし	○JN	○JW	3 拍めなし
[○○○～ ^x ○○[○	8	23	0	11	5	1
[○○○～○○[○	17	44	4	1	23	3

このように、現代仁多方言では、大原(1937)の約 90 年前の記述と異なる、ピッチ上昇位置と分節音の関係が認められる。次節では、そのことについて歴史的観点から考察した結果を述べる。

3.2 仁多方言におけるピッチの上昇位置と分節音の関係の変化

大原(1937)の記述によれば、少なくとも約 90 年前の仁多方言では、2 拍めが二重母音の第 2 要素 J である語(○Jo)では、1 拍めから上昇する[○Joというパターンが一般的であったと推測される。つまり、大原(1937)の記述以降、現在に至る 90 年の間に○Joの語の一部で、*[○Jo > ○J[○というピッチ上昇位置の変化(上昇の遅れ)が起きたと考えられる。

重要であるのは、この*[$\circ$ J $\circ$ > $\circ$ J] $\circ$ という変化は、3 拍めの母音の広狭によって遅速があったと考えられることである。表 1 から示唆されるのは、3 拍めの母音が非狭母音 W である場合に変化が起きやすく、早く変化が進んだ一方で、3 拍めの母音が狭母音 N である場合には変化が起きにくく、変化のスピードも緩やかであった（あるいは変化が阻止された）ということである。

このように後続の母音の広狭によってアクセント変化に差が生じるのは、(3) で示したピッチ上昇位置の変化（上野 2009）や、出雲地域全体における 2 拍名詞 4 類と 5 類のアクセント型の変異やそこから推定される変化（上野 2016、平子 2021）など、出雲地域諸方言におけるアクセント変化の中で広く認められるものである。表 1 で示した 3 拍めの母音の広狭によるピッチ上昇位置の分布の違いは、その変化における差を反映するものとして捉えられる。

また、*[$\circ$ J $\circ$ > $\circ$ J] $\circ$ という変化（上昇の遅れ）が起こったことについては、仁多方言でかつて規則的だった二重母音の融合現象が見られなくなったことが一つの背景として考えられる。

廣戸（1950）によれば、当時の仁多方言で共通語の二重母音/ai, oi/や/ui/に対応するものは規則的に長母音[e:] /ee/や[i:] /ii/で実現していたという。しかし、現代仁多方言では、/akai/[ake:]「赤い」、/kaita/[ke:ta]「書いた」など、一部の形容詞や動詞の活用形で融合現象が認められる以外、共通語の二重母音/ai, oi/や/ui/は、それに対応する母音連続[ai]などとして（融合せずに）実現する。

これは、外来語の導入や共通語あるいは周辺方言の影響によるものと考えられるが、その結果として[ai]などの母音連続が多く現れることとなった。その際、これら母音連続の 2 つめの母音（事実上/i/のみ）は、二重母音の第 2 要素としてではなく、頭子音を持たない狭母音拍として再解釈されるようになったと考えられる。結果として、/i/単独の拍、つまり、元の J は、頭子音を持つ狭母音拍 N と同等の扱いを受け、特に $\circ$ JW という分節音環境にある語で、*[$\circ$ NW > $\circ$ N]W と同様、*[$\circ$ JW > $\circ$ J]W という変化を被ったのである（3c-i を参照）。

一方、2 拍めが撥音 n である場合には、そもそも約 90 年前の大原（1937）の記述でも既に 3 拍めからピッチが上昇するパターンが認められている。まず問うべきは、出雲地域諸方言一般に(3)のようなピッチ上昇位置の遅れが生じたとして、仁多方言などで見られる $\circ$ n $\circ$ というパターンが、どのように生じたのかということである。筆者は、仁多方言などで撥音拍 n が子音単独からなる拍であるという共通性を背景に促音拍 q と同様の扱いを受けたと考える。そのために（3c-ii）*[$\circ$ q $\circ$ > $\circ$ q] $\circ$ という変化が起こったのに合わせて、*[$\circ$ n $\circ$ > $\circ$ n] $\circ$ という変化も生じたのである。

この仮定が正しいとして、次に考えるべきは 2 拍めが n のときに 1 拍めからピッチが上昇する [$\circ$ n $\circ$ というパターンしか認められない語があることについてである。つまり、*[$\circ$ n $\circ$ > $\circ$ n] $\circ$ という変化が、大原の記述より前の時代の仁多方言で起こったとして、なぜ現在の仁多方言で [$\circ$ n $\circ$ というパターンしか認められないものが存在するのかという問題である。

筆者は、2 拍めが n のときに 1 拍めからピッチが上昇するパターンは、借用によって共通語や近隣方言からもたらされたもので、1 拍めから上昇するパターンしか認められないか、それとも 3 拍めからピッチが上昇するパターンも認められるかは、様々な言語内外の要因によって決まっていると考える。筆者の調査では hon[sogo]「小さい可愛い子」のような方言固有の語の場合、3 拍めから上

昇するパターンしか認められないか、そのパターンの方が一般的だという回答が得られた。一方で、1 拍めから上昇するパターンしか認められない語の多くが外来語である。また、一部の語についてのみだが、3 拍めから上昇するパターンが認められるか否かには個人差が見られる。さらに、たとえば ringo「林檎」という語について、それを 1 拍めからピッチが上昇する[ringo というパターンで発話する場合には、ともに使う動詞として tabe-ru という形式が選択され、3 拍めからピッチが上昇する rin[go というパターンで発話するときには ku-u という形式が選択されたということもあった。

以上の諸事実は、語種や語の馴染み度などが 3 拍めから上昇するパターンが認められるか否かに影響していること、1 拍めから上昇するパターンと 3 拍めから上昇するパターンとがともに許容される場合に、それらがスタイルなどによって使い分けられていることを示唆する。

4. おわりに

3.2 節後半で述べたような、ピッチ上昇位置が異なる 2 つの形式の使い分けに言語外の要因が関係する現象は、2 拍めが J である場合にも認められる。2 拍めが J の場合、1 拍めから上昇するパターンの方が伝統的な形式であると考えられる。ただ、それが共通語や東京方言および周辺方言の形式と同様であるためか、話者には改まった言い方だと認識されていて、むしろ 3 拍めからピッチが上昇する新しいパターンの方が「感情を込めた」あるいは「古い」言い方だとされる。

まとめれば、現代仁多方言では、方言内部におけるアクセント変化と共通語などからの影響の結果、ピッチ上昇位置に関する知られていなかった変異が生じ、それが主に言語外の要因によって選択され、併用される状況が生まれたと言える。現代仁多方言におけるこの変化は、アクセントがスタイルなどに関わる新たな機能を得ていく過程として捉えられそうである。

ただ、残された課題は多い。今後、仁多方言を含めた出雲諸方言全般における、ピッチ上昇位置と分節音の関係に関する、より広範かつ詳細な調査研究が必要である。

参考文献一覧

上野善道 (1981) 「松江市方言のアクセント：付属語を中心に」『金沢大学日本海域研究所報告』13: 109-136. / 上野善道 (2009) 「通時的にしか説明できない共時アクセント現象：句頭の上昇と語音との関係」『月刊言語』(特集：ことばの変化を捉える) 38/2: 74-81. / 上野善道 (2016) 「出雲方言アクセント調査報告」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』23-67. / 大原英嗣 (1937) 「アクセント付き方言文例(二)」『方言』7/3: 29-52. / 友定賢治 (2008) 『日本の言葉シリーズ 32 島根県のことば』明治書院. / 平子達也 (2021) 「出雲方言アクセントの分布と歴史：2 拍名詞 4 類と 5 類のアクセントをめぐる」筑紫日本語研究会(編)『筑紫語学論叢Ⅲ：日本語の構造と変化』100-135. 風間書房. / 廣戸惇 (1950) 『山陰方言の研究』島根県立教育研修所. / 廣戸惇・大原孝道 (1953) 『山陰地方のアクセント』報光社.

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費 JP24K00068、JP24K00070 の助成を受けたものです。

中世における呉音・漢音の交替による漢語の語形変化

おおしま ひでゆき
大島 英之（早稲田大学）

1. 問題の所在

日本語の歴史において、漢語（字音語）の語形変化は、大勢としては呉音から漢音に交替するという流れがあったとされる。この傾向については、『易林本節用集』を出発点として近世以降の辞書資料における漢語の語形変化を分析した佐藤（1962）において、呉音→漢音の変化 80 例に対して、漢音→呉音の変化は 28 例に過ぎないことが報告されており、また明治・大正期についても詳細な調査・分析が行われている（飛田 1968 ほか）。しかし、中世においても同様の傾向が認められるのかについては、十分に確かめられてこなかったように思われる。

発表者は、大島（2022）において、呉音と漢音の対立を有する漢字同士で構成される二字熟語に限定して、三卷本『色葉字類抄』と『日葡辞書』とに共通する漢語の語形を対照し、語形変化例の字音体系を分析した。その結果を改めて整理すると、呉音→漢音が 22 語、漢音→呉音が 26 語であり、特に呉音→漢音が優勢という結果は確認できなかった。ただ、大島（2022）では対象語が限定されていたため、本発表では『色葉字類抄』と『日葡辞書』に収録される漢語すべてを対象として、この問題を検証してみたい。

2. 調査方法

『色葉字類抄』については、前田本を主に用い、欠落箇所（中巻と下巻の一部）は黒川本で補う方針を採った。ただし、地名などの固有名詞を含む、国郡部・姓氏部・名字部所収語彙は除いた。なお、「平題箭^{ヘイテイセン} イタツキ」〔前田上 8 ウ 7・イ雑物〕¹などの右傍に記入された仮名の字音については、日本語の語彙として溶け込んだものではなく掲出字一字一字の字面に即して注されているという峰岸（1999）の指摘を踏まえ、分析の対象外とした²。漢語データの作成は、「資料横断的漢字音・漢語音データベース（DHSJR）」2024 年版³で公開されている tsv データ「30-017-01_IRS.tsv」に対して、①語形が示されない漢語の追加⁴、②篇名・部名の追加、③「単字_見出し」「漢語_見出し」列の字体の正規化⁵、④右傍に記入された字音の行の削除といった処理を行い、これに発表者が作成した黒川本の

¹ 『色葉字類抄』からの引用では、声点類は基本的に省略し、仮名語形のみを示す。用例の所在は、〔(前田|黒川)(上|中|下) 丁数(オ|ウ) 行数・篇名 部名〕で示す。

² 右傍の字音の多くは漢音が占めると考えられることから、これらを含めると、検証結果を歪めかねないという懸念もある。

³ <https://github.com/daikaku/DHSJR>（2025 年 9 月 30 日最終閲覧）

⁴ 所属篇から語頭の一文字がわかるため、一字目のみ呉音・漢音の判定が可能であることがある。例えば、「省試」〔前田下 82 ウ 2・シ暈字〕の「省」は、呉音シャウ／漢音セイであるため、呉音であることが確定できる。

⁵ 原則として『三省堂五十音引き漢和辞典 第二版』において異体字とされている字は、その親字の字体に統合した。

漢字音データと結合することで作成した（以下「字類抄漢語データ」と称す）。当該データの総行数は 11367 行、総語数（「資料内漢語番号」の異なり数）は 6312 語となった。

『日葡辞書』については、発表者が中心的に作成し、DHSJR 2024 年版で公開している tsv データ「50-041-01_HNL.tsv」を使用した（以下「日葡漢語データ」と称す）。本データベースの漢字表記は、『邦訳日葡辞書』（1980、岩波書店）に拠っており、「イッケウ（一興・逸興）」〔329r〕⁶のように複数表記が示される語は、表記ごとに別の行を設けている。当該データの総行数は 29840 行、総語数は 15032 語である。

ここで、それぞれのデータにおける呉音と漢音の例数を表 1 に掲げる。表 1 より、『色葉字類抄』の漢語は、『日葡辞書』に比して、呉音率が低く漢音率が高いことがわかる。なお、本発表における呉音・漢音の判定は、古文献に記入されている実例を重んじる立場で判断された『三省堂五十音漢和辞典 第二版』に拠っている⁷。

表 1 『色葉字類抄』『日葡辞書』における呉音・漢音の内訳

	色葉字類抄漢語データ	日葡辞書漢語データ
呉音	510 字種 1539 例	587 字種 5730 例
漢音	523 字種 1690 例	487 字種 4414 例
呉音率	48.6%	56.5%

続いて、各資料において、一字漢語（サ変動詞を含む）を除外し、二字以上の漢語に限定した上で、語形や意味の差異を捨象した漢字表記の異なり数を求めたところ、「字類抄漢語データ」では 5630 例、「日葡漢語データ」では 13455 例となり、両資料における共通表記例が 1892 例得られた。この 1892 例の中から、呉音・漢音の交替に関わる語形変化のみを抽出した。

語形変化のあり方は、大島（2022）と同様、《単純変化》《分化》《統合》の 3 パターンで整理する。それぞれの定義は、表 2 に示す通りである。

表 2 語形変化の三分類

分類名	定義	具体例
《単純変化》	『日葡辞書』と『色葉字類抄』それぞれ異なる語形のみがみられる	中興（チウキヨウ→チュウコウ）
《分化》	『日葡辞書』に、『色葉字類抄』と同じ語形の他に、異なる語形もみられる	損亡（ソンハウ→ソンバウ・ソンマウ）
《統合》	『色葉字類抄』にあった複数語形のうち、一形だけが『日葡辞書』に残る	発起（ハツキ・ホツキ→ホッキ）

⁶ 『日葡辞書』からの引用では、語形は『邦訳日葡辞書』の仮名転写法（ただし、-t は「っ」で代用）に従って示し、推定漢字表記を括弧内に示す。用例の所在は、『邦訳日葡辞書』のページ数と左右（l|r）で示す。

⁷ ただし、判断の対象とする漢字は、「大」（呉音ダイ／漢音タイ）のような清濁のみで対立する字と、「周」のよう呉音シュ／漢音シウで対立する字を除いた 1328 字種に限定している。

3. 結果

結果は以下に示す通りで、呉音から漢音へ変化した語としては 66 語、漢音から呉音に変化したのは 53 語が得られた。なお、変化前の「(エー)」等は、『色葉字類抄』において仮名による語形は示されないがエ篇に所属する語であることを示す。

○呉音→漢音 (66 語)

交易: ケウヤク → ケウエキ	光明朱: クワウミヤウス → クワウミヤウシユ
損益: ソンヤク → ソンエキ	柔弱: ニウシヤク → ジュウジャク
遠近: オンコン・(エー) → エンキン	有職: イウシヨク・ウシキ → ユウシヨク
音声: (オー) → インシャウ・インセイ・ヨンジャウ	人体: ニンタイ → ジンタイ・ニンタイ
上下: シヤウケ → シヤウカ・ジャウゲ	夫人: フニン → フジン・ブニン
家業: (ケー) → カギョウ	聖人: シヤウニン・(セー) → セイジン
勳賞: クワンシヤウ → クワンシヤウ・クワンジャウ・ケジャウ・ケンジャウ	星宿: (シー) → シヤウシュク・セイシュク
往還: ワウクエン・ワウクワン → ワウクワン	熾盛: シハヤウ → シセイ
眼目: (ケー) → ガンモク	石塔: (シー) → セキタウ
邪氣: シヤケ → ジャキ	嫡嫡: チヤクハハ → チヤクチャク・テキテキ
飢渴: ケカツ → キカッ・ケカチ	日没: ニチモツ → ジツボツ
飢寒: (ケー)・キカン → キカン	先日: センニチ → センジツ
飢饉: キハン・ケコン → キキン	入学: ニウカク → ジュガク
久修練行: (ケー) → キョウシュレンギヤウ	發動: ホツトウ → ハツドウ
牛頭: コツ → ギョウトウ・ゴツ	微細: ミサイ → ビサイ・ミサイ
安居: アンコ → アンキョ・アンコ	微少: (ミ) → ビシヨウ
虚言: (コ) → キョゴン・ケヨゴン	文書: (モ) → ブンジョ・モンジョ
虚実: (コ) → キョジツ	多聞: タモン → タブン
恐怖: クフ・クヨウフ → キョウフ・ケウフ	甲兵: カウヒヤウ → カツペイ
胸臆: クヲク → ケウヲク	輔佐: (フ) → フサ・ホサ
曲水: コクスイ → キョクスイ	無礼: ムライ → プレイ
親近: シンコン → シンキン・シンゴン	無道: ムタウ → ブタウ
半月: ハンクワツ → ハンゲツ	名文: (ミ) → メイモン
年月: ネンクワツ → ネンゲツ	聰明: ソウミヤウ → ソウメイ
来月: ライクワツ → ライグワツ・ライゲツ	明朝: (ミ) → ミヤウチョウ・メイチョウ・メヤウチョウ
御製: コセイ → ギョセイ	遊覧: イウラン・ユラン → ユラン
公私: クシ → コウシ	管領: クワンリヤウ → クワンリヤウ・クワンレイ
口舌: クセツ → クゼツ・コウゼツ	令旨: リヤウシ → レイシ
孝養: ケウヤウ → カウヤウ・キョウヤウ・ケウヤウ	靈驗: リヤウケム・レイケン → レイゲン
不孝: フケウ → フカウ・フケウ	漏失: ロシツ → ロウシツ・ロシツ
籌策: チウシヤク → チュウサク	屏風: ヒヤウフ俗 → ビヤウブ・ヘイフ
寂寥: セキレウ・(シー) → セキリヤウ	琥珀: クハク → コハク
強弱: カウニヤク → コウジャク	呪詛: シュシヨ → シュソ

○漢音→呉音 (53 語)

布衣: <u>ホ</u> イ → <u>フエ</u> ・ホイ	往昔: ワウシヤク・ <u>セ</u> キ → ワウ <u>ジャ</u> ク
更衣: カウイ → カウ <u>エ</u>	頭巾: <u>ト</u> キム・ <u>ト</u> キン → <u>ヅ</u> キン・トキン
烏藥: <u>ヲ</u> ヤク → <u>ウ</u> ヤク	竜頭: <u>リョウ</u> トウ・ <u>レイ</u> トウ → <u>リュウ</u> ヅ
汚穢: (<u>オ</u> ー) → <u>ワ</u> エ	白鹿: <u>ハク</u> ロク → <u>ビヤク</u> ロク
中央: チウヤウ → チュウ <u>ワ</u> ウ	發起: <u>ハツ</u> キ・ホツキ → <u>ホツ</u> キ
應鐘: <u>キョウ</u> シヨウ → <u>ワウ</u> シヨウ	百鍊: <u>ハク</u> レン → <u>ヒヤク</u> レン
黃鐘: (<u>ク</u> ー) → <u>ワウ</u> シキ	普天: <u>ホ</u> テン → <u>フ</u> テン
黃金: (<u>ク</u> ー) → <u>ワウ</u> ゴン	逸物: イチ <u>フツ</u> ・イチモツ → イチ <u>モつ</u> ・イツ <u>モつ</u>
下愚: <u>カク</u> → カグ・ <u>グ</u> グ	宝物: ホウ <u>フツ</u> → ホウ <u>モつ</u>
変化: ハ(へ)ン <u>クワ</u> → ヘンクワ・ヘン <u>グ</u>	貝母: ハイ <u>ホ</u> → パイ <u>モ</u>
華鬘: <u>クワ</u> マン → <u>ケ</u> マン	損亡: ソン <u>ハウ</u> → ソンバウ・ソン <u>マウ</u>
解脱: <u>カイ</u> タツ → <u>ゲ</u> ダツ	大望: タイ <u>ハウ</u> → タイバウ・タイ <u>マウ</u>
隔心: <u>カク</u> シム → <u>キヤク</u> シン	琢磨: タク <u>ハ</u> → タク <u>マ</u>
中興: チウ <u>キョウ</u> → チュウ <u>コウ</u>	白麻: ハク <u>ハ</u> → ハク <u>マ</u>
寒苦: カン <u>コ</u> ・カンク → カン <u>ク</u>	末葉: <u>ハツ</u> エフ → バツヨウ・ <u>マつ</u> ヨウ
形骸: <u>ケイ</u> カイ → <u>キヤウ</u> ガイ・ <u>ギョ</u> ガイ	末座: <u>ハツ</u> サ → バツザ・ <u>マつ</u> ザ
林檎: リム <u>キ</u> ・リウコウ → リン <u>ゴ</u>	毛挙: <u>ホウ</u> キヨ → <u>モウ</u> キヨ
行歩: カウホ → <u>ギヤウ</u> ブ	鷺毛: カ <u>ホウ</u> → ガ <u>モウ</u>
重職: チョウシヨク → <u>ヂュウ</u> シヨク	勇者: ヨウシヤ → <u>ユウ</u> シヤ
尊重: ソン <u>テウ</u> → ソン <u>ヂュウ</u>	勇士: ヨウシ → <u>ユウ</u> シ・ <u>ユウ</u> ジ
初秋: <u>ソ</u> シウ → <u>ショ</u> シユウ	猶預: イウヨ → <u>ユ</u> ヨ
初冬: <u>ソ</u> トウ → <u>ショ</u> トウ	良藥: <u>リヤウ</u> ヤク → <u>ラウ</u> ヤク
一人: イツ <u>シン</u> → イチ <u>ニン</u>	迷惑: ヘイ <u>コク</u> → メイ <u>ワク</u>
凡人: <u>ハン</u> シム → ボン <u>ニン</u>	鳳凰: ホウワウ・ホウ <u>クワウ</u> → ホウ <u>ワウ</u>
累世: ルイ <u>セイ</u> → ルイ <u>セ</u>	蝦蟇: カ <u>ハ</u> → カ <u>マ</u>
動靜: トウ <u>セイ</u> → ドウ <u>ジャウ</u>	陵轢: レウ <u>レキ</u> → レウ <u>リヤク</u>
悋惜: リン <u>セキ</u> → リン <u>ジャク</u>	

表 1 でみたように、『色葉字類抄』は『日葡辞書』よりも呉音率が低く、漢音率が高い。それにも関わらず、「呉音→漢音」の方が「漢音→呉音」よりも多いという結果になったことから、近世以降と比較すればかなり緩やかなものではあるが、漢音伸長（漸増？）の傾向を認めてよいと思われる。

4. 考察

3 節の結果を、変化が起こった単字に注目して整理すると、次頁表 3 のようになる。

《単純変化》に限定すると、「漢音→呉音」(35 字) が「呉音→漢音」(32 字) を少し上回っているが、《分化》では、「呉音→漢音」(21 字) が「漢音→呉音」(8 字) を大きく上回ることが見て取れる。すなわち、『日葡辞書』において既存の語形に対して新出語形が表れた場合、呉音よりも漢音の方が用いられやすいということになる。また、《統合》で

も、「呉音→漢音」(13 字)が「漢音→呉音」(7 字)を上回っており、呉音・漢音両方を用いた読み方が併存する場合、漢音の側が生き残りやすいということになる。

表 3 語形変化が起こった漢字

	呉音→漢音	漢音→呉音
《単純変化》	易益家眼気久虚胸曲月御公策弱朱 柔盛石日入発微聞兵没無名明令礼 琥詛	衣烏汚央応黄華解隔興形行重初人 世静惜頭白百普物歩母凡磨麻毛勇 猶竜良墓轢
《分化》	音下飢牛居近月口孝人星嫡頭微 文輔明領漏屏	衣下化頭布亡望末
《統合》	遠還飢恐近寂職人聖有遊靈饅	苦檣昔発物惑風

4-1. 《単純変化》《統合》と「漢字音の一元化」

佐藤(1962:50)は、語形変化の方向性として、「一字について、漢音か呉音か、いずれか一方に固定しようとする傾向のみられる事実」を指摘する。この傾向については、近年、屋名池(2005)による「漢字音の一元化」という枠組みのもと、歴史的な実態の解明が行われつつある(石山 2018 ほか)。

いま既存語形の消失が起こった《単純変化》と《統合》について、変化が起こった字の『日葡辞書』における呉音と漢音の用例数を調査し分類してみると、表 4 の結果を得る。「／」の前が《単純変化》、後が《統合》の例である。

表 4 《単純変化》と《統合》が起こった漢字における『日葡辞書』での字音の状況

呉音→漢音	漢音→呉音
【漢音のみ】易胸策弱朱琥詛／恐職饅	【呉音のみ】烏汚央解初惜普凡磨麻毛勇墓轢／苦檣昔惑風
【漢音 2/3 以上】曲眼虚石没／遠飢近靈	【呉音 2/3 以上】形行重世百良／
【その他】益家気久月御公柔盛日入発微聞 兵無名明令礼／還寂人聖有遊	【その他】衣央黄華隔興人静頭白物歩母猶 竜／発物

表 4 より、「漢音→呉音」の変化は、呉音への一元化の反映と目されるものが多い一方で、「呉音→漢音」の変化は、漢音への一元化のみで説明できる例ばかりではなく、呉音形も依然として使用されていたにも関わらず、漢音が選択されたという例も多いことがうかがえる。すなわち、漢音それ自体に、選好される性質が備わっていたと考えられる。

4-2. 《分化》と語義・位相の異なり

『日葡辞書』に複数語形が立項される《分化》では、それぞれ語形に応じて、意義が異なる場合も多い。以下に示す語は、語釈に差異が見られる。

飢渴(キカッ・ケカチ)、牛頭(ギュウトウ・ゴヅ)、孝養(カウヤウ・キョウヤウ・ケウヤウ)、夫人(フジン・ブニン)、嫡嫡(チャクチャク・テキテキ)、微細(ビサイ・ミサイ)、文書(ブンジョ・モンジョ)、管領(クワンリヤウ・クワンレイ)、布衣(フエ・ホイ)、変化(ヘンクワ・ヘンゲ)、頭巾(ヅキン・トキン)

この中には、漢音の方で仏教語的性格が希薄化しているものが見られる。例えば、「夫人」では、ブニンは「釈迦の国の王妃」、フジン「国王の妻」と説明されている。「変化」の語釈も、ヘンゲは化けること、ヘンクワは変わる・変えることを指している。

同義語でも、位相に関わる注記が見られる場合も多い。「勸賞」では、ケジャウの項目に、イゲレジャ（教会）ではクワンジャウが通行しているが本来の正しい形はケジャウとされているという旨の注記がある。「末座」（バツザ・マツザ）・「末葉」（バツヨウ・マツヨウ）では、漢音バツがまさる旨の、「口舌」（クゼツ・コウゼツ）では、呉音クがまさる旨の注記がある。この種の語形の規範を示す注記では、漢音形を指向する例の方が多くとされている（遠藤 1968）。また「人体」では、ニンタイは下（九州）の語であり、上ではジintaiと言うという注記がある。「屏風」では、ヘイフに「文書語」の注記がある。

位相注記もなく、特に明確な意味の差異が確認できない語に、「音声」「上下」「親近」「来月」「星宿」「輔佐」「明朝」「下愚」「損亡」「大望」がある。うち 7 例は、呉音→漢音の例であり、漢音選好の表れかと思われる。

4-3. 漢音漸増の背景

佐藤（1962）は、近世における漢音伸長の背景について、儒学の隆盛と民間における学問の普及によって、人々が呉音を離れ漢音に親しんでいったことを挙げる。中世における漢音漸増の背景には、日本中世における漢籍の普及の、直接ないし間接的な影響が想定できるのではないかとと思われる。

『日葡辞書』には、『太平記』・『平家物語』からの引用が数多くみられ、漢語の立項の有力な典拠となっていたと考えられる。これらの軍記物語は、現存写本数や関連芸能の存在から考えても、中世において幅広い享受が行われたことは疑いない。注目されるのは、中国故事の引例や漢籍に基づく表現を多く含んでおり、漢音の使用も目立つ点である。

「孝（呉音ケウ／漢音カウ）」や「益（呉音ヤク／漢音エキ）」などは、『日葡辞書』では、漢音の孝（カウ）・益（エキ）のみが、一字漢語として立項されている。いずれも

『論語』や『孝経』に現れる基本的な単語であるが、これらは『平家物語』・『太平記』にも用例があり、やはり漢音で読まれるようである。このような軍記文芸の流行が、中世における漢音の漸増の一要因を担ったのではないかと考える。

5. 参考文献

- 石山裕慈（2018）「漢字音の一元化」の歴史『国語と国文学』95(10)、pp.50-65.／遠藤潤一（1968）「日葡辞書における語意識の解釈」『國學院雑誌』69(4)、pp.65-78.／大島英之（2022）「中世における呉音漢音混読現象の展開―『色葉字類抄』と『日葡辞書』の漢語語形の比較を通じて―」『計量国語学』33(6)、pp.373-388.／佐藤喜代治（1962）「近世における漢語の語形変化」『文化』26(3)、pp.353-374.／飛田良文（1968）「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究』2、pp.375-391.／峰岸明（1999）「尊経閣文庫所蔵『色葉字類抄』三卷本 解説」『尊経閣善本影印叢刊 18 色葉字類抄一 三卷本』pp.1-16. 八木書店.／屋名池誠（2005）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」『築島裕博士傘寿記念国語学論集』pp.670-692. 汲古書院.

『金光明最勝王經音義』成立過程の再検討

—「仏典音義データベース」の構築と分析から—

李^り 乃琦^{ないき} (名古屋大学)

1 はじめに

『金光明最勝王經音義』は、『金光明最勝王經』の語彙について、発音（類音注・反切）、意義、和訓（万葉仮名・片仮名）などを施した音義書である。その本文の前後には、日本で2番目に古い「五十音図」をはじめ、「五音又様」「五音」、片仮名による「イロハ」などが付されており、国語史資料としても高く評価されてきた。

本書には承暦3年（1079）に書写された写本1冊が現存する。築島裕（1981）は、その撰者を「南都古宗（法相宗など）ないし真言宗系の学僧」と推測している。これまでも、川瀬（1955）、金田一（1957）、吉田（1958）、小松（1959）、馬淵（1959）、白藤（1977）、築島（1981）、西崎（1995）など、多くの研究が仮名遣いや音韻史の観点から積み重ねられてきた。

本発表では、『金光明最勝王經音義』の編纂過程を再検討するため、筆者が構築中の「仏典音義データベース」（Database of Ancient Buddhist Dictionary, 以下 DABD）を用い、本音義と7～13世紀に編纂された主要音義書との比較分析を行う。

2 「仏典音義データベース」

仏典音義とは、仏典から抽出された語彙の発音や意義を記録・解釈した文献であり、一種の辞典とみなすことができる。その基本構造は「見出し語」と「注釈」から成り、各資料に共通しているため、比較研究に適している。また、当時の仏典受容や言語の状況、文化的背景を忠実に反映する資料でもある。

筆者は現在、7～13世紀に編纂された仏典音義を用いて「仏典音義データベース」を構築している。具体的な取り組みは以下のとおりである。

- (1) 世界各地に所蔵される20種類の仏典音義写本を精査・翻刻し、データベースの基盤資料とする。これにより「単部音義検索」を実現する。
- (2) 一つの検索語で、各音義の見出し語と注釈を横断的に検索できる「横断検索」を開発する。
- (3) 見出し語を対応する原典と結びつけ、より立体的な解釈を可能にする。

(4) 見出し語が対応する原典のサンスクリット語・パーリ語を調査し、一つのサンスクリット語が各時代・地域でどのように翻訳されたのかを明示できるようにする。

基盤資料および進捗は、2025 年 9 月 30 日時点で次の表の通りである。

○完成 △進行中 ×未開始

	宗派 集団	書名	書誌情報	SAT 有無	翻刻入力 対応原典
1	衆経部	『一切経音義』	唐代・玄奘	/	○
2	華嚴部	『新訳華嚴経音義』	鎌倉時代・喜海	有	○
3	華嚴部	『新訳大方広仏花厳経音義』	唐代・慧苑	有	○
4	方等部	『浄土三部経音義』	鎌倉時代・信瑞	有	○
5	方等部	『金光明最勝王経音義』	平安時代・著者未詳	/	○
6	般若部	『大般若経音義』	奈良時代・信行	/	○
7	法華部	『妙法蓮華経釈文』	平安時代・仲算	有	○
8	律部	『四分律音義』	唐代・玄奘	/	○
9	秘密部	『金剛頂経一字頂輪王儀軌音義』	平安時代・空海	有	○
10	秘密部	『孔雀経単字』	鎌倉時代・著者未詳	/	○
11	法華部	『妙法蓮華経釈文』	平安時代・仲算	有	△
12	法華部	『法華経音訓』	室町時代・心空	/	△
13	印度論部	『俱舎論音義』	鎌倉時代・著者未詳	/	△
14	華嚴部	『新訳華嚴経音義私記』	奈良時代・著者未詳	/	△
15	華嚴部	『華嚴伝音義』	鎌倉時代・著者未詳	/	×
16	法華部	『法華経音義』	室町時代・著者未詳	/	×
17	印度論部	『成唯識論音義』	平安時代・明憲	/	×
18	秘密部	『孔雀経音義』	平安時代・観静	有	×
19	諸宗部	『摩訶止観難字音義』	1803 年写・心宝	/	×
20		敦煌・トルファン出土音義資料		/	×

注：「SAT 有無」の「有」は、SAT（大正新脩大蔵経のテキストデータベース <https://21dzk.1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）に漢文注はあるが、写本・版本の和訓・声点・濁点などが翻刻されていない。DABD 構築の際、念の為、SAT 中に翻刻があるものも、全て再翻刻した。

3 DABD に基づく『金光明最勝王經音義』の分析

3.1 巻目の構成

音義書は、基本的に対象經典の巻に従って構成され、利用者が經文を読み進めながら必要な語釈を確認できるようになっている。それゆえ、『金光明最勝王經音義』も經文に沿って十巻に分類し、見出し語を配列している。巻ごとの注解分布を分析すれば、難解と認識された箇所を特定でき、經典理解の史的様相を把握する手がかりとなる。ただし、經典本文と音義巻目との間に不一致が見られる。例えば以下の二例である。

音義巻第1：< 枉 > 往と（音）。末何留。与己佐末（上上上上）。

經文巻第2：無枉死者。於諸福田。（T0665_ 16. 0411a09）

音義巻第9：< 欽 > 金。ウヤマフ。（*朱筆補入）

經文巻第10：軍兵武勇衆所欽伏。常以正法。（T0665_ 16. 0451b02）

3.2 經文の順序

音義書の見出し語の配列は、基本的には大藏經に収録される經典本文における語の出現順に従う。しかし、必ずしも一貫しているわけではなく、底本の差異、編纂者による恣意的な調整、あるいは関連語を便宜的にまとめた結果など、複数の要因が考えられる。この順序の揺れは単なる不整合ではない。むしろ当時のテキスト状況を反映する痕跡とも考えられ、写本系統の復元や異本比較を行う上で重要な基礎資料となる。

具体例として、『金光明最勝王經音義』巻第1を取り上げる。同巻には計76項目の見出し語が立てられ、そのうち補入が4項目、判読不能が1項目存在するため、残りの71項目を分析対象とした。本来であれば、音義における項目の出現順（1～71）は、そのまま仏典本文における出現順とも一致するはずである。ところが実際に大藏經本文と照合すると、次のような配列の乱れが確認できる。

音義の見出し語の出現順：1～71

音義の見出し語の經典での出現順：1～6、8、12、13、9～11、14、15、7、20、21、16～19、22～51、55、56、52～54、57～63、65、66、64、67～70、94

下線を付した箇所は、本文との対応関係に齟齬が見られる部分である。このような配列の不一致は、編纂過程における参照本文の異同や、音義編者が理解の便宜を図って項目順を調整した可能性を示唆している。

3.3 見出し語の用字

『金光明最勝王經音義』には多数の用字差が見られる。異体字だけでなく、意味差を生じうる文字の選択も含まれており、当時の文字使用の柔軟性と翻訳語の不安定さが示されている。

用字の研究は、単なる字体比較にとどまらず、どの表記がどの時期・地域で好まれたのかを明らかにすることで、翻訳伝承の系統や写本の由来を追跡する手がかりを与える。その中には、いわゆる異体字の問題だけでなく、文字選択そのものが語義に差異をもたらす場合もある。筆者は用字の対照表を作成し、音義における文字使用の傾向を整理してきた。これにより、同一語に対する解釈がどのように累積・変容していったのかを具体的に明らかにすることが可能となる。

以下に、『金光明最勝王經音義』と『金光明最勝王經』（大正蔵）との間で確認できる異体字を、対応関係「A:B」の形式で示す。A（左辺）は音義における見出し語、B（右辺）は大正蔵本文における用字である。

【巻第一】瞽：瞽、噸：噸、博：專、策：策、蚘：蚘、搖：搖、蠅：蠅、醉：醉、鵠：鵠、船：船、柴：嘴、□イ□卅 倍心：億、【巻第二】□ヲ盖：猛、燄：焰、烟：煙、弊：蔽、暎：映、軀：軀、鞭：鞭、慄：慄、鎖：鎖、網：網、牢：牢、□イ□立安：佞、【巻第三】□一隶：秉、殄：殄、策：策、【巻第四】冠：冠、勤策：勤策、逆：逆、【巻第五】貌：貌、刹：刹、鋌：鋌、弈：奕、奕：軟、嘗：嘗、藂：叢、桴：桴、燄：焰、殄：殄、愈：愈、【巻第六】烈：列、殄：殄、罰：罰、讓：讓、燄：焰、磬：磬、衰：裔、駟：駟、側：測、牀：床、觀：觀、【巻第七】忙：忙、昏：昏、苟：苟、菴：菴、奕：軟、株：末、蚘：虻、蘭若：蘭若、茅：茅、𦵏：𦵏、得：得、【巻第八】𦵏：姦、𦵏：𦵏、利：利、醯：醯、饒：豐、旃：旃、【巻第九】勃：勃、獼：獼、據：據、【巻第十】□利今：黎、豺：豺、脉：脈、筋：筋

3. 4 注釈の構造

『金光明最勝王經音義』には、『金光明最勝王經』全 10 巻から計 880 語が選択され、注釈が施されている。調査の結果、判読不能の約 20 項目を除き、残りの約 760 項目を本稿の研究対象とする。

この 880 項目については、3 段階に分けて作成されたことが先行研究により指摘されている。築島（1981）は次のように述べている。「本文の内の随処に、朱書及び墨書による書入がある。この書入は本文とは別筆であり、その字体・書風を見ると、朱書が先で、墨書が後であるが、両者は同筆と考えて差し支えないと思われる。書写年代は、多分院政時代前半（12 世紀前半）頃と見てよいであろう。」

精査の結果、研究対象とする約 860 項目は、以下の三段階に分けられる。

(1) 初期編纂：452 項目。

(2) 朱筆による追加：77 項目を新たに補入し、さらに初期編纂の 8 項目に和訓を加えた。

（分布：第 1 巻 2 例、第 2 巻 4 例、第 3 巻 3 例、第 4 巻 20 例、第 5 巻 28 例、第 6 巻 5

例、第7巻0例、第8巻12例、第9巻2例、第10巻1例)

(3) 墨筆による追加：331項目を補入し、さらに初期編纂の6項目に和訓を加えた。

(分布：第1巻0例、第2巻1例、第3巻0例、第4巻9例、第5巻32例、第6巻117例、第7巻71例、第8巻100例、第9巻0例、第10巻1例)

以上から、朱筆の追加は第4・5・8巻に、墨筆の追加は第5・6・7・8巻に集中していることが確認される。

3.4.1 漢字音の音注

築島(1981)の指摘によれば、『金光明最勝王經音義』における音注の形式は大別して二種類に分けられる。第一は「擔 墮牟反」の如く「○○反」と記される形式であり、この中の「○○」の部分には万葉仮名が用いられる。第二は「駛 四音」の如く「○音」あるいは「○と」と記される形式であり、ここで示される「○」は、見出し語と同音を有する別の漢字によって表記されている。

初期編纂の452項目については、築島(1981)の指摘と概ね一致し、見出し語には原則として音注が付されている。実際、「○と」と記された例は336例に上る。しかしながら、朱筆および墨筆による追加部分においては、この傾向が必ずしも維持されていない。精査の結果、以下のような特徴が確認された。

(1) 朱筆による追加の計77項目：初期編纂と類似する漢字音注は2例(「俳 非と」「唾 多と」)。それ以外に「涙 ルイ六」「傷 シャウ六」「策 尺六」「訟 受六」「砂 シャ六」「珂 カ六」「欽 金六」「整 正六」「沃 ヲ六」「壤 生六」「肥 ヒ反」、計11例の新たな音注形式が見られる。

(2) 墨筆による追加の計331項目：初期編纂と類似する漢字音注は1例(「綜 宗六」)。それ以外に「桴 フ六」「潜 セム六」「諍 シャウ六」「盆 ホン六」「置 チ六」「版 ハン六」「蠱 故六」「幢 トウ六」「旗 キ六」「妹 マイ六」「戈 火六」「澁 澁 シフ六」「漱 シフ六 先豆反」「痛 ツウ六」「肥 ヒ六」「濃 ノウ六」「壤 生六」「踞 コ六」「繫 ケツ六」「炭 タン六」「蘇 ソ六」「寧 子イ六」「統 ツウ六」「擯 ヒン六」計24例の音注が確認できる。

3.4.2 和訓の特徴

先に述べた通り、朱筆による追加は巻第4・第5・第8に、墨筆による追加は巻第5・第6・第7・第8に集中している。したがって本節では、特に資料の集中的な分布が確認される巻第5および巻第8を研究対象とし、DABDならびにHDIC(平安時代漢字字書総合データベース)の検索結果に基づき、和訓の特徴を検討する。

諸音義および辞書との対照の結果、とりわけ観智院本類聚名義抄(以下、観智院本と

略す)との関連性が顕著であることが確認された。具体的には以下の通りである。

(1) 朱筆による追加

第5巻28例中20例が観智院本と一致(約71.4%)

第8巻12例中11例が一致(約91.7%)

(2) 墨筆による追加

第5巻32例中20例が観智院本と一致(約62.5%)

第8巻100例中47例が一致(47.0%)

この結果から、朱筆による追加は観智院本との一致率が高い。特に、巻第8において顕著であると言える。一方、墨筆による追加には、一致率が相対的に低下する傾向が見られる。

4 終わりに

本稿では、『金光明最勝王經音義』の成立過程を再検討するために、筆者が構築中の「仏典音義データベース」(DABD)を用い、同書の構造と特徴を分析した。その結果、以下の点が明らかになった。第一に、本書は初期編纂・朱筆による追加・墨筆による追加という三段階を経て形成されたことが、項目の分布や注記の形式から具体的に裏付けられた。第二に、初期編纂の段階では、反切や「〇と」による音注が体系的に施されていたが、朱筆・墨筆による追加部分ではその形式に変化が見られ、新たな漢字音注が導入されている。第三に、和訓については観智院本類聚名義抄との関連性が顕著であり、とりわけ朱筆の追加部分で高い一致率を示した。それに対して、墨筆の追加部分では一致率が相対的に低下する傾向が確認された。

今後は、DABDを活用して他の音義書や辞書との比較をさらに拡張し、和訓・音注・用字の変容をより広範な文献群の中に位置づけていくことが課題となる。

参考文献：平井秀文(1940)「承暦本『金光明最勝王經音義』に就いて」『国語国文』10 / 川瀬一馬(1986)『古辞書の研究 増訂』雄松堂出版(1955年初版、1986年再版) / 野間達子(1979)「金光明最勝王經音義の和訓に関する一考察」『広島大学国語史研究会会報』5 / 築島 裕(1981)「金光明最勝王經音義解題」『古辞書音義集成 〈第12巻〉金光明最勝王經音義』 / 遠藤和雄夫(1983)「『金光明最勝王經音義』の「五音又様」小考」『和洋女子大学紀要』24 / 鈴木豊(2016)「『金光明最勝王經音義』所載「以呂波」のアクセント」『アクセント史資料研究会』論集11 / 池田証壽(2024)『日本辞書史研究 草創と形成』汲古書院

謝辞：本研究は、科研費(課題番号 24K22442、25K16074) および田島毓堂語彙研究基金の助成を受けた成果の一部である。写本の翻刻・入力に際しては、名古屋大学博士後期課程の平野杏氏の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

『三宝絵』二伝本における MVR・ハ使用率の比較研究

小玉 花菜(こだま かな・北海道大学大学院 修士課程学生)

1 はじめに

1.1 研究の背景

文体の史的研究は、これまで主に語彙の和漢対立(いわゆる和文語／漢文訓読語という二元的語彙分類)に焦点が当てられ、多くの成果を積み上げてきた。そして古典日本語の文体研究は、表記体と不可分の関係で進められてきた。それは、特に和／漢の二元的語彙分類において顕著であった。一方、近年の研究においては、表記や語法といった、語彙の対立だけに依らない新たな言語特徴に注目する視点からの文体研究も行なわれている。その流れに乗っていくと、それらの新しく注目される言語特徴が、従来検討されてきた表記体といかに関連するかが新たな課題となるはずである。

そこで、表記体はいかなる言語特徴に影響を与えるものなのかを明らかにすることで、従来、語彙的な指標が中心とされてきた和漢対立に、新たな指標を提案することが可能になる。

1.2 研究の目的

本発表では、表記体が異なる伝本を有する平安時代の仏教説話集『三宝絵』を分析対象とする。具体的には、平仮名表記である東大寺切と、漢字片仮名交じり表記である観智院本を比較し、次の点を明らかにする。

○語彙の和漢対立以外を指標に分析すると、表記体と文体は相関関係を有するのか

同内容でかつ表記が異なる伝本を有する『三宝絵』の諸本を比較し、これを観察することで、見いだされた共通点・相違点が表記に由来するものなのか、それとも記述内容に由来するものなのかを明らかにする手がかりが得られること。また、特定の状況・場面での言語運用に着目した文体研究の意義を示すことにつながることを期待される。

2 『三宝絵』の概説と先行研究の整理

2.1 『三宝絵』の概説

『三宝絵』は、源為憲により、出家した尊子内親王に奉じるため著された平安時代中期成立の仏教説話集である。仏・法・僧の三宝を上・中・下の三巻に収め、草稿本は漢文乃至変体漢文、下書き本・清書本は平仮名で書かれたことが想定されている¹。現在、東大寺切(以下、ひらがな本)、観智院本(以下、カタカナ本)、変体漢文本の三種の伝本が存在するが、いずれの伝本も、平仮名書きの本を基にしていると推定されている。

¹ 管見の限り、池田(1935)による指摘が初出である。

『三宝絵』は文学的価値が高いとは必ずしもいえないが、成立が『日本霊異記』と『今昔物語集』の間に位置し、特に中巻の大部分は『日本霊異記』からの引用であることから、『日本霊異記』『今昔物語集』との連関から通史的に日本語書き言葉史を記述するのに有用である。

2.2 先行研究

ここではまず、『三宝絵』について、また古典日本語の文体研究の二点に関する先行研究を整理しておきたい。

2.2.1 『三宝絵』

○乾(2017)²

- 表記体の異なる三種の伝本を持つ『三宝絵』を取りあげ、表記体は文体に影響を与えるのかを検討
- ひらがな本とカタカナ本の間に和文語／漢文訓読語の対立(とく／ハヤク)があること、ひらがな本では漢語を訓読すること(「赤光」→「あかきひかり」)を指摘
- 『三宝絵』伝本間に、和文／漢文訓読文の文体対立があることを示す

2.2.2 表記体・文体

○蔦(2016)

- 『蒙求和歌』のひらがな本・カタカナ本の文体的差異について、「イハク…トイヘリ」の呼応(訓読文で使用)・ナムの使用状況(訓読文で用いられにくい)を検討
- ひらがな本は和文的な傾向、カタカナ本は漢文訓読的な傾向が強いことを示す
- 表記が言語に及ぼす影響に一定の方向性があることを指摘する

○大川(2023)³

- 文体を構成するさまざまな指標に基づいて分類を行うと、平安鎌倉時代の文学作品がどのような特徴を持つ文体類型に分けられるのかを検討
- 指標の一つとして、平安・鎌倉時代の文学作品における MVR を算出
- 結果から、漢文訓読文寄りの文体では MVR が相対的に低いことが読みとれる

これらの研究を総合すると、表記体によって MVR が異なる、つまり、和文では MVR が高くなり、漢文訓読文では MVR が低くなると予想される。したがって、『三宝絵』伝本について、次に掲げる仮説が立てられる。

○ひらがな本(東大寺切)では相対的に MVR が高くなり、カタカナ本(観智院本)・変体漢文本では相対的に MVR が低くなる

² 初出は、月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編(2010)。

³ 初出は、大川(2019)。

3 研究の方法

3.1 分析資料

本発表では、現存する『三宝絵』三伝本の内、次の二伝本を分析対象とする⁴。

- ひらがな本(東大寺切)
- カタカナ本(観智院本)

3.2 分析指標

本発表では、次に掲げる二つの指標を用いて分析を行なう。

- MVR(Modifier-Verb Ratio): 形容詞数、形容動詞数、副詞数、連体詞数の合計を動詞数で割り、100 を乗じた値((形容詞数+形容動詞数+副詞数+連体詞数)/動詞数×100(%))⁵。これは修飾語の多寡を示し、MVR の値が大きいほど「描写」的であり、値が小さいほど「動き」的と見做される⁶
- 提題助詞「ハ」の使用率: 文数に対する提題助詞「ハ」の使用率(ハの数/文数×100(%))。この指標は、文体における主題提示の傾向を示す

3.3 MVRと提題助詞「ハ」の算出方法

MVR・提題助詞「ハ」は、次に掲げる手続きによって算出した。

- MVR: 各伝本から文を抽出し、動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞をそれぞれカウントした。形態素解析には「Web 茶まめ」を用いた。解析結果を目視で確認し、必要なものには修正を施した。その後、算出式(前掲)に従ってMVRを求めた
- 提題助詞「ハ」の使用率: 各伝本の文数をカウントし、その中から提題助詞「ハ」の出現数を数えた。その後、算出式(前掲)に従って「ハ」の使用率を求めた

主題・対比主題の用例の一部を次に示す。なお、対比主題は一对で一つとしてカウントした。

【主題】

なむぢがもたるものは(、)これいをなり(。)(ひらがな本、中巻、十六・吉野山寺僧)
カウヲツ、メリシ袋ハ(、)失ヌレドモナヲカウバシ(。)(カタカナ本、下巻、序)

【対比主題】

⁴ 翻刻の凡例は次の通りである。

- ・テキストは、東大寺切・観智院本ともに『三宝絵集成：諸本対照』に拠った。
- ・仮名は適宜濁点を補って翻刻した。
- ・傍書きは底本を尊重し、ルビ機能を用いてこれを翻刻した。
- ・明らかな誤写は訂正した。
- ・句読点は、馬淵(1997)を参考に私に付し、()に入れてこれを示した。
- ・歌・漢文表記の箇所は分析対象外とした。
- ・提題助詞「ハ」には、波線を私に付した。

⁵ 以下、小数点以下については小数点第三を四捨五入した値で示す。

⁶ 樺島・寿岳(1965)

又會昌^{クワイシヤウノテイシ}天子おほく經論をやきしかば、(、)宮にうちのく卿^{キヤウ}はかうべをたれてなげき、かどのまへの官人はなむだをながしてかなしひき。(。)
 魚ノ子ハ多カレド、(、)魚ト成ルハ少シ。(。)⁷ (カタカナ本、上巻、十・雪山童子)

3.4 分析指標選出の根拠

MVR に着目することにより、「ハ」の使用率が動詞の使用と相関するのかを明らかにする。

発表者は「ハ」の使用率について、『源氏物語』(和文・作り物語)・『本朝文粹』(漢文訓読文・論説文)・『権記』『小右記』(変体漢文・古記録)を調査し、次に示す結果を得た⁸。

○表記体に基づく分類に着目すると「ハ」の使用率に差が生じているが、ジャンルが重なる『権記』『小右記』では明確な差が生じていない

この時点では、この結果が変体漢文という「表記」によるものなのか、それとも古記録という「ジャンル」によるものであるかは不明瞭であった。ただし、古記録が「儀式や行事の記録」であったことをふまえると、古記録は「動詞優位」だと予想される。そこで、MVR を導入し、「ハ」の使用率が何によって変化するのか、またそれは和漢対立と関与するのかを分析可能にする。

4 結果と考察

4.1 MVR の比較結果

表 1・表 2 は、ひらがな本・カタカナ本における MVR を示したものである。

表 1 ひらがな本(MVR)

	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	動詞	MVR(%)
上巻	55	11	57	30	407	37.59
中巻	159	68	204	115	1958	27.89
下巻	82	25	81	39	588	38.61
合計	296	104	342	184	2953	31.36

表 2 カタカナ本(MVR)

	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	動詞	MVR(%)
上巻	358	112	416	187	3099	34.62
中巻	184	89	234	151	2307	28.52
下巻	430	96	391	279	3223	37.11
合計	972	297	1041	617	8629	33.92

⁷ 観智院本の上巻は片仮名宣命書き表記であるが、本発表では大きさを統一して表記する。

⁸ 拙稿(2025)

第2節の末尾で示したとおり、特に大川(2023)の研究結果からは、ひらがな本ではMVRが高くなり、カタカナ本ではMVRが低くなる、と予想される。しかし、実際にはひらがな本とカタカナ本とでは明らかな差は生じていないことが指摘される。さらに、その値は両本間の上巻・中巻・下巻それぞれ似た値であり、中巻のMVRがやや低くなる点で特に類似している⁹。

以上の結果は、表記体の選択が必ずしもMVRの数値に反映されないことを示す。つまり、乾(2017)が明らかにしたように和文語／漢文訓読語のような語彙選択は表記体と密接に関係する一方、MVRは表記体の影響を受けにくい、または表記体以外からの影響を受ける指標の可能性はある。

4.2 提題助詞「ハ」の使用率の比較結果

4.2では、本発表のもう一つの注目すべき言語特徴である「ハ」について見ようと思う。4.1と同様に、ひらがな本・カタカナ本における「ハ」の使用率を表3・表4に示す。

表3 ひらがな本(「ハ」利用率)

	主題	対比主題	文数	使用率(%)	MVR(%)
上巻	12	3	127	11.81	37.59
中巻	63	12	772	9.72	27.89
下巻	46	4	231	21.65	38.61
合計	121	19	1130	12.39	31.36

表4 カタカナ本(「ハ」使用率)

	主題	対比主題	文数	使用率(%)	MVR(%)
上巻	131	21	1165	13.05	34.62
中巻	78	14	866	10.62	28.52
下巻	200	25	1381	16.29	37.11
合計	409	60	3412	13.75	33.92

MVRと同様に、「ハ」の使用率にひらがな本とカタカナ本とで大きな差は見られなかった。かつ、ひらがな本・カタカナ本ともに、MVRが比較的低かった中巻について「ハ」の使用率が両本とも上巻・下巻より低い、という結果が見て取れる。したがって、MVRと「ハ」の使用率は相関関係にある、または両者の値が変化する条件が極めて近い、といえる。

よって、MVRと同様に「ハ」の使用率もまた、表記体の影響を受けにくい、または表記体以外からの影響を受ける指標だと考えられる。ただし、ひらがな本の下巻は、ひらがな本全体の使用率及びカタカナ本の下巻と比較し、「ハ」の使用率がかなり高くなっている点には注意が必要である。これは、ひらがな本は大部分の話が不完全な形で残存しているため、話によってはハの多く出現する箇所が残存していることが原因だと考えられる。

4.3 考察

4.1及び4.2の結果と、小玉(2025)の考察を併せて考えると、次の点が指摘できる。

- ①MVRと「ハ」の使用率は相関している
- ②MVRや「ハ」の使用率は、共に古記録や説話集といった「ジャンル」と関係する
- ③従来和文語／漢文訓読語などは表記体に影響を受けやすい文体指標であることが

⁹ なぜ中巻のMVRが比較的低いのか、については現時点で明確な答えを持たないが、少なくとも中巻／上巻・下巻で構造上の違いがあると推定する。

指摘されてきたが、その一方で、MVR・「ハ」の使用率のようにその影響を受けにくい文体指標がある

さらに、ここで改めて大川(2023)の結果を見てみると、『宇治拾遺物語』『今昔物語集』といった説話集が、『三宝絵』とMVRが近いことが注目される(『宇治拾遺』(31.13%)、『今昔』(本朝仏法部:27.08%、本朝世俗部:31.65%)、『三宝絵』(ひらがな本:31.36%。カタカナ本:33.92%))。これは、説話というジャンルがある範囲の伝達内容を共有することによりMVRが変化する、という上掲①の指摘を裏付けるものである。

以上を踏まえ、現時点では、「ハ」の使用率やMVRは、恣意的な「選択」というよりも、古記録や説話集といった「ジャンル」が有する文章の「構造」や「目的」、特定の言語特徴が共有する「機能」と関連する指標だと予想している。しかし、なぜこれらの指標が表記体の影響を受けないのか、については未詳であるため、これは今後の検討課題とする。

5 まとめと展望

本研究では、『三宝絵』二伝本における、MVRと、提題助詞「ハ」の使用率を分析した結果、これらの指標が表記体との相関関係に乏しいことを指摘した。一方でこの結果は、文体が語彙選択だけでなく、ジャンルや場面といったより広範な要素に影響されることを示唆している。

本研究の成果は、和文語／漢文訓読語のような伝統的な分析視座と競合するものではなく、むしろ連携することで、多面的な要素から構成される文体を分析する一助となり得る。これは、従来の文体史研究の基盤を捉え直すものであり、今後の文体研究の展開に貢献するものになるであろう。

今後は、このような指標に影響を与える要因(ジャンル、書き手の意図、読者層など)をより広範かつ多角的に検討していく必要がある。また、『三宝絵』の変体漢文本も対象に加えることで、表記と文体、またジャンルと文体の関係をより明確なものとしたい。

《参考文献》

- ・池田亀鑑(1935)『尊経閣叢刊前田本三宝絵：解説』、育徳財団
- ・乾善彦(2017)『日本語書記用文体の成立基盤：表記体から文体へ』、塙書房
- ・大川孔明(2019)「平安鎌倉時代の文学作品の文体類型：多変量解析を用いて」、『計量国語学』31(8)、pp555-571
- ・大川孔明(2023)『古代日本語文体の計量的研究』、武蔵野書院
- ・樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文体の科学』、綜芸舎
- ・小玉花菜(2025)「平安期日本語の文体間に見られる提題助詞ハの使用率の差異：和文体・記録体・漢文訓読体を対象として」、『国語国文研究』164、pp.17-32
- ・月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編(2010)『古典語研究の焦点』
- ・蔦清行(2016)「『蒙求和歌』の伝本と文体」、『日本語・日本文化』43、pp.1-30

《参考資料》

- ・小泉弘・高橋伸幸(1980)『三宝絵集成：諸本対照』、笠間叢書 131
- ・国立国語研究所(提供)『Web 茶まめ』(最終閲覧日:2025年9月15日)
- ・馬淵和夫(1997)『新日本古典文学大系 31 三宝絵 注好選』、岩波書店

脱従属化の観点から見た接続助詞ノニの情意に関する通時的研究

南山大学大学院生 ^{あかお}赤尾 ^{りお}莉央

1. はじめに

現代日本語の接続助詞ノニはケドなどの他の逆接の形式と比べて、特徴的な感情を表すことが指摘されている（今尾 1994, 衣畑 2001 など）。例えば（1）では、「（だ）けど」とすれば「あの子」と「私」の立場の違いを、単なる事実の対比として表すにとどまるが、「（な）のに」とすると、そのような対比だけでなく、「あの子が会社員であること」と「私が学生であること」という非対称性への違和感が含意される。

(1) [同じ年齢である 2 人の身分が、会社員と学生で異なる場面]

あの子は会社員{けど／なのに}、私は学生。

本発表では、このようなノニの持つ違和感・意外感・不満といった特徴的な感情を「情意」と仮称し、その歴史的な発達過程を明らかにすることを目的とする。なお、本発表では、ノニが用いられる文を「ノニ文」、ノニで構成される節を「ノニ節」と呼び、以下の（2a）を〈叙述型〉、（2b）を〈態度型〉、（2c）を〈独立型〉のノニ文と呼ぶ。

- | | | |
|-----|-------------------------------|-------|
| (2) | a. あの子は会社員 <u>なのに</u> 、私は学生。 | 〈叙述型〉 |
| | b. 熱いって言ってる <u>のに</u> 、触るなよ。 | 〈態度型〉 |
| | c. なにひとつ 1 人でできない <u>のに</u> 。 | 〈独立型〉 |

〈叙述型〉とは、主節で現実の事態が叙述されるものを指す。〈態度型〉とは、（2b）のように、主節で命令や推量、意志、提案など、現実の事態に対する話者の態度や評価を表されるものを指す。〈独立型〉は主節がなく、従属節で言い終わっているものを指す。

青木（2014, 2018）は、ノニの発生初期段階は情意を伴わない用法もあったが、ノニが「準体助詞ノ＋格助詞ニ」という構造から成ることから、この構文が逆接の文脈で使われることで情意が定着したと論じる。しかし、青木（2014, 2018）ではノニが接続助詞として用いられる文中用法（=2a, b）しか扱われておらず、（2c）の〈独立型〉について十分な考察が行われていない。一方、発表者の行った調査では、〈叙述型〉とほぼ同時期に発生する〈独立型〉のノニ文は発生段階から一貫して情意を表したことがわかっている。ノニの現れる統語的位置（＝〈叙述型〉と〈独立型〉の違い）によって通時的様相に違いがあることを、青木の説では必ずしも十分に説明できない。このことを受けて本発表では、ノニの情意は〈独立型〉に由来すると仮定し、そのことを脱従属化（insubordination, Evans 2007）の枠組みを用いて検証する。

2. 問題の所在

青木（2014, 2018）はノニが「準体助詞ノ＋格助詞ニ」という構成要素でできていること

から、ノニの情意の定着についても準体助詞ノの発達が関わるとした。青木（2014, 2018）によると、ノニの発生当初は、（3）のように情意を伴わない単純な逆接を示すこともあったが、発達段階においてノダ文の特性である「承前性」「既定性」が意識された結果、青木が定着段階と呼ぶ段階になると、（4）のように安定して情意を表すようになったという。

- （3） 雑兵原が手にかゝらうかと思つて、何ぼうか口惜しかつたのに、そちが手にかゝれば満足ぢゃ。（好色伝授 1693 年）
- （4） だつて、私の耳へ入る位なのに、お前さんが万更知らない事は無かろうと思ひますがね。（金色夜叉 1897 年）

また、青木（2018）は、ノニだけでなく「連体形＋ヲ」「モノ＋ヲ」「ク語法＋ニ」が、時代は違うものの同じように情意を表すことから、「名詞化節＋格助詞」から産出される構文的意味が情意であると結論づけた。しかし、これらの研究にはいくつか課題がみられる。

まず、青木（2014, 2018）は、ノダ文に「承前性」「既定性」という特性があることを論拠に、それが逆接の文脈で用いられることでノニに情意が定着すると論じているが、ノニとノダを同じ語と分析するかは議論の余地がある。ノダの逆接形には、「ノダガ」「ノダケレド」もあり、ノニとノダが同じ語であるかを前提に議論してよいかはわからない。

次に、日本語の歴史上、情意を表した形式には、ノニだけでなく「連体形＋ヲ」や「モノ＋ヲ」「ク語法＋ニ」もあり、それらがすべて「名詞化節＋格助詞」という構成であることから、青木（2018）は、「名詞化節＋格助詞」からなる構文的意味が情意であると論じている。しかし、これは帰納的一般化であって、情意を定着した動機であるとは限らない。衣畑（2005）は上代語のヲ・モノヲの情意定着に関する論考であるが、これによると、上代語のヲ・モノヲの情意は反実仮想のマシとの共起を継起に定着したものである。

さらに、青木（2014, 2018）では、ノニが文中に現れる場合のみが考察されており、〈独立型〉に関する考察が不十分である。青木（2014, 2018）の考察対象となっている〈叙述型〉のノニ文とは対照的に、〈独立型〉のノニ文は発生から一貫して情意を表す。

以上の3点を踏まえ、本発表では、ノニの情意がノダ文の持つ「承前性」「既定性」という特性や「名詞化節＋格助詞」という構成にもとづくとする青木の仮説とは別の可能性として、〈独立型〉のノニ文を契機に情意が定着したという仮説を提示し、これを脱従属化（insubordination, Evans 2007）の枠組みを用いて検証する。脱従属化とは、形式的に従属節と見なすことができる節が、慣習的に主節として振る舞うようになる現象を指す。ノニの情意を、脱従属化の過程を経て得られたものだと考えるということは、すなわち、その発生は〈叙述型〉でありながら、〈独立型〉で繰り返し情意を伴ってノニが用いられることで、ノニという形式に情意が定着した、と仮定することである。このように考えることで、ノニの史的变化だけでなく、（2b）の〈態度型〉のノニ文の位置付けや、ノニの発達期である近世期における接続助詞ニとの違いも説明可能であることを示す。

3 節では、発表者の調査で得られたノニ文の例を脱従属化の過程に位置付けていくことで、

上述の仮説が妥当であることを示す。

3. 調査結果

今回の調査では、以下の 2 つのコーパスに含まれる資料を対象にノニを抽出し、〈叙述型〉〈態度型〉〈独立型〉という構造と情意の関連を検討した。結果の概要を表 1 に示す。なお、括弧内は情意がないと解釈されるものの件数である。

- 国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2025.3, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2025 年 7 月 8 日閲覧)
- 『日本古典文学大系本文データベース』 <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/> (2021 年 2 月 25 日閲覧)

表 1：調査結果

	1684~1738	1739~1792	1793~1846	1847~1900	計
〈叙述型〉	7	11 (1)	76 (6)	80 (3)	174 (10)
〈態度型〉	3	11	36	20	70
〈独立型〉	2	6	32	43	83
計	12	28 (1)	144 (6)	143 (3)	327 (10)

表 1 より、青木 (2014, 2018) の示した通り、〈叙述型〉のノニ文には情意がないと解釈されるものが散見される (5)。

- (5) 大学様がお呼被成てござるのに、目を振る間に爰へ來てござる。
(韓人漢文手管始 [1789])

脱従属化の過程の初期段階にあたるものが、〈叙述型〉のノニ文であり、(5) の例がこれにあたる。次段階にあたるのは〈独立型〉のノニ文であり、(6) がこれにあたる。〈独立型〉のノニ文は、〈叙述型〉とは異なり、発生から一貫して情意を伴う。(6) は呼んでいるのに返事だけして来ない相手に対する不満が「来いと言うのに」で表されている。

- (6) [女に「ここへ来い」と言っても「はい」と返事するだけでうぢうぢする場面]
ハテ、来いと言うのに。
(韓人漢文手管始 [1789])

脱従属化の流れの中に、ノニの通時的過程を位置付けると、①〈叙述型〉において従属節を構成する形式として機能する、②〈独立型〉において情意を伴って安定して使われる、③ノニという形式そのものに情意が定着する、④〈叙述型〉においても情意があるものと解釈される、となる。このように考えることで、〈独立型〉が〈叙述型〉とは異なる通時的様相を示すことを整合的に位置付けることができるとともに、従来の研究における問題点として指摘したノダ文の特性や構成要素に言及することなく、その過程を説明することができる。

また、脱従属化の枠組みにおいて、ノニの情意が〈独立型〉に由来すると考えると、従来の研究での位置付けが不明であった理由を表す〈態度型〉のノニ文についても説明することができる。例えば(7)である。

- (7) [美人を見た後、彼女は小野小町の幽霊だ、天人だ、龍女だと言い合う場面]
おれが天人じゃといふのに、天人にして置やれな

(鳴神 [1684])

(7)は「天人と言うのだから、天人にしてくれ」というように順接的に解釈することができ、また、天人だと言っているのに周りにそうではないと異見されることへの不満を表すと言える。一方、青木(2018)では、ノニの情意は「ノ＋ニ」が逆接の文脈使われることで定着したとされており、(7)のような逆接の文脈にないのに情意を表すものがどう位置付けられるか不明である。しかし、脱従属化の過程で〈独立型〉を契機にノニに情意が定着したと考えると、〈態度型〉のノニ文は、〈独立型〉のノニ文に、命令や推量、意志、提案など、現実の事態に対する話者の態度や評価を表す文が続いていると説明することができる。

現代語のノニの研究である衣畑(2003: 16)は、〈態度型〉のノニ文を「短絡的な結びつき」と呼び、「ともに現実の事態に対し話し手の態度、評価を表す二文が、あたかも一文のように結び付いている」とする。すなわち、衣畑(2003)の言う「短絡的な結びつき」のノニ文は、形式上、従属節であるノニ節と主節である話し手の態度、評価を表す節という2節構造を持つ点では複文であり、その点でそのノニは接続助詞のように見える。しかし、むしろそのノニ節は終助詞用法(本発表での〈独立型〉)のノニ文で、主節も独立して用いられる話し手の態度、評価を表すものであることから、2つの節がともに主節に相当する機能を持つと言える。衣畑は、さらに、「短絡的な結びつき」の一部に「ノニはケドには置き換えられず、カラのような理由によって置き換えられる」特徴を持つものがあることを指摘し、現実の事態が主節に現れる通常のノニ文とは異なるものだとしている。これは(7)の例文と同じ特徴である。つまり、現代語の研究で、〈態度型〉のノニ文を〈独立型〉のノニ文と機能的に類似するものとして位置付けられることから、脱従属化の枠組みを用いたノニの情意獲得の仮説が支持される。4節では、ノニの発達期である近世期に同じように逆接の接続助詞としても用いられた二との違いについて考察する。

4. 接続助詞ニについて

接続助詞ニの通時的変化に関する先行研究には、此島(1966)、京極(1987)、山口(1996)などがあるが、此島(1966: 202)は〈独立型〉のニ文があることも指摘しており、それを「逆接的用法の名残」とする。ただ、このような〈独立型〉のニ文が情意を伴っていたかなどの詳細は不明である。本節では、〈独立型〉のニ文を調査した結果を概観し、〈独立型〉のノニ文と比較する。先んじて結論を述べると、〈独立型〉のニ文は此島(1966: 202)の言うような「逆接的用法の名残」ばかりでなく、現代語の終助詞ヨやネ、接続助詞カラの

文末用法に近いと考えられるものが見られる。一方、〈独立型〉のノニ文は発生から一貫して情意を伴うことから、〈独立型〉で表される意味の違いが、当該の形式に情意が定着するか否かの違いに関連すると結論づけられる。

まず、〈叙述型〉のニ文には以下の(8, 9)などが挙げられる。接続助詞ニは逆接節や順接節を構成している。

(8)

勘十郎を切り殺さんと思ひしに誤つて人違へ

(五十年忌歌念仏 [1707] 51-近松 1707_01003, 21360)

(9)

只管歎き。かなしむに。お露もその別れを惜み

(花街鑑 [1822] 52-洒落 1822_01062, 20080)

次に、「逆接的用法の名残」とはいえない〈独立型〉のニ文には、以下のものが見られる。

(10) は、自分に頼まれごとをしてきた相手に対して、「昨夜頼まれていたことができないよ」と、頼まれごとが自分ではできないことを現状報告として主張しており、「違和感・意外感・不満」といった情意を表しているとは解釈しにくく、「夕部の事あどふも出来そふもねへ」と現状報告しているに過ぎない考えるのが自然である。

(10) 夕部の事あどふも出来そふもねへによ

(深川新話 [1779] 52-洒落 1779_01025, 30460)

(11) は「後生なのに」というより「後生だから」と、相手への懇願に際して「後生」という条件を加えている。

(11) [タバコと紙を取り寄せてほしいと依頼する場面]

ごしやうだによ。

(仕懸文庫 [1793] 52-洒落 1793_01066, 143030)

(12) は「ここへ入れておくのに」ではなく「入れておくから」「入れておくね」のようにこの後の行動の前置きが示されている。

(12) もし五郎さんさつきのはなしのものをここへ入れておくによ。(と時宗が紙入の中へ金を入れる。)

(仕懸文庫 [1793] 52-洒落 1793_01066, 182050)

以上見て来たように、〈独立型〉のニ文は、「違和感・意外感・不満」といった情意を表すものと解釈できる例も少なからず存在するが、広く相手への働きかけを表すものがある。その内実は、「同情・主張・脅し・苛立ち・懇願・提案・前置き」と多岐にわたり、現代語の終助詞ヨやネ、接続助詞カラの文末用法に近いと考えられる例が散見される。

一方〈独立型〉のノニ文は、(6)で示したような、現実の事態に対する「違和感・意外感・不満」を表すものばかりである。

本発表では、このような〈独立型〉におけるニ文とノニ文の様相の違いが、情意の定着の有無に繋がったと考える。ノニが情意を獲得した背景には「〈独立型〉で安定して情意を表すこと」があった。一方、ニの場合〈独立型〉は広く相手への働きかけを表した。この差がそれぞれの形式への情意の定着の有無に繋がったと考えられる。

5. 結論

本発表では、接続助詞ノニに情意が定着する歴史的背景を考察した。従来の研究では、ノダ文の特性である「承前性」「既定性」が逆接の文脈で用いられることで、情意が定着したとされていた。しかし、そこにはいくつかの問題点が指摘でき、本発表ではノダ文の特性や構成要素によらない情意の定着の背景の考察を試みた。〈独立型〉のノニ文が発生から一貫して情意を表すという事実から、〈独立型〉のノニ文を契機にノニという形式そのものに情意が定着したという仮説を提示し、それが〈独立型〉〈叙述型〉のノニ文の様相だけでなく、〈態度型〉のノニ文や〈独立型〉のニ文からも支持されるものであることを示した。

本研究は、Evans (2007)をはじめとする脱従属化研究を継承し、意味の定着に脱従属化した〈独立型〉が関与するという知見を、日本語文法史研究に持ち込んだものである。また、本発表の仮説は、ある形式に新規の意味が定着する時、その新規の意味を表す文全体の構造に目を向けるべきであるという衣畑 (2005) の主張を参考にしている。

【参考文献】

- 青木博史 (2014) 「接続助詞「のに」の成立をめぐって」 青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』 ひつじ書房. 81-105.
- 青木博史 (2018) 「準体助詞「の」の発達と定着 文法化の観点から」 高田博行・小野寺典子・青木博史 (編) 『歴史語用論の方法』 ひつじ書房. 141-161.
- Evans, Nicholas (2007) Insubordination. Nikolaeva, Irina (ed) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*. 366-431: OUP.
- 今尾ゆき子 (1994) 「条件表現各論—ガ/ケド/ノニ/クセニ/テモ—談話語用論からの考察」 『日本語学』 13 (9) : 92-103.
- 衣畑智秀 (2001) 「いわゆる「逆接」を表すノニについて：語用論的意味の語彙化」 『待兼山論叢 文学篇』 35 : 19-34.
- 衣畑智秀 (2003) 「ノニ、クセニ、ニモカカワラズ」 『日本語文法』 3 (1) : 3-18.
- 衣畑智秀 (2005) 「上代語のヲ・モノヲ—その起源をめぐって—」 『和漢語文研究』 3 (3) : 49-63. 京都府立大学国中文学会.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究』 桜楓社.
- 京極興一 (1987) 「接続助詞「に」「を」「が」成立と展開」 『国文法講座 3 古典解釈と文法』 190-223. 明治書院.
- 山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』 和泉書院.

「A テモ B テモ」構文の成立について―「A ドモ B ドモ」との比較を中心に
パーマー・パトリック（金沢大学）

1. はじめに

現代日本語における「A テモ B テモ」文は、(1)のように、異なる動詞が A と B の位置に来る用法と、(2)のように同一の動詞が繰り返される用法とに大別される。本研究は、それぞれの用法を「非反復用法」と「反復用法」と呼ぶことにする。

(1) 寝ても起きてても忘れられない。(非反復用法)

(2) 待っても待っても電車が来ない。(反復用法)

なお、非反復用法については、更に(1)のように A と B の位置に来る動詞が対義関係をなすものと、(3)のように A と B の位置に来る動詞が類似関係をなすものと分類することができる（崔 2021）。反復用法については、(2)のような例の他に、(4)のように同じ動詞が用いられるが、動詞句全体では異なるものが来る用例も見られる。しかし、本研究では構文の構造が明確な用例に着目するため、扱わないこととする。

(3) 詫びても謝っても堪忍しない。

(4) 東京にいても地方にいてもやりたいことがある。（清水 2010: p. 106 より）

(1)-(4)にある構文の意味・用法の共時的な記述が進んでいる一方、その通時的な発展はまだ十分に解明されていない。そこで、本研究では、歴史的な観点から「A テモ B テモ」構文の用法の成立過程について検討する。特に、「反復用法」の成立に着目しつつ、意味・用法のレベルで多くの共通点を有する「A ドモ B ドモ構文」(5)を分析し、両構文の歴史的変化と相互関係を明らかにすることを目的とする。

(5) 待てども待てども電車が来ない。

具体的には、以下の2点のリサーチクエスションを設定する。

(i) 「A テモ B テモ」構文の各用法は、どのように成立したか。

(ii) 「A テモ B テモ」と「A ドモ B ドモ」の通時的な関係は何か。

研究方法は、日本語歴史コーパス（CHJ）を用いて、「A テモ B テモ」構文と「A ドモ B ドモ」構文を抽出し、反復用法と非反復用法を分析することにより、(i)と(ii)の課題に取り組む。

2. 先行研究と本課題の背景

「A テモ B テモ」構文に注目した先行研究には、田中(1989)、Fujii (1994)、Okamoto (1994)、野呂(2009)、清水 (2010)、崔 (2021)などがある。これらの研究はいずれも、「テモ」自体の意味的特徴が構文全体の意味分析と分類において重視されている点を共通点とする。例えば、清水 (2010) は、記述文法の観点から「A テモ」・「B テモ」それぞれの述べる事態と主節との関係を重視し、「テモ」の使用により条件関係が否定される場合（薬を飲んでも治らないだろう）と否定されない「並列」を表す文（-4 を自乗しても 16 になる）とに分類できるという基準で「A テモ B テモ」構文全体を包括的に捉えて分類した。その一部は以下の

(6)-(8)である。

(6) 勝っても負けても悔いのない試合 [...]。(「A テモ」＝並列・「B テモ」＝逆条件)

(7) 血糖値は上がりすぎても下がりすぎても困る。(「A テモ」は並列・「B テモ」は並列)

(8) 5歳の娘は食べても食べても太らない。(「A テモ」＝逆条件・「B テモ」＝逆条件)

清水の分類方法では、非反復用法は四通りの組み合わせが可能であるのに対し、反復用法は「逆条件」のみである。なお、清水は、非反復用法については、A の場合にも B の場合にも主節の事態が成立するという仮定的な事態を表す一方、反復用法は、「A テモ B テモ」節の A と B に進展性のある動詞が現れ、主節には「動作・状態の継続の結果、変わるはずの事態が相変わらず続く」という継続性のある表現が来やすい点を指摘している。

「A テモ B テモ」構文の歴史を考察する上で、その構成要素である「テモ」と古語の「ドモ」の通時的な関係は避けて通れない。「テモ」は、古語の「トモ」と深い関係にある。例えば、「トモ」は、(9)のように、主に仮定条件を表す形式だった。

(9) 千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。(徒然草・7)

Shirane (2005: 182)によれば、「トモ」は室町時代から「テモ」と競合関係になり、江戸時代後期までに「テモ」が優勢となった。現代日本語では、「テモ」は「トモ」には見られない、逆接の確定条件を表す用法にまで意味が広がっている。このように、「テモ」は歴史的に「仮定」や「反事実」を表す場合が多く、次第に現代日本語のように逆接の確定条件や並列も表すようになったという一連の流れがある。従って、「テモ」をベースにした「A テモ B テモ」構文の成立過程でも、この意味の広がりが反映されている可能性が高いと推測される。

一方、「A ドモ B ドモ」構文の「ドモ」は、現代日本語の「けれども」などに対応する、専ら主節が事実である場合に使用された譲歩的な形式である。(10)に見られるように、「ドモ」は逆接の確定条件を表し、「トモ」(仮定)とは意味的に明確に対立していた。

(10) 或は露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。(『方丈記』)

このように、「トモ」(後に「テモ」)と「ドモ」は元々かなり異なる意味を持っていたことが指摘されている(衣畑 2004)。

以上の通り、「トモ」(後の「テモ」)と「ドモ」は、それぞれ仮定条件と確定的な譲歩という、元来かなり異なる意味を有していた。この歴史的な事実から判断すれば、「A テモ B テモ」構文と「A ドモ B ドモ」構文は、「古い形」と「新しい形」という単純な関係ではなく、異なる機能を担っていた可能性が高い。しかし、構文としての「A ドモ B ドモ」は、先行研究において「A テモ B テモ」の古い形として言及されることがある。例えば、Petermann (2018: p. 118)では、「A ドモ B ドモ」の反復用法が現代語の「A テモ B テモ」反復用法に対応するものとして挙げられている。このように部分的な対応が指摘される一方で、「A ドモ B ドモ」構文自体に焦点を当て、その成立、意味、および変遷を体系的に分析した先行研究は、管見する限り存在しない。従って、本研究は、コーパスに基づいた「A ドモ B ドモ」構文の用例収集を行い、その上で「A テモ B テモ」構文との通時的な関係を考察する。

3. CHJ によるコーパス調査—データ収集と分類の仕方

データ調査には日本語歴史コーパス（CHJ）を用いた。データの抽出方法は、検索フォームの単位検索により検索対象を「全て」に設定し、「動詞テモ+動詞テモ」及び「動詞ドモ+動詞ドモ」を検索した。「A テモ B テモ」の場合 228 件、「A ドモ B ドモ」34 件の検索結果となった。これらの結果をそれぞれダウンロードし、人手で両構文と関係のない用例を除外した。その結果、「A テモ B テモ」・「A ドモ B ドモ」構文とみなした文はそれぞれ 193 例と 33 例だった。

次に、収集した各用例を A と B に来る動詞の意味関係の観点から分類した。先行研究では清水（2010）のようにより詳細な意味分類が行われる場合が多いが、本研究が扱う構文は用例数が限られるため、細かい分類基準を適用すると、両構文の通時的な異同が捉えにくいと推測される。そのため、可能な限りシンプルな三分類を採用した。動詞が反復される場合は「反復用法」に分類(11 と 12)し、「打っても撃っても」のように、表記が異なる場合も同様に反復用法とみなした。それ以外の用例を「非反復」に分類して、更に類似関係をなすもの（「叩いても打っても」）を「類似用法」に（13）、明確な反対関係をなすもの（「起きてても寝ても」）を「反対用法」に分けた(14)。それぞれの分類を代表する例は、(11)-(14)にある(コーパスにおけるサンプル ID 及び開始位置の情報はカッコ内にある)。

- (11) 行けども行けども林の中ばかりで、いかにも物淋しい道に當つて露に晒された白骨があつた。(60M 太陽 1901_14021, 29330)
- (12) しかし、行つても行つても、湖水はありませんでした。(60T 小読 1933_46A22, 25340)
- (13) 打っても叩いても片時離れることではないぞや [...] (60M 太陽 1895_06026, 119680)
- (14) わりなくもねても覚ても恋しき心をいつちやらば忘れん。(20W 古今 0905_12013, 5590)

各用法の時代別の分類結果は、表 1 にまとめた。

表 1 「A テモ B テモ」・「A ドモ B ドモ」の年代別の用例数

	「A テモ B テモ」			「A ドモ B ドモ」		
	反復	類似	反対	反復	類似	反対
奈良	0	0	5	0	0	0
平安	1	2	14	4	0	0
鎌倉	1	1	6	9	0	0
室町	0	1	2	3	1	0
江戸	0	17	21	0	0	0
明治	14	24	19	12	1	0
大正	22	21	18	0	0	1
昭和	4	0	0	2	0	0
合計	42	66	85	30	2	1

4. 調査結果

分類結果をみると、「A テモ B テモ」は非反復用法に集中しており、明治以降に反復用法が急速に増えた。それに対して、「A ドモ B ドモ」は通時的に反復用法に用いられており、明治以前の非反復用法は1例のみである。この事実から、「A テモ B テモ」の多機能化・多用化が、「A ドモ B ドモ」の使用域を侵食し、結果として「A ドモ B ドモ」の使用が減少に至ったという仮説が導かれる。しかし、この大まかな時代単位での分布は、各時代の資料の性質や量の偏りに影響を受けている可能性があり、時代ごとの増減が両構文の真の競合関係を正確に反映しているか判断できない。そのため、時代範囲といった区分ではなく、両構文が実際に用いられた「年」に着目した、より詳細な分析が必要である。特に、使用頻度が拮抗した明治期においては、「ドモ」と「テモ」の反復用法の使用年が相互に反比例の関係にあるかどうかを詳細に検証する必要がある。

そこで、両構文が機能的に直接競合していたと考えられる「反復用法」のみに注目し、統計環境 R を用いて一般化線形モデル (GLM) による分析を行うことで、両構文の時代を通じた割合の変化 (交替速度) を統計的に検証した。GLM は二項選択、すなわち「成功」と「失敗」という2つのカテゴリーの割合をモデリングするのに適する。本分析では、個々の用例の観測年における「成功」を「A ドモ B ドモ」の反復用法の出現、「失敗」を競合形式である「A テモ B テモ」の反復用法の出現とし、試行回数として扱った。予測変数には「年」(資料の成立年)を設定し、この変数が時間の経過に伴う「A ドモ B ドモ」の出現確率の変化を説明するようにモデルを構築した。その結果、「年」の係数が統計的に有意な負の値を示した (p 値 <0.01) ことで、「A ドモ B ドモ」の出現確率が年々確実に減少していることが確認され、反復用法では「A ドモ B ドモ」優位から「A テモ B テモ」優位への変化がモデリングされた。なお、このモデルから推定された「A ドモ B ドモ」・「A テモ B テモ」の勢力が交差する年は1741年だった。図1では、このモデルの結果が可視化されている。

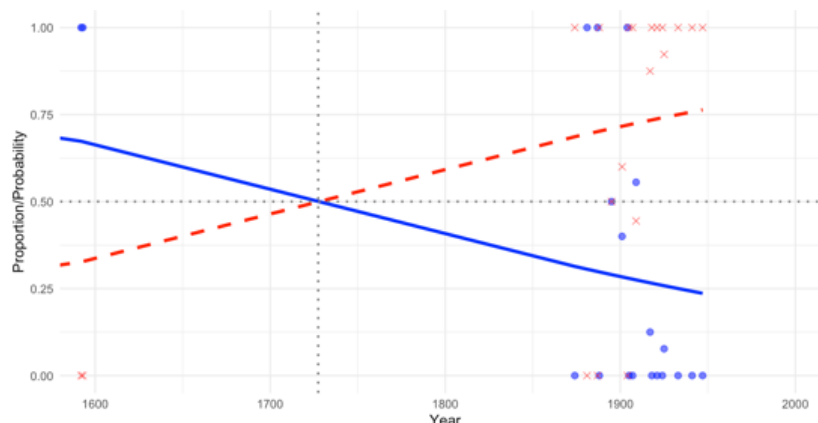


図1 「A テモ B テモ」・「A ドモ B ドモ」の反復用法の出現率推移

以上の通り、反復用法における「A ドモ B ドモ」の使用頻度は、「A テモ B テモ」の反復用法の使用頻度と直接的に反比例の関係で減少しており、これは「A テモ B テモ」がその機能を吸収したことを示唆している。

5. 考察

本研究で明らかになった通時的変化は、「A テモ B テモ」が反復・非反復の両方の用法を獲得したことにより「A ドモ B ドモ」の機能的な利便性が相対的に低下したという、一般的な文法変化の法則（小柳 2018 など）に整合する。しかし、なぜ「A テモ B テモ」構文は明治期までに反復用法が少なく、「A ドモ B ドモ」構文は反復用法が優勢な形式として用いられていたのかという、初期の機能差を説明する必要がある。この初期の機能差の背景には、第2節で触れた「トモ」（テモ）と「ドモ」の根源的な意味的対立が影響していると考えられる。「トモ」・「テモ」は元々反事実の仮定を示す形式であったため、逆条件を構成する A 節と B 節には、反対の意味を持つ語や対照的な意味を持つ語が来ることが意味的に自然であったと考えられる。

なお、この傾向は「A テモ B テモ」構文の非反復用法における階層性からも裏付けられる。表1に示されたように、「非反復用法（反対）（85 例）→非反復用法（類似）（66 例）→「反復用法」（42 例）の順で出現頻度に差があることが確認できる。このうち、反対用法が最も多いという傾向は、「テモ」自体が基盤とする逆接の仮定条件を示す役割に対応する。すなわち、意味的に反対・対照的な動詞を用いることで逆条件を表現するという、根源的な機能から派生した自然な結果であると解釈できる。逆に、最も新しく出現頻度が低い「反復用法」は、のちに成立した逆接の確定条件（事実的な継続）に対応すると考えられる。この階層性は、「テモ」の意味が根源的な仮定用法から確定用法へと拡張していく過程を反映していると解釈できる。

一方、「A ドモ B ドモ」構文の用例は反復用法が優勢であり、その機能が当初から限定的であったことが明確である。なお、この機能の汎用性の差に加えて、明治期に向けて、「ドモ」の文語化が進んだ事実も、競合における優劣を決定づけた要因であると考えられる。すなわち、「ドモ」は文語化された点と、非反復用法との相性が良くない点が重なり、競合構文に比べて汎用性が低くなったといえる。(15)の通り、「A ドモ B ドモ」は文語の文体に用いられるようになった一方で、「テモ」は、「A テモ B テモ」は(16)の通り口語にも用いられた。

(15) [...] 而して其の爵を受けたるは辭せども辭せども容されざりしが故ならん、然れども始め辭して終りに受く [...] (60M 国民 1887_07009, 1180)

(16) それつきり、待つても待つてもたうとう母は歸つて來ませんでした。 (60M 婦俱 1925_03134, 6020)

すなわち、多機能で広い意味領域をカバーできるようになった「A テモ B テモ」が、「A ドモ B ドモ」がそれまでに担っていた反復用法をも包含するに至り、言語経済性の観点から「A ドモ B ドモ」が衰退したと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本調査の結果、「A テモ B テモ」の反復用法は明治以降に急増し、それまでは非反復用法が主流だった。時代ごとの用例数の分布から、用法の変遷には「非反復（反対）→ 非反復

(類似) → 反復」という階層性がみられる。一方で、明治期に文語としてピークを迎えた「A ドモ B ドモ」は、通時的に反復用法が優勢で、非反復の用法はほとんどみられなかった。これらの結果から判断して、明治から大正期にかけて、「A ドモ B ドモ」構文の衰退が進み、それに代わって「A テモ B テモ」構文がその反復用法を吸収したと考えられる。

今後の課題は、まず本研究で得られた「A テモ B テモ」構文の通時的な用法の階層性が、「テモ」自体の意味変遷を反映するという主張の妥当性を、より厳密に検証することにある。また、これらの構文の通時的な相関関係をさらに深く分析するため、本研究で中心的に扱えなかった古語「トモ」を用いた構文のデータも視野に入れつつ、量的・質的な分析をより包括的に展開する必要がある。具体的には、「A トモ B トモ」構文の用例収集を行い、その機能と「A テモ B テモ」構文への移行過程を考察することにより、「テモ」系構文全体の成立と変遷をより正確に捉えることが可能になると思われる。

7. 参考文献

- 崔小萍 (2021) 「コーパスからみた日本語の「A ても B ても P」文の特徴」『名古屋大学人文学フォーラム』4, pp. 17-32.
- Fujii, Seiko (1994) A Family of Constructions: Japanese TEMO and Other Concessive Conditionals. *BLS* 20, pp.194-207. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- 衣畑智秀 (2004) 「古代語・現代語の「逆接」: 古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に」『大阪大学国語国文学会』83 巻. pp. 49-58.
- 小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』くろしお出版.
- 野呂健一 (2009) 「日本語の動詞反復表現—「V ても V ても」「V には V」を例として—」『日本語認知言語学会論文集』9, pp. 92-101. 日本語認知言語学会.
- Okamoto, Shigeko (1994) Augmentative Verbal Repetitive Constructions in Japanese. *Cognitive Linguistics* 5(4), pp. 183-212.
- Petermann, Christoph (2018) A brief overview of total reduplication in Modern Japanese. In Rita Finkbeiner & Ulrike Freywald (Eds.) *Exact Repetition in Grammar and Discourse*. De Gruyter Mouton.
- Shirane, Haruo. (2005) *Classical Japanese: A Grammar*. Columbia University Press.
- 清水由貴子 (2010) 「「A テモ B テモ」文の分析」『日本語文法』10 巻 1 号. pp.105-121. 日本語文法学会.
- 田中寛 (1989) 「逆接の条件文<ても>をめぐって」『日本語教育』67, pp. 139-158. 日本語教育学会.

使用コーパス

日本語歴史コーパス (CHJ). 国立国語研究所.

BCCWJ2 のメタ情報の設計―出典情報について―

山崎 誠 (国立国語研究所)
 高橋 雄太 (国立国語研究所)
 呉 寧真 (国立国語研究所)
 近藤 明日子 (国立国語研究所)
 小木曾 智信 (国立国語研究所)

1. はじめに

本発表は、国立国語研究所が文化庁委託事業として実施している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) の拡張プロジェクトである BCCWJ2 に付与するメタ情報、とくに出典情報の設計について報告するとともに、本コーパスの活用のためにはどのようなメタ情報が必要か、コーパスの利用者から意見を収集することを目的とする。なお、本発表では、既公開の BCCWJ を BCCWJ1、拡張部分を BCCWJ2 と呼んで区別する。

2. BCCWJ のメタ情報

BCCWJ2 については、山崎・小木曾・高田(2024)、小木曾・山崎(2024)、山崎・高橋・小木曾(2025)で設計の経緯を説明している。2025 年 9 月現在、2006 年～2010 年分のデータの整備が進んでおり、年度末の部分公開を目指している。そのために、データ本体とともにメタデータの整備を進める必要があり、その設計について報告するものである。国立国語研究所が公開しているコーパスにはさまざまなメタ情報が付与されている。図 1 はコーパス検索ツール「中納言」で BCCWJ1 を選択した場合の「列の表示」で示される情報である。形態論情報のほかに、コーパス情報、出典情報、話者情報などが示されている。本発表ではこのうち、出典情報に焦点を当てる。

The screenshot shows the 'Column Display' settings for BCCWJ1 in the 'Chunagami' search tool. The interface is organized into several sections:

- コーパス情報 (Corpus Information):** Includes checkboxes for 'サンプル ID' (checked), '開始位置' (checked), '連番' (checked), 'レジスター' (checked), 'コア' (unchecked), '固定長' (unchecked), and '可変長' (unchecked).
- 形態論情報 (Morphological Information):** Includes checkboxes for '前文脈' (checked), 'キー' (unchecked), '後文脈' (checked), '語彙素 ID' (checked), '語彙素読み' (checked), '語彙素' (checked), '語彙素細分類' (unchecked), '語形' (checked), '品詞' (checked), '活用型' (checked), '活用形' (checked), '書字形' (unchecked), '発音形出現形' (unchecked), '語種' (unchecked), and '原文文字列' (unchecked).
- 出典情報 (Source Information):** Includes checkboxes for '執筆者' (checked), '生年代' (unchecked), '性別' (unchecked), 'ジャンル' (unchecked), '書名/出典' (checked), '副題/分類' (unchecked), '巻号' (unchecked), '編著者等' (checked), '出版者' (checked), and '出版年' (checked).
- 話者情報 (Speaker Information):** Includes checkboxes for '話者名' (unchecked), '話者性別' (unchecked), and '話者年齢層' (unchecked).
- その他 (Others):** Includes checkboxes for 'permalink' (unchecked) and '分類語彙表' (checked).

図 1 「中納言」で BCCWJ1 を選択した場合の各種のメタ情報 (デフォルト)

2. 1. 出典情報の典拠

BCCWJ1 の場合と同じように、BCCWJ2 においても、出典情報は基本的に国立国会図

書館の提供するデータを利用する。具体的には「全国書誌データ」に含まれる以下の2つのデータである。これらは国立国会図書館のホームページで公開されている。

JAPAN/MARC(M/S)：単行・逐次刊行資料

JAPAN/MARC(A)：典拠

JAPAN/MARC(M/S)は、書誌情報が中心であり、JAPAN/MARC(A)は主に著者に関する情報を格納している。

2. 2. 少納言、中納言における出典情報

BCCWJ1は、コーパス検索ツール「少納言」および「中納言」で提供しているほか、全文データも有償で提供している。このうち、「少納言」「中納言」の検索結果に表示される出典情報を表1にまとめ、書籍データを想定した説明を施した。さらに、BCCWJ2での表示・ダウンロードの可・不可についても記した。なお、「不可」という場合、権利者からの許諾が得られない場合とそもそも情報自体が得られない場合の2つがあるが、その区別はしていない。

表1 「少納言」「中納言」の検索結果に表示される出典情報

項目	BCCWJ1	BCCWJ2	説明
執筆者	○	○	コーパスに収録されたサンプル部分の著者
生年代	○	○	著者の生年代を10年刻みで丸めた数値
性別	○	×	BCCWJ2では典拠データに情報なし。 BCCWJ1の情報が使えるか、要確認
メディア/ジャンル （「少納言」のみ）	○	○	メディアはレジスターを表示、ジャンルはNDCの大分類（1桁目）。
ジャンル （「中納言」のみ）	○	△	NDC（分類名、分類番号）、Cコード（図書分類コード）。NDCは新旧2種類、BCCWJ2ではCコードは表示しない予定。
書名／出典	○	○	書籍の名称（副題を含まない）。「少納言」では列名は「タイトル」
副題／分類	○	○	書籍の副題。「少納言」では列名は「副題」
巻号	○	○	上下巻に分かれている場合や、雑誌などの場合に利用
編著者等	○	○	書籍全体の編著者
出版者	○	○	刊行元の出版社、官公庁等
出版年	○	○	書籍の刊行年

○：表示、ダウンロード（DL）可能。△：Cコードは表示可・DL不可。×：表示、DLともに不可。

以下、JAPAN/MARC(M/S)から取得したメタ情報の例を「中納言」での表示項目・形式に合わせた形で示す。情報が得られない箇所は空欄にしている。

表2 BCCWJ2「中納言」の表示例に合わせたメタ情報の例

「中納言」の項目	例 1	例 2
執筆者 ¹	森村 誠一(著)	D・カーネギー(著)/山本 悠紀子(監修)/田中融二(訳)
生年代	1930	1880／1920／
性別		
ジャンル		
NDC (1桁目)	9 文学	8 言語
NDC (フル)	913.6	809.4
Cコード		
書名／出典	虹の生涯	カーネギー心を動かす話し方
副題／分類	新選組義勇伝	一瞬で人を惹きつける秘訣
巻号	下	
編著者等 ²	森村誠一 著	Carnegie, Dale 著; 山本悠紀子 監修 ; 田中融二 訳
出版者	中央公論新社	ダイヤモンド社
出版年	2006	2006

2. 3. BCCWJ2 の出典情報付与の問題点

(1) サンプル部分の執筆者の同定

コーパスに収録する部分は書籍の中の一部である。書籍全体の著者が複数いる場合、あるいは(編)で示されている場合は、書籍全体の著者と当該サンプル部分の執筆者とは一致しないため、個別に同定する必要がある。

(2) 著者の性別

BCCWJ1 では、性別情報は著者にアンケートを取る形で取得していた。今回はそのような処理は行わない。また、JAPAN/MARC(A)には著者の性別の情報が収録されていない。したがって、BCCWJ2 では著者の性別は空欄になるが、BCCWJ1 の全文データの中にDirectory.txt というファイルがあり、そこに「安部 公房 男 1920」のような性別・生年代の情報が格納されている。これは BCCWJ1 当時のものだが、著者の同定が出来れば、この情報が使える可能性がある。

(3) Cコード(想定読者情報)

JAPAN/MARC(M/S)には C コードの情報が収録されていない。出版情報登録センター(JPRO)のデータベース(有料)を使うと API で C コードの情報を取得出来ることが分かったが、契約により、中納言での表示は問題ないが、ダウンロードができない。版元ドットコムに掲載されている書誌情報で「利用可」と表示されているものはダウンロードも含めて

¹ JAPAN/MARC(M/S)の「責任表示」の欄の情報を利用。

² JAPAN/MARC(M/S)の「典拠形アクセス・ポイント(創作者等):個人」の欄の情報を利用。

利用できることを確認したが、どのくらい BCCWJ2 で必要な情報をカバーできるかは未確認である。

3. 新たな項目の可能性

BCCWJ1 で付与したメタ情報に加えて、分析等に必要な新たなメタ情報を付与する可能性を探る。

3. 1. ISBN（国際標準図書番号：International Standard Book Number）

ISBN は書籍を特定するための国際規格で、日本では 1980 年代ごろから普及した。現在では流通するほぼすべての書籍に付与されている。ISBN はコーパスの検索結果を他のデータと連携させるのに有効である。BCCWJ2 だけでなく、BCCWJ1 にも採用可能である。ISBN はさまざまな入手方法があるが、JAPAN/MARC(M/S)に収録されているものが利用できる。

3. 2. NDLC（国立国会図書館分類表：National Diet Library Classification）

NDLC は、国立国会図書館が独自に付与した分類コードである。同館の HP によると、「知識の全分野を包含する一般分類表であるが、当館の蔵書構成を反映して社会科学部門に重点を置く。」という特徴を有する分類である。NDC（日本十進分類法）はすべての書籍に付与しているわけではないが、NDLC は排架のための分類記号ということもあり、すべての資料に付与されている。BCCWJ1、2 とともに利用している NDC と併用することで活用の範囲が広がることが期待される。NDLC も JAPAN/MARC(M/S)に収録されている。

3. 3. フィルタリング用情報

コーパスの幅広い活用のために、教育用・機械学習用のフィルタリング情報を設けることを検討している。

例えば、教育現場としては成人向けの書籍を区別できるようになっていたほうが都合がよいと考えられる。NDC で言えば、「384.7 性風俗」、「598.2 結婚医学」などである。また、上記の NDLC には「Y85 風俗本」という分類があるが、これもフィルタリング情報として使える可能性が高い。2006 年の書籍データ（サンプリングのための母集団）から、NDLC が「Y85」となっているものの NDC の分布を図 2 に示した。冊数の多いものとしては、「598.2 結婚医学」（122）、「798.5 コンピュータゲーム〈一般〉」（39）、「なし」（37）、「748 写真集」（7）であった。なお、「なし」の内訳を紀伊国屋書店のホームページで調べると、ほとんどが「726.1 漫画、劇画、諷刺画」であった。

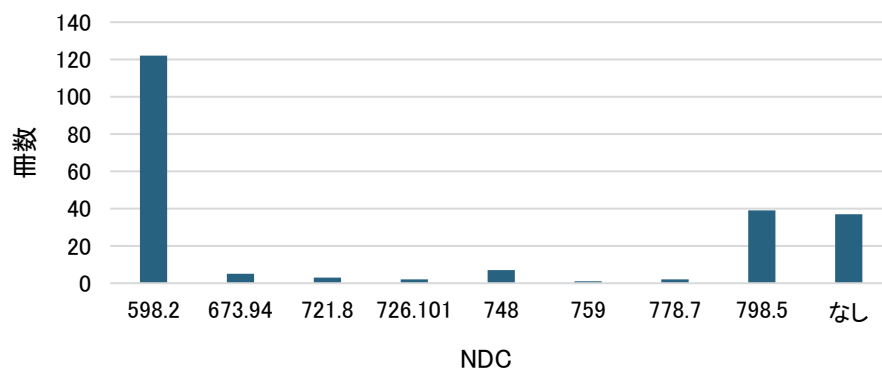


図2 NDLC の「Y85」に対応する NDC（2006 年）

また、BCCWJ1 の経験からは出版者や著者での絞り込みも有効と思われ、あわせて検討していきたい。

4. 公開に向けて

2025 年度末には整備が進んだ 2006 年～2010 年のデータを公開する予定であるが、それに向けて「少納言」「中納言」のインターフェイスも変更すべき部分がある。図 3 は現在の「少納言」の検索画面、図 4 は現在の「中納言」のコーパス選択画面である。「少納言」では「書籍 (1971-2005)」の年を変更する必要がある。「中納言」では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の下に新たに「BCCWJ2」を設ける予定である。BCCWJ2 は、著作権処理を行わないため、小木曾・山崎 (2024) で触れているようにキーの前後の文脈長が例えば 30 語前後となる。また、検索対象は当初は 2006 年～2010 年であるが、最終的には 2025 年までになる。



図 3 「少納言」検索画面

コーパス名		略 称	個別検索	まとめて検索	備 考
書き言葉	現代日本語書き言葉均衡コーパス	BCCWJ	✓	✓	従来より利用いただいている BCCWJ のデータです (コーパスの紹介ページ)。こちらのページから BCCWJ アノテーションデータをダウンロードできます。
話し言葉	日本語話し言葉コーパス	CSJ	✓	✓	コーパスの紹介ページ
話し言葉	日本語日常会話コーパス	CEJC	✓	✓	コーパスの紹介ページ 有償版契約者は関連データを「データ配布」からダウンロードできます。
話し言葉	子ども版日本語日常会話コーパス	CEJC-Child	✓	✓	コーパスの紹介ページ
話し言葉	昭和話し言葉コーパス	SSC	✓	✓	コーパスの紹介ページ SSC の全データ (音声・転記・形態論情報・メタデータ等) をこちらからダウンロードできます。ダウンロードするには、コーパス追加利用の申請から昭和話し言葉コーパスの新しい規約に同意して利用を申請してください。
話し言葉	名大会話コーパス	NUCC	✓	✓	コーパスの紹介ページ
話し言葉	現日研・職場談話コーパス	CWPC	✓	✓	コーパスの紹介ページ
通 時	日本語歴史コーパス	CHJ	✓	✓	コーパスの紹介ページ
通 時	昭和・平成書き言葉コーパス	SHC	✓	✓	コーパスの紹介ページ
方 言	日本語諸方言コーパス	COJADS	✓	✓	コーパスの紹介ページ 関連データを「データ配布」からダウンロードできます。

図 4 「中納言」コーパス選択画面

付記

本事業は文化庁委託事業「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」に基づいて実施しています。

<https://www2.ninjal.ac.jp/BCCWJ2/>

参考文献

小木曾智信・山崎誠 (2024) 「現代語書き言葉コーパスと著作権処理—BCCWJ2 の構築に向けて—」、日本語学会 2024 年度秋季大会ポスター発表、2024 年 10 月 27 日、オンライン、同予稿集 pp.85-88.

山崎誠・小木曾智信・高田智和 (2024) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の拡張計画について—BCCWJ2 の構築に向けて—」、日本語学会 2024 年度春季大会ポスター発表、2024 年 6 月 2 日、東京外国語大学、同予稿集 pp.161-166.

山崎誠・高橋雄太・小木曾智信 (2024) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の拡張—BCCWJ2 の構築—」、言語処理学会第 31 回年次大会ポスター発表、2025 年 3 月 11 日、出島メッセ長崎、同予稿集 pp.414-417.

https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2025/pdf_dir/Q1-20.pdf

URL (いずれも 2025.09.29 最終アクセス)

国立国会図書館 全国書誌データ

https://www.ndl.go.jp/jp/data/data_service/jnb/index.html

国立国会図書館分類表 (National Diet Library Classification : NDLC)

https://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/classification_subject/ndlc.html#news

出版情報登録センター (JPRO)

<https://jpro2.jpo.or.jp/>

版元ドットコム

<https://www.hanmoto.com/>

ツール (いずれも 2025.09.29 最終アクセス)

「中納言」

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

「少納言」

<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>

小学生と中学生の作文にみられる文末の時制表現の誤用

—「児童・生徒作文コーパス『ちょっとおかしい日本語』検索サイト」を用いて—

かとう えり・やぎ ゆたか
加藤 恵 梨・八木 豊

1. はじめに

石黒（2004）が述べているように、過去の出来事の描写や説明では、「～した。」のような過去形（以下タ形）だけではなく、「～する。」のような非過去形（以下ル形）も使うことができ、ル形とタ形を巧みに使い分けられれば、情報の焦点がどこにあっているかを示し、書かれている内容を読者に印象的に伝えることができる。しかし、児童・生徒の作文には、そのような効果を狙っているのではなく、文脈や内容から考えてル形にした方が適切であるところでタ形を用いているといった誤用がみられる。本研究では、児童・生徒がル形やタ形という文末の時制表現をどのような時に間違えるのか、学年および作文のテーマによって誤用に違いがあるのかについて、「児童・生徒作文コーパス『ちょっとおかしい日本語』検索サイト」を用いて明らかにする。

2. 調査資料について

本研究が調査資料とするのは、「児童・生徒作文コーパス『ちょっとおかしい日本語』検索サイト」（以下 J-CONi）である。J-CONi は、小 1 から中 3 までの児童・生徒が書いた「がんばったこと」及び「夢」という 2 種の課題作文 5,325 編の全データを対象に問題箇所のタグ付けが行われており、様々な条件のもとに問題箇所を検索できる（砂川ほか 2024）。

図1 児童・生徒作文コーパス「ちょっとおかしい日本語」検索サイト

「がんばったこと」作文、「夢」作文の学年別の検索対象の文の数と語数は表 1 の通りである。なお、表 1 は現時点で搭載されている 1,816 作文に対する数値を示している。

表1 学年別の検索対象の文の数と語数

	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6	中 1	中 2	中 3	全学年
「がんばったこと」の語数	10,745	14,108	18,635	27,481	29,924	26,200	59,301	58,323	66,108	310,825
「夢」の語数	7,196	11,045	17,741	25,636	25,265	26,779	56,898	55,791	63,474	289,825
全検索対象の語数	17,941	25,153	36,376	53,117	55,189	52,979	116,199	114,114	129,582	600,650
「がんばったこと」の文の数	667	712	1,012	1,325	1,442	1,217	2,833	2,892	3,082	15,182
「夢」の文の数	454	536	885	1,130	1,144	1,144	2,398	2,792	2,782	13,264
全検索対象の文の数	1,121	1,248	1,897	2,455	2,586	2,361	5,231	5,684	5,863	28,446

3. 分析

3.1 問題の箇所の数と人数

J-CONi で、問題の対象を「すべて」、問題の内容を「時制ミス」として検索し、得られた検索結果のなかの文末表現のみを抽出し、分析対象とした。なお、問題個所の修正後の表現が、時制以外の修正も行われている場合には本研究の分析対象外とする。例えば、次の(1)では、「やります」が「担当しました」に修正されている。このような場合は今回の分析対象から外す。

- (1) わたしのがんばったことは、学校の誕生日をお祝いする、創校記念音楽会です。わたしは、責任を感じる指揮者をやります (→担当しました)。 (6年生、TD6731G)

分析により、表2の結果が得られた。表2の「ミスのタイプ」における「ル/タ」の表記については、「ル」はタ形にすべきところをル形にしているもの、「タ」はル形にすべきところをタ形にしているものを表している。

表2 問題の箇所の数と人数

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	全学年
がんばったこと	8件(6名)	11件(9名)	9件(7名)	7件(5名)	5件(4名)	14件(9名)	11件(11名)	9件(9名)	3件(3名)	77件(63名)
ミスのタイプ	ル2/タ6	ル8/タ3	ル4/タ5	ル5/タ2	ル3/タ2	ル11/タ3	ル4/タ7	ル7/タ2	ル2/タ1	ル46/タ31
夢	7件(3名)	1件(1名)	5件(4名)	10件(9名)	6件(6名)	6件(5名)	20件(15名)	2件(2名)	12件(11名)	69件(56名)
ミスのタイプ	ル6/タ1	ル0/タ1	ル0/タ5	ル1/タ9	ル2/タ4	ル5/タ1	ル2/タ18	ル2/タ0	ル5/タ7	ル23/タ46

以下で児童・生徒の学年別の誤用についてみていく。その際、タ形にすべきところをル形にしている場合は「ル形 (→タ形)」の誤り、ル形にすべきところをタ形にしている場合は「タ形 (→ル形)」の誤りと記す。また、例文中の下線部が問題箇所、括弧内が修正表現を表している。

3.2 小学校低学年について

まず、1年生の1文当たりの誤りの数をみると、「夢」作文における「ル形 (→タ形)」の誤りが多い。3名すべての児童が、「夢」を「睡眠時にみる内容」と捉えており、過去に見た夢を紹介する際、「昨日の夢は～です」のように「ル形 (→タ形)」で書いているものが6件2名みられる。一方の「がんばったこと」作文では、「タ形 (→ル形)」の誤りが多く(6件5名)、その中でも次の(2)のように、過去のできごとを振り返り、それについて執筆時の感想を述べる際、「おもいました」と書いているものが最も多い(4件3名)。

- (2) ほんばんのときまちがえたけどだいじょうぶでした。それが、がんばったことだとおもいました (→おもいます)。たいへんでした。 (1年生、TI1627G)

次に、2年生は「がんばったこと」作文において「ル形 (→タ形)」の誤りが多く(8件6名)、その中でも次の(3)のように、筆者の感情や考えを表す際の誤りが最も多い(5件3名)。

- (3) とてもみんなえがおでおきゃくさんのとこまでとどくように二きよくをぜんりよくでするとてもきいたりするの6年生までぜんぶきくのもわくわくします (→わくわくしました)。 (2年生、TH2735G)

2年生の「がんばったこと」作文における「タ形 (→ル形)」の誤り(3件3名)はすべて、次の(4)のように、「思います」にすべきところを「思いました」にしている誤りである。

- (4) どうしてかという、みなさんの前で歌うのは、ちょっときんちょうしたけど、みなさんか

らはくしゅをもらって、みんなとちからを合わせてうたったから、ぼくもみんなのなかの一人だからぼくもがんばったなと思いました（→思います）。（2年生、TH2215G）

2年生は「夢」作文において「ル形（→タ形）」の誤りはみられず、「タ形（→ル形）」の誤りも少ない。

以上のように、低学年では、過去のできごとについて書く際に誤用が多い。1年生では「タ形（→ル形）」の誤りが多く、過去のできごとを振り返り、それについて執筆時の感想を述べる際に「おもいました」と書いているものが最も多い。2年生は「がんばったこと」作文において「ル形（→タ形）」の誤りが多く、筆者の感情や考えを表す際の誤りが最も多いことがわかった。

3.3 小学校中学年について

まず、「がんばったこと」作文において、3年生は「タ形（→ル形）」の誤りと「ル形（→タ形）」の誤りが同程度みられ、「タ形（→ル形）」の誤りにおいては「ありました」が2件2名と最も多く、次の(5)のように、現在の状況について説明する際に用いている。

(5) いつも宿題が多くて、宿題をずうーっとやっています。たまに十二時くらいまで宿題をやっている日もありました（→あります）。（3年生、TG3211G）

一方の「ル形（→タ形）」の誤りは、3年生は4件4名で、「てきます」という補助動詞を使用する際の誤り（1件1名）もみられる。

4年生は、「タ形（→ル形）」の誤りは2件2名で、低学年と同様、過去のできごとを振り返り、それについて執筆時の感想を述べる際、「思いました」と書いている。一方、「ル形（→タ形）」の誤りは5件3名で、「Nです」が2件1名、その他に3年生と同様、補助動詞を用いた際の誤りがみられる。次の(6)のように「ています」や、「てくれます」が各1件1名ある。

(6) このまえのテストのときもそうでした。「合かくする！」ということよりも、「不合かくになってしまふかもしれない」という気もちのほうが大きくて、とてもきんちょうしています（→ていました）。（4年生、TF4631G）

次に、「夢」作文において、3年生の誤りはすべて「タ形（→ル形）」の誤りである。低学年と同様、「思いました」が最も多く、それ以外にも次の(7)のように、否定形における誤りもみられる。今でもわすれられないという思いを表すのに、「わすれられませんでした」と書いている。

(7) にぎってもにぎってもくずれちゃいます。だからわたしは何ども何ども練習してたら、うまくできました。この日がとてもわすれられませんでした（→わすれられません）。

（3年生、TG3736Y）

4年生も「タ形（→ル形）」の誤りのほうが多く、「思いました」の誤りが最も多い（2件2名）。一方、「ル形（→タ形）」の誤りは1件1名のみと少ない。

以上から、「がんばったこと」作文において、3年生は「タ形（→ル形）」の誤りと「ル形（→タ形）」の誤りが同程度みられ、4年生は「ル形（→タ形）」の誤りのほうが多い。一方の「夢」作文においては、3・4年生の誤りの大部分は「タ形（→ル形）」の誤りで、低学年と同様、現在の思いを表すのにタ形を用いている。このように、「タ形（→ル形）」の誤りにおいては「思いました」「ありました」の誤りが目立ち、特定の語を繰り返し間違えていると言える。また、否定形を用いる際の誤りも新たにみられる。一方の「ル形（→タ形）」は、低学年ではみられなかった補助動詞

の誤りがみられることがわかった。

3.4 小学校高学年について

まず、「がんばったこと」作文において、高学年は「ル形（→タ形）」の誤りのほうが多い。5年生の「ル形（→タ形）」の誤りは3件2名で、「思います」「つきます」「まよいます」が各1件1名みられる。6年生の「ル形（→タ形）」の誤りは11件6名で、「あります」2件2名、「喜ぶ」「うれしいです」「～たいです」「思っています」「しなければなりません」「うまくいきません」「Nです」「てくれます」「いわれる」が各1件1名みられる。高学年になると列挙型などの技法を使って書くことが多くなり、次の(8)のように書き出しで「がんばりたい事が、二つあります」といった文を書くことが習慣化し、生じた誤用ではないかと考えられる。しかし、(8)ではがんばりたいことが過去のことであるため、「がんばりたい事が、二つありました」となる。

(8) 私は今年、特にがんばりたい事が、二つあります（→ありました）。一つ目は、クラス合唱を去年より、もっと良くする事です。（6年生、TD6630G）

一方、「タ形（→ル形）」の誤りは、5年生は2件2名で、「求められました」「Nでした」が各1件1名みられ、6年生は3件3名で、「忘れられなかった」「ちかいました」「思いました」が各1件1名みられる。

次に、「夢」作文において、「タ形（→ル形）」の誤りは、5年生は4件4名で、「思いました」が2件2名、「ありました」「わかりました」が各1件1名ある。次の(9)は先ほどみた(8)とは逆で、将来の夢に向けて現在がんばっていることを述べているため、「三つあります」となる。6年生の誤りは「思いました」（1件1名）のみである。

(9) しょう来イラストレーターになりたいのがんばっていることが、三つありました（→あります）。一つ目は、図形の勉強です。（5年生、TE5725Y）

一方、「ル形（→タ形）」の誤りは、5年生は「Nです」「～ていく」が各1件1名みられるのみである。6年生は「Nです」が3件2名、「になります」「考えこむ」が各1件1名みられる。次の(10)では過去の事柄について説明するのに、「Nです」を用いている。

(10) きっかけは、四才くらいのときに、一人で飛行機に乗って、おばあちゃんの家に行くとき、とても親切な人が私のとなりになすわって、トランプをくれました。その人がキャビンアテンダントです（→でした）。（6年生、TD6627Y）

以上のように、小学校高学年では、「がんばったこと」作文においては「ル形（→タ形）」の誤りのほうが多い。型を使って作文を書くという技能がみにつき、列挙型で文章を書く際、書き出しで「～が二つあります」のように書く練習をしているため、過去のことでも「ル形」で書いた可能性がある。「夢」作文においては、5年生は「タ形（→ル形）」の誤りが多い。6年生では「ル形（→タ形）」の誤りが多く、過去の事柄について説明する際、「Nです」などを用いている。

3.5 中学1年生について

まず、「がんばったこと」作文では、「タ形（→ル形）」の誤りは7件7名で、「思いました」が4件4名と最も多く、その他に「Nでした」が2件2名、「あった」が1件1名ある。一方の「ル形（→タ形）」の誤りは4件4名で、「Nだ」「あります」「きびしいです」「思います」を各1回1名

使っている。

次に、「夢」作文では、誤りのほとんどが「タ形（→ル形）」の誤りで、18件15名みられる。「思いました／思った」が16件12名、「ていました」「ありました」が1件1名ある。現在も持ち続けている夢を述べる際、「いつか月に立ちたいと思いました」と書くなど、小学生と同様「思いました」の使い方で誤りがみられる。一方、「ル形（→タ形）」の誤りは「あります」「好きだ」が各1件1名みられるのみである。次の(11)は、「そのころは」の後に「というか今もだけど」と書いたため、文末も「好きだ」としたのではないかと考えられる。

(11) 最後に、小さいころから、僕は「つくる」ことが好きだった。そのころは、というか今も
だけど、電車やバスなどの、公共公通が好きだ(→好きだった)。(中学1年生、TC7114Y)

以上のように、中学1年生は「がんばったこと」作文・「夢」作文ともに、「タ形（→ル形）」の誤りが多い。小学生と同様、「思いました」の使い方で誤りが多いことがわかった。

3.6 中学2年生について

まず、「がんばったこと」作文において、誤りは9件9名であり、その大部分(7件7名)は「ル形（→タ形）」の誤りである。「てみる」「ていく」「かかる」「いたらない」「なおりません」「おきません」「NAだ」が各1件(1名)みられる。「いたらない」「なおりません」「おきません」のような否定形を用いるときに誤りが生じている。一方、「タ形（→ル形）」の誤りは少なく、2件2名のみである。

「夢」作文においては誤りが少なく、すべて「ル形（→タ形）」の誤りである(「Nだ」「見えます」が各1件1名)。

以上のように、中学2年生は「がんばったこと」作文に誤りが多く、「夢」作文では誤りがほとんどみられない。「がんばったこと」作文での誤りのほとんどは「ル形（→タ形）」の誤りで、否定形を用いるときなどに誤りがみられることがわかった。

3.7 中学3年生について

まず、「がんばったこと」作文において誤りは少なく、「タ形（→ル形）」の誤りが1件1名、「ル形（→タ形）」の誤りも「悔しいです」「出会います」が各1件1名みられるのみである。

他方、「夢」作文においては、12件11名の誤りがみられる。「タ形（→ル形）」の誤りは7件6名で、「思った」が4件4名、「ていました」「であった」「ありました」が各1件1名あり、小学生によくみられる誤りと同じである。「ル形（→タ形）」の誤りは5件5名で、「でならない」「ことはない」「あります」「Nです」「聞きます」が各1件1名みられる。次の(12)では、「小学生の私には」の後に「(勿論今も)」と書いたため、「不思議でならない」とした可能性が考えられるが、ここでは過去の「小学校の私には」にあわせて「不思議でなかった」となる。

(12) 二度目は警察に電話をかけようとした所で目が合い、五度目でようやく警察に電話をかけられた。この例であげた夢が最長記録で、小学生の私には(勿論今も) 不思議でならない
(→ならなかった)。(中学3年生、TA9934Y)

以上のように、中学3年生では、「がんばったこと」作文には誤りがほとんどみられないが、「夢」作文において誤りが多い。その際に多い誤りは小学生と同様、「思う」と書くべきところを「思っ

た」と書いているという誤りである。

4. まとめ

分析の結果、以下のことが明らかになった。

小学校低学年では「タ形（→ル形）」の誤りが多く、特に、過去のできごとについて振り返り、それについて執筆時の感想を述べる際、「思います」と書くべきところを「思いました」と書いているものが多い。

小学校中学年においても、「タ形（→ル形）」の誤りが多く、「思いました」「ありました」の誤りが目立つというように、特定の語を繰り返し間違えている。一方の「ル形（→タ形）」の誤りは少ないが、低学年ではみられなかった補助動詞の誤りがみられるため、補助動詞を使用する際、時制についても注意するように教師は促したほうが良いと言える。

小学校高学年になると、「がんばったこと」作文では、「ル形（→タ形）」の誤りのほうが多く、「タ形（→ル形）」の誤りが少なくなる。列举型などの型を使って作文を書くという技能がみにつき、書き出しで「がんばりたい事が二つあります」といった文を書くことが多くなるため、過去のことでもル形で書いた可能性がある。教師は列举型を導入する際、時制表現にも気をつけるように注意を促したほうが良い。「夢」作文においては、5年生は「タ形（→ル形）」の誤りのほうが多いが、6年生では「ル形（→タ形）」の誤りが多く、過去の事柄について説明する際、「N です」を用いるといった誤りがみられる。

中学1年生は、両作文において「タ形（→ル形）」のなかの「思いました」の誤が多い。中学2年生は「がんばったこと」作文に誤りが多く、そのほとんどは「ル形（→タ形）」の誤りで、否定形を用いるときなどに誤りがみられる。それに対し、中学3年生では「がんばったこと」作文には誤りがほとんどみられないが、「夢」作文に誤が多い。「夢」作文にみられるのは「タ形（→ル形）」の誤りで、そのなかでも小学生と同様「思った」の誤りが目立つ。

最後に、作文のテーマによる誤用の違いについて述べると、主に過去のことについて書いている「がんばったこと」作文では「ル形（→タ形）」の誤りのほうが多く、主に将来のことについて書いている「夢」作文においては「タ形（→ル形）」の誤が多いという違いがみられた。

今後は、今回の調査・分析結果を児童・生徒の作文指導にいかす方法について考えていきたい。

引用文献

石黒圭（2004）「「～した。」「～した。」と延々と続く文末の単調さをどう解決したらいいか」『國文學 解釈と教材の研究』第49巻7号、pp.42-49、學燈社

砂川有里子・清水由貴子・永島みのり・藤村春菜・宮城信・八木豊・加藤恵梨（2024）「児童・生徒作文コーパス問題例検索システム『J-CONi』の構築と問題例の分析」『日本語習熟論研究』2、pp.135-143、ひつじ書房

ジブリ作品の役割語—虚構度を指標として—

やすい かずえ 安井寿枝（関西外国語大学）

1. はじめに

本発表では、作品の虚構度に応じた役割語の差異を示す。虚構度とは、安井（2024b）で規定した三人称小説における虚構の枠組みによって規定するものである。安井（2024b）では、今井（1975）の原視点から順次配賦視点が配られるという視点論に倣って、虚構の枠組みを図 1 のような入れ子型構造として規定した。虚構度は、現実世界と物語世界が近ければ近いほど低くなり、遠ければ遠いほど高くなる。金水（2003：37）では「役割語は、私たち一人一人が現実に対して持っている観念であり、いわば「仮想現実」（ヴァーチャル・リアリティ）なのである」、「小説、シナリオ等の作品は、作家によって作り出された「仮想現実」の世界であり、そこで用いられるのは役割語である」と述べられている。分析では、この「「仮想現実」の世界」を「小説世界（作品世界）」と考え、その中に存在する「物語世界」を「現実世界」である作品公開年と比較することで虚構度を決定し、役割語の使用に相違があるかを検証した。



図 1 虚構の枠組み

2. 対象作品

スタジオジブリ公式ホームページ内の「スタジオジブリの作品」には、27 作品が挙げられている。分析では、27 作品のうち徳間書店からフィルムコミックが刊行されている 22 作品を対象とした¹。公式ホームページに示されている作品情報を表 1 に示す。

表 1 対象作品情報

通し 番号	作品名	公開年	原作／原案	脚本	監督
1	風の谷のナウシカ	1984	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
2	天空の城ラピュタ	1986	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
3	となりのトトロ	1988	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
4	魔女の宅急便	1989	角野栄子	宮崎駿	宮崎駿
5	おもひでぽろぽろ	1991	岡本螢、刀根夕子	高畑勲	高畑勲
6	紅の豚	1992	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
7	平成狸合戦ぽんぽこ	1994	高畑勲	高畑勲	高畑勲
8	耳をすませば	1995	柊あおい	宮崎駿	近藤喜文
9	もののけ姫	1997	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
10	千と千尋の神隠し	2001	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
11	ギブリーズ episode2	2002	すずきとしお、いしいひさいち	百瀬義行	百瀬義行
12	猫の恩返し	2002	柊あおい	吉田玲子	森田宏幸

¹ 徳間書店からフィルムコミックが刊行されていない作品は、「火垂るの墓」（1988 年公開）「海が聞こえる」（1993 年公開）「On Your Mark」（1995 年公開）「レッドタートルある島の物語」（2016 年公開）の 4 作品である。また、「ホーホケキョとなりの山田くん」（1999 年公開）はフィルムコミックが刊行されているが、中心人物が近畿方言を話すことから除外した。

13	ハウルの動く城	2004	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	宮崎駿	宮崎駿
14	ゲド戦記	2006	アージュラ・K、ル＝グウィン、宮崎駿	宮崎吾朗、丹羽圭子	宮崎吾朗
15	崖の上のポニョ	2008	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
16	借りぐらしのアリエッティ	2010	メアリー・ノートン	宮崎駿、丹羽圭子	米林宏昌
17	コクリコ坂から	2011	高橋千鶴、佐山哲郎	宮崎駿、丹羽圭子	宮崎吾朗
18	風立ちぬ	2013	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿
19	かぐや姫の物語	2013	高畑勲	高畑勲	高畑勲
20	思い出のマーニー	2014	ジョーン・G・ロビンソン	丹羽圭子・安藤雅司・米林宏昌	米林宏昌
21	アーヤと魔女	2020	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	丹羽圭子、郡司絵美	宮崎吾朗
22	君たちはどう生きるか	2023	宮崎駿	宮崎駿	宮崎駿

3. 虚構度を計る項目

虚構度は、時代・国・地名・登場人物・見た目・設定の6項目から決定した。時代は、物語世界の時代が公開年から50年以上離れているか否か²、国は、物語世界の場所が日本以外か否か、地名は、架空の国や地方の地名が明示されているか否か、登場人物は、ことばを話す人型以外の生き物が登場するか否か、見た目は、人型の見た目が現実から逸脱しているか否か、設定は、現実世界にあり得るか否か、を確認した。これらの項目について、肯定されれば1を加算し、虚構度を数字で示した。数字が大きいほど虚構度が高いと考える。この結果、虚構度0が「耳をすませば」、虚構度1が「おもひでぽろぽろ」「ギブリーズ episode2」「コクリコ坂から」「風立ちぬ」「思い出のマーニー」、虚構度2が「となりのトトロ」「猫の恩返し」「借りぐらしのアリエッティ」、虚構度3が「平成狸合戦ぽんぽこ」「崖の上のポニョ」「かぐや姫の物語」、虚構度4が「魔女の宅急便」「紅の豚」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」「アーヤと魔女」「君たちはどう生きるか」、虚構度5が「風の谷のナウシカ」「天空の城ラピュタ」、虚構度6が「ハウルの動く城」「ゲド戦記」となった。

4. 虚構度と役割語の相関

分析では、金水（2024）で役割語の特徴が表れやすいとされている代名詞・終助詞・命令表現を扱う³。さらに、金水（2017）では役割語を話すキャラクターを「クラス1」「クラス2」「クラス3」に分類している⁴ため、本分析でもこの3つのクラスで登場人物を分類し⁵、クラス1とクラス2の登場人物について言語的特徴を示す。

4.1. 人称代名詞

せりふ内に指示代名詞は限りなく少ないため、人称代名詞の特徴を確認する。クラス1に分類できる人物の一人称代名詞・二人称代名詞の使用をまとめたのが表2・表3である⁶。○は女性、●は男性、◐は男女の使用を示す。作品名は割愛し、表1で付した通し番号を用いた。表2を確認すると、虚構度の高い作品では女性の一人称代名詞の種類が少ないこと

² 物語世界の西暦が不明な場合は、乗り物・家電・武器から時代を判断した。

³ 他者のせりふの引用や歌詞は除外した。

⁴ 「クラス1」は主人公および準主人公。「クラス2」はメンター、同調者、敵対者、トリックスター、変貌者、影といったアーキタイプに属するキャラクター。「クラス3」はほぼ1回登場したらそれっきりの人物。

⁵ クラスの判断は、フィルムコミックの登場人物紹介を参考にした。

⁶ 表記の異なり（「わたし」「私」など）は同じ単語（「わたし」）とした。

がわかる。虚構度4の作品群では、ワタシとアタシの2種類の使用が確認できるが、これらの例はアタシの使用が1例のみか使用率が全体の1割に留まるため、女性の一人称代名詞はワタシが主流となる。すると、虚構度4以上の作品では、クラス1の女性の登場人物は1種類の一人称代名詞を専用としているといえる。男性の一人称代名詞では、虚構度の低い作品でオレ、虚構度の高い作品でワタシが使用されている。表3からは虚構度の高い作品でソナタやキサマが確認される。また、女性が聞き手に対してオマエを使用するのも虚構度の高い作品に限られている⁷。ただし、「もののけ姫」のサン以外の登場人物は、オマエを人間以外（オウム・カブ）に対して使用し、人間に対しては使用しないことが男性と異なる部分である。

次にクラス2に分類できる人物の人称代名詞を確認する。紙数の関係上、全体の使用をまとめた表は割愛し、虚構度に応じた特徴のみを述べる。クラス2の一人称代名詞の特徴は、①虚構度の高い作品で女性のオレの使用があること、②虚構度の高い作品でクラス1では確認されない語形があること、である。①の話し手は、「おもひでぽろぽろ」のトシオのばっちゃん、「千と千尋の神隠し」のリン、「君たちはどう生きるか」のキリコである。このことから、女性がオレを使用するのは、虚構度の低い作品では方言、虚構度の高い作品では異世界の人間の言語使用と見なすことができる⁸。金水（2019：81）では、リンについてアニメで描かれる「男性性を具有する少女」の一例だとするが、本稿の分析からは、「男性性を具有する少女」は虚構度の高い作品に描かれやすいといえよう。②については、表4のようにまとめることができる。表4からは、虚構度0や1では特別な人称代名詞が使用されないこと、虚構度の高い作品にアタイが使用されることが確認される。虚構度の高い作品では、主人公の住む世界と異なる世界が描かれやすく、この異なりがアタイに表現されていると考えられる。他にも、「平成狸合戦ぽんぽこ」の狸にオラとソレガシ、「君たちはどう生きるか」の青サギにオ

表2 一人称代名詞の使用（クラス1）

虚構度	通し番号	わたし	あたし	わたくし	おれ	ぼく	われ
0	8	○	○		●		
1	5	○	○		●		
	11					●	
	17	○			●		
	18	○		○		●	●
	20	○	○				
2	3	○					
	12	○					
	16	○				●	
3	7	●			●	●	
	15					●	
	19	○		○			
4	4	○	○			●	
	6	○	○		●		
	9	●					
	10	●	○				
	21	○	○				
	22					●	
5	1	○					
	2	○				●	
6	13	●				●	
	14		○			●	

表3 二人称代名詞の使用（クラス1）

虚構度	通し番号	あなた	あんた	きみ	おまえ	そなた	きさま
0	8	○	○	○	○		
1	17			●	●		
	18	○		●			
	20	○					
2	12	○	○	○			
	16	○		●			
3	7			●			
4	4	○		●			
	6	○	○		●*		
	9	○			○	●	
	10	○				●	
	22	●		●	●		
5	1	○			○		
	2	○		●	●		
6	13	○	○	●	○		
	14	○		○	●		●

※オマエ・テメエも含む。

⁷ 「耳をすませば」で雫がオマエを使用するのは1例で、自身の記憶の中に出てきた聖司に対して用いられたもので、聞き手に対して実際に発せられたものではない。

⁸ キリコはアタイとオレ、きりこはアタシを使用する。

イラ・アッシ・アツチ、「ハウルの動く城」のカルシファーにオイラが確認されることから、虚構度の高い作品ほど人間以外の話し手が登場するために

表4 特別な一人称代名詞の使用（クラス2）

虚構度	人間		人間以外	
	女性	男性	女性	男性
0,1				
2	わし			わし
3		わし	おら	わし、おら、それがし
4	あたい	わし		わし、おいら、あっし、あっち
5	わし			わし
6	あたい	わし、あっし		わし、おいら

特殊な一人称代名詞が使用されると考えられる。虚構度6の人間が使用するアッシは二人称代名詞と共に考察する。クラス2の二人称代名詞の特徴は、①虚構度1～3の作品群にもソナタ・キサマ・女性のオマエの使用が確認されること、②虚構度の高い作品にオマエの転訛形（オメエ・テメエ）が多くなること、③「ハウルの動く城」のマルクルにソコモトが唯一確認されること、である。①については、「かぐや姫」のソナタと「コクリコ坂から」のキサマは、物語世界の時代が関係している。一方、「平成狸合戦ぽんぽこ」「崖の上のポニョ」のソナタと「猫の恩返し」「平成狸合戦ぽんぽこ」のキサマは、話し手が人間ではないことが共通する。「おもひでぼろぼろ」「平成狸合戦ぽんぽこ」「かぐや姫」の女性が使用するオマエは、それぞれ方言・人間以外・時代を表現していると考えられる。②については、虚構度4以上のクラス2に海賊などの位相が存在することが要因だといえよう⁹。③については、マルクルは老人に変身したときにソコモトを使用する。この使用は、人間が使用する一人称代名詞アッシと共通する使用である。アッシは、「ゲド戦記」のハイタカが別人に変身したときに使用されている。このように、虚構度の高い作品内で登場人物が別人に変身すると虚構度がさらに高まるため、アッシやソコモトなど他の作品では使用されない特殊な人称代名詞が使用されると考えられる。

4.2. 終助詞

終助詞¹⁰では、クラス1の登場人物に、①虚構度の低い作品で女性にカモ系¹¹、男性にノナ・ヨナの使用があること、②虚構度の高い作品で女性にゾ・ワヨネ、男性にノサ・モンカの使用があること、③虚構度に応じて女性のサ・ノカの使用に差があること、が確認された。①について、用例は以下のとおりである¹²。これらは自然談話に近い使用だと考えられる。

- 1) うーん…… わたしのことを からかっているのかも (8・1-107)
- 2) ときどきだったら ときどきの方が いいのかもよ (5・3-11)
- 3) 何かすてきなものが 見つかるかも…… (12・2-86)
- 4) お前の弁当 ずいぶん でっかいのな (1-141)
- 5) よくそういう ハズカシイこと 平気でいえるよな (2-130)

⁹ そのため、「紅の豚」のポルコはクラス1であるものの転訛形を使用する。

¹⁰ 「おもひでぼろぼろ」に出現する山形方言のガ・ベ・ケロは除外した。

¹¹ カモ・カモネ・カモヨ・ノカモ・ノカモヨの総称。

¹² ルビは省略する。括弧内は、(通し番号・巻号・頁数)である。吹き出し内の改行には空欄を設けた。

②について、用例は以下のとおりである。

- 6) 母さんを バカにすると 許さんぞ (10・3-158)
- 7) ぶつかるぞ!! (1・1-130)
- 8) 見守るってまさか カラスに化けてるんじゃ ないわよね (13・2-116)
- 9) 町や人を 焼きに行くのさ (13・3-125)
- 10) あんな怖い人の所へ ひとりで行けるもんか (13・3-38)

ゾはサンとナウシカが使用する。彼らは、金水(2025:216)では「武装戦闘美女」とされているとおり現実世界とかけ離れた存在といえ、「武装戦闘美女」が虚構度の低い作品に登場しないことがゾの偏りに表れると考えられる。ワヨネはソフィーが使用する。8)では「ないよね」と言えるところを「ないわよね」としている。ヨネは虚構度に関係なくすべての作品で確認される。たとえば、虚構度0の「耳をすませば」では、雫が「かわいく ないよね…」(2-97)を使用する。ヨネとワヨネの違いは話し手の年齢層にあると予想され、クラス1では少年や青年が中心となるため、ワヨネが使用されないといえよう。ノサ・モンカはハウルが使用する。サやモノ・モンは虚構度に関係なく確認されていることから、ノサ・モンカは虚構度やキャラクターが関係しているとも考えられる。③について、用例は以下のとおりである。

- 11) でもさ杉村だって タ子の気持ち 知ってるわけじゃ ないし…… (8・2-60)
- 12) 宝塚とかさあ…… (5・3-132)
- 13) メイ みんな 逃げちゃうって さ (3・1-99)
- 14) じつはわたしも ここんとこ いろいろあった モンだからさー (12・1-128)
- 15) 杉村だったのかア… タ子の好きな人って (8・1-47)
- 16) そうさ この国いち こわ〜い魔女だよ (13・1-136)
- 17) なぜ人間など 喰おうというのか (9・3-88)

例 11) ~15) は虚構度 0~2、例 16) 17) は虚構度 6 と 4 である。用例を確認すると、虚構度の高い作品では、サは老年、ノカは「武装戦闘美女」を表していると考えられる。サについては、クラス2の老年の多くが使用することから、全体として〈老人語〉として扱われていると判断される。一方、先のワヨネは、ソフィー以外では虚構度1の「思い出のマーニー」のセツのみが使用することから、〈老人語〉とはいえない。

次にクラス2の登場人物では、①虚構度の低い作品で男女ともにカモ系、男性にトモの使用があること、②虚構度の高い作品で女性にカイ・ノカ・ノサ・モンカの使用があること、③虚構度の高い作品ほどクラス1と異なる終助詞を使用すること、が確認された。①からは、クラス1、2ともに虚構度の低い作品ほどカモ系が使用されるといえる。②は「武装戦闘美女」であることが影響しているといえる。③で確認される終助詞は、虚構度2のゲエ・ケナ・ニャ系¹³、虚構度3のジャ・カノ系¹⁴・ノウ、虚構度4のガナ・ヤナ、虚構度5のノ

¹³ ニャ・ニャよ・カニャの総称。

¹⁴ カノ・ノカノの総称。

オ・ワイ、虚構度6のカイノ・ジャ・ノカヨである。これらの多くは〈老人語〉として使用されている。さらに、老年+異形（釜爺）、老年+変身（ハイタカ）の場合はガナやカイノのような他の作品では使用されない特殊な終助詞が確認される。虚構度2の作品群に確認される特殊な終助詞は〈田舎ことば〉〈動物語〉である。

4.3. 命令表現

命令表現¹⁵では、①虚構度の高い作品でクラス1の女性の登場人物が命令形を使用すること、②虚構度に応じてオ+連用形・タマエの使用に差があること、が確認された。①については、先の「武装戦闘少女」が影響している。安井（2024a）では、「ヒーローの旅」において命令形が多用されると指摘した。虚構度の高い作品では「ヒーローの旅」が典型になることから女性の命令形の使用が行われると考えられる¹⁶。②について、虚構度の低い作品では、オ+連用形は人間以外に使用するか定型（オアガリ）、タマエは近代語として使用されている。一方、虚構度の高い作品では、オ+連用形はメンター（ヒイ様・ハク・釜爺・大叔父・ポムじいさん）、タマエはメンター（大叔父）と敵対者（ムスカ）が使用している。さらに、祝詞や呪文、神への発言についてもタマエが確認できる。

5. おわりに

以上から、虚構度は伝達回路に影響すると考える。山田（2007:22）は、フィクションのコミュニケーションにおいて、役割語には「微視的伝達」と「巨視的伝達」があるとしている。微視的伝達は「日常会話で対話者と話すことばのように、できるだけ自然なものの方がよい」とし、巨視的伝達は「読者（観客）に向けられた発話でもある。いかに自然な発話でも観客が理解できなければ意味がない」とする。本分析からは、虚構度の低い作品ほど微視的伝達が、虚構度の高い作品ほど巨視的伝達が重視されるといえよう。

引用文献・参照ホームページ

今井文男（1975）『文章表現法大要』笠間書院。

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。

——（2017）「第11章 言語—日本語から見たマンガ・アニメ」山田奨治（編著）『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法—』ミネルヴァ書房、pp. 239-262.

——（2019）「第6章 アニメキャラクターの言葉」田中牧郎（編）『シリーズ〈日本語の語彙〉7 現代の語彙—男女平等の時代—』朝倉書院、pp. 72-83.

——（2024）「役割語の古典としてのジブリアニメ（その二）」『日本語学』43（1）、明治書院、pp. 106-113.

——（2025）「第6章 役割語でジブリアニメを読み解く——『もののけ姫』を中心に」金水敏（編）『役割語とキャラクター——ポピュラーカルチャーをより深く理解するために』研究社、pp. 169-221.

安井寿枝（2024a）「キャラクター言語に見るジェンダー意識—宮崎駿作品の特徴とは—」『日本語学』43（1）、明治書院、pp. 46-53.

——（2024b）「虚構の中の話し言葉について—虚構度・創作度・脚色度—」日本近代語研究会（編）『論究日本近代語 第3集』勉誠社、pp. 265-279.

山田治彦（2007）「役割語の個性性と普遍性—日英の対照を通して—」金水敏（編）『役割語研究の地平』くろしお出版、pp. 9-25

スタジオジブリ公式ホームページ URL: <https://www.ghibli.jp/> （最終閲覧日：2025年9月29日）

¹⁵ 聞き手に行為の施行を要求する場合のみを述べる。

¹⁶ 「魔女の宅急便」のキキが命令形を使用することも「ヒーローの旅」が起因すると考える。

人物の性格と使用する人称詞との関係について —アニメーション作品を資料として—

深田芽生 (FUKADA Mei)

明治大学大学院 学生

1. 研究背景と目的

従来の役割語研究において、人物の性格は副次的に捉えられている要素であった。しかし性格を人物属性の1つとして注目した西田(2009)や富樫(2009)をはじめとする一連の研究の後、近年では性格に起因する言葉遣いは、社会的属性に起因する役割語とは似て非なるものであり、その結びつきは固定的ではないという見方が示されるようになってきている。これまでの研究では、人物の属性と言葉遣いはある程度固定的なものとして捉えられていたために用例をあげる形での調査が多かったが、このような傾向的な言葉遣いの使用実態を網羅的に把握するためには、コーパスを利用した量的な調査が有効であると考えられる。さらに、西田や富樫らの研究では「ツンデレ」のような特定の性格に注目されていたが、これらの性格は一般的でないのではないかとすることも指摘されており(金水 2016)、誰にでも分かりやすいより基本的な性格を複数取り上げることも必要である。

そこで本発表では、特に人物像が表れやすいとされる人称詞を対象として、①選択される一人称と一貫性の有無に注目し、複数の性格と各要素との対応関係を明らかにすること、そして②なぜ特定の性格と一人称の使用の特徴が結びつくのか、その理由をその一人称が持つ特徴から考察することを目的として、複数の性格と人称詞との関係について量的な調査及び分析を行った。

2. 研究方法

研究対象は、国民的アニメーションとされる「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」「名探偵コナン」「ポケットモンスター」「ONE PIECE」の5シリーズの劇場版作品と、その主要登場人物である。対象のシリーズは田中(2014)を参考に、アニメシリーズの累計放映年数やメディアミックスの有無などの基準を設け選出した。さらに劇場版作品の中から、全ての主要登場人物の発話が一定量確認できることを基準に各シリーズから5作品ずつ選出し、計25作品を分析対象とした。

また調査は、各登場人物の性格の判定、そして発話に見られる言葉遣いの分析という二段階の手順で行った。人物の性格の判定にあたっては、作者や出版社が公開している人物紹介文を用いた。『分類語彙表 増補改訂版』や村上(2002)を用いて性格表現用語を抽出した後、類語表現をまとめていくつかの性格類型とした。今回は深田(2020)で調査した性格類型のうち、よりステレオタイプ性の高い言葉遣いを見るべく、2名以上に共通している性格類型とその保持者を主な調査対象とした。対象となっているのは表1に記載の13の性格類型と保持者28名である。

表 1：対象となる 13 の性格類型とその保持者 28 名

保持者数	性格類型	保持者
6人	頭の良い	出木杉（ドラえもん）、ドラミ（ドラえもん）、風間くん（クレヨンしんちゃん）、円谷光彦(名探偵コナン)、サンジ（ONEPIECE）、ニコ・ロビン（ONEPIECE）
	女好き	野原しんのすけ（クレヨンしんちゃん）、野原ひろし（クレヨンしんちゃん）、毛利小五郎（名探偵コナン）、タケシ（ポケットモンスター）、サンジ（ONEPIECE）、ブルック（ONEPIECE）
5人	優しい	のび太（ドラえもん）、しずちゃん（ドラえもん）、出木杉（ドラえもん）、パパ（ドラえもん）、毛利蘭（名探偵コナン）
	頼もしい	ジャイアン（ドラえもん）、ドラミ（ドラえもん）、ボーちゃん（クレヨンしんちゃん）、モンキー・D・ルフィ（ONEPIECE）、ロロノア・ゾロ（ONEPIECE）
4人	臆病	スネ夫（ドラえもん）、マサオくん（クレヨンしんちゃん）、吉田歩美（名探偵コナン）、ウソップ（ONEPIECE）
3人	明るい	ネネちゃん（クレヨンしんちゃん）、ウソップ（ONEPIECE）、ブルック（ONEPIECE）
	御調子者	鈴木園子（名探偵コナン）、ウソップ（ONEPIECE）、ブルック（ONEPIECE）
	厳しい	ロロノア・ゾロ（ONEPIECE）、サンジ（ONEPIECE）、ニコ・ロビン（ONEPIECE）
	好奇心旺盛	吉田歩美（名探偵コナン）、鈴木園子（名探偵コナン）、トニートニー・チョッパー（ONEPIECE）
	しっかりもの	しずちゃん（ドラえもん）、ドラミ（ドラえもん）、ナミ（ONEPIECE）
2人	義理堅い	ロロノア・ゾロ（ONEPIECE）、フランキー（ONEPIECE）
	紳士的	円谷光彦（名探偵コナン）、ブルック（ONEPIECE）
	ナルシシスト	スネ夫（ドラえもん）、風間くん（クレヨンしんちゃん）

また言葉遣いの分析では、調査対象 25 作品の日本語字幕スクリプトを用いた。人物の属性と言葉遣いの結びつきに関する先行研究では、人物の属性は人称詞や感動詞、文末表現に表れるとされている（真田 2006 など）が、人称詞はその中でも取り上げられることの多い言葉遣いである。今回はこのうち、特に一人称に注目して調査を行った。対象としたのは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」のコアに収録されている語彙素となっている一人称代名詞と、役職名称（鈴木 1973）である。調査範囲では、「わたし」「ぼく」「おれ」「おら」「おいら」「わし」「自分」、そして名前と役職という 9 種が表れた。なお、今回は表記には注目しておらず、複数を示す形についても単数として集計をしている。

これらの対象作品の発話から人称詞を抽出し、性格別に集計することで、一人称の使用とその人物の性格がどのように結びつくのかについて調査、及び分析を行った。

3. 調査結果

3-1. 概観

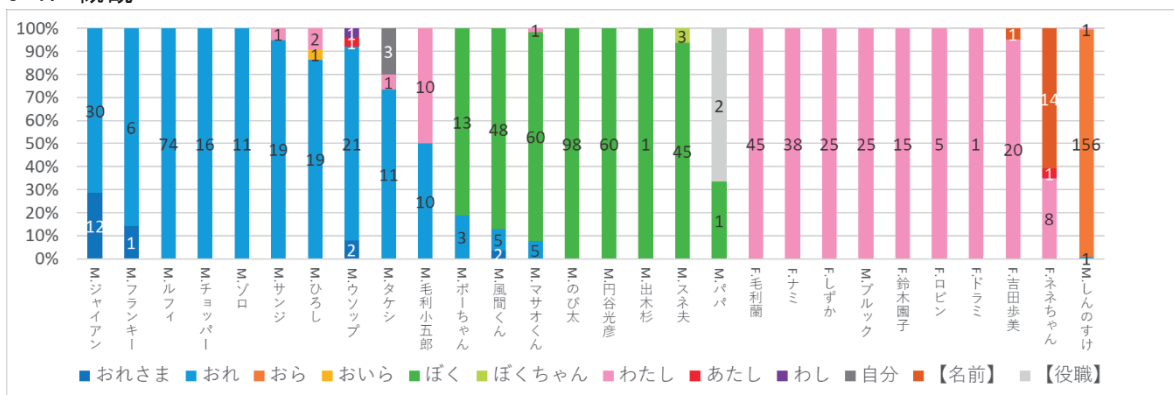


図 1：一人称の使用数（100 パーセント積み上げ縦棒グラフ、一人称毎）

集計の結果、調査対象 28 名の一人称の使用数と割合は以下ようになった。横軸登場人物名の上にある M は男性、F は女性の話者であることを示している。図 1 の結果から、女性は「わたし」単一使用がほとんどであるのに対し、男性は人物によって「ぼく」「おれ」の選択が見られること、そして場面や相手に関わらず一定の一人称を用いる人物と、一人称の使い分けをする人物がいることの 2 点が確認できた。そこで、男性話者が使用する「ぼく」「おれ」の選択、そして使用する一人称の一貫性の有無と、性格との結びつきに注目した分析を行った。

3-2. 男性話者による「ぼく」「おれ」の選択と性格との関係

図 1 に見られた「おれ」を 7 割以上の頻度で使用する男性登場人物 9 名について、それぞれが保持する性格に注目してみると、「おれ」使用話者の中では「頼もしい」「厳しい」「義理堅い」「女好き」という性格が共通して見られることが分かった。そこでこれら 4 つの性格について、それぞれの性格保持者グループ（表 1）の中で、「おれ」使用者はどの程度の割合を占めるのかを確認したところ、「頼もしい」（図 2）「厳しい」（図 3）「義理堅い」（図 4）の 3 つの性格については、「おれ」使用者が過半数を占めるという結果となった。

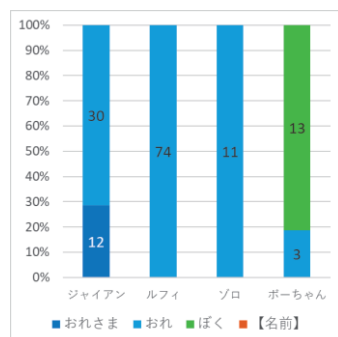


図 2：頼もしい

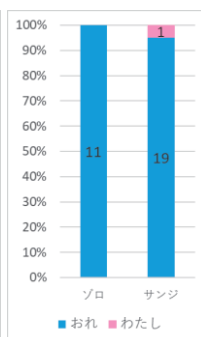


図 3：厳しい

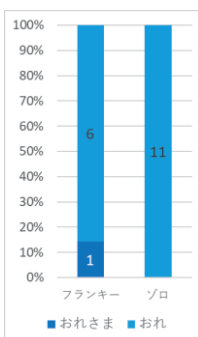


図 4：義理堅い

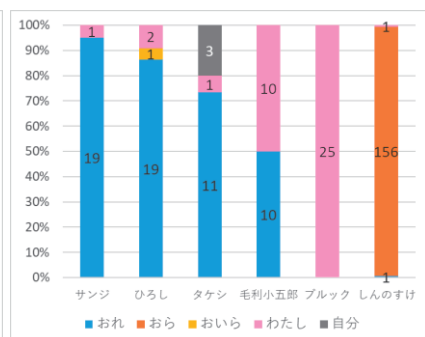


図 5：女好き

同様に、「ぼく」を主に使用する男性登場人物 8 名に共通した性格に注目すると、こちらは「頭の良い」「ナルシスト」「臆病」「優しい」という 4 つの性格が抽出され、これら 4 つの性格についても、図 6 から 9 のように男性話者の中では「ぼく」使用者が過半数を占めることが確認できた。

これらの調査結果をまとめると、「頼もしい」「厳しい」「義理堅い」、特に「頼もしい」性格の男性登場人物は一人称に「おれ」を傾向的に用いやすく、「頭の良い」「ナルシスト」「臆

病」「優しい」、特に「頭の良い」「臆病」「優しい」といった性格の人物は、一人称に「ぼく」を用いやすいといえる。

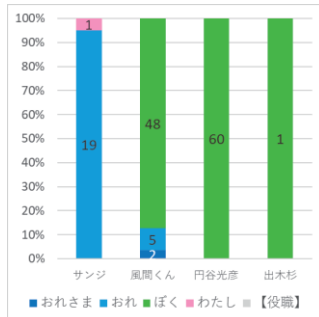


図 6：頭の良い

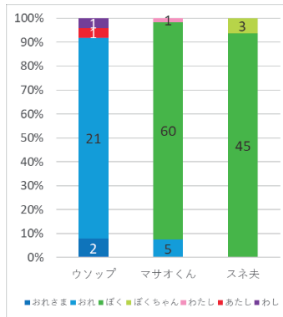


図 7：臆病

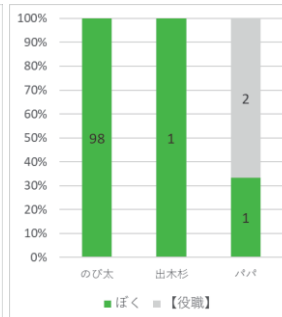


図 8：優しい

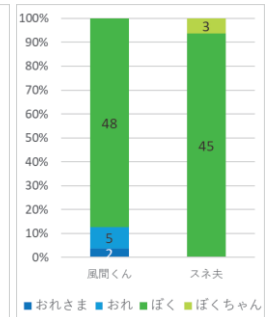


図 9：ナルシシスト

これらの一人称の使用に特徴が見られた性格と一人称に関して、『日本国語大辞典 第二版』の語釈、及び語誌を照らし合わせると、今回の調査範囲では、「おれ」は精神的な面での強さが表れたり、他者への強い態度をとるような性格に用いられやすく、「ぼく」は精神的な面での未熟さや弱さが表れたり、他者への穏やかな態度に表れるような性格、または知性を表すような性格に用いられやすいことがそれぞれ確認された。このことから、男性話者に多く使用が見られる一人称「おれ」「ぼく」は対照的な性格と結びつきやすく、双方向的に互いの特徴を際立たせる働きがあると考えられる。

3-3. 一人称の一貫性の有無と性格との関係

次に、使用する一人称に一貫性があるかどうかという観点から性格との結びつきを見る。図 1 から、一人称が単一使用の人物に共通しているのは「優しい」「しっかりもの」「頼もしい」「紳士の」の 4 つの性格、複数使用の人物に共通しているのは「頭の良い」「女好き」「臆病」「ナルシシスト」という 4 つの性格であった。そして、これらの複数使用する人物のうち、「臆病」「女好き」「ナルシシスト」の 3 つの性格については過半数以上が一人称を複数使用していた。そこでそれぞれの一人称が変化する場面を確認したところ、用例からは、「臆病」な人物が同じ発話相手に対して一人称を変える発話例と、「女好き」な人物が初対面の女性に対してのみ、自己紹介時に一人称を変えるという特徴的な発話例が見られた。

「臆病」な人物による発話例

- ウソップ 「う… 本当に… 大事なときに 俺は…役に立たねえ 全然 強さが足りねえ…」
「見たか ルフィ あの野郎… 俺様の迫力に 尻尾 巻いて逃げ出しやがった」
(『ONE PIECE STAMPEDE』、2019 年)
- マサオくん 「どうせ 僕なんか…僕なんか弱虫でなんの取り柄もないしー」
「兄弟子の俺についてきな」 (『爆森盛！カンフボーイズ～拉麺大乱～』、2018 年)
- スネ夫 「ぼ… 僕に聞かないで」
「なんたって 黄金のカブトムシだもんねえ 僕ちゃんの勘では… あの辺りが怪しい」
(『映画ドラえもん のび太と奇跡の島～アニマル アドベンチャー～』、2012 年)
- 吉田歩美 「私たちで助けなきゃ」
「じゃあ 歩美が 名前 付けてあげる」 (『名探偵コナン 漆黒の追跡者』、2009 年)

「女好き」の登場人物による発話例

- タケシ 「俺はタケシ 結構イケてる ポケモンブリーダー」
「もちろんですとも 自分は 世界一の ポケモンブリーダーを— 目指している タケシです」
(『劇場版ポケットモンスター セレビィ 時を超えた遭遇』、2001 年)
- サンジ 「ここは 俺が止める お前たちはルフィのところへ！」
(『ONE PIECE STAMPEDE』、2019 年)
- 「どうも マドモワゼル 私 この船のコック サンジです」
(『ONE PIECE FILM GOLD』、2016 年)

ここでも前項と同様に、一貫性の有無に特徴が表れた性格について『日本国語大辞典 第二版』の語釈、及び語誌を見てみると、一貫性の無い一人称の使用は、特に「臆病」「女好き」「ナルシスト」のような感情が揺れ動きやすくその振れ幅が大きく安定しない性格に見られやすく、一貫性を持った使用は他者に対して一定の態度を示されるような、「優しい」「しっかりもの」「頼もしい」「紳士的」といった精神的に安定した性格に見られやすい傾向にある可能性が示唆された。

4. 調査結果のまとめ

国民的アニメ 5 シリーズの主要登場人物について、その性格と発話を対象として、量的な調査を行った結果、以下の 3 点が明らかになった。

- ① 一人称「おれ」は他者に対して強い態度を取れるような「頼もしい」「厳しい」といった性格の人物に用いられやすく、「ぼく」は弱弱しさや他者に対しての穏やかな態度が

表れる「臆病」や「優しい」、または知性が表れる「頭の良い」といった性格の人物に用いられやすいこと

- ② 一人称「おれ」と「ぼく」は対照的な性格と結びつきやすく、双方向的に互いの特徴を際立たせる働きがあること
- ③ 感情が揺れ動きやすく安定しない性格はその起伏によって様々な人称詞を使用し、精神的に安定した性格は一貫した一人称を使用する傾向にあること

これらの結果から、「場」における自己と他者の位置づけ方に深く関わる人称詞は、その使用の一貫性や種類、使い分けといった部分に性格との結びつきあることが確認された。

本発表では特に一人称毎の使用率に注目した調査結果を報告したが、日本語において人称詞は省略することも可能であり、用法によってその可否も異なる。今回は有標の例のみを扱ったが、今後は量の調査を活かした観点からの分析も加えつつ、調査を進めていきたい。

参考文献

- 金水敏[編] (2014)『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏 (2016)「役割語とキャラクター言語」金水敏(編)『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』pp.14-31、私家版
- 国立国語研究所 (2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 真田信治(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波書店
- 田中ゆかり (2014)『ドラマと方言の新しい関係ー『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へー』笠間出版
- 富樫純一 (2009)「ツンデレ属性と言語表現の関係ーツンデレ表現ケーススタディー」シンポジウム「役割・キャラクター・言語」(2009/03/28,29 神戸大学百年記念館) 西田隆政 (2010)「「属性表現」をめぐるツンデレ表現と役割語との相違点を中心に-」甲南女子大学研究紀要 文学・文化編 (46)、1-11、2009
- 西田隆政 (2009)「ツンデレ表現の待遇性：接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に」甲南女子大学研究紀要、文学・文化編＝Studies in Literature and Culture (45) , 15-23, 2009-03-19
- 深田芽生 (2020)「役割語研究の視点から見た人物の性格と言葉づかい -アニメシリーズの人物紹介文と登場人物の発話の分析-」国際日本学研究論集 15 1-20, 明治大学大学院
- 村上亘寛 (2002)「基本的な性格表現用語の収集」性格心理学研究 11 (1), 35-49

日本語学会2025年度秋季大会 ワークショップ

通時コーパスをひらく

ー『日本語歴史コーパス』と『OpenCHJ』ー

お ぎ そ としのぶ きたざき ゆうほ く ぼ まさこ こうの ともあき
 小木曾 智信※・北崎 勇帆・久保 証子・鴻野 知暁・
 た な か まきろう むらかみ けん むらやま み わ こ わたなべ ゆ き
 田中 牧郎・村上 謙・村山 実和子・渡辺 由貴

はじめに：ワークショップの趣旨

国立国語研究所では 2009 年に開始した「通時コーパスの設計」プロジェクト以来、『日本語歴史コーパス』(CHJ) の構築・公開を行ってきた。現在は共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の中で、CHJ の拡張を継続して行うとともに、オープンデータとして外部の研究者が作成したコーパスを受け入れて公開する準備を進めている。この新しいコーパスは OpenCHJ と名付け、対象を日本語史資料に限定せずに 2025 年から公開を始めた。

本ワークショップは、「通時コーパスをひらく」と題して、

通時コーパスを拓く：日本語史研究に不足する資料を開拓して CHJ に加える

通時コーパスを開く：プロジェクト外部のオープンデータを OpenCHJ に加える

という 2 つの側面から、今秋以降に公開を予定している 3 つの資料のコーパスについて紹介する。あわせて OpenCHJ の取り組みについて紹介し、フロア参加者と意見交換を行う。

ワークショップの構成

このワークショップは下記の 4 つの発表と質疑の時間で構成される。

- ① 『日本語歴史コーパス』と『OpenCHJ』 小木曾智信
- ② 『法華百座聞書抄』コーパスの構築と公開 鴻野知暁・田中牧郎
- ③ 「上方絵入狂言本」コーパスの構築と公開 久保証子・小木曾智信・村上謙
- ④ 大蔵流狂言台本『虎寛本』コーパスの構築と OpenCHJ での公開 北崎勇帆・渡辺由貴・村山実和子
- ⑤ 質疑応答・ディスカッション

謝辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の成果の一部です。

『日本語歴史コーパス』と『OpenCHJ』

おぎそ 智信 (国立国語研究所・総合研究大学院大学)

1. 『日本語歴史コーパス』の現状と課題

『日本語歴史コーパス』(CHJ, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>) の現在の登録ユーザ数は約 4.5 万人、年間の検索回数は約 63 万件となっている。学会発表や研究論文での利用状況を見ても、このコーパスが当初より目的としていた「デジタル時代における日本語史研究の基礎資料」として既に定着し、研究のインフラとすることがほぼ実現できているように思われる。CHJ は、国立国語研究所の基幹研究プロジェクトとして、2009 年より 6 年間の共同研究プロジェクトを 2 期にわたって実施する中で構築されてきた。この間、年間の予算額は概ね 3000 万円規模であり、中期計画に基づいて(比較的)大規模な予算を投入して体制を作り、多くの人員の協力のもとで実現したものである。このコーパスの構築は、大学共同利用機関のミッションに照らして、国立国語研究所にふさわしく、必要な仕事であったし、また広く利用され十分な効果を生んだといえよう。

しかし、所外の研究者から見たとき、こうして作られたコーパスは(それが質・量の両面で優れたものであればあるほど)おいそれと構築に手を出せるものではなく、コーパス作りは一般利用者の自分には関係のないこと、という意識が芽生えてしまっていたように思われる。また、CHJ の利用が進む中で、コーパスに収録されていない資料が研究に使われない、という問題も顕在化してきた。CHJ の構築にあたっては、日本語史研究の上で価値のあるものを選定して収録してきたが、それでも従来利用されてきた価値ある資料のごく一部を扱っているに過ぎない。可能であれば収録資料を増やしたいところではあるが、容易ではない。テキストの権利関係の課題もあるが、基本的にはコーパスの整備が極めて高コストであること、とりわけ専門性の高い資料では整備が容易でないことが問題である。

2. 伽藍とバザール：CHJ と OpenCHJ

このような状況の中、2022 年から開始した国語研共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」では、引き続き CHJ に不足する資料を追加するとともに、OpenCHJ と題して、外部の研究者らが作ったデータを CHJ のように公開し、共同利用できるようにする試みを開始した(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/open-chj/>)。プロジェクト予算は従来の 3 分の 1 程度の規模であり、以前のように CHJ に半年ごとに新しい資料を追加するようなことはできないが、コーパスの拡張を続けつつノウハウを維持している。一方、OpenCHJ は国語研外部の研究者らを中心に新しい開かれた形でコーパスを構築することを目指すものである。

ソフトウェアの開発の方法論としてカセドラル方式とバザール方式があるとされる(Eric Raymond (1997) *The Cathedral and the Bazaar*, 邦訳『伽藍とバザール』)。これに擬え、CHJ が閉じたメンバーによる精密な設計にもとづいて作られるカセドラル方式の

特徴を備えるのに対して、OpenCHJ は開かれた大人数による自発的協働にもとづいて作られるバザール方式の特徴を備えたコーパスとして成長することを期待している。国語研外部の多くの人が自由に参加しデータを持ち寄って整備して広く公開するコーパスである。国語研のプロジェクトはノウハウを活かしてその活動のための環境・ツールを整備することを担う。なお、OpenCHJ に収録できるテキストは、一般公開・再利用が求められるため、著作権をはじめとする権利関係がクリアになったオープンデータであることが前提となる。これは CHJ が権利保護のため全文データを公開できないことと対照的である。

OpenCHJ は、先に課題として述べたコーパスの開発者と利用者の乖離の問題を乗り越えるために有効である。コーパスの利用者が自分でもコーパスを作ることができるようになることで、言語資源の充実と研究活動の高度化が見込まれる。そしてそれが可能になれば、専門性の高い資料のデータを当該資料の専門家が整備して OpenCHJ として公開する道も拓かれるだろう。そうなればコーパス収録資料の制限とそれによる研究対象の偏りの問題も解決に向かう見込みがある。こうした専門性の一方で、市民に開かれたオープンデータによる研究資源整備活動という点で、オープンサイエンスの実践としても有意義なものとなるだろう。また、データの利用に制限がないことは自然言語処理等の他分野での研究利用にも有利である。

3. OpenCHJ (Open Corpus of Holistic Japanese) ver.2025.3

OpenCHJ の名称はもともと CHJ: Corpus of Historical Japanese のオープン版を意図して名付けたものであるが、その後、対象を歴史的資料に限らずに方言や現代語までを含めた包括的なものとして広げていくことを想定して、Open Corpus of Holistic Japanese の略として読み替えた。

この最初のバージョン 2025.3 (<https://github.com/togiso/OpenCHJ>) として「速記叢書 講談演説集」、青空文庫の国語教科書採録 6 作品、渋谷栄一氏による『源氏物語』を公開した。バザール方式の実現にはまず動くプロトタイプを用意することが必要だとされる。そのための第一歩として、プロジェクトリーダーが中心となり率先垂範のつもりで用意したのがこれらのデータである。広く参加を求めるために、今後、修正用ツールの公開や講習会などを通じて環境を整えていく予定である。

4. 本ワークショップについて

本ワークショップでは、このあと、新たに CHJ や OpenCHJ の一部として公開を予定している資料 3 件について詳しく紹介する。このうち、『法華百座聞書抄』『上方絵入狂言本』は OpenCHJ としても公開可能なデータであるが、プロジェクトによって CHJ と同等レベルの形態論情報の修正を行ったことから CHJ での公開としたものである。一方、『虎寛本』コーパスはデータ整備の度合いが十分でないこともあり OpenCHJ として公開する。今後、データの整備が進み利用者の希望が多い場合には形式を整えて CHJ へ収録することも考えられる。将来的に OpenCHJ として公開される貴重な資料についても同様である。

『法華百座聞書抄』コーパスの構築と公開

鴻野 知 曉 (大阪大学), 田 中 牧 郎 (明治大学)

1. はじめに

国立国語研究所では通時的研究に資するデータベースとして『日本語歴史コーパス』の構築・公開が進められてきたが、平安鎌倉時代のコーパス構築においては、和文資料だけではなく、漢文系資料を収録し、文体的変異をコーパスに反映させる必要がある。漢文系資料として、国立国語研究所で『法華百座聞書抄』、『尾張国郡司百姓等解文』、『高山寺本古往来』などのコーパスの開発が進行している¹。これらの資料には異体字、宣命書き、返読、訓点など、和文系統の資料にはない特殊な表記様式が含まれ、それらを電子化する際に定められた仕様は、同種の表記を有する資料をコーパス化する際にも有効である。

上記漢文系資料の中で『法華百座聞書抄』は 1110 年に 300 日間にわたって講じられた法華経等の説教の聞き書きである。原文は片仮名を主体とした漢字片仮名交じり文で、典拠の影響もあって漢文訓読語の影響が大きいとされる。中世語への過渡的な段階を示す例が見られることが特徴である。

2. 設計方針と公開形式

本コーパスは、小林芳規編 (1975) 本文篇を解析用のテキストとして使用した。振り漢字、傍書、誤脱、返読などの要素を XML タグの属性等で取り込み、原文の状態をできる限り復元できるような方針で設計してある²。ウェブアプリケーション『中納言』と全文検索システム『ひまわり』の両方で検索を行えるようにデータを公開することを検討している。『中納言』では、『日本語歴史コーパス』に収められた『今昔物語集』などの他作品と一括して検索を行えるといった長所がある。返読前の文字列は原文 KWIC に表示されるため、返読前・返読後の語順を見比べることができる。また、検索結果の語について、原文の表記別に集計することが容易である。一方で、『中納言』では左ルビや、注記 (傍書) がコーパスデータに含まれないといった欠点もある。『ひまわり』では、コーパス本文全体をウェブブラウザで閲覧することができる (たとえば左ルビ・右ルビの区別もブラウザ上で一目でわかる) といった長所がある。しかしながら、返読箇所の原文の様態を、検索

¹もともと、日本学術振興会科学研究費基盤研究 (B)「和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究」(24320086、代表者：田中牧郎)において、開発が進められていた。

² タグセットの概要については河瀬彰宏・野田高広 (2014) を参照されたい。また、コーパス公開時に、合わせて、詳細な仕様書も公開する予定である。

結果やブラウザ上でうまく表示できないといった欠点もある。図1に、『ひまわり』によってコーパス本文をブラウザ表示した画面（開発中のもの）を載せた。

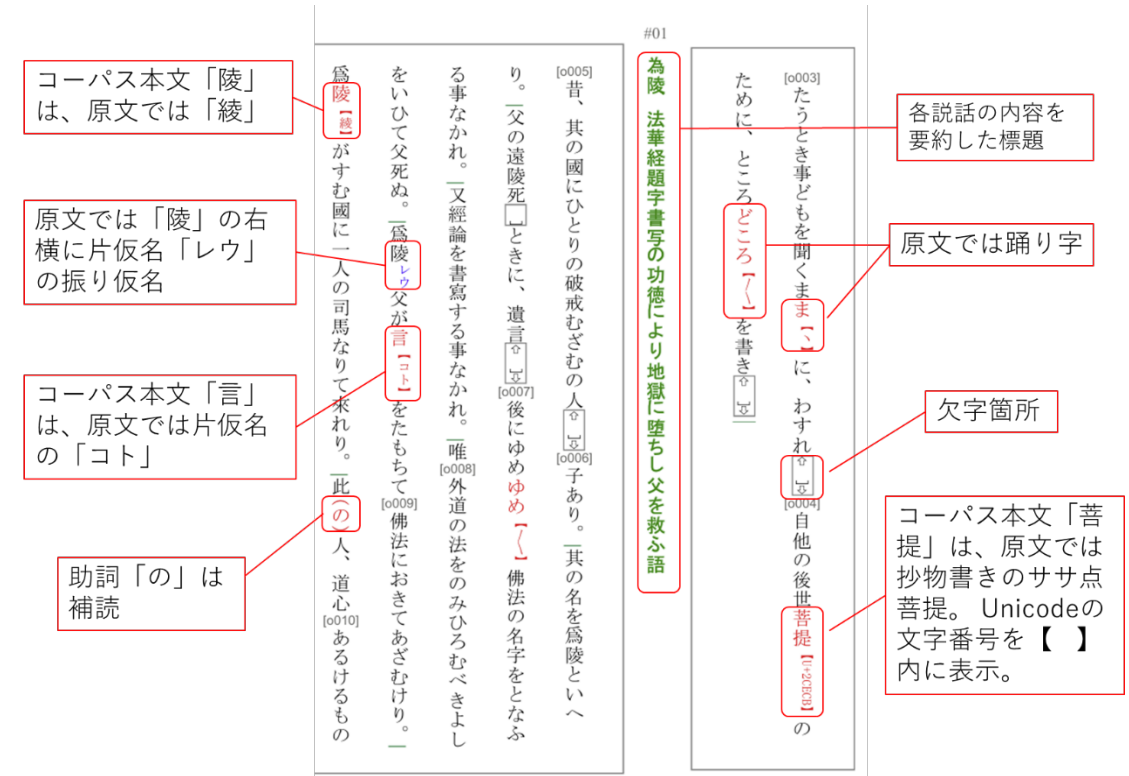


図1 『法華百座聞書抄』コーパス本文（「ひまわり」からのブラウザ表示と説明）

3. コーパスの語彙研究への利用

本コーパスは約 20,000 短単位から成る。語彙研究での利用例として、『法華百座聞書抄』と『今昔物語集（本朝仏法部および本朝世俗部）』を調査対象とした、語彙調査の結果を 2 点紹介する。表 1 に示したのは、名詞・動詞・形容詞・助詞・助動詞といった主な品詞の頻度と比率である。集計には短単位を利用した。名詞の占める比率が作品間でやや異なっているが、それ以外で品詞の構成比率にさほど大きな違いはないことがわかる。

表 1 各作品の品詞比率（短単位）

	名詞		動詞		形容詞		助詞		助動詞	
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
法華百座聞書抄	4864	30.4%	3447	21.6%	332	2.1%	5567	34.8%	1769	11.1%
今昔物語集 本朝仏法部	70724	28.2%	58213	23.2%	5543	2.2%	90564	36.1%	25557	10.2%
今昔物語集 本朝世俗部	49659	24.1%	47368	23.0%	5593	2.7%	74476	36.2%	28674	13.9%

表 2 は短単位普通名詞における、和語・漢語の頻度と比率を示したものである³。『法華百座聞書抄』では、和語と漢語とがおおよそ同じくらい出現しているが、『今昔物語集』の本朝仏法部では漢語より和語の割合が高く、本朝世俗部では仏法部よりさらに和語の方が多くなっていることがわかる。

表 2 語種別の頻度と比率（短単位普通名詞）

	和語		漢語	
	頻度	比率	頻度	比率
法華百座聞書抄	2148	52.3%	1962	47.7%
今昔物語集 本朝仏法部	42188	67.7%	20106	32.3%
今昔物語集 本朝世俗部	36986	82.8%	7657	17.2%

4. コーパスの文法研究への利用

本コーパスを使うと、たとえば「接続助詞のガ」、「終止形終止文における主格助詞のガ」、「完了の助動詞リの異例な接続」といった中世語的な性質（小林芳規編 1975 研究篇、山田巖 1982、山内洋一郎 1989 参照）について、『今昔物語集』と比較しつつ調査することができる。

(1)から(3)は接続助詞のガと見ることが可能な例である。コーパスでは、「連体形」の直後に助詞「が」が来るという条件で検索にヒットする⁴。

- (1) サ候シガ、ヤウノ\命チツツマリテ、…身ノ光ノ皆ウセテクラキヤミニ衆生ノマドヒ候ケム。（『法華百座聞書抄』ウ 119）
- (2) 「我レハ多ノ年ヲ経テ此ノ所ニ有ツルガ、愛欲ノ心発ス事無シ。…」（『今昔物語集』巻第十三・第十二）
- (3) 女ノ童、「（私は）京へ罷ルガ、日ノ暮ヌレバ、御馬ノ尻ニ乗テ罷ラムト思フ也」（『今昔物語集』巻第二十七・第四十一）

(4)と(5)は、終止形終止文における主格助詞のガの例である。コーパスでは、たとえば、格助詞「が」の 10 語以内に、「終止形」の活用形が来るという条件で検索可能である。

- (4) 大聖文殊ノ三世ノ智母トマシマスガ、コレニウトクオハスベキニモアラズ。（『法華百座聞書抄』オ 428）

³ ただし、これらの資料では漢字文字列の読みに揺れが生じるため、和語か漢語かの認定も揺れる場合がある。

⁴ コーパスではこの類の「が」を格助詞とするか接続助詞とするかに明確な基準は設けていないので、検索条件には「品詞の大分類が助詞」として入力し、その後目視で判断していくのがよい。

(5)七条辺ニ有ケル薄打ツ者ノ妻ノ女ノ、年三十余四十許也ケルガ、此ノ阿闍梨ノ房ニ来タリ。(『今昔物語集』卷第二十・第六)

(6)から(8)は、下二段動詞の連用形に完了の助動詞リが付いたと見ることができる例である(コーパスでもこのように処理している)。

(6)金ヲ地ニシキテアタヘリ。(『法華百座聞書抄』ウ 68)

(7)家ノ主答テ云ク、「今日男子生(ムマ)レリ」ト。(『今昔物語集』卷第十一・第十一)

(8)我其レヲ恨テ愁ヘル也』ト。(『今昔物語集』卷第二十・第十六)

5. 本資料の表記とコーパス利用の際の注意点

本コーパスでは原文の様態がかなりの程度わかるようになっており、表記研究に利用すれば、たとえば、漢字・片仮名表記の揺れや、仮名遣いの揺れを、語ごとに調査することが可能である。

ただし、漢文系資料では、ある漢字列をどう読むかが問題となってくる場合がある(読み自体が研究の対象となる)。コーパス作成にあたって、読みは小林芳規編(1975)索引篇に従ったが、コーパス利用者は各自の研究目的に応じて読みの不確定性に留意すべきである。実際、本資料では、同一の漢字文字列が、複数の読み(の可能性)を持っていることがある。たとえば、「父母」の本資料における基本的な読みは「ブモ」であろう(新編日本古典文学全集『今昔物語集』でも読みがブモに統一されている)。ただし、本資料では、捨て仮名や振り仮名によって「フボ」、「チチハハ」と読むことが示されている時がある。これらは通常とは異なる読みであると筆録者によって意識され、特記されたものではないかと思われる。類似の例として、「山林」(サンリンと読むのが普通であろうが、ヤマハヤシと振り仮名を付けた例あり)、「度々」(ドドと読めるが、タビノ\という仮名書きの例あり)といった漢字列が本資料中に見られる。

6. おわりに

『法華百座聞書抄』のコーパスはサイズとしては比較的小さいものであるが、本資料は『今昔物語集』と時代的に重なりつつも、表記などの面で異なりも見せるといった点で興味深いものである。『今昔物語集』は既に『日本語歴史コーパス』に収録されており、『法華百座聞書抄』のコーパス化によって、両者を比較対照して研究することが容易に行えるようになるだろう。

7. 参考文献

河瀬彰宏・野田高広(2014)「和文体および漢文体をもつ資料の構造化—法華百座聞書抄の事例研究—」『第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.129-136.

小林芳規編(1975)『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院.

山内洋一郎(1989)『中世語論考』清文堂出版.

山田巖(1982)『院政期言語の研究』桜楓社.

「上方絵入狂言本」コーパスの構築と公開

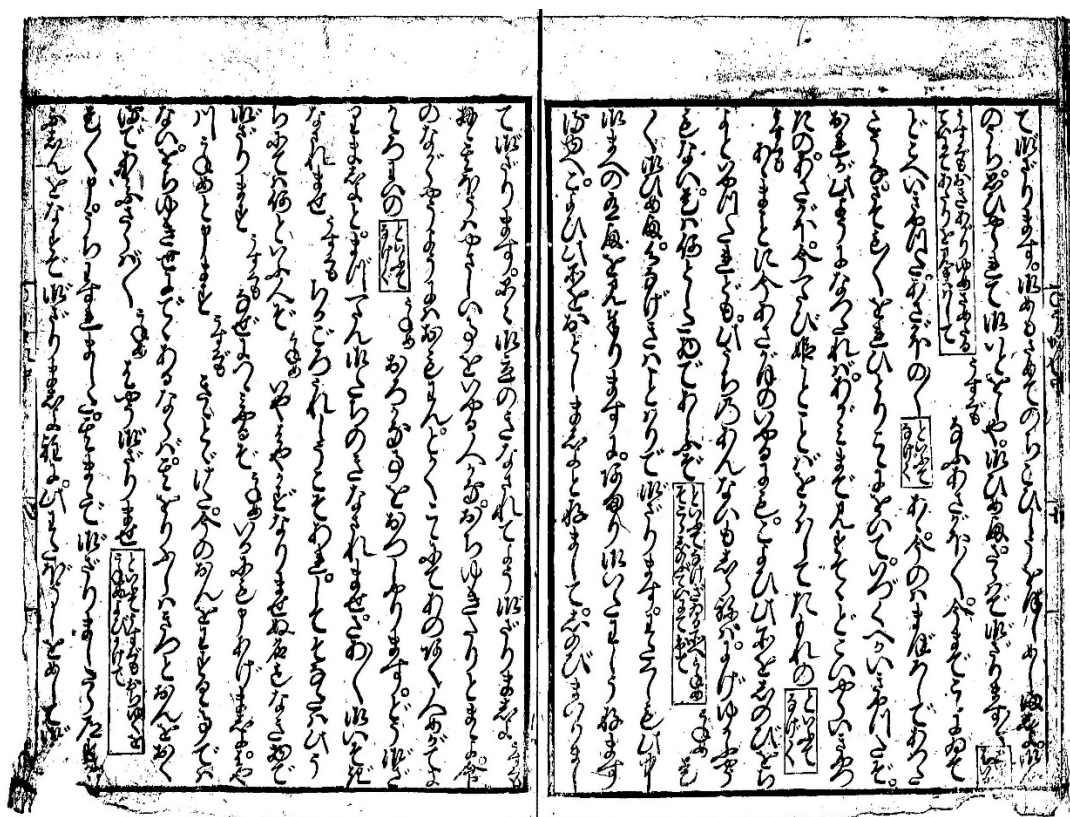
久保 亜子 (総合研究大学院大学学生),

小木曾 智信 (国立国語研究所・総合研究大学院大学), 村上 謙 (関西学院大学)

1. 資料の概要

『日本語歴史コーパス』(以下 CHJ)「江戸時代編VI上方絵入狂言本」として、『好色伝受』『うかれきやうげん』『大雑書伊勢白粉』『代々の御神楽』の4作品を公開する。

絵入狂言本はおおむね歌舞伎の筋書き本と考えられているが、その中で『好色伝受』(小嶋彦十郎作、元禄6(1693)年刊)はせりふ、ト書きともかなり詳細であり、特異な位置を占める。また、せりふ部分は発話者が明示され、ト書き部分は二行割書にされて四周を囲われてせりふ部分と区別されており、ほぼ上演台本、いわゆる台帳と考えてよい資料である。この時期、こうした台帳形式は他に天和3(1683)年刊の『うかれきやうげん』を見るのみである(図1)。



【図1】「うかれきやうげん」(東京大学総合図書館(霞亭文庫)所蔵)

※国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300079682/> より

この台帳形式は生の会話の記録に極めて近いため、談話状況などがとてもわかりやすく口語資料としての利用価値が高い(村上 2023)。元禄6(1693)年刊の『好色伝受』、元禄

9 (1696) 年刊の『大雑書伊勢白粉』、『代々の御神楽』はこれに続くもので、いずれも前期上方語の資料として極めて重要である。そこで CHJ にぜひ収録すべきものとして書誌情報・形態論情報を整えたコーパスの公開を行うこととなった。

なお、本サブコーパスのうち『好色伝受』のテキストは坂梨・小木曾・酒井・村上 (2000) の本文をもとにしている。その他 3 作品のテキストデータは発表者の村上が作成したものである。

2. XML による構造化

原文を忠実に翻字したテキストデータをもとに、XML によるタグ付けを行ってコーパスの本文とした。タグセットは、市村・河瀬・小木曾 (2012) と同様、CHJ のこれまでの XML の仕様に準拠している。せりふ部分については<speech>、ト書き部分を<warigaki>として区別し、話者を<speaker>で示した。

```
51 </div>
52 <div title="上 風流女 付りかつらの川がり">
53 <title><s><lb id="2001"/> 上 <ruby rubytext="ふうりう">風流</ruby><ruby rubytext="をんな">女</ruby></s><s>付りかつらの川がり</s></title>
54 <lb id="2002"/><warigaki><s>ぶたひにかつら川のきわにみさきのまへてまくらしてねいりみ給ふ</s>
55 <s>こしもとあをばわかは<wbr/>したばつきそいゐる</s>
56 <s>つけふたいよりかづまなみの助がん兵へうた蔵いづれもあみをもち出る</s></warigaki>
57 <lb id="2003"/></warigaki><s>かづまみさきのまへ<wbr/>ねてみ給ふを見て</s></warigaki>
58 <speech><s>なみのすけ蔵あれさて大じないもの</s></speech>
59 <speaker>なみの助</speaker><speech><s>されば<lb id="2004"/>うつくしい上ろうで御 ざる</s>
60 <s>さすが都ほどござるあのようなうつくしい<lb id="2005"/>上ろうのゆたかにして御 ざるをたが見る物もござらぬ</s>
61 <s>国もとでこな様<lb id="2006"/>やわたくしがちとだてなふうをして町をとをりますとはや目に<lb id="2007"/>たてます</s></speech>
62 <speaker>かづま</speaker><speech><s>いかにもそうで御 ざる</s>
63 <s>はて都ではうつくしい上ろうたちが<lb id="2008"/>ある所じやによつてめづらしうおもはぬでござる</s>
64 <s>扱あの上ろうを何人<lb id="2009"/>見たてさしやつた</s></speech>
65 <speaker>なみの助</speaker><speech><s>わたくしはよしみねまいるのげこうと見ました</s>
66 <s><lb id="2010"/>今からかへりても日はたかし此所でなくさみ白くらしにかへらふと<lb id="2011"/>いふような事でござる</s></speech>
67 <speaker>かづま</speaker><speech><s>是はよいみたてすござる</s>
68 <s>こなたによし<lb id="2012"/>みねまいるとみたてられて物がないういの</s>
69 <s>してうた蔵は何と<lb id="2013"/>みたてた</s></speech>
70 <speaker>うた蔵</speaker><speech><s>わたくしはうつくしい上ろうがねてござるとみたてま
71 <block type="挿絵">
72 <lb id="2101"/>ひめみさきのまへ
73 <lb id="2102"/>こしもと青ば
74 <lb id="2103"/>わかば
75 <lb id="2104"/>がん兵衛あみうつ
76 <lb id="2105"/>したば
77 <lb id="3001"/>あさのかづま
78 <lb id="3002"/>う川なみの介
79 <lb id="3003"/>うたぞう
80 <lb id="3004"/>かつら川
81 </block>
82 <lb id="3101"/>した</s></speech>
83 <speaker>かづま</speaker><speech><s>はてわけもない</s>
84 <s>がん兵へは何とみたてた</s></speech>
```

【図 2】『好色伝受』XML ファイルの一例

3. 短単位データの作成

以上のように整備したデータを、形態論情報修正ツール「大納言」を用いて修正作業を行った。「江戸時代編VI上方絵入狂言本」Ver.1.0 の形態論情報は、先行して公開された『CHJ 江戸時代編 I～V』と同じ規程によっている。割書き部分については文語活用、一部の「上方絵入狂言本」の資料の特性によって既存の規定集では対応できない箇所については、独自の対応を施している。

例えば、「CHJ 江戸時代編」では動詞の未然形に助動詞「う」が付いたものを動詞の意志推量形としており、本サブコーパスもこれに準拠しているが、「上方絵入狂言本」には、坂梨 (2000) で指摘されている通り、従来の表記法とは外れるものや、開合を誤っている

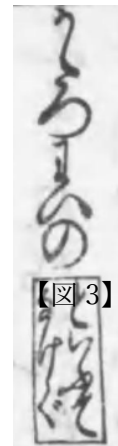
もの、一部長音の脱落した形もみられる。これらについても、意志推量形として新たに形態論情報を付与した。

- ① さてたてうすにこもまいたようなといふたらまだ何程にはらをたちやうぞ（好色伝受）
- ② それであなたにおさようとをつしやります（好色伝受）
- ③ 門十郎いやはやこゝでやすも。こゝがようおじやる。（うかれきやうげん）
- ④ 是はここにおいていかしやれ。おれがあづかつておこ。（大雑書伊勢白粉）

また、「上方絵入狂言本」には濁点が不審な点がしばしば見られる。濁点・半濁点が期待される箇所が付されていない例のほか、濁点が不要と思われる箇所が付与されている例、前後の文字で濁点の位置が入れ替わってしまっている例もある。濁点落ちについては、近世期の資料の特徴として原本での記述を維持した。一方、過剰に濁点が付されていると考えられる箇所は、タグによる情報を残した上でテキストを修正して形態論情報を付与した。

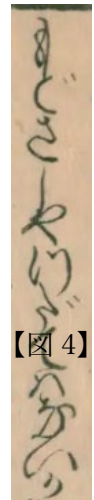
- ⑤ 〈原文〉とかくこゝにてあのかく人めがてにかゝろわいのといふてなげく。

〈修正テキスト〉とかくこゝにてあのかく人めがてにかゝろわいのといふてなげく。（うかれきやうげん【図3】）



- ⑥ 〈原文〉じひふかいとのさまで二たびよびもどさしやつだてはないか

〈修正テキスト〉じひふかいとのさまで二たびよびもどさしやつたではないか（好色伝受【図4】）



4. 今後の展望

以上のような形態論情報付与作業により、CHJ「江戸時代編VI上方絵入狂言本」は今年度秋の公開を予定している。近世前期上方口語資料のコーパスの公開によって、同分野の研究、日本語史研究の発展が期待される。

5. 参考文献

- 市村太郎・河瀬彰宏・小木曾智信（2012）「近世口語テキストの構造化とその課題」『情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告』CH96（1）
- 坂梨隆三・小木曾智信・酒井わか奈・村上謙（2000）『好色伝受 本文・総索引・研究』笠間書院
- 野間光辰監修（1973）『飜刻 絵入狂言本集 上』般庵野間光辰先生華甲記念会
- 村上謙（2023）『近世後期上方語の研究—関西弁の歴史—』花鳥社
- 湯沢幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究 上方篇』刀江書院

大蔵流狂言台本『虎寛本』コーパスの構築と OpenCHJ での公開

北崎 勇帆¹ (大阪大学), 渡辺 由貴² (常葉大学), 村山 実和子³ (日本女子大学)

1. はじめに

大蔵流狂言台本『虎寛本』は、大蔵流 19 代宗家、大蔵弥右衛門虎寛[1758-1805]によって、寛政4[1792]年に書写された狂言台本である。その本文は現行曲のものに近く、近世中期頃の言語を反映するものと見られる。本書は、同じ大蔵流台本『虎明本』(1642 写)との比較によって、中世末期から近世にかけての言語変化を窺い知ることができる点においても貴重である。

公刊されている虎寛本の翻刻には笹野堅校訂『大蔵虎寛本 能狂言』(岩波文庫、1942)があり、校訂者の著作権保護期間が満了しているため、オープンデータでの公開が可能である。本発表では、発表者らが現在進めている虎寛本のコーパスの構築と、OpenCHJ での公開のプロセスを報告し(第2節)、その過程で行う「中世口語 UniDic」による形態素解析の結果から読み取れることを述べる(第3節)。第4節では、現在検討中の事項や、本コーパスの活用事例を取り上げる²。

2. 構造化のプロセス

コーパス化にあたって、まず、テキスト(図1左)の構造を図1(右)のように把握し、虎寛本全編をテキストデータ化したうえで³、小林・市村(2013)を参考にしつつ、XML による構造化を行った。

台詞には以下(1)のようにして、話者情報と文体情報を付す。また、次節に述べる形態素解析を円滑に進めるために、文字レベルのタグとして、校訂者による(2a)〔脱字〕と(2b)

〈衍字〉を修正し、踊り字、片仮名を平仮名にする処理を行った⁴。原文の情報は XML タグ内に残してあるので、「中納言」上では原文文字列を表示可能である。

(1) a. <speech source="太郎冠者"> ... </speech>

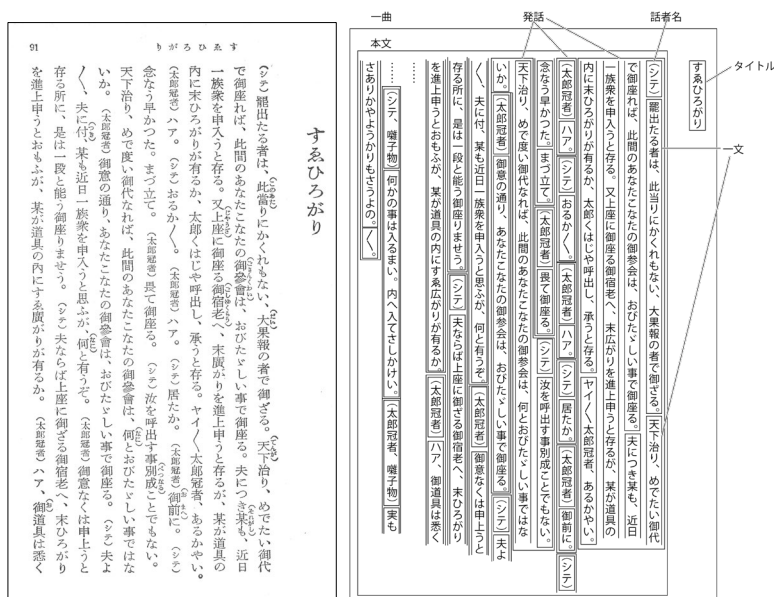


図1 虎寛本テキストの構造

¹ 本発表は、JSPS 科研費 JP23K12192, JP23K00564, JP25K04134 の助成を受けたものである。

² 公開は 2025 年度末を予定しており、以下に示す構築方針やデータは、本予稿提出時(2025 年 9 月 30 日)現在のものである。

³ また、「読方の紛らわしい宛字、送仮名が省略されて読みにくい漢字、今日の普通の読方と異つてある言葉、他に読方のある文字、注意すべき語句」が()によってルビに示されているが、データ化の際には反映していない。

⁴ 虎明本の場合は濁点無表記箇所の解釈が大きな問題となったが(渡辺・市村 2015)、本書の場合は校訂によって「濁点・半濁点を附し」てあるため、この点は問題とならない。また、小林(1987)には校訂者の修正自体が誤りであると指摘される箇所もあるが、本コーパスでは笹野の校訂に従った。

- b. <speech source="アド" type="謡"><s>帰る嬉しき古郷に...</s></speech>
- (2) a. 此度は能序で御座る〔に〕依而(末広がり・上 92-12)
→此度は能序で御座る<corr type="omission">に</corr>依而
- b. 甥を一人持て<持て>居るに依て、(察化・中 138-12)
→甥を一人持て<corr type="excess" originalText="持て"/>居るに依て、

3. 形態素解析と公開

3.1 解析精度と誤解析の要因

上記の方針で作成した XML データに対し、自動解析器 MeCab および解析用の辞書 UniDic を用いた自動解析を行い、品詞・活用形などの形態論情報を付与した。解析結果は発表者らが人手で修正し、UniDic の見出し語の拡充も行っている。今回、精度向上と解析エラー傾向の把握のため、試行的に 3 曲(「末広がり」「止動方角」「宗論」)⁵を選定し、発表者らが一次・二次チェックを行った。いずれも結果的におよそ 9 割は合致しており、約 1 割に修正が必要な誤解析が含まれていた。以下、典型的な誤解析の要因を 2 点に分けて示す⁶。

①表記が要因となるもの

仮名の連続(例:「くはじや」)や、仮名と漢字の交ぜ書き(例:「はしり廻る」「やく束」)、宛て字などは誤解析を生じさせやすい。虎明本と共通する語であっても、表記が異なり、UniDic にも未登録である場合には誤解析の要因となる(例:「頌文」(語彙素「呪文」))。特に、表記に基づく誤解析で目立つのは、本書が送り仮名を明示しない傾向を持つために、下例のように、適切な語彙素や活用形として解析できていないケースであった。

- (3) a. 夫は其時の様に寄う。(宗論、「寄す」として解析)
b. 廿日三十日の事は扱置、一年が二年成共待うはさて。(宗論、終止形として解析)
c. かぶりつく様にせねば歩行(ありかれ)ぬか。(止動方角、「歩み行く」として解析)

②修正方針(規程)が要因となるもの

形態論情報の付与にあたっては、虎寛本を既存の CHJ の中世語・近世語のどちらのルールに適用させるかが問題となる。虎寛本は、書写期は近世期であるものの、CHJ 所収の虎明本のデータと比較検討されるニーズが強いことを想定して、「中世口語 UniDic」で解析したうえで、原則として虎明本の規程(市村・渡辺 2016)に沿って修正する方針を採った。例えば、CHJ「室町時代編」は原則として「動詞を文語活用、形容詞を口語活用」として処理するが、今回の解析では虎寛本の形容詞の多くが「文語活用」として解析されたため、結果的に「誤解析」と認定せざるを得ない。

3.2 誤解析から分かること

誤解析は、虎明本と虎寛本との差異を知る手掛かりともなるものである。例えば、形容詞の活用語尾の「…敷」表記や、形容詞「よい」の「能い」の表記は、CHJ では近世以降の資料でしか用い

⁵ 取込時に 3000～3500 短単位(虎寛本内では比較的分量が多い)となる長さの曲で、かつ、「他同断」として省略が起こらない、「類」冒頭のものを選定した。

⁶ そのほか、他コーパスでも見られたこととして、返読させる文字列(例:「人を被遣まするか」(止動方角))、同音異義で一見して分類が難しいもの(例:形容詞「よう」と副詞「よう」)では誤りが生じやすいといえる。本コーパス独自の問題として、底本テキストに付されたルビを讀みの正解とする場合、語境界～語彙素のレベルでは適合していても、語形・発音形レベルで不正解となることが多く、その点が解析精度を落とす要因となることが挙げられる。

られていなかったため、自動解析の時点では誤解析につながっていた。

また、虎明本では使用されていない語彙・語法や、(虎寛本初出語を含む)近世以降が初出と見られる語は、当然ながら誤解析となる。今回の人手作業の際に新たに UniDic に登録された語のうち、「茶比べ」「待ち連れ」「薙ぎ取る」「乗り静む」などは、『日本国語大辞典 第二版』(小学館、以下『日国』)において虎寛本が初出とされる語であった。『日国』において虎寛本が初出とされる項目は数百例に及び、本コーパスの構築によって UniDic 自体が拡充されることの意義もある。

また、初出語ではないが、成立時期の差を想起させるものに、(4a)四段活用の「おます」、(4b)副詞「なるほど」のような例がある。

- (4) a. そなたは余り心よい買人じやに依て、土産をおますう(末広がりに・上 95-7)
b. 成程御供致ませう。(宗論・下 10-8)

「おます」は「もとサ行下二段に活用したが、江戸中期以降に四段活用例も現れる」(『日国』語誌)語で、四段活用の語釈【二】には虎寛本の例が示される。「なるほど」も『日国』では天理本狂言の例が早いものとして挙げられるが、虎明本には例がなく、CHJ では近世以降の使用しか確認できない。いずれも、虎寛本の言語の時代性を考える上での好例であるが、同時に、中世・近世的な要素を併せ持つ資料を、便宜的に「中世」のものとして扱うことの難しさもあり、虎寛本の性質を考慮した規程の検討と、公開段階でのユーザーに対する周知が必要となる。以上のように、本コーパスの修正作業に際しては、少なくとも CHJ の初出を「さかのぼる」用例が多く出現している。CHJ と別建ての言語資料として、虎寛本のコーパスが提供されることの意義は大きいといえる。

4. 検討中の事例・活用事例

4.1 音便形の認定

虎寛本には、音便形と非音便形の両表記形がみられる語があり(例:「参つてー参りて」)、活用語尾が表記されない例も多数ある(例:「参て」)。コーパスデータにおいては、このような例についても読みを認定し、その活用形を音便形・非音便形のいずれかに決める必要があるが、本コーパスは作業体制上、全用例の人手による確認・検討が難しく、方針を設定した上で、ある程度一律に語や読みを認定・判断せざるを得ない。

同様のケースが問題となった虎明本コーパスの構築の際は、渡辺・市村・鴻野(2015)の調査をもとに、読みの認定が難しい語は下記の方針で判断しデータを作成した(市村・渡辺 2016)。

- ・ 「た」が後接する場合や、仮名表記に音便形しかない語は原則音便形として認定する。
- ・ 他のものは積極的には音便化させない。

ここでは、虎明本の事例を参考に、渡辺・市村・鴻野(2015)で取り上げた 10 語を対象とし⁷、虎寛本における音便形の使用状況を表 1⁸に示す。音便化が起こらない「申す」(橋本 1962: 28)を除

⁷ 渡辺・市村・鴻野(2015)は、虎明本の四段活用動詞のうち、連用形の用例数上位の 10 語をとりあげ、活用語尾が表記されている例について、音便形・非音便形別の用例数を後接語(「た」「たり」「て」)ごとに集計することで、上の方針を導いている。なお、連用形の用例数の順位は、虎明本と虎寛本とで「ホドニ」と「ニヨッテ」の勢力が逆転し(小林 1973: 35)、虎寛本では「因る」の用例数が多くなっているなど、虎明本での調査結果と一部異なっている。

⁸ 表内、*1「申す」については語形「マス」を除外している。*2促音便「云つて」1 例、*3書字形「もて」3 例、*4書字形「よて」1 例は数値に含めていない。*5参考に、底本で「脇狂言之類」の対象語のルビを確認したところ、音便形は「言う+た」1 例・「言う+たり」3 例・「言う+て」17 例・「因る+て」1 例・「致す+た」3 例・「致す+て」8 例、非音便形は「成る+て」1 例で、その多くが「言う」「致す」の音便形を示すルビであった。

く9語は音便形が優勢であり、「会話」において活用語尾が表記されている例は、概して音便形である⁹。以上より、本コーパスにおいては、可能な範囲で底本のルビを参照し、各語の特徴をふまえた上で、音便形か

表1 後接語別音便形・非音便形の用例数

語	音便	音便形後接語						非音便形後接語						連用形 総計
		話	他	話	他	話	他	話	他	話	他	話	他	
言う	ウ	61	2	33		385	128*2							1145
参る	促	8				7		6		1		3		817
申す*1	(無)							1				2		493
持つ	促			2		8*3								483
取る	促	1		1		3	1					2	11	430
因る	促					53	1*4							1297
致す	イ	45	2			219						1		705
成る	促	3				2				2		1		496
思う	ウ	11		19		144	1					3	2	249
急ぐ	イ	1				31	2						1	205

否かの判断に迷う場合は「音便形」に倒す方針を採る¹⁰。

4.2『虎明本』との対応付け

第1節に述べたように、虎寛本は、虎明本などの他の台本との比較により、中世末期から近世にかけての言語変化を含む、曲の変更についての手がかりを提供する。このことを踏まえ、「末広がり」の両本のデータに対して、単語ベクトルを用いた短単位の対応付け(北崎 2025)を試行した。文節・文レベルの異同・加除が多く、計量に耐え得る精度のアライメントを行うのは難しいが、両本の対応関係を把握しながら読み進めるためのよい材料にはなろう。

このデータからは、例えば、「たのふだる人の」(4420)¹¹→「頼ふだ人の」(92-8)、「ぞんじたらば」(11710)→「存じておれば」(93-14)、「御ぎなひ」(4610)→「御ざらぬ」(92-9)のように、時代差を反映する異同を容易に拾うことができる。一方で、「それに付て」(1130)→「夫につき」(91-6)、「ほねにみがきをあてて」(3900)→「骨にみがきをあて」(92-6)のように虎明本でテ形であるものが虎寛本では連用形となる例、「それに事のほかこのみがあるよ」(3730)→「それにちとこのみが有る」(92-5)、「にぎやかなよ」(5660)→「賑に成た」(92-13)、「ぬかれてきたよ」(25080)→「ぬかれおつた」(97-7)のように、虎明本で使用される終助詞ヨが虎寛本では使用されない例などは、一般に知られる中世・近世間の時代差からは予測しがたく、探索的な問題発見にも繋がると思われる。

参考文献

- 市村太郎・渡辺由貴(2016)『『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ 狂言』形態論情報の概要』([URL](#))。
 北崎勇帆(2025)『[研究ノート]単語ベクトルを用いた『天草版平家物語』と原拠本『平家物語』の対応付け』『日本語の研究』21(2), pp.53-61。
 小林賢次(1987)『『大蔵虎寛本能狂言』における衍字・脱字の校訂について』『近代語研究7』武蔵野書院, pp.313-331。
 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房。
 小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94, pp.16-44。
 小林正行・市村太郎(2013)『『虎明本狂言集』コーパスの構造化―仕様と事例の検討―』『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.323-332([URL](#))。
 橋本四郎(1962)「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』31(4), pp.27-43。
 渡辺由貴・市村太郎(2015)『『虎明本狂言集』における濁点表記状況―全例に濁点が付された語を中心に―』『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.57-64([URL](#))。
 渡辺由貴・市村太郎・鴻野知暁(2015)『『虎明本狂言集』のコーパスデータにおける短単位認定の諸問題』『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.233-240([URL](#))。
 『日本国語大辞典 第2版』小学館(JapanKnowledge版を使用)。

⁹ 「会話」における非音便形の例は、多くが囃子物・謡などの韻文や法間(法文)である。韻文以外の「会話」の中でも非音便形「致して」「成りて」が各1例みられたものの、全体として活用語尾が表記されている「会話」の例の多くは音便形であるといえる。

¹⁰ 今後、音便の他、動詞の活用型(例:「一段活用―二段活用」)や、複数の語形があり得る語(例:何「ナニーナン」)などについても同様の検討が必要となる。

¹¹ 以下全て、虎明本は「末広がり」(サンプルID: 40-虎明 1642_01013)の開始位置、虎寛本は底本のページ数を示す。

日本語学会 2025 年度秋季大会シンポジウム

日本語研究と辞書編纂の接点を求めて

パネリスト

いながわ ともき
稲川 智樹（講談社）

こむろ ゆり
小室 夕里（中央大学）

きんすい さとし
金水 敏（放送大学）

司会

つつみ りょういち
堤 良一（岡山大学）

企画担当

さいき きょうこ
佐伯 暁子（甲南大学）

つつみ りょういち
堤 良一（岡山大学）

趣旨

昨今、スマートフォンやタブレット端末、ウェブサイトを通じて利用できるデジタル辞書が身近になりました。一方で、紙の辞書も、国語辞典では『広辞苑』第七版（2018 年）、『新明解国語辞典』第八版（2020 年）、『明鏡国語辞典』第三版（2020 年）、『三省堂国語辞典』第八版（2022 年）と改訂が相次いでいます。辞書を利用する人、また調べる目的によって、媒体及び辞書が選択できる環境にあると言えます。このように辞書が多様化する中、他との差別化を図るため辞書には独自の工夫が盛り込まれています。

しかし、既存の辞書には、様々な問題点があります。辞書を引く人にとって、語史、方言、ジェンダー、差別用語、品位といった点においても必要な情報が過不足なく記載されることが理想ですが、現実にはそうなってはいません。また、どのような例文を採用するかといった問題も考えなければならないでしょう。

ところで、英和辞典等の外国語学習のための辞書に用いられる翻訳の日本語については、これまであまり議論がなされてきませんでした。掲載されている例文は概して直訳調のものが多く、より自然な日本語にする必要があるのでしょうか。

以上のような問題に対して、我々日本語の研究者はどのような貢献が可能でしょうか。

本シンポジウムでは、辞書編纂に携わる方々をパネリストに迎え、辞書編纂の視点から既存の辞書の問題点やこれからの辞書のあり方について議論していただきます。これらの議論を踏まえ、日本語研究者として辞書記述に対してどのような貢献ができるのか、考える場としたいと思います。

構成

- 14:00-14:10 趣旨説明・パネリスト紹介
- 14:10-14:40 講演 1 小室夕里 「外国語学習に資する用例とは何か―対象言語・学習者レベル・辞書サイズの違いを越えて―」
- 14:40-15:10 講演 2 稲川智樹 「発信のための国語辞書に必要な情報は何か―校閲者の視点から―」
- 15:10-15:40 講演 3 金水敏 「総合的な「日本語辞書」は可能か―「中央語」と「方言」を驚つかみにする―」
- 15:40-15:50 休憩
- 15:50-16:20 パネルディスカッション
- 16:20-16:50 質疑応答
- 16:50-17:00 総括

外国語学習に資する用例とは何か
—対象言語・学習者レベル・辞書サイズの違いを越えて—

小室夕里(中央大学)

1. はじめに

テクノロジーの進化に伴い、辞書の形態や項目内で提供される情報、さらには辞書編纂のあり方が大きく変化してきている。紙の辞書から電子辞書やWebサイト上で辞書が展開されるのに伴い、スペース上の制約が緩和され、用例が追加されることもある。また、AIを活用した辞書編纂も盛んに議論、研究されており、今後、用例が自動的に生成される可能性も決して低くはない。そのような変化の中で、外国語学習に資する用例のあり方を明らかにしておくことは重要であろう。本発表では、砂川(2025)が初・中級者向け日本語学習辞書の「例文作成上注意すべき点」として挙げている9点と、赤野(2018)が指摘する「高校生を中心とする日本人の英語学習者を対象に編まれた」学習英和辞書と学習英英辞書における用例のあり方を比較し、外国語学習に資する用例のあり方について考えてみたい。

2. 日本語学習辞典における用例のあり方

砂川(2025: 126)は、初・中級者向け日本語学習辞書3冊を比較分析し、「例文作成上注意すべき点」として以下9点を挙げている。

- (1) 学習者のレベルに合った難易度の語彙を使用する。それが無理な場合は、(=)などの方法により簡単な語彙を用いた説明を加える。
- (2) 学習者のレベルに合った難易度の文法や文体の例文を作る。
- (3) 情景が思い浮かぶ典型的で分かりやすい例文を作る。
- (4) 習慣的によく共起する語が用いられた例文を作る。
- (5) 文法的な情報が得られる例文を作る。
- (6) 意味や用法の理解に不要な情報を含まない例文を作る。
- (7) 論理的に整合性のある例文を作る。
- (8) 国籍・性別・人種・宗教・社会階層・障害・性的指向などのステレオタイプを避ける。
- (9) 社会文化的な背景知識が必要な情報は避ける。

3. 学習英和辞典における用例のあり方

赤野(2018)は、上級者向け学習英和辞典と学習英英辞典を対象とし、「2. 用例の役割」で受信情報としての用例、発信情報としての用例の役割をまとめ、「3. 用例はどうあるべきか」では、引用例と創

作用例を比較しながら論じ、好ましくない用例と好ましい用例について述べている。論点をまとめると以下ようになる。

【受信情報としての用例】

- (1) 定義・語義説明の正確な理解を助ける役割
 - a. 語の使用場面・使用者の態度に関わる語用論的意味
(ラベルや定義内の選択制限・内包的意味の記述を具体的に示す)
- (2) 求めている語義の特定

【発信情報としての用例】

- (1) 語の適切な使用のモデルとしての役割
 - a. 記号化された文法情報(＝骨格)の肉付け
 - b. コロケーション情報の提示(特に重要)

【好ましくない用例】

- (1) 文脈から切り離され、内容が独立していない用例
- (2) 見出し語と派生関係にある語が含まれている用例
- (3) 構文説明のためだけの無味乾燥な用例
- (4) 男女のステレオタイプの役割を示す用例

【好ましい用例】

- (1) 使用者が検索している当該語を含む文と一致または類似している用例(→頻度の高い表現から提示)
- (2) 豊富なコロケーション情報を含む用例
- (3) 内容が独立しており理解するために他の知識を必要としない用例(self-sufficient)
 - a. 見出し語より難易度の高い語が使われていないこと
 - b. 文構造が複雑でなく、程よい長さであること
 - c. 背景的知識(文化事情・時代事情・社会状況など)を必要としないこと
- (4) 【英和辞典の場合】日本人にとって常識と思われる事柄(人名・地名などの固有名詞)を積極的に取り入れた用例

4. 用例のあり方における日本語学習辞典と学習英語辞典の比較

砂川(2025)が対象とするのは初・中級者向けの一言語辞書、赤野(2018)が対象とするのは上級者向けの一言語・二言語辞書であり、レベルやサイズ等辞書のデザインが大きく異なる。

表1:対象とする辞書の基本情報

	砂川(2025)	赤野(2018)
TL/SL	日本語／複数言語	英語／複数言語 英語／(主に)日本語
レベル	初級・中級	上級
編纂者	母語話者	母語話者 非母語話者・母語話者
見出し語数	300語～2,500語	／50,000～100,000語
形態	紙	紙

しかしながら、用例作成において注意すべき点を砂川(2025)を基準に比較すると、ほとんどの事項が両者に共通している。

表2:用例作成における注意事項との比較

砂川(2025)	赤野(2018)
1. 学習者のレベルに合った難易度の語彙を使用する。それが無理な場合は、(＝)などの方法でより簡単な語彙を用いた説明を加える	見出し語より難易度の高い語が使われていないこと
2. 学習者のレベルに合った難易度の文法や文体の例文を作る	文構造が複雑でなく、 <u>程よい長さ</u> であること
3. 情景が思い浮かぶ典型的で分かりやすい例文を作る	・語の使用場面・使用者の態度に関わる語用論的意味(ラベルや定義内の選択制限・内包的意味の記述を具体的に示す) ・文脈から切り離され、内容が独立していない用例を避ける ・構文説明のためだけの無味乾燥な用例を避ける
4. 習慣的によく共起する語が用いられた例文を作る	豊富なコロケーション情報を含む
5. 文法的な情報が得られる例文を作る	語の適切な使用のモデルとしての役割 a. 記号化された文法情報(＝骨格)の肉付け

6. 意味や用法の理解に不要な情報を含まない 例文を作る	内容が独立しており理解するために他の知識を 必要としない
7. <u>論理的に整合性のある</u> 例文を作る	
8. 国籍・性別・人種・宗教・社会階層・障害・性的 指向などのステレオタイプを避ける	男女のステレオタイプの役割を示すことを避ける
9. 社会文化的な背景知識が必要な情報は避ける	・内容が独立しており理解するために他の知識 を必要としない ・背景的知識(文化事情・時代事情・社会状況 など)を必要としないこと

5. 考察

上記の比較を踏まえ、学習辞典における用例のあり方を考察する。現代の辞書編纂はコーパスデータの活用を前提としているが、井上(2019)が指摘するように「科学的データと学習性の両立」は依然として課題である。対象者やレベル、デザインが大きく異なる2つのタイプの辞書に共通して挙げられている用例のポイントは以下のようにまとめられる。

【科学的データが判断の中心に】

- (1) 初級、中級、上級のレベルを問わず、学習者のレベルに応じた語彙・文法を使用する。
- (2) コロケーション情報を(なるべく多く)提示する。
- (3) 見出し語の文法的なふるまいを反映し、使用頻度の高い文型や活用形を用いる。

【複眼的な人間の判断がより中心に】

- (4) 実際の言語使用の場面(いつ・どこで・誰が・どのように・なぜ)がわかるものにする。
- (5) 文脈を必要とせず、内容が独立しており、文化的・歴史的・社会的背景的知識を有していることを前提としない。
- (6) 多様性を尊重し、差別・ステレオタイプな記述・描写を排除する。

次に、両者を比較した時に、特徴的に見える2つの点について検討する。

- (1) 日本語学習辞典の用例においては「論理的整合性」が強調されている。
- (2) 英語学習辞典においては用例の「長さ」に言及がある。

ここでの論理的整合性とは、「9. 社会文化的な背景知識が必要な情報は避ける」と密接に関連している。砂川(2025: 130)は『ねっこ日日学習辞書』で不採用となった以下の例を挙げている。

子育てのため、10年勤めた会社を先月辞めました。今は看護師の勉強をしています。

【辞める】

この用例においては、原因(=子育て)から結果(=会社を辞める)は論理的に導き出されるものではなく、残念ながら日本ではそうした現象が観察されるために理解ができるが、そうではない文化圏の人には理解しにくいものとなることが指摘されている。つまり、固有名詞の使用や歴史的出来事への言及などに代表される単純な社会文化的な知識の問題だけでなく、思考の部分にも踏み込んでいる点が特徴的と言えるかもしれない。これは、一つには想定される使用者の国籍や民族、母語等が多様であることを踏まえた「わかりやすさ」の追求から来るものだろう。そして、グローバル化や多様性の概念が発達した近年の動向を反映しているように見える。一方、英和辞典が想定する使用者は、より単一的で、日本語を母語とし日本の学校教育で英語を学習している者である。さらには、英和辞典が飛躍的に発達した1980年代・90年代は、政治的・経済的に強力な英語という言葉の学習することが、特に米国を中心とした英語圏文化を理解するというよりも、「英語による支配構造に取り込まれてしまっている」危険性が指摘された時代である(神谷、2008)。英和辞典における用例をより厳しい目で見直すと、論理性を欠いている、または不明瞭なものが見つかるのではないか。

そしてそれは、英和辞典における用例の長さの制約とも関連する。『アクシスジーニアス英和辞典』の編集主幹である中邑光男氏は「用例は、ポイントを明確にしつつ、1文あたり平均で13語程度に収めなくてはいいけない。文用例とする必然性はあるのか。句用例でいいのではないのか。」と、用例の語数基準を明確に定めて編纂を行ったとしている(小室、2023)。二言語辞書である英和辞典には、用例とその訳で単純に2倍のスペースが必要になるという物理的制約もあるが、学習者の「理解」に資する用例の長さも重要な考慮事項である。Kawamoto & Tono (2025) は、異なるレベルの学習者が文レベルの英作文を行う際に、句用例と文用例のどちらがより学習者のパフォーマンスを高めるかを検証し、学習者のレベルによって効果が異なる可能性を示唆している。このようなユーザスタディが今後も重要性を増すだろう。

また、1つの用例に、見出し語の意味や使われる場面をより正確に理解するという受信の機能と、見出し語を正確に用いるという発信の機能を兼ねさせることを再考すべきなのかもしれない。用例が暗示している情報をすべて正確に読み取り、正しい発信に繋げることができるのはかなりの上級学習者に限られることを認識し、インターフェイスによって表示する用例を選択することができるなど、デジタル時代ならではのプレゼンテーション上の工夫を考え、実現していくフェーズに入っているのかもしれない。

6. おわりに

対象言語、対象レベル、そして辞書のサイズが大きく異なる中でも、用例作成において広く重要であると考えられていることには共通項目が多いことがわかった。また、相違点をもたらし要因を考える

ことにより、外国語学習に資する用例とはどのようなものか、そしてこれからの辞書における用例のあり方について検討した。

本発表で取り上げたのは、1つ1つの用例の語彙や構文、内容についてのあり方であるが、用例に関して他にも考慮すべき点が多々存在する。そもそも用例を必要とするのはどのような場合で、必要な場合は1つの語義に対していくつ記載すべきなのか、それをどのように提示すべきなのか。さらには見出し語と関連する語の記述との整合性も重要な論点である(中尾 1999)。また、二言語辞書の場合、見出し語に対して与えられた訳語と用例中の訳語を一致させるのかそうではないのか(=用例中にてさらなる訳語の可能性を示す)についても執筆者は注意を払っている。それぞれの要素は密接に影響しあうことが推測されるため、さらに多面的な用例の検討が必要となる。

参考文献

赤野一郎(2018)「V 用例・コロケーション」堀正広・赤野一郎監修、赤野一郎・井上永幸編

『英語コーパス研究シリーズ第3巻 コーパスと辞書』ひつじ書房、pp. 121-152

井上永幸(2019)「コーパスを活用した学習英和辞書編集の問題点 —科学的データと学習性の両立—」赤野一郎先生古希記念論文集編集委員会編『言語分析のフロンティア』金星堂、pp. 48-60

神谷雅仁(2008)「日本人は誰の英語を学ぶべきか—World Englishesという視点からの英語教育—」『上智短期大学紀要』28、pp. 41-71

Kawamoto, N. and Yukio Tono (2025) “L2 English learners’ use of phrasal vs. sentential dictionary examples: Factors affecting usage and implications for dictionary design” The 18th International Conference of the Asian Association for Lexicography. 13 September 2025.

小室夕里(2023)「中邑光男」英和辞典の作り手たち、
<https://ej-lexicographers.com/lexicographer/nakamuramitsu/>

砂川有里子(2025)「第8章 初・中級学習者向け日本語学習辞書における例文の作り方」石黒圭編『理想の辞書を求めて:学習者にほんとうに役立つ辞書とは』明治書院、pp. 117-134

中尾啓介(1999)「5辞書の用例」『辞書学論考』研究社、pp. 80-85

発信のための国語辞書に必要な情報は何か

―校閲者の視点から―

いながわともき
稲川智樹（株式会社講談社 編集総務局 校閲第一部）

1 はじめに

辞書の使用目的は「受信」と「発信」に大別できる。国語辞書はテキストの読解すなわち受信の用に供することに主眼を置いて編纂されてきた歴史があり、発信に役立てられる情報が比較的少ないと感じられることが多い。発表者は2015年に講談社に入社して以来、一貫して書籍・雑誌の校閲に従事してきた。国語辞書を頻用するなかで見て取った課題と、発信型の国語辞書のあり方について、利用者の立場から私見を述べる。

2 辞書における「受信」と「発信」

読解や聞き取りなど、辞書を言葉の意味を理解するために用いるとき、辞書を受信（decoding）に用いているといい、作文や発話など、自らが言葉を産出するために辞書を利用するとき、辞書を発信（encoding）に用いているという。通常、一つの辞書を受信にも発信にも用いることができるわけだが、受信の機能を重視したものを受信型辞書（passive dictionary）、発信の機能を重視したものを発信型辞書（active dictionary）という。先述の通り、辞書は長く受信の機能に重きを置いて編纂されてきた歴史があり、発信に有用な情報に不足があることは認めざるを得ない。また、発信に有用な情報は、その語の真の理解に必要不可欠なものでもあり、受信の面からも同時に役立てられる。

3 校閲者が迷うとき

校閲は、書き手の文章をいわゆる規範的な表現に直す仕事であると思われる節もあるが、これは全くの誤解で、可能な限り著者の表現を尊重し、余計な指摘を避けることが旨とされている。実務上は、ある表現について「疑問出し」（鉛筆書きによって訂正の提案をすること）をするかどうかの問題になった場合、いずれかの辞書に一つでも載っていれば許容することが原則とされている。この意味で、校閲者は書き手と同じ発信者の立場からゲラを読んでいるのであり、発信型の辞書が有用になる。

さて、一冊でも辞書に載っていれば許容し、そうでなければ疑問を出すというふうに機械

的に処理することができれば簡単だが、実際にはそう容易くはいかない。辞書の記述と、内省や実際の用例とが衝突する場合、どちらを優先するかで悩むことになるのは日常茶飯事である。以下、「辞書にはないが、内省や実例からは許容できる」「辞書にはある（ように読める）が、内省や実例からは許容しづらい」という二つのパターンに分けて、実際の事例を挙げる。（なお、以下に示すのは、あくまで多数の辞書に該当する例であって、必ずしもすべての辞書に当てはまるとは限らないことをことわっておく。また、辞書の引用では論旨に差し支えない範囲でアクセント表示や記号などを省略したところがある）

3.1 辞書にはないが、内省や実例からは許容できる例

辞書にすべてを書くことは原理的に不可能で、辞書にないことが直ちに誤りを意味しないのは当然である。たとえば、新語・新用法、集団語、方言など、そもそも国語辞書の編集方針のために収録されづらい語や用法もあり、こうしたものは本発表では取り上げない。

（１）語釈の過度な限定

〈例〉**急転直下**、北海道が緊急事態宣言の対象地域に加えられた。

『旺文社国語辞典』第12版

きゅう-てん【急転】 一ちょっか【一直下】（名・自スル）

行き詰まっていた状態や形勢が急に変わって、問題が解決・結末に向かうこと。「一事件が解決する」

「急転直下」は、多数の辞書が「解決に向かう」「結末に向かう」などと語釈するが、解決するかどうかにかかわらず単に急に事態が変わる状況で用いられている事例は多く、上記の例も問題なしとしてよいと思われる。『四字熟語を知る辞典』は、「事態、状況、情勢などが急激に大きく変化すること。また、急に事態が変わって、解決、決着すること」とする。

〈例〉戸を**薄く**開ける。

『明鏡国語辞典』第3版（用例は省略）

うす・い【薄い】[形]

- ①板状のものの両面の間の幅が小さい。
- ②層状・膜状のものの幅が小さい。
- ③〈「…層が薄い」の形で〉そのような人が少ない意を表す。
- ④利益の程度が小さい。
- ⑤人や物事に対する心入れや関わりの程度が小さい。また、信頼などを受ける程度が小さい。
- ⑥密度や濃度が小さい。

⑦色合いや味付けなどから受ける印象や刺激が小さい。あっさりしている。淡い。

『明鏡国語辞典』は語義を細分化して語釈する傾向が強いが、「戸を薄く開ける」というときの「薄い」に該当する語義がないように思われる。しかし、上記の例も通常違和感なく読めるのではないか。

(2) 比喩義の不足

〈例〉仕事から離れて、南の島で**羽休め**でもしてきたらどうだ？

『大辞林』第4版

はね やすめ【羽休め】(名) スル

鳥が枝などにとまって羽を休めること。

「羽休め」を立項する辞書がそもそも少なく、あっても鳥が羽を休める意しか載せていない。一方、上の例では人間が一時休息するという比喩的な意味で用いられている。原理的にはどんな語でも比喩的に用いることはできるわけだが、そうすると、比喩義を語義として載せる場合とそうでない場合の境界が問題になる。

(3) 用例(コロケーション)、構文の情報の不足

〈例〉すっかり頬が**やつれて**しまった

『新明解国語辞典』第8版

やつ・れる【窶れる】(自下一)

病気・心労や老齢などのために やせ衰えて、別人かと思われるほど みすぼらしくなる。「窶れ果てた姿」

現行の多くの国語辞書では、コロケーションや構文の情報が圧倒的に不足している。受信にはそれで事足りても、発信に用いるには難がある。

『新明解国語辞典』は、主要な動詞には構文の型を示すが(たとえば「見る」項には〈(どこに) なにヲー／なにデなにヲー〉とある)、数は限定的で、「やつれる」にはない。ここでは「やつれる」の主語として「頬が」が適切であるかが問題になるが、用例として掲出している国語辞書はほとんどない。コロケーションとしては「頬がこける」がより一般的だと思われること、またこの語釈だと全身状態に用いるものと解釈できることから、「頬が」を主語とはしにくくも思える。しかしながら、実例は多く、許容して差し支えないと思われる。

『てにをは辞典』では「やつれる」項に「頬が」を示している。

3.2 辞書にはある（ように読める）が、内省や実例からは許容しづらい例

（１）限定の不足・意味記述のずれ

〈例〉親に**不要な**心配をかけてしまった

『明鏡国語辞典』第3版

ふ-よう【不要】[名・形動]

必要としないこと。いらぬこと。「一な字句を削る」「弁当〔会費・経験〕一」「一不急」「一論」

む-よう【無用】[名・形動]

①役に立たないこと。無益。↔有用

②必要ないこと。不要。「遠慮は一だ」「心配御一」「天地一」

③用事のないこと。「一の者立入禁止」

3.1（１）とは逆に、語釈の限定が足りていないために、実際には許容しづらいのに、あたかも通用するように思える事例は多い。上記の例では、「無用な」とするのが普通であろうが、互いに比較しても「無用」との差異がわからず、いずれも交換可能であるように読めてしまう。

（２）位相・文体や語感の記述の不足

〈例〉〔災害救助の場面で〕Aさんは「任せてください」と**目を輝かせた**。

『新選国語辞典』第10版

かがやか・す【輝かす】[耀かす][他五]

①光をはなつ。光らせる。「目を一」

②威光・威力・功名をあらわす。「国威を一」

〔参考〕「顔を輝かせる」のように、終止形や連体形では、下一段活用になることもある。

上の例は、凄惨な災害の現場で、レンジャー隊員のひとりが隊長の命令に応答する場面である。文字通り目に光を宿しているということで意味的にも構文的にもおかしいところはないように思われるが、「目を輝かす」というと喜びや期待が連想され、隊員があたかも災害を楽しんでいるかのような奇妙な印象も受ける。こうした意味というよりは語感に属する情報も国語辞書にはきわめて少ない。上記の例は、必ず訂正を要するとまでは言えないが、校閲者としては、文脈上ふさわしい表現であるか質しておきたいところである。

4 辞書が必要なものであり続けるために

上記のような例に直面したとき、校閲者はコーパスや、それに準ずるもの（青空文庫や Google Books、新聞記事データベース、国立国会図書館デジタルコレクションなど）を検索し、実例の有無や多寡を確認して、疑問出しすべきか否かを判断することになる。場合によっては、内容に照らし、自分の語感を信じて決断することもある。もし仮に辞書というものがこの世に存在しなかったとしても、このような手順を踏んで指摘をするか否かを判断することになるだろう。そうであるならば、もはや辞書など最初から必要なく、校閲者を含む発信者は、用例を検索できるサービスを利用すればそれで済むのではないだろうか。

実際、生のデータに誰もが比較的容易にアクセスできるようになり、また AI がある程度情報を整理して考えてくれる（ように見える）ようになった現在、従来の辞書の必要性は低くならざるを得ない。辞書は学術的成果物でもあるが、第一義的にはあくまでも実用品であり、真に実用的であり続けねば廃れるのは必定である。辞書が必要なものであり続けるために、発信の機能により特化した辞書を検討することが有効であると考ええる。

5 新しい発信型辞書の形の試案

生の用例データへのアクセスが容易になった今、国語辞書に求められることとして、①従来の受信型から発信型への転換、②「用例を検索しただけ」「内省に頼っただけ」ではわからない専門的な知見を盛り込む、という行き方が考えられる。いずれの辞書も、改訂という形で新機軸を打ち出し改善を重ねてはいるが、実際のところ、個々の項目の改修を繰り返しているにすぎない。辞書の根本的な構造自体を見直すことも考えなければならない。

そこで、3 節に挙げた事例もふまえ、新しい発信型辞書のスタイルを提案する。新しい発信型辞書の各項目には、以下の要素を盛り込む。従来のように個々の項目に恣意的に情報を足していくのではなく、原則としてあらゆる項目に同じ構造を適用することが重要である。

- ①原義（プロトタイプの意味）・転義・比喻義を明確化した構造
- ②構文の型の明示
- ③典型的な用例に対する頻度の明示
- ④語感の解説
- ⑤類義語の明示

ここでは試みに、「這いつくばう」項の内容の素案を示すことにする。

はい-つくば・う【這いつくばう】[×這（い）×蹲う]
[発音] ハイツ㊦バ\ウ

〔歴〕 はひつくばふ

〔自五〕

（原）〈〔場所〕 ニー〉 四つんばいに体を伏せる。「(多) {地面／床} にー」「ベッドの下にー・って指輪を探す」「ー・って謝る」「熱がひどく、ー・るように家を出る」▽経由する場所を表すときは〈〔場所〕 ヲー〉 もまれにある。「虫が地上をー・っている」

（喩1）〈〔人・集団〕 ニー〉 へりくだって言いなりになる。「主人にー・って機嫌をとる」

（喩2）〈〔地／地べた〕 ニー〉 低い地位に甘んじ、みにくく過ごす。「地にー・い、泥水をすすって今日の地位まで上り詰めた」

〔異形態〕 はいつくばる

〔語感〕 類語に比べ、不格好である、無様であるという感じが強い。向かう相手に対してかしこまったときの姿勢として典型的に用いることから、（喩1）の意味が生じた。じっと動かないでいる感じもあるが、拝む・探す・覗くといった動作を伴って用いることも多い。

〔類義語〕 → 這う

類義語については、各語の語釈を読めば差異がおのずと分かるようになっているのが理想的だが、実用性の面から、類義語どうしの違いについては別途解説を設けるのが好ましい。上記の案では、「這う」項にリンクし、同項目内においてこれらを含む「伏す」「平伏する」などとの差異を記述することを想定している。この場合、排列は五十音順ではなく意味分類とすべきである。もっとも、デジタル媒体であれば排列の軛からは自由である。

6 おわりに

本発表では、校閲者が実務の中で行き当たる「迷う」事例をヒントに、新しい発信型国語辞書の形を提案した。国語辞書の記述改善の一助になれば幸いである。

参考文献

石黒圭編（2025）『理想の辞書を求めて：学習者にほんとうに役立つ辞書とは』明治書院

国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店

国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞：理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店

国広哲弥ほか（1982）『ことばの意味3：辞書に書いてないこと』平凡社

糸山洋介（2021）『〔例解〕 日本語の多義語研究：認知言語学の視点から』大修館書店

山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社

ラインハート・ハートマン、グレゴリー・ジェームズ著、竹林滋ほか訳監修（2003）『辞書学辞典』研究社

総合的な「日本語辞書」は可能か

—「中央語」と「方言」を驚づかみにする—

金水 敏（放送大学大阪学習センター）

1. はじめに

辞書を引く人の大部分が期待するのは、辞書が意図する表現の「正統性」を保証してくれるという点にあるだろう。国語辞典の場合は、たいてい、ある表現のある用法が「標準日本語」（全国共通語）として「正しい」かどうか、という点に答えてくれる、ということが大切となる。

しかし、現実の自然言語は、多様な表現の連続体であり、「正統性」という枠組みで線引きをする行為は、一定の政治的な意図を含まざるを得ない。線引きされた外側に置かれる方言、俚言、臨時的・個人的用語、新語・流行語、古語等は「正統ではない日本語」として排除されるのである。

一方で、辞書は今日、紙媒体を離れて電子媒体に急速に移行しつつある。電子媒体が可能にするハイパーテキストの手法によって、正統・非正統の線引きなしに、あらゆる表現の相互的な関係を表示することは十分可能なはずである。また、方言辞典や集団語辞典、また各種コーパス等の言語資源も日々充実しつつある。これらの言語資源を統合しつつ、各項目の関係性を驚づかみにできるような辞書ができれば、これは確かに理想的と言えるのではないか。もちろんそのような辞書は現在、存在しないが、一つの理想型として構想することに十分意味はある。

本発表では、そのような理想型を探る手がかりとして、『日本国語大辞典』第2版（以下、『日国』）の語釈と方言欄に着目したい。『日国』は、今日普及している辞書の中では唯一「大辞典」と呼べる規模の国語辞書で、約50万語の項目を登録するほか、OEDにならって歴史的な用例主義を取っており、語釈の各ブランチでは必ず得られる限り最古の用例を掲載するほか、典型的な用例を時代順に並べることを原則としている。また、各種方言辞典から転載された、方言の語彙項目を参考として列挙している。しかし第2版の段階では、語釈欄と方言欄を統合的に関連付けるような記載は積極的にはなされていない。2025年より8年計画で始まった『日国』第3版の改訂作業では、このような点についても、「語誌」欄を活用して目配りすることを計画しているが、人的、予算的な制約により、ごく一部の項目の改訂に留まらざるを得ないだろう。

今回の『日国』改訂による統合的、総合的な辞書の実現は難しいとしても、どのような点に着目して理想に近づくか、ということの手がかりを、二つほどのケーススタディによって

示してみたい。

2. ケーススタディ(1) 「す」(【鬆・巢】)

この項目については、「日国余滴」というサイトに関連する記事を書いており、以下の内容はその記事との重複を含むことをお断りしておく。

この項目に興味をもったのは、とある YouTube チャンネルを通じて「ワケノシンノス」と呼ばれるイソギンチャクが存在することを知ったことがきっかけであった。このイソギンチャクは標準和名を「ハナワケイソギンチャク」と言うが、福岡県有明海沿岸では「ワケノシンノス」と呼ばれることが多い。そしてこの方言名の意味は、「若い者の尻の穴」であるという。気になったのは「シンノス」の部分で、「シリ>シン」は分かるが、「穴」はどうして「ス」なのか。『日国』で該当する項目には次のようにある。

(1)大根、牛蒡(ごぼう)、蓮根(れんこん)などの、時期がすぎて、みにできるすきま。

また、食品、植物、その他の組織などに、処理が悪かったため生じる多数の穴。

(2)筒状のもの。また、その中空の部分。

(3)鉄砲の筒の穴。

(4)意図に反して鋳物の中にできた空洞。おもに鋳造の際、ガス抜きが悪かったため生じるもの。鋳巢。

(1)の最古例としては、羅葡日辞書〔1595〕「Fistulo 〈略〉 Su (ス)、すなわち、アナガ アマタ アク 〈訳〉 海綿のような穴があく」というものが上がっていた。(2)の用例としては、羅葡日辞書〔1595〕「Ethmoides 〈略〉 ハナノ su (ス) すなわち、アナ 〈訳〉 鼻孔」があった。これは「尻の穴」にかなり近いと言えよう。(3)の用例は日葡辞書〔1603~04〕「Su (ス) 〈訳〉 鉄砲の筒の穴」であり、(4)の用例は俳諧・毛吹草〔1638〕六「水底やさながら月の鏡のす 〈貞盛〉」というものであった。

(1)の例は、私が母語とする大阪方言でも「大根にスが入る」というような例で用いることがあるが、(2)以下は理解語彙ですらない。ちなみに、JapanKnowledge 所収の『デジタル大辞泉』では

す【×鬆】

1 大根・牛蒡(ごぼう)などの芯(しん)にできるすきま。「―が入(い)る」

2 豆腐・卵などを煮すぎたためにできる多数の細かい穴。鋳物などに急に高い熱を加えたときにも生じる。「―が立つ」

とあり、(1)と(4)にまたがる語釈が上がっている。しかし「鼻のス」「耳のス」のような例は採り上げていない。

興味深いのは、『日国』の方言欄で、次のようになっている。

- (1)穴。小さい穴。《す》徳島県 811 三好郡 810 長崎県対馬 911 熊本県 918 宮崎県東諸
県郡 954 《すう》愛媛県周桑郡・今治郡 845 《ず》宮崎県東諸県郡 954 鹿児島県肝
属郡 970
- (2)耳や鼻などの穴。《す》薩摩†137 島根県石見「人を鼻のすに入れたような事を言う
(人をばかにしたさまにいう)」725 山口県豊浦郡 798 徳島県 811 愛媛県 845 高知
県 861 土佐郡 866 福岡市 879 長崎県対馬 911 熊本県下益城郡 930 大分県 939 宮崎
県児湯郡 947 鹿児島県 961 《すう》愛媛県周桑郡 054
- (3)草木などの芯(しん)にあいた空洞。《す》香川県 829 《ず》福島県浜通 155 千葉県
印旛郡 274 山口県豊浦郡「木の胴にづが入ってゐた」498 京都府竹野郡 622 兵庫県
但馬 652 島根県石見 725
- (4)瓜(うり)類の種のある部分。《ず》兵庫県加古郡 664 広島県 771 香川県 829 《ず
う》香川県 829
- (5)わらを積み重ねたもの。《す》三重県飯南郡 590
- (6)海鼠(なまこ)のこのわた。《ず》香川県西部 829

所々に「ず」という変異形も見られるが、これはおそらく「濁音減価」に類する変異であ
ろう。ここで地理的な分布に目を向けると、標準語にも含まれるらしい(3)が広く東日本に
も分布するのに対し、(1)、(2)は圧倒的に西日本に限定された分布となっている。特に中国、
四国、九州における分布が目立つ。愛媛県の知人も「耳のス」「鼻のス」等は現在でも用い
ると言っていた。また「ワケノシンノス」が福岡県における名称であることも符合する。

歴史的用例による語釈部分と方言分布を照らし合わせて分かることは、羅葡日辞典や日
葡辞書の用例等から、「す」は中央部でも野菜の穴から鼻の穴、鉄砲の筒まで広い意味を持
っていたが、中央部では野菜の穴以外の用法は失われた。しかし西日本では「耳の穴」「鼻
の穴」等の用例が今日まで生き延びたわけである。

なお、標準語では「鼻」や「耳」の穴は「穴」としか言わないが、「穴」と「す」はどう
いう関係にあるのだろう。用例から知られることは、「す」とは細長いパイプ状の構造をも
った空洞を指すのに対し、「あな」とは表層の欠損にのみ着目した名称であると考えられる
(図1参照)。類語として、「溝」「裂け目」「窪み」等との違いも考える必要があるだろう。



(図1)「あな」と「す」(日国余滴より。イラスト／イトウソノコ)

3. ケーススタディ(2) 「ひて-つ」(【一】)

『日国』には「ひて-つ」という項目があり、次のように説明されている。

ひて-つ 【一】

解説・用例

〔名〕

「ひとつ (一一)」の変化した語か。

*枕草子〔10 C 終〕一九五・ふと心おとりとかするものは「ひてつ車にといひし人もありき」

意味的には「ひとつ」とあるべき所、「ひてつ」と書かれていて、従来、『枕草子』のみが有する孤例として知られてきた。和数詞は、倍数ごとの母音交替によって作られているとされ、次のように整理できる。上代語の形態と併せて示しておく

ひと—ふた	pi ₁ to ₂ - puta
み—む	mi ₁ - mu
よ—や	jo ₂ - ja

この体系の中で「ひとつ」は自然な形態であり、これに対し「ひてつ」は謎の孤例ということになる。ところが、ここで琉球諸語の状況に目を向けると、俄然違う風景が見えてくる。国立国語研究所(2001)『沖縄語辞典』に示された首里語の語形を示しておこう。

tiiCi - taaCi
miiCi - muuCi
'juuCi - 'jaaCi

「ひとつ」「ふたつ」に対応する語形では、音節数の制約からか、頭の音節が省略されて第2音節目以降が残っている。なお、「C」は、電子化にあたっての代替文字である。仮名書きすれば、「ティーチ」「ターチ」となるだろう。

電子化にあたっての代替文字

電子化するにあたって、一部の特殊文字は下表の代替文字を利用しています。

	声門破裂音	声門破裂を伴わない				鼻音化 (例)	アクセントの二次的下降
辞書の文字	?	'	Ç	Ş	z	Ō	↘
本表の文字	?	'	C	S	Z	Ō	]

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/>

沖縄語首里方言をはじめとする琉球諸語は、日琉祖語からの分岐として、日本語諸方言と対応している（図2参照）。「ティーチ」の「ティ」の琉球祖語の形態は *te であり、*to ではない（表1、表2参照）。したがって、琉球祖語として期待されるのは *pitetu である。もし琉球祖語が *pitotu のような形態であるとすれば、tuuCi となるはずである。琉球祖語が *pitetu であるとするならば、日琉祖語は *pitiatu または *pitetu であり、その平安時代における語形はまさしく「ひてつ」である。つまり、枕草子の「ひてつ車」は、謎の孤例に留まらず、日琉祖語にあって日本語からは消えてしまった「ひてつ (pitetu)」の混入であった蓋然性が高まってくる。

つまりこのようなストーリーが想起される。日琉祖語には、「ひとつ」系の項目と、「ひてつ」系の項目が存在していたが、日本語には「ひとつ」系のみが受けつがれて「ひてつ」は捨てられた。一方で、日琉祖語から琉球祖語には、「ひとつ」系は受けつがれず、「ひてつ」系のみが受けつがれた。ところが、いかなる偶然か、「ひてつ」系の用例が『枕草子』に孤例として紛れ込んでいたのである。『枕草子』の該当箇所は、「ふと心おとりとかするものは、男も女もことばの文字いやしう使ひたるこそよろづの事よりまさりてわろけれ」という節に含まれており、言った人に対してがっかりするような下品な言葉づかいを列挙しているのである。「ひてつ車」はつまり当時の京都の上流社会における標準語形とは異なる、下品な訛りとして認識されていたことが推測される。それが実は琉球諸語にとっては祖形に他ならなかったということを、清少納言は知るよしもなかった。

なお、標準語形が日本語と琉球諸語でずれている語彙項目はいくつもあり、例えば「夢」を指す語彙項目は、平安時代までの中央語では「いめ」と「ゆめ」があり、現在の標準語では「ゆめ」だけが残っているが、琉球諸語では「いめ」系の語彙項目のみが認められる（仲原穰氏のご教示による）。

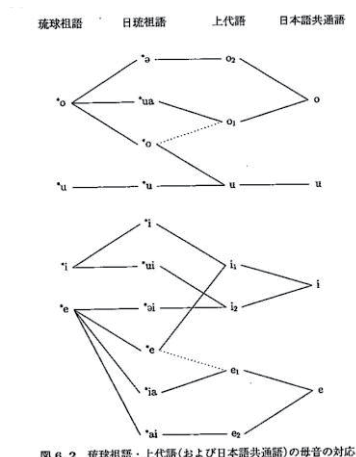


図 6.2 琉球祖語・上代語(および日本語共通語)の母音の対応

(図2) 平子・五十嵐・ペラール (2024: 106) より

表 6.4 琉球祖語 *o の狭母音化

	「網」	「閉」	「身」	「目」
琉球祖語	*ami	*ame	*mi	*me
奄美語	大和浜 ?ami	?ami	mi:	mi:
鹿児島	亀津 ?ami	?ami	mi:	mi:
沖縄語	伊江島 ?ani	?ami:	ni:	mi:
宮古語	大神 am	ami	miu:	mi:
平良	am	ami	mi:	mi:
池間	aq	ami	mi:	mi:
八重山語	石垣 aq	ami	mi:	mi:
与那国語	aq	ami	mi:	mi:

(表1) 平子・五十嵐・ペラール (2024:97)

表 6.5 琉球祖語 *o の狭母音化

	「白」	「音」	「黒」	「これ」
琉球祖語	*usu	*oto	*kuro	*kore
奄美語	大和浜 ?usi	?ut ^h u	k ^h uru	k ^h uri
鹿児島	亀津 ?usi	?ut ^h u	kuru	k ^h uri
沖縄語	伊江島 ?usi	?utu	k ^h u:	φuri
宮古語	首里 ?usi	?utu	kuru:	kuri
平良	us	utu	flu	kuri
池間	usi	utu	flu	kui
八重山語	石垣 usi	utu	φu	kuri
与那国語	与那国 utci	utu	φuru	k ^h u:

(表2) 平子・五十嵐・ペラール (2024:98)

4. おわりに

以上二つのケーススタディでは、中央語の用例による語彙に琉球諸語を含む諸方言の光を当てることによって、大きく時空が広がる見え方のする例を採り上げた。日本語 (Japanese Language) の辞書であるにとどまらず、日琉諸語 (Japonic Languages) の辞書として立ち上がってくるのである。『日国』改訂の事業が、そのような統合的・総合的辞書の理想型に近づく作業の足がかりとなることを発表者は願ってやまない。

参考文献

- 金水 敏 (2025) 「「す」(【鬆・巢】) についての歴史的・地理的考察」『日国余滴』、小学館辞書編集室公式ウェブサイト「ことばのまど」所収。
<https://kotobanomado.jp/column/9902/>
- 国立国語研究所 (1963/2001) 『沖縄語辞典』財務省印刷局。
 電子版データ集：<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/>
- 小学館国語辞典編集部 (2000~2002) 『日本国語辞典 第2版』小学館 (JapanKnowledge版を参照)。
- 平子達也・五十嵐陽介・ペラール, トマ (2024) 『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店。

日本語学会2025年度秋季大会予稿集
発行日（ウェブ公開日）：2025年10月10日
大会会期：2025年10月25日・26日

オンライン大会スタッフ

大会企画運営委員会 高木千恵（委員長），有田節子（副委員長），矢田勉（副委員長），
大槻知世（委員長補佐），岡田一祐（オンライン大会副委員長），小川晋史，
久保蘭愛（オンライン大会委員長），小出祥子，佐伯暁子，田村早苗，堤良一，中崎崇，
中澤光平，永谷直子，森勇太（委員長補佐），山本佐和子，幸松英恵

事務局委員会 川瀬卓（事務局長），富岡宏太，麻子軒

広報委員会 市村太郎，荻野千砂子，河野光将